



081.5
G95
N







新
羣書類從

第十五卷

銀行部 二管信部
蹴鞠部 鷹部
遊戯部 飲食部

内外書籍株式會社

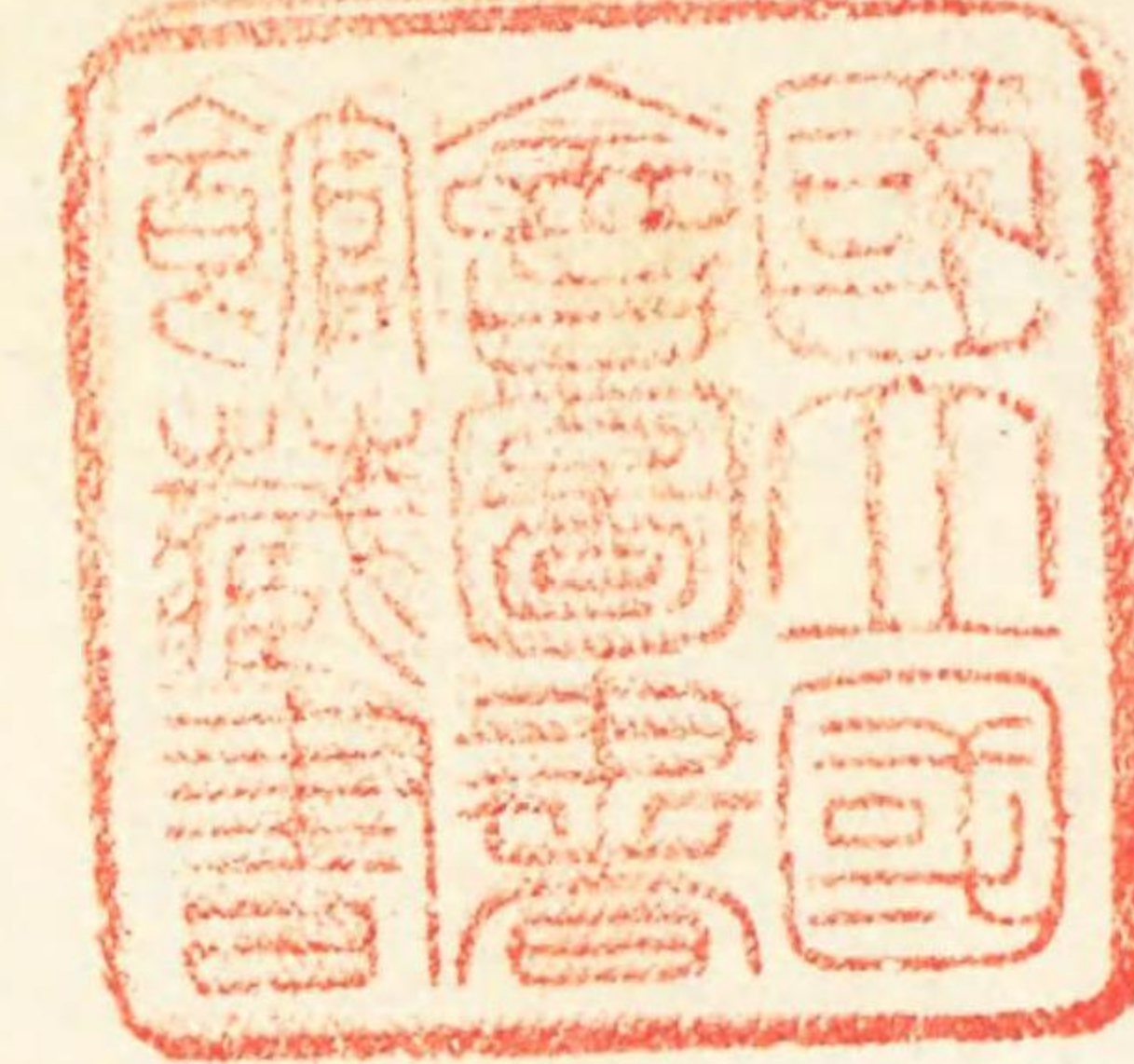
新校
羣書類從

第十五卷

紀行部 二
管絃部
蹴鞠部 鷹部
遊戲部 飲食部

内外書籍株式會社

08/5
G95
N



新校羣書類從

顧問 修 監

文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士	文學博士
黑板勝美	三上參次先生	藤村善之	辻幸田成	新井浦周	三井乙萬	藤田萬	和田萬	上田萬年先生



212205

海茶湯

茶の湯の作法... 一、茶の湯の作法... 二、茶の湯の作法... 三、茶の湯の作法... 四、茶の湯の作法... 五、茶の湯の作法... 六、茶の湯の作法... 七、茶の湯の作法... 八、茶の湯の作法... 九、茶の湯の作法... 十、茶の湯の作法...

西茶論

(蘭球自筆 大島洋書館蔵 邦幸海蔵)

邦 長 勝 日

酒 茶 論

(蘭叔自筆 美濃稻葉郡乙津寺所藏)

花 見 朔 巳

春晝閑として人なく、花片飛んで鳥聲ほがらかなる時に當つて、酒を好める忘憂君と、
 茶を好める藤原子との二人を拉し來り、各、酒と茶との徳を擧げてその優劣を闘はしめ、
 一論一駁決する所なく、遂に一閑人の和解によつて勝敗なしといふ圓滿解決を告げた趣向
 である。固より架空の人物ではあるが、判者一閑人は著者蘭叔その人にあらずやと想はし
 めるものがある。兩々相譲らず、酒を頌し茶を揚げ、所謂事なくして事を生ずる口舌の論
 争は、罪なき閑人のすまびたらずとせず。(美濃稻葉郡乙津寺の許諾を得て撮影印行す)

酒 茶 論

春晝閑として人なく、花片飛んで鳥聲ほがらかなる時に當つて、酒を好める忘憂君と、
 茶を好める藤原子との二人を拉し來り、各、酒と茶との徳を擧げてその優劣を闘はしめ、
 一論一駁決する所なく、遂に一閑人の和解によつて勝敗なしといふ圓滿解決を告げた趣向
 である。固より架空の人物ではあるが、判者一閑人は著者蘭叔その人にあらずやと想はし
 めるものがある。兩々相譲らず、酒を頌し茶を揚げ、所謂事なくして事を生ずる口舌の論
 争は、罪なき閑人のすまびたらずとせず。(美濃稻葉郡乙津寺の許諾を得て撮影印行す)

例言

- 一、本卷は、第十五卷として、紀行部（二）・管絃部・蹴鞠部・鷹部・遊戯部・飲食部の六部、書目總數百五種を収録した。
- 一、本卷に於ても亦從來の如く、塙本を底本とし、覓め能ふ限りの善古寫本その他を以て、嚴密に對比校合し、しかも善本との定評あるものは、収録書目一種に對して古寫本その他を一種に止めず、數種迄併せて校讎し、収録書目の主なるもの、殆んど全部に涉ることを得て、密字組壹千餘頁、印刷鮮明、老大なる一の證本を學界に提供し得たることは、實に本卷の最大特色である。
- 一、本卷は總て、誤字、古字を作字すること、宛字、略字をそのままに殘留すること、文法上のあらゆる誤謬を故意に看過すること等に依り及ぶ限り塙本の面影を保存することに努めた。
- 一、從來の方針に據り、濁點を附すべきものにはこれを附し、句讀點を切り、漢文には返り點を施した。
- 一、宛字、誤字、古字の傍には、正字、現行文字を當てておいた。また、闕字あるやに思はるゝ箇所には歟字を附して補字し、衍字ならんかと思はるる字には衍歟の二字を並記した。
- 一、本卷収録の諸書中の過半数は、内閣文庫、宮内省圖書寮、神宮文庫、東京帝國大學文學部史料編纂掛、前田侯爵家、忝氏祐祥氏等所藏の古寫本、影寫本、刊本、寫真版等との校比を遂げた。異本の所在、及び所屬の變遷は各書の末尾に記しておいた。
- 一、喫茶養生記は、文學博士高楠順次郎氏の許諾を得て、同博士の手澤本を採擇し、塙本所載のものにかへた。同書は東京帝國大學文學部藏本を底本とし、羣書類従本、及び鎌倉扇谷壽福寺藏本を以て懇切叮嚀なる校勘の遂げられてゐるものであつて、その懇切叮嚀さの故に、上記三本を並載せるも同様であり、且、校訂者の意見の附せられてゐる點に於いて類本中の白眉である。

一、南海流浪記は禿氏祐祥氏所藏、嘉永四年仲夏鏤刻、高野山正智院道猷の校訂本に依り、成通卿口傳日記、蹴鞠略記、養鷹記は宮内省圖書寮本に依り、鷹三百首和歌、小鷹部は内閣文庫本に依り、それら補ふ所が多かつた。

一、本巻の圖中、塙本とその位置を異にするものは、總て、舊位置を示しておいた。圖の移動は、専ら、編輯上の都合に依つてのみなされたものである。

一、本巻収録の諸書中、頭註あるものは、頭註、及び本文中頭註の相當する箇所イに數字を附し、照應に便ならしめた。

一、異本並載の形式中、主なるものを摘記すれば、塙本所載の異本は何々イ、この度の校合はイ何々イ(……)は異本に依る補充、「……」は異本になきもの、イイ何々は異本所載の異本、イ何々イは塙本所載の異本と校合の異本との一致せるもの、行外のイ(……)は異本の傍註、……イ何々イは原本の闕字を塙本に於いて補へるに、校合の異本の一致せるものであつて、文中の黒點はその補はるべき位置を示したものである。

一、本巻目次中、(……)を以て括れるは、塙本の標題と異なる異本の標題、「……」を以て括れるは、同標題を區別する爲の作者名である。

一、本巻の解題は、特に各専門家諸氏の起稿を煩はし、紀行部(二)は、臺北帝國大學教授安藤正次氏、及び西岡虎之助氏、管絃部は、宮内省圖書寮編修官芝葛盛氏、蹴鞠部は、西岡虎之助氏、鷹部は駒澤大學教授福井久藏氏、遊戯部、飲食部は宮内省圖書寮御用掛文學博士櫻井秀氏、以上諸氏の執筆である。

一、本巻が、かく比較的短日月の裡に、校訂刊行の業を了りたるは、これ偏に監修諸先生の御指導、校訂者諸氏の共同助力の外、かゝる祕本との對校を快諾されたる官衙、學校、圖書館及び各位の賜物である。特記して感謝の意を表する次第である。

一、本巻は宮内省圖書寮編修官芝葛盛が擔任した。

新校羣書類從 第十五卷 目次

解題……………一

紀行部(二)

卷第三百二十九 高倉院嚴島御幸記(通親嚴島記)……………一

卷第三百三十 御鳥羽院熊野御幸記……………二〇

海道記……………一八

南海流浪記……………四〇

卷第三百三十一 東關紀行……………望

うたゝねの記……………五

卷第三百三十二 いさよひの日記……………六

都のつと……………八

卷第三百三十三 小島のくちずさみ(美濃行幸路記)……………八

住吉詣……………九

道ゆきぶり……………九

鹿苑院殿嚴島詣記……………二一

卷第三百三十四 ながさめ草……………二七

伊勢紀行……………三五

卷第三百三十五 富士紀行……………三九

覽富士記……………四四

富士御覽日記……………四三

富士歷覽記(富士見道記)……………四五

卷第三百三十六 善光寺紀行……………四九

ふち河の記……………一五

正廣日記……………一六

平安紀行……………一四

筑紫道記……………一七

北國紀行……………一八

卷第三百三十七……………一

廻國雜記……………一八四

卷第三百三十八

高野參詣日記……………二二〇

吉野詣記……………二二五

九州道の記(細川幽齋道記)……………二三四

九州のみちの記……………二二三

卷第三百三十九

あづまの道の記……………二二六

むさし野の紀行……………二四〇

東國陣道記……………二四二

蒲生氏郷紀行……………二四五

東路のつと……………二四六

紹巴富士見道記……………二五五

卷第三百四十

東國紀行……………二六六

管絃部

卷第三百四十一

管絃音義……………二九四

五重十操記……………二〇七

卷第三百四十二

龍鳴抄上……………三三〇

龍鳴抄下……………三三四

卷第三百四十三

懷竹抄……………三三三

卷第三百四十四

胡琴教錄上……………三三五

胡琴教錄下……………三三四

卷第三百四十五

舞樂要錄上……………三九三

舞樂要錄下……………四〇六

卷第三百四十六

雜秘別錄……………四四五

舞曲口傳……………四三五

卷第三百四十七

夜鶴庭訓抄……………四三三

殘夜抄 或號迷路抄……………四四五

卷第三百四十八

絲竹口傳……………四五六

木師抄……………四六六

卷第三百四十九

秦箏相承血脉……………四七五

琵琶血脉……………四八八

順徳院御琵琶合……………四九二

八音抄……………四九五

卷第三百五十

東遊歌圖……………四九九

風俗……………五〇三

郢曲抄……………五〇六

卷第三百五十一

新撰朗詠集 卷上……………五二〇

新撰朗詠集 卷下……………五二三

卷第三百五十二

梁塵祕抄口傳集……………五三六

蹴鞠部

卷第三百五十三

承元御鞠記……………五五三

貞治二年御鞠記一名衣かづの日記(貞治記)……………五五八

享徳二年晴之御鞠記一名雲井の春……………五六二

後鳥羽院御記……………五六九

卷第三百五十四

成通卿口傳日記(成通卿三十箇條)……………五七〇

蹴鞠略記……………五八二

蹴鞠簡要抄……………五八六

卷第三百五十五

遊庭秘抄……………五九六

鷹部

卷第三百五十六

新修鷹經序……………六二二

新修鷹經上……………六二二

新修鷹經中……………六二四

新修鷹經下……………六二八

嗟哦野物語……………六四
 白鷹記……………六九
 養鷹記……………六二
 卷第三百五十七
 後京極殿鷹三百首……………六四
 鷹三百首和歌……………六三
 小鷹部……………六〇
 鷹百首〔慈鎮和尚〕……………六三
 鷹百首〔西園寺入道前太政大臣公經公〕……………六六
 禰津松鷗軒記……………六九

遊 戲 部

卷第三百五十八
 薰集類抄上……………六三
 薰集類抄下……………六四
 卷第三百五十九
 後伏見院宸翰薰物方……………七八
 むくさのたね……………七七

五月雨日記……………七九
 名香合……………七三
 名香目錄……………七六
 卷第三百六十
 圍碁口傳……………七九
 圍碁式……………七三
 仙傳抄一作書……………七八
 卷第三百六十一
 君臺觀左右帳記……………七六
 御飾記……………七八
 卷第三百六十二
 作庭記……………七九
 卷第三百六十三
 洛陽田樂記……………八五
 文安田樂能記……………八六
 糺河原勸進猿樂日記……………八〇
 異本糺河原勸進申樂記……………八四
 粟田口猿樂記……………八六

飲 食 部

卷第三百六十四
 厨事類記……………八二
 卷第三百六十五
 世俗立要集……………八四
 四條流庖丁書……………八四
 卷第三百六十六
 武家調味故實……………八六
 大草家料理書……………八三
 庖丁聞書……………八七
 卷第三百六十七
 大草殿より相傳之聞書……………八三
 卷第三百六十八
 喫茶養生記 卷上……………八九
 喫茶養生記 卷下……………九五
 喫茶往來……………九二
 酒茶論……………九五
 亭子院賜酒記……………九八

酒飯論……………九二
 北野大茶湯之記……………九四



解題

紀行部 (二)

高倉院嚴島御幸記 一卷

源通親

本書は、安徳天皇の治承四年三月、高倉上皇の嚴島御幸に、陪從した土御門内大臣通親の紀行であるが、二月二十一日の御讓位に筆を起し、次に「かくて、いつくしまの御幸あるべし」とて、やよひの三日、神ほうはじめらるべき日次のさたあり。位おりさせ給ひては、加茂八はたなどへこそ、いつしか御幸あるに、思ひもかけぬ海のはてへ、浪をしのぎていかなる御幸ぞとなげき思へども、あらし波の氣色、風もやまねば、口より外に出す人もなし」と記して、いよいよ都をいでさせ給ふまでの事に及び、次に往復の御路次の事どもを、日記體に記したものである。

本書の傳本竝に其の所在は、類從本の外、左の通りである。

内閣文庫所藏 通親嚴島記 寫本 舊林氏藏書 昌平坂本

一冊

後鳥羽院熊野御幸記 一卷

藤原定家

本書は、土御門天皇の建仁元年十月、後鳥羽上皇の熊野御幸に陪從した藤原定家の日記である。

海道記 一卷

源光行

海道記は、本書の著者が、後堀河天皇の貞應二年四月上旬、都を出でて東海道を下り、鎌倉に赴いた折の紀行で、鎌倉

に滞在してゐたのは一ヶ月に足らぬほどのことである。

本書の著者と推定されてゐる源光行は、歌人として聞え、その歌は千載集以下の勅撰集にも入り、その源氏物語の註釋書には水原抄といふものがあり、その源氏の校本は所謂河内本として傳へられたものである。また光行には、蒙求和歌十四卷、百詠和歌十二卷の著もある。

本書を光行の著と推定したのは、羣書類従を以てはじめとするが、果してこれが光行の作であるかどうかについては、疑問の餘地がある。光行は本書に見えてゐる貞應二年以前、元暦元年四月に鎌倉に下つたことがあり、鎌倉幕府に縁故のある人であることは、東鑑の諸所に散見してゐる記事によつても、また蒙求和歌の序によつても明らかである。然るに、海道記を見ると、「いまだ關山千里の雲にむちうたず、今使人の芳縁に乗じて俄に獨身の旅行を企て」といひ、また、鎌倉においての記事に、「相知りたる人は一兩人持るをたのみて、物など申さんと思ふほどに、たがひてなければ」などといつてゐるなど、どうも光行に相應しない點がある。或は夫木和歌抄に、鴨長明の作として、その家集から撰び出してゐる、「はやすぎよ人の心もよこた山、みどりの林かけにかくれて」といふ歌は、海道記に「若相といふ所をすぎて横田山をとほる。此山は、白榆のかけにあらはれて、緑林の人をしきる所とも聞ゆれば、益なく覺えて急ぎゆく。」と記した次に載せてあるのと同じであるから、海道記を鴨長明の作であると考へる人もあるが、長明としても、事實が合はない。東鑑には、貞應を去る十餘年前、建暦元年に長明が鎌倉に下つた記事がある。然るに、この海道記はどうも再遊の記事とは見えない。かういふ風に、海道記の作者についてはいろいろの疑がある。なほまた、夫木和歌抄には、東關紀行、十六夜日記、長明の伊勢記などの歌は引いてあるが、海道記からの歌は、一首も引いてないので、或は海道記は後人の作ではないかといふ疑をいだく人もある。

南海流浪記 一卷

道 範 阿 闍 梨

南海流浪記の著者道範は、高野山正智院の學僧である。本書は、道範が、仁治四年の春、事に坐して讃岐に配流されるに至つたことに筆を起し、讃岐配流中のことを日記體に記したものである。道範は、建仁元年の夏、赦されて高野山に歸り、同四年五月、六十九歳で歿した。

本書には類従本の外、左の刊本がある。

南海流浪記

刊本嘉永四年五月

一冊

東關紀行 一卷

源 親 行

東關紀行は、本書の著者が、嵯峨天皇の仁治三年八月に都を出でて東海道を下り、鎌倉に行つた折の紀行で、十月二十三日鎌倉を出て歸洛の途についたと記されてゐるから、二ヶ月餘滞在したわけになる。

本書の著者は、源親行と推定されてゐる。親行は、光行の子で、やはり歌人として聞え、千載集にも入つてゐるし、萬葉集や古今集の校勘にも力をつくした人であるが、果して、東關紀行がこの人の作かどうかについては疑問の餘地がある。本書を親行の作であるとしたのは、扶桑拾葉集がはじめであるが、羣書類従はこれを承けて、巻尾に、「右東關紀行上木行于世之本、稱鴨長明所著、今據夫木抄所載、從古本一定爲源親行作、比較已了」と記してゐるが、夫木和歌抄を見ると、東關紀行の歌を多く載せてゐるけれども、羣書類従の附記にいつてあるやうに、親行の作としてゐるかといふにさうでなく、光行の作としてゐる。(從古本としてあるから、或はさういふ本があるのかも知れないが)かつまた、東鑑によると、親行は、承久の前後には鎌倉と京都との間を往復し、本書の成つた仁治、寛元の頃には幕府にゐるやうである。さうだとすると事實に合はなくなる。然らば、光行の作としたらばどうかといふに、それはやはり海道記についていつたと同様な理由で否定されなければならない。しかも、本書を鴨長明の作であると見た從來流布の寫本刊本の考の探るに足らないことは、長明の鎌倉に下つたのは、仁治を去る三十二年前の建暦元年十月のことであるので明らかである。いづれ

にしても、海道記の作者と同様に、東關紀行の作者もまた疑問に屬するといはなければならぬ。

うた、ねの記 一卷

阿 佛 尼

うた、ねの記は、普通に阿佛尼の作といはれてゐる。或は阿佛尼の妹の作ではないかといふ説もあるが確かではない。この記事の内容と十六夜日記のそれとに、一致する點の少くない點などから見れば、本書も、やはり、阿佛尼の作と見るべきものであらう。

本書は、二部に分れる。最初の部分は、太秦への佛詣をはじめとして、日記體に身邊の雜事を記したものであり、後半の部分は、「さそふ水だにあらばと、朝夕の言草に成ぬるを、そのころ後の親とかたのむべき理も淺からぬ人しも、遠つあふみとかや聞くもはるけき道をわけて、都の物詣せんとて登りきたるに、誘はれて、遠江に下向したる時のことを記した紀行文である。この「後の親とかたのむべき云々」といふのは、父の平度繁のことであらう。

本書は扶桑拾葉集にも收められてゐる。阿佛尼のことについては、いさよひの日記の解題を参照されたい。

本書には、類従本の外、左の傳本がある。

前田侯爵家所藏	うたたね 寫本	一帖
神宮文庫所藏	うたたねの記 刊本	二冊

いさよひの日記 一卷

阿 佛 尼

いさよひの日記は、阿佛尼の作である。阿佛尼は、平度繁の女で、はじめ、順德天皇の皇后安嘉門院に仕へて四條とよばれ、安嘉門院四條として勅撰集などに入つた歌人であるが、後、藤原爲家の後妻となり、爲相、爲守等を生んだ。本書は、爲相が亡父爲家から譲られた所領地播磨の細川庄を庶兄爲氏に横領されたので、その問題について鎌倉幕府の裁決を仰

ぐために、東海道を下つた折の旅日記で、後宇多天皇の建治三年十月十六日京を出で、二十九日鎌倉につき、月影谷に宿つたこと、京よりの消息および返り事等について記し、さらに弘安元年のことに及び、卷末には弘安三年の作と思はれる長歌を添へてゐる。

本書の書名はいろいろに傳へられてゐる。「いさよひの日記」(帝國圖書館所藏寫本、内閣文庫所藏寫本、萬治二年刊本)、「いさよひの記」(宮内省圖書寮所藏寫本、扶桑拾葉集本)、「路次之記」(夫木和歌抄)、「阿佛尼紀行」(松井簡治博士所藏本)、「道の記」(佐々木信綱博士所藏本)、「阿佛道行」(殘月抄所引、西院伊村所藏寫本)、「不知夜記」(阿波國文庫所藏本)のやうに一定してゐない。以上のうちで、「路次之記」または「道の記」といふのが最も古い名で、十六夜日記といふのは、後人の命名であらうと考へられる。本書に類したもので「阿佛東下り」又は「阿佛吾妻下り」といふ書がある。これをいさよひの日記の異本と考へる人もあるが、これは別種のもので、いさよひの日記をもととして後人が作つた物語と見るべきものであらう。

本書の註釋書として推すべきものは、十六夜日記殘月抄(三冊)であらう。この殘月抄は文政七年に刊行されてゐるが、第一冊、第二冊は小山田與清、第三冊は門人北條時鄰の編したものである。殘月抄の本文の校合には、岡山少將朝臣自筆本、金吾中納言卿自筆本、西院伊村所藏古寫本、扶桑拾葉集本、萬治元年刊本、松の舎所藏古寫本を參考にしたといふことである。

都のつと一卷

僧 宗 久

本書は、崇光天皇の觀應の頃、僧宗久が、丹波より京にいで、東國に下り奥羽に遊び、宮城野、末の松山、松島などの名勝をもたづねまはりし折の紀行である。都のつとと名づけたのは、作者が、「路すがらの名だかきところ」の心に残りしを、忘れぬさきにとて、おもひいづるまゝに、前後のしだいをいはずこれをしるしつけて、みやこのつとにとて持のほ

りぬ。」といつてゐるので明らかである。巻尾に、後普光園院攝政すなはち二條良基の跋文がついてゐる。

小島のくちずさみ 一卷

二 條 良 基

北朝後光嚴天皇の文和二年六月、南朝の軍勢京師に迫れるによつて、天皇は、六日に二條良基の押小路第に行幸、尋で延暦寺に行幸あらせられたが、北軍利あらず、月の十三日に足利義詮は天皇を奉じて坂本より東走し、終に美濃の垂井に至り、小島を以て行宮とすることになった。かくて、天皇は、行宮におはしますこと約三ヶ月、九月十七日（本書には十九日還幸のやうに記してあるが、誤か）行宮を發せられて、二十一日京都に還幸、土御門殿に入らせられたのであるが、二條良基は、七月二十七日、密に京都を發し、坂本を経て美濃に入り、小島の行宮に伺候し、天皇の京都御還幸まで行宮に奉仕してゐたのである。本書は、良基が、京都を出でてより歸京するに至るまでのことを記したものである。巻末にも「此さうしは、をじまにて書たりしまゝなる、あまりにいふばかりなきことども多し。歌などひきなをすべし。」と見えてゐる。

本書の傳本竝に其の所在は、類従本の外に、左の如きものがある。

内閣文庫所藏

美濃行幸路記 寫本

一冊

住吉詣 一卷

足 利 義 詮

本書は、後光嚴天皇の貞治三年四月、足利義詮が住吉神社に參詣した折の紀行である。巻末に、「此一卷、所々のさまを筆にまかせて書しるし侍り、又時の興にもなるべきなり。」と記してある。本書によつて義詮の文藻をうかがふことが出来る。

本書の傳本竝に所在は、類従本の外、次の如きものがある。

内閣文庫所藏

難波住吉詣 寫本

一冊

同

住吉詣 同

同

道ゆきさぶり 一卷

今 川 貞 世

本書は、當時九州探題であつた今川貞世が、京都から長門の赤間關に至れる折の紀行である。この時代における紀行文の上乗といふべきもの。

貞世は、法名を了俊といふ。和歌および連歌の道に聞えた人で、その著に、「今川了俊和歌所へ不審之條々」「了俊辨要抄」「落書露顯」以上の三書、共に羣書類従卷二百九十六所收）などがある。

本書の傳本竝に其の所在は、類従本の外、左の如きものがある。

圖書寮所藏

道行觸 寫本

一冊

鹿苑院殿嚴島詣記 一卷

今 川 貞 世

本書は、後小松天皇の康應元年三月、將軍足利義滿が嚴島詣をした折の紀行で、今川貞世の筆に成る。

なぐさめ草 一卷

正 徹

本書は、正徹が、後小松天皇の應永二十五年三月、京都を立ち出でて、近江路より美濃に入り、轉じて伊勢に赴き、神宮に詣でて歸洛せるほどのことを記したものであるが、連歌のこと、歌道のこと、源氏物語に關することなどについての意見なり感想などが隨處に散見してゐる。正徹、字は清巖、東福寺佛照派の書記であつたので、世に徹書記とよばれた。歌を今川了俊、藤原爲尹に學び、歌集には、草根集、續草根集があり、歌道、歌人などに關するものには、徹書記物語（羣

書類従卷二百九十七所收)清巖茶話(續羣書類従卷四百六十三所收)などの著がある。

伊勢紀行 一卷

堯孝法印

本書は、後花園天皇の永享五年三月、將軍足利義教が伊勢參宮に赴ける折、陪從の列にあつた堯孝法印の筆になつたものである。奥書によると、十月十三日に道中詠進の和歌を一巻として進覽すべき仰せをうけ、筆を馳せて翌日持參せしめたものである。本書の傳本竝に其の所在は、類従本の外、主なものは左の通である。

神宮文庫所藏

伊勢紀行

寫本享保十八年

一冊

以上 安藤正次

富士紀行 一卷

飛鳥井雅世

將軍足利義教は、永享四年(一〇九二)富士遊覽の名目の下に、東海の政情視察を企て、駿河の國府まで赴いて居る。この富士紀行は、その折義教に隨侍した歌人飛鳥井雅世のものした歌日記であつて、九月十日の京都出立に筆を起し、九月二十七日老蘇杜近くの武者宿に落着いた事に筆を止めて居る。文中山城、近江、美濃、尾張、三河、遠江、駿河等の路次の國々の事に觸れては居るが、この紀行の性質上當然の事とは云へ、駿河の記述が最も豊富である。

著者飛鳥井雅世は、雅經の後で、權中納言正二位まで進んだ。飛鳥井家は元來和歌の家として著れて居るが、彼も亦當代一流の歌人であつて、勅を奉じて、新續古今和歌集を撰んで居る。

傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

東京帝國大學附屬圖書館所藏

富士紀行

寫本

一冊

覽富士記 一卷

堯孝法印

覽富士記は、富士紀行の著者飛鳥井雅世と同じく、永享四年(一〇九二)足利義教に隨侍して駿河の國まで下つた法印堯孝の歌日記であつて、九月十日の門出に筆を起し、同月二十七日京都歸着に筆を止めて居る。この紀行は富士紀行に比して、例へば墨の俣(美濃)の條に於けるが如く、地方の状況を髣髴せしむるに足る敘述を多く含んで居る點は特に注目し値する。

著者堯孝は、號を淨光院と云ふ。頼阿の後であつて、權大僧都堯尋の子である。位は法印、權大僧都にまで昇つて居る。康正元年七月、六十五歳で示寂した。

傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

内閣文庫所藏

覽富士紀行 寫本

一冊

帝國圖書館所藏

富士紀行 扶桑拾葉集

一冊

富士御覽日記 一卷

富士御覽日記は、前の飛鳥井雅世の富士紀行、堯孝法印の覽富士記と同じく、永享四年(一〇九二)九月、足利義教の富士遊覽の折の紀行であるが、著者の名は傳はらぬ。主として、駿河滯在中の足利義教と彼の隨行者、及び今川範政との和歌の贈答が記されて居る。

著者未詳。

傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

神宮文庫所藏

富士御覽日記 寫本

一冊

富士歴覽記 一卷

飛鳥井雅康

飛鳥井雅康は、富士の雄姿に懐れて、富士遊覽のために、明應八年〔二二五九〕、遠江の小夜の中山まで下向した。富士歴覽記は實にその折の紀行であつて、五月三日都を出立した事に筆を起し、七月七日關民部大夫盛貞の宿所に於ける探題に筆を止めて居る。路は山城、近江、美濃、尾張、三河、遠江と云ふ普通の巡路を採つて居る。

著者飛鳥井雅康は、法名を宗世、號を二樂軒と云ふ。雅世の次男であつて、權中納言、正二位にまで累進した。雅趣多き和歌を作るを以て知られて居る。文明十四年二月剃髮した。

傳本としては、類従本の外、特に見るに足るべきものはない。

善光寺紀行 一卷

堯惠法印

善光寺紀行は、寛正六年〔二二五五〕七月、當時加賀の金劔宮に居た堯惠法印が、信濃の善光寺に參詣をした時の往復の紀行であつて、四日曉の門途に筆を起し、同月末歸郷の事までを記して居る。先づ金劔宮より礪波山を経て越中に入り、直に伏木(越中)に出で、海岸線に沿つて糸魚川(越後)に至り、關山(越後)を経て善光寺(信濃)に詣で、更に戸隱山(信濃)を攀ちた。歸途は畧、この逆の行程を採つて居る。

著者堯惠は、堯孝法印の門に投じて和歌を學び、その蘊奥を極め、古今傳授を受けて居る。著書としては、本書の外、北國紀行、古今血脈抄、古今抄延五記等がある。

傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

神宮文庫所藏 善光寺紀行 寫本 一冊

ふぢ河の記 一卷

一條兼良

ふぢ河の記は、文明五年〔二二三三〕、一條兼良が美濃路を遊覽した折の紀行であつて、五月二日の明方奈良を出立した事に筆を起し、同月二十八日乗燭の時分奈良の宿坊に歸り着いた事に筆を止めて居る。この遊覽は往路と復路とは路を異にして居るので、往路は、奈良、瓶原(山城)あけ宮(伊賀)、堅田(近江)、朝妻(近江)、不破關(美濃)、岐阜(美濃)の道を取り、歸路は不破關、番場(近江)、水口(近江)、上野(伊賀)、笠置(山城)、奈良の道によつて居る。この書は、季弘大叔の蔗軒日録に「關の藤河」と記されて居るのを始として、「關の藤川日記」「後成恩寺道之記」等と多くの異名を持つて居る。著者一條兼良は、關白經嗣の第二子として生れたのであるが、兄經輔が病を以て薙髮したので、代つて父の後を繼ぎ、文安四年には關白、氏長者の顯職に就いて居る。應仁二年八月亂を南都に避けた。當時南都で幅をきかせて居た大乘院尊尊は彼の息子であつたので、文明九年十二月の歸洛まで十年の歲月を、その僧房で送つた。歸洛後間もなく十三年四月、八十歳で薨じて居る。彼は才智の極めてすぐれた人で、「三百年來の才人」「日本無双の才人」等と評されて居た。従つて著書も新玉集、公事根源、文明一統記、樵談治要、桃華葉葉以下數十部に達する。

傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

神宮文庫所藏	藤川記	寫本	一冊
史料編纂掛所藏	藤川記	寫本	一冊
神宮文庫所藏	關藤川日記	寫本	一冊
神宮文庫所藏	後成恩寺道之記	寫本	一冊
帝國圖書館所藏	ふぢ河の記 扶桑拾葉集所收		一冊

正廣日記 一卷

正廣法師

正廣日記は、文明五年〔二二三三〕當時大和國泊瀬寺に寄寓して居た正廣法師が、攝津修理大夫之親に随つて、駿河國藤枝に下向した折の紀行である。文は八月七日攝津之親來訪に始り、遠江の府中にて歸途に就く事で終つて居る。この行は、大江(伊勢)より白須賀(遠江)までを船路によつて居るので、尾張、三河の事には殆んど觸れて居ないが、遠江の事は極めて詳しく記されて居る。

著者正廣は、招月庵徹書記の門下であつて、歌人である。著書は、本書の外、正廣筆記、松下集等がある。本書の傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

神宮文庫所藏

海道記

寫本

一冊

平安紀行 一卷

源持資

平安紀行は、文明十二年〔二四〇〕六月初旬、源持資即ち太田道灌が、京都に行つた折の歌日記であつて、江戸城出立に筆を起し、三條銅陀坊到着に筆を止めて居る。

著者源持資は、所謂太田道灌であつて、道灌は剃髮してからの號である。資清の子であつて、康正元年父の資清の後を繼ぎ、二年江戸城を築いた。河越、岩槻、鉢形等の諸城も亦彼の手になるものである。上杉定正を助けて、その武威を耀したのであるが、不幸敵の術中に陥つた定正のために浴室で殺された。彼は歌人としても有名で、人口に膾炙して居る歌が少くない。著書としては、本書の外、我宿草、花月百首等がある。

傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

神宮文庫所藏

太田道灌紀行

寫本

一冊

筑紫道記 一卷

宗祇法印

法印宗祇は、文明十二年〔二四〇〕六月初旬、周防の山口に下り、豊浦(長門)、赤間關(長門)、若松(筑前)を経て、太宰府(筑前)、博多(筑前)地方を歴覽した。筑紫道記は、その時の紀行であつて、六月初旬山口下着の事に筆を起し、十月十二日再び山口の宿に歸着した事に筆を止めて居る。

著者宗祇は、飯尾氏の出であつて、自然齋、見外齋、種玉庵等の號を持つ。性來和歌を好み、東常縁に古今和歌集の傳授を受け、猪苗代兼裁に就て連歌を學び、晝夜精研、遂に連歌を以て天下第一と稱せらるゝに至り、天皇は賜ふに花下の宗匠の號を以てせられた。文龜二年七月晦日、八十二歳で歿した。彼は常に天下を遊歴した。著書としては、本書の外、吾妻問答、筑波集等の著がある。

傳本として、類従本の外、左の如きものがある。

東京帝國大學附屬圖書館所藏

筑紫紀行

寫本

一冊

北國紀行 一卷

堯惠法印

文明十七年〔二四五〕秋京都を立つて、美濃に滞在して居た法印堯惠は、翌十八年五月の末つ方、飛驒の山路を凌いで越中に入り、次で越後の府中に出で、善光寺(信濃)、柏崎(越後)、白井(上野)、草津(上野)、伊香保(上野)、佐野(下野)、狭山(武藏)、鳥越(武藏)、鎌倉(相模)、金澤(武藏)、中野(武藏)、鳩井(武藏)等の各地を歴遊した。北國紀行は、その時の紀行であつて、文明十七年秋京都を去つて美濃に移つた事に筆を起し、文明十九年十一月二十七日、三國山を越えた事に筆を止めて居る。

著者の略傳は、すでに善光寺紀行の條に記したから、就いて見られたい。
傳本としては、類從本の外、左の如きものがある。

圖書寮所藏	北國紀行	寫本	一冊
内閣文庫所藏	北國紀行	寫本	一冊
内閣文庫所藏	堯惠北國紀行	寫本	一冊
帝國圖書館所藏	吾妻道記	寫本(元祿六年)	一冊
神宮文庫所藏	北國紀行	寫本	一冊

廻國雜記 一卷

道興 准后

准后道興は、文明十八年(二二四六)六月十六日早朝、年月見馴れた柴の庵にしばしの別を告げて、朽木(近江)、小濱(若狭)、敦賀(越前)、白山(加賀)、石動山(能登)、立山(越中)、國府(越後)、柏崎(越後)、杉本(上野)、岡部(武藏)、郡の山(下總)、那古(安房)、三崎(相模)、日光(下野)、宇都宮(下野)、兒ヶ原(下總)、淺草(武藏)、鎌倉(相模)、金澤(武藏)、藤澤(相模)、小田原(相模)、箱根(相模)、三島(伊豆)、河越(武藏)、膝折(武藏)、大塚(武藏)、白河(岩代)等と極めて氣儘な旅程によつて、關東諸國を幾度も廻つて、十九年の三月過に陸奥に入り、松島、鹽竈に遊んだ。廻國雜記は、この時の紀行で、文明十八年六月上旬、東征北行のために公武に暇を申入れた事に始り、名取川の吟詠に終つて居る。
著者道興は、左大臣從一位關白藤原房嗣の三男であつて、聖護院門主、大僧正、准三后であつた。
本書の傳本としては、類從本の外、左の如きものがある。

内閣文庫所藏 廻國雜記 寫本 一卷
又標註書としては、次の如きものが残されて居る。

廻國雜記標註

關岡野洲良註
文政八年刊

二卷

高野參詣日記 一卷

三條西實隆

三條西實隆は、大永三年(二二八三)四月十九日、京都を出立して、天王寺(攝津)、住吉社(攝津)、根來寺(紀伊)、高野山(紀伊)等に參詣して、五月三日京都に歸着して居る。高野參詣日記はこの參詣往復の紀行であつて、彼自らの筆になるものである。

著者三條西實隆は、逍遙院と號す。内大臣公保の次男で、内大臣正二位にまで累進して居る。永正十三年、剃髮して僧となり、名を堯空と改めて、諸國を歴遊し、天文六年八十三歳で歿して居る。著書としては、本書の外に有職問答、雪玉集及び實隆公記等がある。

傳本としては、類從本の外、特に注目すべきものはない。

吉野詣記 一卷

三條西公條

三條西公條は、天文二十二年(二二八三)二月二十三日の朝、京都を出發して、奈良(大和)、飛鳥(大和)、高野(紀伊)、吉野(大和)、當麻(大和)、法隆寺(大和)、信貴山(大和)、住吉社(攝津)、天王寺(攝津)、水無瀬(攝津)、男山八幡(山城)等の畿内の靈地を巡禮して、三月十四日歸京した。吉野詣記はこの折の紀行であつて、公條自ら記せるものである。

著者三條西公條は稱名院と號す。實隆の子にして、右大臣にまで累進して居る。天文十二年官を辭して、僧となり、諸方を遊歴し、吟詠を事として居る。永祿六年十二月、七十七歳で歿した。著書としては、本書の外、稱名院集、石山月見記、字槐記抄、右府句題百首等がある。

本書の傳本としては、類從本の外、特に注目すべきものはない。

九州道の記 一卷

細川藤孝

細川藤孝は、天正十五年〔二四七〕四月二十一日、居城丹後田邊の城を出で、海路松倉（丹後）、仁保の關（出雲）、杵築（出雲）、濱田（石見）、豊浦（長門）、赤間關（長門）、小倉（豊前）を経て博多（筑前）に上陸し、大宰府（筑前）に詣で、ついで當時島津征伐のため下向して居た豊臣秀吉を見舞ひ、七月七日山口（周防）に赴き、嚴島（安藝）、姫路（播磨）、明石（播磨）、須磨（攝津）を遊覽して、七月二十三日難波の港に着いた。九州道の記は、この往復の紀行であつて、藤孝の自ら記せるものである。

著者細川藤孝自ら玄旨と稱し幽齋と號す、幼にして播磨守元常の嗣子となり、長ずるに及んでは、足利義晴、足利義昭に仕へ、後織田信長、豊臣秀吉を助けて居る。深く歌道に達し、古今和歌集の祕訣を傳へた。著述としては、本書の外に、幽齋軍禮書、百人一首抄、詠歌大概抄、老の木曾越、東國陣道記等がある。傳本としては、類従本の外、左記の如きものがある。

- 兵庫縣奥藤研造氏所藏 細川幽齋道記 寫本 一冊
- 東京帝國大學附屬圖書館所藏 九州道の記 寫本 一冊
- 神宮文庫所藏 幽齋道記 寫本 一冊
- 神宮文庫所藏 玄旨海道記 寫本 一冊
- 帝國圖書館所藏 九州道の記扶桑拾葉集所收 一冊

九州のみちの記 一卷

豊臣勝俊

豊臣勝俊は、文祿元年〔二五二〕正月十五日、京都を立ち、海路須磨（攝津）、明石（播磨）、吉備（備中）、鞆（備後）、尾

道（備後）、嚴島（安藝）、赤間關（長門）を経て、博多（筑前）に上陸、太宰府（筑前）に詣で、次で名護屋（肥前）の行營に赴いた。名護屋到着の年月は明瞭でない。九州のみちの記はこの折の紀行で、京都出立の事より、名護屋到着の事にかけて及んで居る。

著者豊臣勝俊は、肥後守定家の子、幼にして秀吉に仕へて、その寵を受け、豊臣姓を授けられ、後に若狭小濱の城主にまでなつた。大坂の役の際、遅疑遂巡、終に東軍に投じたので、その封を奪はれた。爾後東山に潜居して、吟詠を以て自ら慰め、慶安二年六月、八十一歳で歿して居る。長嘯子は彼の雅號である。傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

- 帝國圖書館所藏 九州のみちの記 一冊
- あづまの道の記 一卷 仁和寺尊海
- 僧正尊海は、天文二年〔二九三〕十月二十四日、都を出で、近江、美濃、尾張、三河、遠江を経て駿河に至り、富士淺間神社に詣でた。あづまの道の記は、その折の彼の歌日記である。
- 著者尊海は、世に眞光院僧正と稱せらるゝ人であつて、天文十二年十二月、七十三歳で示寂して居る。傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。
- 神宮文庫所藏 東の道の記 寫本 一冊

むさし野の紀行 一卷

北條氏康

北條氏康は、天文十五年〔二二〇〕七月、鎌倉（相模）、藤澤（相模）、勝沼（武藏）、長井（武藏）、大澤（武藏）、葛西（武藏）を歴遊して、八月中旬小田原（相模）の居城に歸着した。むさし野の紀行は、その折の紀行で氏康自身の記したものである。

著者北條氏康は、氏綱の子、即ち北條早雲の孫に當る。初め新九郎と稱し、相模守に任ぜられ、次で左京大夫となつた。文武の才能があつたので、關東を震駭させた。元龜元年十月五十六歳で歿して居る。

本書の傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

東京帝國大學附屬圖書館所藏 武藏野紀行 寫本

一冊

東國陣道記 一卷

細川藤孝

細川藤孝は、天正十八年〔三二五〇〕小田原征伐のため、熱田（尾張）、駿府（駿河）を経て、關東に下向したが、七月十五日病氣により歸陣する事になり、足柄（相模）、甲府（甲斐）、福島（信濃）を経て歸陣して居る。東國陣道記は、その折の彼の紀行であつて、二月二十九日熱田（尾張）居陣の事より、七月二十七日秀吉歸京の事にまで及んで居る。

著者細川藤孝の略傳は、九州道の記の條下に記したから、こゝには省略する。

傳本としては、類従本の外、左の如きものがある。

帝國圖書館所藏

東國陣道記今古殘葉所收

一冊

蒲生氏郷紀行 一卷

蒲生氏郷

蒲生氏郷は、文祿元年〔三二五二〕陸奥を出で、白河關（陸奥）、那須（下野）、佐野（下野）、淺間（信濃）、木曾（信濃）、垂井（美濃）を経て上洛し、豊臣秀吉の朝鮮征伐の軍に投じた。蒲生氏郷紀行は、その折のものである。

著者蒲生氏郷は、本名を教秀又は賦秀と云ふ。幼より武を好み、信長に寵愛せられて、その女婿となつた。信長の歿後は、秀吉の信用厚く、従つて武功も多かつた。文祿四年二月七日大坂で歿して居る。

傳本としては、類従本の外、特に注目すべきものはない。

東路のつと 一卷

宗長

永正六年〔二二六九〕七月十六日、柴屋軒宗長は、駿河の丸子を出で、沼津（駿河）、小田原（相模）、藤澤（相模）、勝沼（武藏）鉢形（武藏）、新田（上野）、佐野（下野）、足利（下野）、玉生（下野）、鹿沼（下野）、日光（下野）、草津（上野）、江戸（武藏）、品川（武藏）、葛西（武藏）、眞間（下總）、中山（下總）、撿見川（下總）、市川（下總）等を巡遊して、十二月鎌倉に入つた。東路のつとは、その時の紀行であつて、丸子門途に筆を起し、十二月八日鎌倉蘇谷宮内少輔仲次第の和漢興行に筆を止めて居る。

著者宗長は、文安五年駿河國島田の鍛工の家に生れ、稍長するに及んで、敏慧の故を以て、今川義忠の近侍に召された。或時偶々宗祇に見えて、連歌の教を乞ひ、爾後日夜精研、遂にその蘊奥を極め、名聲天下に喧傳さるゝに至つた。宗祇が歿してから、宗祇門下の人達によつて花の下宗匠に推擧されたけれども、固く辭して受けなかつた。享祿五年三月十六日、八十五歳にて歿した。

傳本としては、類従本の外、特に注目すべきものはない。

紹巴富士見道記 一卷

紹巴

紹巴は、永祿十年〔三二二七〕二月十日、京都を出で、鈴鹿（伊勢）、桑名（伊勢）、清須（尾張）、小牧（尾張）を経て掛川（遠江）、小夜の中山（遠江）、島田（駿河）、府中（駿河）、淺間神社（駿河）、三保松原（駿河）、清見寺（駿河）、田子浦（駿河）等より富士の大觀を恣にして、歸途に就き、岡崎（三河）、鳴海（尾張）、三井寺（近江）を経て、八月二十七日歸洛した。紹巴富士見道記は、その折の紀行にして、遊覽の動機より始め、歸洛の日の事にまで及んで居る。

著者紹巴は、南都の人、本姓は松村氏、臨江齋又は半醒子と號す。周桂に従つて連歌を研究し、遂にその蘊奥を極め、法眼に叙せられた。豊臣秀吉の殊眷を受け、宅地を與へられた事もあつた。慶長七年（或は五年とも云ふ）四月十二日、

七十九歳で歿して居る。著書としては、本書の外、源氏物語紹巴抄等がある。傳本としては、類従本の外、特に注目すべきものはない。

東國紀行 一卷

宗

牧

宗牧は、天文十三年〔二一〇四〕九月二十日過、都に別れを告げ、石山（近江）、桑名（伊勢）、津島（尾張）、那古野（尾張）、熱田（尾張）、岡崎（三河）、島田（駿河）、駿府（駿河）、蒲原（駿河）、三島（伊豆）を経て、熱海（伊豆）に浴し、更に江島（相模）、鎌倉（相模）、金澤（武藏）を歴遊し、翌十四年三月四日江戸に到着した。東國紀行は、即ちその時の紀行にして遊覽の動機より、三月七日江戸滞在中の事にまで及んで居る。

著者宗牧は谷氏、俳人專碩の門人であつて、俳句に堪能であつた。俳人松永貞徳は、彼の門下である。

本書の傳本としては、類従本の外に、左の如きものがある。

帝國圖書館所藏

東國紀行 寫本

一冊

以上 西岡虎之助

管絃部

管絃音義 一卷

涼

金

本書は、古書を引き、圖を挿入して、管絃の音調に關する説明をしたものである。その内容は、卷首の序文によつて知ることが出来る。即ち「夫管絃者、萬物之祖也、籠天地於絲竹之間、和陰陽於律呂之裏、乾闥緊那同翫、鬼物人倫等感而石金竹絲雖分其響、調之併以鳳管、琴瑟鼓吹似異其曲、本之咸以龍笛、仍且就中笛圖明調子名義、其首尾相

合一卷、名之曰管絃音義、此有五音七聲、七則配於天之七星、五則應于地之五岳、依之下愚用之成聖賢、聖賢用之成三天仙、加之以近之則發五種之聖禁、遠之亦通五方之極位、故初借俗事粗釋名相、後引佛教委辨義理、書不分行卷數、章不立篇什、但愍顯橫笛之圖相、直作七音之義釋而已」と述べてゐる。文治元年仲冬二十三日、北山隱倫涼金の草する所であるが、涼金の傳記に至つては詳かでない。

五重十操記 一卷

本書は、管絃の音調に、輕重曲節あることを、五重十操に分ちて説明したものである。五重とは毛皮肉骨髓の五者を云ひ、五常に則る。十操とは、大曲中曲・小曲・仲絃・喘吹・曳累・連詞の七則及び中大曲・中小曲・中吹の三卷を合せ稱したものである。著者は詳でない。

龍鳴抄 上下二卷

大神基政

本書には管絃大略日記と内題した寫本がある。先づ樂家の心得べき事は調子であるといひ、春は雙調、夏は黃鐘調、秋は平調、冬は盤涉調、壹越調は中央なること等により、時日晝夜に應じて、時の聲ある事より説き起して、各調子に屬する樂曲の所作を述べたものである。上卷には、總論竝に一越調・雙調・大食調等呂音に屬する樂曲の説明を載せ、下卷には平調・黃鐘調・盤涉調等律音に屬する樂曲の説明竝に本書撰述の來歴を述べてある。

龍鳴抄と題する所以は、笛のことを龍鳴といふより來たもので、龍が鳴いて海に入りしを、再びこの聲を聞きたいものと戀ひわびて、竹を打ち切りて吹いた所が、その聲が龍鳴に似てゐたとの傳説に基くものである。

長承二年五月の著にかゝる、嘉祿二年十月六日書寫以下の奥書がある。

懷竹抄 一卷

今横笛篇を存するのみであるが、笛の由來・故實・調音法等を説明したもので、又古來よりの笛の名人の傳を擧げて、その傳説を示し、笛に關する物語を掲げてある。大神惟季の傳ふる所といふ。

胡琴教録 上下二卷

本書は、琵琶の傳授に關することを記したるもので、上卷には、教學琵琶、琵琶體様、調琵琶、取撥、差柱、撥音、諸調子品、十二律調、呂律分別、樂曲、催馬樂、搔合、手、案譜法、師傳相承等の十五條、下卷には、琵琶彈時用意、晴所作、樂屋琵琶、閑御簾前彈、相交管、相交箏、隨時用意、隨所用意、隨琵琶用意、彈玄上用意、雜口傳、提琵琶、置琵琶、治琵琶、懸緒、付柱、押撥面、直惡音、知善惡、琵琶寶物、琵琶名所、縫袋、縫緒等の二十四條につきて作法故實及び傳統等を載せてゐる。著者は詳かでない。

舞樂要録 上下二卷

本書上卷には舞樂を行ふ時の左右組合せ、即ち番舞の曲目を列記し、應和より保元に至る間、塔供養、堂供養、舞樂曼陀羅供、御八講、朝觀行幸、御賀、相撲節會等に實際行はれた舞樂の用例を記録より抄録し、又下卷には應和より康治に至る間、塔供養、堂供養、一切經供養、舍利會等の大法會に於ける調子音樂の用例を注したものである。著者は詳かでないが、末尾に「覺教法眼授合之」と見えて居る。

雜祕別錄 一卷

藤原孝道

本書は、玉樹、賀殿、胡飲酒、菩薩、陵王等三十九曲の舞樂に就いて、その作法を説明したもので、嘉祿三年の作、著者は當時音樂生たりし藤原孝道である。

舞曲口傳 一卷

豐原統秋

本書は、案摩、二舞、皇帝破陣樂、團亂旋以下の大中小曲、新古樂に關する故實作法等の口傳を録したもので、永正六年八月豐原統秋の上意により撰進したものである。統秋は體源抄二十卷の著者で、後柏原天皇の御師範ともなつた。當時樂道の大家である。大永四年八月七十五歳にて卒去した。

夜鶴庭訓抄 一卷

本書は、五音調子の事、樂名の事、神樂、催馬樂、其他管絃に關する祕事心得等を録して、その子に傳へ、庭訓としたものである。著者は詳かでない。

殘夜抄 一卷

近衛家基

本書一名を迷路抄ともいふ。初めに管絃の起りを略叙し、御遊、舞樂、式講、十種供養、人に物を教ふる事、人に習ふ事、調子の移り替りめ、樂の間の事、音の事、物を祕すべきやう、物の違ひめの事、打物の事、樂器の事の十三ヶ條に分ちて、作法心得等を叙したものである。

近衛家基は淨妙寺と號し、深心院關白基平の長男で、正應二年四月、關白となり、右大臣となつた。

絲竹口傳 一卷

僧俊鏡

本書は管絃に關する口傳を集めたもので、管絃講之時次第、笛之寶物、琵琶之寶物、箏名物、箏調子異名、調子可彈折之事、撥合可彈様、箏之絃張次第、箏の絲より様、和琴寶物、絃管祕曲、管絃着座次第、調子異名等の目につきて説明をしたもの、嘉曆二年三月十五日天王寺の僧俊鏡の記す所である。

木 師 抄 一卷

本書は、管絃をなす次第、大法會の所作等につきて、管絃に關する口傳を述べたものである。著者は詳かでない。

秦 箏 相 承 血 脈 一卷

本書は、仁明天皇の承和十二年箏竝に樂曲譜を持して本朝に渡來せる唐の孫賓より、嵯峨天皇の皇子左大臣源信に傳へ、それより數十代を経て隆圓法師の子覺耀・最尊に至り、又一方には右大臣公顯の女從三位氏子に至る、秦箏相傳の血脈を記したもので、後小松天皇、後花園天皇、後奈良天皇、正親町天皇、後陽成天皇等を何れも當今と記してあるのに徴すれば、幾度にも書き繼ぎしものと思はれる。

琵 琶 血 脈 一卷

本書は、唐の琵琶博士廉承武に起り、遣唐使藤原貞敏より、相承けて鎌倉時代頃までの琵琶の道相傳の系圖を記したものである。

順 德 院 御 琵 琶 合 一卷

本書は、順德天皇の承久二年三月二日、後鳥羽上皇の院御所に於て、琵琶合を行はせられし折の記録で、都合十三番の

組合せ、竝に其の判詞を載せてある。伏見宮御所藏の寫本の奥書によれば、此日後鳥羽上皇琵琶を弾じ給ひ、その外定輔卿孝道等同じく弾じたる趣に見え、判詞は上皇の勅筆であつたことが知られる。

今こゝに收めたる寫本は西園寺公相公自筆の本によりて書寫したものであることが奥書に見えてゐる。圖書寮所藏の寫本は同じく公相自筆の影寫本で、その筆致をよく寫し出してある。又前記伏見宮御所藏の寫本は文永六年三月一日以正本書寫畢と奥書のあるもので、内容に於て多少の異同がある。

八 音 抄 一卷

本書は、玄上牧馬・良道・木繪小琵琶・并手・滑橋・元興寺以上琵琶の八名器のことを記し、兼て琵琶製作の方法を述べたものである。何人の記し置いたものか詳かでない。

東 遊 歌 圖 一卷

風 俗 一 卷

右の二書は、共に堀川右大臣頼宗流の所傳で、一は東遊の歌の調べを記したるもの、一は風俗歌の詞を記したるものである。

郢 曲 抄 一 卷

本書は郢曲に關する祕説口傳で、神樂今様・催馬樂・足柄・片下・田歌等と比較して、その音律聲調等のことを述べたものである。著者は詳かでない。

新撰朗詠集 上下二卷

藤原基俊

本書は四條大納言公任の和漢朗詠集の體裁に倣ひて、同題の詩歌文章を撰みたるもので、上卷には春、夏、秋、冬の部を集め、下卷には雜部を集めてある。

藤原基俊は歌學者で、右大臣俊家の子、官は從五位下左衛門佐、保延四年剃髮して覺舜と號し、本書の外に悦目抄、新三十六歌仙等の著書がある。

圖書寮所藏のものに一寫本がある。胡蝶装で冷泉流の書風を以て書かれた美本であるが、内容には異同を認めない。

梁塵秘抄口傳集 一卷

後白河法皇

梁塵秘抄口傳集はもと十卷あつたもので、梁塵秘抄十卷と合せて、二十卷をなしてゐたものと思はれる。本朝書籍目錄に、梁塵秘抄二十卷とあるのは即ち是をいふのであらう。こゝに收めたる口傳集は卷第十の一卷のみで、從來世に傳はつてゐたのもこの一卷のみであつた。大正の初の頃綾小路子爵家から口傳集卷一の斷簡が発見せられて、その首尾を知ることが得られるに至つた。

この書の來歴は奥書によつて明で、之によると、此書はもと妙音院入道師長の所藏であつたのを、法性寺禪定九條兼實の手許に取寄せて、子孫に傳へたものらしい。それを二條經定が保管して居つたのを師弟の縁を以て、内々綾小路有資に寫させたものと見える。有資の歿後、之を伏見上皇に獻じたので、其本によつて、康暦元年伏見宮榮仁親王が御寫しになつたものと思はれる。この康暦の寫本もそのまゝ、今日まで傳はつて居るが、是も卷第十の一冊のみで、その内容は類從本と同様である。

本書は神樂・催馬樂・風俗・今様等の起源及娑羅林以下の歌ひ方等を一卷より九卷までに記され、この第十の卷には、和歌

の髓腦にならひて、今様の口傳を記されたものである。

大日本史禮樂志にはこの口傳集を後白河法皇御撰として引いてあるが、その内容より研究して法皇の御撰なることは疑がないといふ事を和田英松氏が考證して居られる。

梁塵秘抄口傳集はその第十の卷のみは、世に流傳して居たが、梁塵秘抄に至つては從來全く湮滅して居つた。然るに近來、梁塵秘抄卷二が発見せられて、その佛を知ることを得るに至つた。之は佐々木信綱博士が解説校訂を加へて、「梁塵秘抄」と題して出版せられたものがある。(大正元年、明治書院發行) 尙この書には和田英松氏の序説があつて、梁塵秘抄並に同口傳集について詳しい解説を述べて居られるから、委しくは同書を参考せられたい。

以上 芝 葛 盛

蹴鞠部

承元御鞠記 一卷

承元二年戊辰(一八六八)四月十三日に、後鳥羽天皇が前大相國頼實の郁芳里第に臨幸し給ひて行はせられた蹴鞠御宴の次第を詳叙したものである。蹴鞠に於ける座席のしつらへを最初に詳しく記した後、上皇着座の次第、列席の人々、競技の次第を述べてある。次で十四日、十五日に行はれたる蹴鞠についても略述してある。この精しい記録が蹴鞠の研究に對して甚だ重要なものである事は云ふまでもない。

後鳥羽天皇は蹴鞠の技に堪能であらせられたのは有名な事であつて、後の「貞治二年御鞠記」や、「享徳二年晴之御鞠記」等にもそれ等の事は見えてゐるのであるが、後の蹴鞠の場合にこの時の蹴鞠がよき手本とされた事は容易に想像出来る。従つてこの精しい記述が占める地位は中々大きなものであつたと考へられる。天皇の御傳記は世俗淺深秘抄の項に譲る。

この書は類従本の外に次の如きものがある。
圖書寮所藏 承元御鞠記 寫本 一冊

貞治二年御鞠記 一卷

二條 良基

貞治二年癸卯(一一三三)五月の御鞠會の有様を雅文體で記述したものである。この書も座席のしつらへから、參列の人々、その人々の装束等を詳しく記し、次にこの日の蹴鞠について畧述してある。すべてこれ等の書が主たる蹴鞠そのものよりも、その爲の座席とか參列者の装束とかの記述に主なる部分を割いてゐるのは注意さるべき事で、これ等の記述のなされた目的の一を示すものである。そして後世の風俗史家、有職故實研究者にとつては、蹴鞠と云ふ遊戯以外に多くの好資料を提供してゐる。この書は一名が「きぬかつきの日記」となつてゐる。この「きぬかつき」と云ふ言葉は外にも三條西實隆の著書にも用ひられてゐる言葉で、その場合も蹴鞠の書の表題となつてゐる。意味する所明らかではないが、蹴鞠の場合に勝者にきぬを被せ與へる事ある等より由つて用ひられた言葉かとも考へられる。
筆者二條良基は關白左大臣道平の子で、文あり、和漢の書に通じ、殊に和歌に長じて令名があつた。和歌、蹴鞠、鷹等に關して著書も多い。

「貞治二年御鞠記」は類従本の外に、今傳へられてゐるものには、次の如きがある。

- 圖書寮所藏 貞治二年御鞠記 寫本 一冊
- 圖書寮所藏 貞治御鞠記 寫本 一冊
- 靜嘉堂文庫所藏 衣加津幾日記 寫本 一冊

享徳二年晴之御鞠記 一卷

一條 兼良

享徳二年(一一三三)春、三月廿七日、内裏の晴の蹴鞠の日記で一名「雲井の春」といふ。この奥書に、「享徳二の春三月廿七日、内裏の晴の御鞠の日記、女房に代りて是をしるす、貞治の御鞠の衣かつきの日記と申侍るは後普光院の攝政の書給へる物也、今はかゝるおもかけも残らぬやうになり侍れば念なき心ちもし侍り、且は又後代のためしにもなりぬべき事と思ふ給へれば筆にまかせてかたのやうに書とゞめ侍り。」云々とあるが、よくこの種の記録の成る目的の一を示してゐる。尙この書は右の記事の外に「人々装束並轆色事」を載せ、後花園院以下の人々の装束を詳しく記してある。
筆者一條兼良(一一〇六—一一四一)については代始和抄の項を參照せられたい。歌人である兼良の筆であるだけ、この書も美しい和文で記されてある。

類従本の外に、この書の今に傳へられてゐるものは凡そ次の如くである。

- 内閣文庫所藏 享徳鞠記 寫本 一冊
- 圖書寮所藏 雲井の春 寫本 一冊
- 圖書寮所藏 雲井の春 寫本 一冊
- 靜嘉堂文庫所藏 雲井の春 寫本 一冊

後鳥羽院御記 一卷

後鳥羽院

後鳥羽天皇が蹴鞠の技に堪能であらせられた事は先の承元御鞠記の條で述べたが、この書は即ち後鳥羽院が親しく斯道について記し給ふたものである。惜しい事に殘欠で、終りの「着沓轆様」の一項があるのみで、題名も分らない。然しこの残つてゐる一項は沓のはき方を繪入で詳しく記したものであつて、又、奥書の中に「今定裁轆之色々、示蹴鞠之人々、永守法式、勿違犯矣」とあるを見れば、本書が蹴鞠の装束について、故實を詳述したものである事は想像出来る。
類従本の外に次の如き傳本がある。

圖書寮所藏 後鳥羽院御記 寫本 一冊

成通卿口傳日記 一卷

藤原成通

「木のもとに立つ事」「人数の事」以下蹴鞠に關する三十箇條をあげ、各々について作法を説明したものである。その中鞠の扱ひ方に關する部分が多く、その外に装束の事や、饗膳の事についても記してあるが、興味のある事は、鞠に關する自分の経験や、傳説的な記述もしてある事で、蹴鞠書の中では異色あるものである。

藤原成通は權大納言宗通の子で、久安五年に權大納言となつた。和漢の學に通じ、殊に蹴鞠と馭馬に熟練してゐた。鞠譜の著もある。

この成通卿口傳日記は、傳本としては、尙次の如きものがある。

圖書寮所藏	成通卿卅箇條	寫本	一冊
彰考館所藏	蹴鞠口傳	寫本	一冊
彰考館所藏	蹴鞠口傳	寫本	一冊

蹴鞠略記 一卷

飛鳥井雅經

蹴鞠略記は、蹴鞠の故實を漢文體で記したものであつて、十二項目に分つて略述してある。そしてこの十二項は蹴鞠の技術に關する點が主となつてゐる。「身體者手持足踏顔持腰仕等也」と云ふ項目から「誰無鞠者稱我分之驗也」に至る。

筆者飛鳥井雅經は賴經の子で、和歌をよくし、定家等と共に新古今和歌集の撰者の一人となつてゐる。和歌は定家に學び、其の流漸く重んぜられて、明日香井集其の他の歌集もある。同時にまた蹴鞠の技にも達して居たのである。承久三年五十二歳で薨じた。

蹴鞠略記は類從本の外に凡そ左の如き傳本がある。

帝國圖書館所藏	蹴鞠略記	寫本	一冊
帝國圖書館所藏	蹴鞠略記	寫本	一冊
神宮文庫所藏	蹴鞠略記	寫本	一冊
圖書寮所藏	蹴鞠略記	寫本	一冊
圖書寮所藏	蹴鞠略記	寫本	一冊
内閣文庫所藏	蹴鞠略記	寫本	一冊
彰考館所藏	蹴鞠略記	寫本	一冊

右の外尙圖書館には「蹴鞠略記並八境圖」と云ふ寫本が一軸ある。

蹴鞠簡要抄 一卷

飛鳥井雅康

蹴鞠簡要抄は蹴鞠の故實作法を十六項目に分ち、それをまた六十二細目に分つて述べたものである。まづ「時節」として「三月上旬也、正月公事忿々、二月餘寒猶在云々」と云ひ、その時節に於てまた吉日の選び方、刻限等に分つて述べ、「懸」の條ではかゝり木が櫻、柳等各種の木によつて一々異なるを示し、「會者」の條で會する者の人数等を「装束」の條では烏帽子、扇、沓等について詳しい説明を述べ、かくて鞠の扱ひ方の各方面に亘つて餘す所がない。蹴鞠の研究者にとつては蓋し頗る好き資料であらう。

筆者雅康は法號を宗世と云ひ、又二樂軒と號した。和歌をよくし、蹴鞠の家傳に詳しかつた人である。蹴鞠十箇條、蹴鞠十二箇條肝心抄、蹴鞠書、蹴鞠條々大概、蹴鞠祕說條々等、蹴鞠に關する著書多く、又蹴鞠百首と云ふ心持の大體、庭作大體等、蹴鞠の作法を和歌によつて教示した著書もある。

蹴鞠簡(肝)要抄は類従本の外に、次の如きものがある。

帝國圖書館所藏 蹴鞠肝要抄 寫本 一冊
圖書寮所藏 蹴鞠簡要抄 寫本 一冊

遊庭祕抄 一卷

藤原爲明

遊庭祕抄は、上中下三卷、各卷十ヶ條づゝに分つて述べた蹴鞠祕傳書である。最初に根源として、蹴鞠が我國に傳はつたのが皇極天皇の御代とし、成通、成平の名手を経て、飛鳥井家に傳はり、雅經以下を出し、難波家に宗長を出した由を略述してある。そしてこの書に於ても「時節」「懸」「棹」等から、装束、進退作法等、蹴鞠一般について詳述し、必要に應じては繪を入れて解説して居り、蹴鞠書としては詳しいものである。

筆者爲明は歌人であつて、又蹴鞠に精しい。後醍醐天皇の御親任を得、勤王の軍に従ひ、捕へられて尊良親王と共に土佐に流された事もある。後に後光嚴院の命を奉じて「新拾遺和歌集」の撰に従つたが事成らずして歿した。

本書は類従本の外に、次の如きものがある。

帝國圖書館所藏 遊庭祕抄 寫本 二冊

以上 西岡虎之助

鷹部

新修鷹經 三卷

この書一部三卷に分れ、上卷には鷹、隼鶡の種類形體を説きその相法を示し、中卷には鷹の飼養調矯の法を説き放鷹の方を述べ、その取扱上注意すべきことを挙げ、下卷には鷹の病、及び治療法を説いたもので、中に鷹の種類及び調矯治療器具の圖十餘を挿んである。

全部漢文にて誌され、序があり目録がある。卷末に弘仁九年五月廿二日の日附があり、その下に

賜自

内裏奉

正從六位下兼行備前權掾勳六等巨勢朝臣馬垂

正七位上行令史兼美作大目上野公祖繼等

と誌し、次に別當二品行式部卿親王以下七人の官位姓名を擧げてある。この書に就いては、伴信友が夙く研究を試みて、比古婆衣の第六卷にその説を擧げてある。本書卷末の文の中に、内裏の二字が諸本に脱落してゐること、奉の字が擧また拳の字に誤まつてゐる本のあること、巨勢馬垂の位署の上に正とあるは主鷹正の官を示したものであること、奉の字は内裏から賜つた件の鷹經を主鷹司の官人の奉體する意なること、その他別當官以下の人々の事歴を日本後紀、類聚國史等を引いて詳に明かにしてある。

尙この書の撰者に就きて、伴友は古來説を立てたものはないが、嵯峨天皇は深くこの道を好ませられたから、漢國の鷹經などに據つて欽撰あらせられ、またその道の人にも示して意見を求めさせられたものであらう。唯田獵などの事は帝道に關繫ないことであるから、御製と銘をうつてないと云つてゐる。これに對し和田英松氏は皇室御撰解題の中に

文章の古雅なる後人の編著ならぬ事は論なく、且序文にも「朕内閣寫本は僕は僕とありとあり毎因務隙不廢翫好」とあれば御撰なるが如し。

されど宇多天皇の御代、漢籍の現存せるものを録したる日本國見在書目録に、「新修鷹經三卷」とありて卷數さへ隋唐時代の著書なるべく、且其内容を檢するに、我國に關するものなければ、之を嵯峨天皇の御撰とせんはいかゞあるべき。殊にこの書の事は

嵯峨物語に新修鷹經も弘仁に出されたる文なり云々、また嵯峨天皇ことに好ませ給ひたりとて、弘仁九年に新修鷹經を鷹所へ出さる。別當親王大臣連署して是を天下に弘行せらる。

と記して天皇の御撰なるよしの明文なければ、唐より渡來せしものを、鷹所に下附せられしにはあらざるか、序文に朕云々とあれば隋唐の帝王の著はされしものにもあるべし云々。と論じてゐられる。

氏のこの考は頗る傾聴すべき説である。但し新唐書の文藝志などに見えてゐる書名と同じやうな名をつけて我邦に撰んだ歌書もあれば、書名も巻数も彼に則つて我邦で改作しないと限られない。祕閣から出されても欽撰か、舶載せるものか、そこも明瞭に誌されたものがない。彼國の帝王の著作に如上の書があつたか否か、吾人は彼國の書史に暗いから斷言することが出来ぬ。よつて兩説を擧げて置く。尙後勘を俟つべきものか。

この書は宮内省圖書寮、内閣文庫、京都圖書館、彰考館、池田侯爵家等に古寫本がある。古今要覽稿百七十九には新修鷹經和名鈔といふ書を擧げてある。續羣書類従には鷹經辨疑抄三卷を収めてある。又林信充信智の諺解が三卷（内閣文庫には一冊ものの寫本あり）ある。

嵯峨野物語 一卷

二條 良基

この書は後普光園院攝政良基の著すところ、至徳三年十一月の序がある。身攝家に生れたれば政道を第一とし、和漢の才學これに次ぐべきことを述べ、一萬卷にあまる我邦の記録を考勘し、詩歌を嗜み、老後には水石を玩べる自家の經歷を敘し、世人は馬及鷹は偏に武勇のもてあそびものと思つてゐるのは、我が朝の史に通じない爲で、公家も知るべきものであるといひ、日記記録の中より鷹に關することを抄出したよしを序に述べてある。

本文にはまづ歷朝の天皇の鷹を好ませられた事例を擧げ、次に鷹の貢のこと、鷹場のこと、鷹の使のこと、引出物とな

すこと、鷹の種類、野の行幸の時の鷹の数、鷹の綸旨、鷹の据ゑ様、鷹裝束等のことを説き、野行幸の時の行粧等を詳に敘し、末に土御門右大臣師房の嵯峨野行幸に扈從し大井河に遊覽した時の和歌序（漢文）を擧げてある。そのかみは嵯峨野に行幸があつて御鷹狩を催されるのが例であつたから書名もそれに因みて命じさせられたものである。尙公の作には鷹百韻連歌がある。

神宮文庫、宮内省圖書寮、並に内閣文庫にこの物語の古寫本がある。

白鷹記 一卷

二條 道平

信濃の禰津の神平の奉つた白鷹の記であつて、嘉曆二年丁卯三月前關白（道平）の作つた一篇の文章である。

首に鷹の徳を擧げ、次に仁徳天皇百舌野行幸以來代々の御門の野行幸のことを説き、次に天智天皇の磐手、野守を始とし古今の名鷹を擧げ、さて禰津の奉つた白鷹の古今に類稀なる形相を具へてゐることを、筆を盡して細かに敘してある。鷹經に誌したる良鷹の形相以上に卓越してゐた状が目に見えるやうである。

公卿補任に據るに、嘉曆二年に前關白は二條道平であらう。公は右大臣兼基の子、伏見天皇の永仁三年、九歳にして從三位に叙せられ、歴仕して後醍醐天皇の御代に二たび關白となり、東宮傳兵部卿を兼ね、建武二年四十九歳で薨去し、後光明照院と諡した。

この書は宮内省圖書寮に寫本が一冊ある。

養鷹記 一卷

越前國守朝倉孝景の一族教景が一雙の良鷹を得、餌養して二雛を育て、一を孝景に贈り、一を細川京兆尹に獻じたが、いづれも俊逸であつたので時人がこれを異とし、時の相公は孝景よりその一を得て喜ぶこと限なかつた。その次第、並に教

景が仁愛にして禪を學び、養賢の徳が羽族に及んだことを、漢文で綴つたものである。作者は釋門の人であるが、その誰であるかは未だ詳かでない。連歌師の柴屋軒宗長は教景の賓客であつた關繫から、宗長の需により教景の爲に書いたよし
が文中に見えてゐる。蓋し宗長の友人の大徳寺又は五山の禪僧の筆であらう。
この書は宮内省圖書寮に寫本が一冊ある。

後京極殿鷹三百首

傳 京 極 良 經

春夏秋冬戀雜各五十首づつ、いづれも鷹を詠じたもので、中には

山水のかすむ流に影おちていかなる空に鷹のとぶらむ

霧くらきをちの高嶺を眺むれば鷹かけるらむ騒ぐ村鳥

はらはらと木葉かつ散る山里に夕は鷹のわたるをや知る

の如き風趣ある作も少くないが、風切の羽、ならし羽、ゆるし毛、御法毛、巢守、みより、餌袋、をぎ餌などの所謂鷹詞
を詠み入れて門外のもの解しがたい作が多く、また

身のししのつまと見えばはし鷹の燒き白灰の湯を注ぐべし

折からにつれてはし鷹うけとらば唯よきやうに身をもふるまへ

の如く、鷹匠などの鷹の治療とか扱方などを心得おく爲に、三十一文字に綴つた非文藝のものが甚だ少くない。風體多不
類平生作、疑後人依託耳と奥書にある如く、後京極攝政良經の名を假つて後人の詠んだものであらう。公の集月清集には
この三百首の中の歌は見えないやうである。

尙この書には後京極殿鷹三百首歌鷹秘抄といふ一書があつて古今要覽稿にも引用してある。それから内閣文庫に寫本が
一冊ある。

鷹三百首和歌 一卷

傳 藤 原 定 家

春夏秋冬戀雜の部を設けて「あら玉の年の小柴の雪消えて」以下鷹に關する歌を集めたるもので、前中納言定家の作と
傳へられてゐるが、奥書に「右鷹三百首恐非定家卿作、蓋後人依託耳、然姑從世之所稱收之以異本及注本按合畢、云々と
あるやうに假託の書である。冬の部に

ぬれぬれて猶ぞ狩りゆくはし鷹のうは毛の雪をうち掃ひつつ

の歌が入つてゐるが、源道濟の名歌であつて金葉集冬の部に撰み入れられ、袋草子にも載せてある。定家の作にこれを入れ
る譯がない。また天文八年仲春上旬末晨の「如本書寫置候畢」とある本の末の方にある、

雲雀たつ野邊の眞萩のかり衣花にすりとり秋のすこのり

氷室山麓の原の小鷹狩田面はるかにるなからぞ見る

夕されば秋の小鷹の草とりてききぞまがひぬ鈴蟲の聲

の三首は西園寺公經の鷹百首に同歌が載せてある、彼の百首も怪しむべきことが多いが、この書も疑しい。

又塙本奥書に(前掲の續)「歌存二百九十三首、闕七首、又有定家卿鷹百首者已載目錄。今審訂之於此卷及小鷹部内抄出者也。
故削之以小鷹部五十首代之云。且夫百首者屋代弘賢藏天文中書本則傳世已久、而算計其歌、更餘十九首。今所有百十一首
合點所無八首寫于左、存彼書之體焉。」とありて「はい鷹の小鳥取るてふ」云々の歌より「御狩する野中の清水」の歌まで
八首を載せてあるが、その數を檢するに、

春 三十八首 夏 二十首
秋 四十三首 冬 七十三首

戀 十四首 雜 三十七首

以上二百二十五首で、これに八首を加へても三百首に満たず、小鷹部の五十首を合せても二百八十三首で三百首にならぬ。諸本異同がある。集中には

雪をうすみ若菜つむ野に影おとしくさざる鷹の七嶺の鈴

荒鷹のかなぐりおとす鳥の毛を吹き立ててゆく秋の山風

秋の野に尾花の波をさきたてて走るうさぎを鷹やおふらむ

の如き佳歌もあるが、こゝろ、草どる、山がへり、片がへり、ぬく立、巢まはり、とさけび、ほろろ打、ますかき羽、とら毛、羽杖、ふせ衣、もとほり、大緒、経緒、打かひ袋、をぎ餌、まち餌などいふ鷹語といふ術語を詠み入れてあることは後京極殿鷹三百首よりも一層多く、風趣が少く、且は解しにくい作が可成多いやうである。

本書には定家卿三百首註が一卷ある。また、神宮文庫、宮内省圖書寮、内閣文庫等に一冊ものの寫本があり、内閣文庫には中島尙正等校正寫本、寛永十三年刊本一冊などがある。

鷹 百 首 一 卷

慈 鎮 和 尙

鷹に關した歌百首を収めてある。鷹詞を詠み入れたことは前掲の三百首と同様である。書中

頼まずよ遠山鳥のしだり尾の長々しさよけふの足緒鷹

片敷にむすほほるとも経緒さゝむこゝろも知らぬつみの若鷹

ほに出づる薄がもとの小鷹狩かざす袖より露ぞこほるゝ

嬉しやなたゞひとよりにとりかひつことし始めてつかふ若鷹

百敷の日並のにえを立てんとや交野のしめ野狩聲ぞする

みかり人野され若鷹山かへりおもひおもひに手に据ゑにけり

の六首は西園寺公經鷹百首に入つてゐる。和尚の家集拾玉集中にこの百首の歌が入つてゐるか明かでない。西園寺鷹百首が當時の人々が相集まりて各詠出したものを百首撰び集めたものならば論はないが、否らざればこの百首も問題となつて来る。

この書は宮内省圖書寮、内閣文庫、神宮文庫等に一冊ものの寫本がある。

鷹 百 首 一 卷

西 園 寺 公 經

「たか山にあさる麓のしばしばも」云々の歌より「はし鷹のこもつちこゝろの一もちり」云々の歌に至る鷹の百首であるが、慈鎮和尚の鷹百首に出てるものが六首、定家卿鷹三百首に載せてあるものが三首あることは前二書の解題に述べた通りである。西園寺家は持明院家と共に公卿に於ける鷹の家筋であるから、その家にて人々の歌を撰んだとするならば差支ないが、公經の作とすれば疑問を生ずるのである。東子爵家にこの書を註解した古寫本がある。そうしてその外題には西園寺家鷹百首註とある。それが正しいならば公經の百首でなくて、同家に人々が集つて詠んだものか、或は同家で撰んだものかの一つになる譯である。尙この問題は前の三百首及百首と關聯して考究するを要する。

この書には東子爵藏の註本があり、また古今要覽稿所引の註本があり、また有徳院殿御實記附録卷十七には持明院家をはじめ諸家の秘書、鷹經、新修鷹經、鷹鶴方酉陽雜俎、その外唐商また韓人などにもかの國の鷹法など書て進らせしめ給ひ、御座右に置て朝夕御覽あり、また白鷹記、嵯峨野物語、西園寺鷹百首、京極中納言定家鷹百首などより見出し玉ひ、古のすがたを今に引用ひ給ひし事もあまたあり、後には諸流拔萃七冊、西園寺鷹百首疏義などを御撰述あり。其中に鶴とる事どもを御考ありて探囊抄といふをつくらせ玉ひ、彼の楠右衛門に見せられしに、鷹の事に於て未だかゝる書を見ずと感し奉りけるとなり。

とある。されば徳川吉宗もこの書の疏義を著されたのである。

この書は神宮文庫に寫本一冊、宮内省圖書寮に寫本一冊（別に實兼註の寫本一冊）、内閣文庫に寫本一冊（實兼註寛永十三年刊本一冊）等がある。

小 鷹 部 一 卷

傳 藤 原 定 家

定家卿鷹三百首の後に附けてある鷹歌「春の野の草にとり入るあをさしは鷹のしるしに鈴やなるらむ」以下五十首の歌を分冊したもの。

奥書に「小鷹部五十首附定家卿鷹三百首後、諸本同之、雖然以員外二故分爲別卷二畢」とある。

小鷹といふは隼又はあをさしなどを用ひて小鳥を取るのを指していふ。鳥取藩で出來た夜据物語に秋の狩を小鷹といふとあるが、こゝには春の狩の歌も擧げてある。蓋し冬行ふ大鷹狩（單に鷹狩といふ）に對して云つたものと見える。

禰津松鷗軒記 一 卷

禰 津 定 安

信州諏訪鵜鷹派の禰津松鷗軒常安の鷹に關する記録にして、足利末期の所傳であつて、その門人屋代越中前守秀政より諏訪因幡守頼水が受けついだことは、慶長九年九月の奥書によりて明かである。

その内容は鷹の名稱及び毛名所のこと、斑がはり見様のこと、鷹狩のこと、鷹の架のこと、ほこ衣のこと、鷹の繫ぐ様、鳥屋のこと、大緒、足緒、をぎ繩、餌袋等の長さ大さ色等より鷹に關する禮儀作法に至るまで一つ書にしてあるが、その中には口傳などと記したところがある。

松鷗軒は宮内大輔元直の子で、諱は信直、美濃守と稱す。松鷗軒常安は入道後の名である。中世地下に於ける鷹は諏訪

と宇都宮と二流あつて、禰津の元祖はその系圖によれば禰津左衛門尉道直に起り、その子神平貞直、その孫神平宗直、その曾孫神平宗道、その玄孫宗教と相繼ぎ、宗道の子神平宗光に至り御所御鷹飼方の秘訣を傳ふといふ。松鷗軒は宗光の十五代の裔といふ。松鷗軒が門には屋代越中前守、吉田多右衛門家元、熱田鷹飼伊藤清六、荒井豊前守、平野道伯等出でて皆發明するところあり、各一家をなすといふ。

以上 福 井 久 藏

遊 戲 部

薰 集 類 抄 二 卷

藤 原 定 長

薰集類抄は、諸家の薰物の處方を記したものである。上卷に於ては梅花、荷葉、侍従等二十三種の香について、閑院左大臣、賀陽宮等の諸家の獨得の處方を一々記してある。これによつて一つの香と雖も、如何に複雑なる調合によつて苦心作成せられたかが分る、例へば「梅花」について見ても、擬梅花之香也春尤可用之と云ふ一つの香でありながら閑院左大臣と賀陽宮では異なる八種の調合であり、滋宰相家では三種の調合法をあげてある如く、その一々の示す興味は頗る大なるものがある。そしてこの書の含む内容は單に香のみならず、藥學の方面から見ても亦教ふる所頗る大なるものがあらうと考へられる。よく知られた麝香が殆どすべての處方に含まれて、其の重要さを見せると共に、沈、占唐、甲香等々豊富に示されてゐる。上卷に於てこの處方を述べて置いて、下卷に於ては、和合の時節、香の春方、和香の次第等、製法に關して十二項をあけて説いてゐる。香に關する書として、到れり盡せりと云ふべく、頗る價值高きものと考へられる。

筆者定長は僧俊海の子である。叔父俊成によつて養はれたが、俊成の子定家生るゝや避けて僧となり、名を寂運と改めた。丹青をよくし、和歌に長じた人で、定家も亦彼を重んじてゐた。建仁二年七月二十日歿した。

本書は類従本の外には左の如きがある。

神宮文庫所藏	薰集類抄	寫本	一冊
彰考館所藏	薰集類抄	寫本	一冊

後伏見院宸翰薰物方 一卷 後 伏 見 院

後伏見院宸翰薰物方は後伏見院が、薰物の製法、燒様、合様等について記し給うたものである。「黒方」「梅花方」について其の處法を記し、甘葛の煎方、貝のあらひ方を述べ、其の他の各種に及んでゐる。香の研究者にとつて逸すべからざるものである。

むくさのたね 一卷 後 小 松 院

むくさのたねは、香の中で、常に用ひられる所の六種、即ち梅花、荷葉、菊花、落葉、侍従、黒方について、その處方、製法を記せるもので、一名六くさの記ともいはれる。この處方をまた、先の薰集類抄や、後伏見院宸翰薰物方に記されたものと比較する時は、その興味は甚だ大きい。尙本書では單に處方のみでなく、沈、丁、白等のそれらについてもその刻み方、おろし方等を詳しく述べてある。この六種の香の記であるためにむくさのたねの題名を附したものであらう。

五月雨日記 一卷

五月雨日記の題名の所以は本書が、「おりからさみだれのころは、なをいほのうちしめやかに」云々と書き初められてゐるよりつけたのであらう。最初に香合の作法を略述した後、文明十一年己亥(一二三九)足利將軍義政邸に於て行はれた六番香合の次第を記したものである。六番の香合を順次に略述した後、道具の一々を繪を入れて精しく記してある。先の薰

集類抄以下が香の製法、成分の方面から見てあるに對し、本書は香合の作法、儀式の方面から見てあるもので、兩々相まつて好き参考となるものである。類従本の外に左の數種の寫本がある。

南葵文庫所藏	五月雨日記	寫本	一冊
彰考館所藏	五月雨日記	寫本	一冊
靜嘉堂文庫所藏	五月雨の記	寫本	一冊

名 香 合 一 卷 三 條 西 實 隆

名香合は文龜二年、香道の名匠志野宗信の亭で行はれた香合の記録で、三條西實隆がそれを執筆した。肖柏、宗信等、會衆は凡て十人、十番である。十番各々について美しい文章で記されてゐる。宗信に關する文獻には假託が多く、研究者を困惑せしめるが、本書等は正確なものの一として、香道史の上から云つても、實隆や宗信の傳記の資料と云ふ點から云つても逸する事の出来ないものと考へられる。本書には尙左の如きが現存する。

内閣文庫所藏	名香合	寫本	一冊
--------	-----	----	----

名 香 目 録 一 卷 玩 隱 永 雄

名香目録は太子、蘭奢待以下三十餘種の名香について、その特色、即ちにはひ、火末等を簡單に解説したものである。香道の研究者にとつて、香の特色や、種類等を知るに役立つものであらうし、又別に醫學的方面から見ても、前代人の嗅覺、にはひに對する好惡等について参考となるものであらう。

園 碁 口 傳 一 卷

圍碁口傳は、碁道の傳書であつて、斯道の古典から要點を摘抄したものとあつてゐる。「碁聖式中取要載之」とあるのは、その意味であらう。しかしこの註がそのまゝ、信憑に値するか否かは、將來の攻究にま

たねばならない。記述の形式は本文をあけて、「私に」と云ふ註を入れた形になつてゐる。最初に手敵相打法を記し、次に手受相打法を記して、以下斯道の諸秀才の語を引いてあるが、その中に「圍碁式」の撰者に觸れた物語もある。よつて本書が現在の形に成立した時代を推測し得られぬ事はない。本書は類從本の外に、次の如き傳本がある。

神宮文庫所藏 圍碁口傳 寫本

一冊

圍碁式 一卷

玄

尊

圍碁式は卷尾に「正治元年六月注之、玄尊」とあつて、鎌倉初世のものとされてゐる。果して然るか分らないが、碁書としての古典であり、技術的な觀察者にとつても、風俗史的な研究者にとつても、必讀の書である。「閑なる所にたゞみをならべしきて尋常の局石を置べし」と會所について注意すると共に、先手、石立、石責、目算、劫等にわたつても記述し、又「凡強き合手に合ときは、前の夜能々やすむべし」などと心得を説き、碁局の寸法にまで及んでゐる。圍碁口傳が主として技巧を教へてゐるに對し、本書は故實、風俗上の事にまで及んでゐる點を特徴と見られるであらう。

仙傳抄 一卷

仙傳抄は、比較的詳細な花道の書として現存する最大のものといふべきである。内容は、「元服の花の事」以下五十餘條で、卷尾には天文から天文に至るまでの相傳次第が記されてある。即ち此仙傳抄一作者三條殿御祕本。頼政公依御所望。

天文二年三月廿五日

寛正六年二月八日

(中略)

天文五年正月十七日

富阿彌相傳

武部三位法印

池房專慈

右相傳次第如此

と記されてある。本邦の花道史を飾る文献の一である。

一、七夕の花の事、すこし風をもたせたる躰をたつるなり。をにいていなるけしきあるべからず。すこしも下草たてわけの心有べからず。しんのえだ三光のえだをくべし。三重にあり。

一、むこよめとりの花の事、あいきやうの枝ををくべし。そのやうは一へいのうちにしんを二本さしむかはせてたつるなり。兩様に口傳あり。(下略)

と云ふ風な故實もよく説き示されてあるし、又禁忌の作法などについても、

一、三木とは杉松つはきはきを立あはせぬなり、又木三つ一のうちに立ぬといふ。祝言にいむべし。と云ふ様な注意を怠らない。術語の解釋等も處々に見える。

一、十文字とは、さしちがゆるといふこゝろなり。

一、もちりとは、木と草とにて、草と草、木と木にても、もとのもちりたるをもちりといふなり。

と云ふ如きがそれである。その他花道の諸方面に涉つて必要な事項をよく傳へてあり、殊に、「谷川流」と云ふ一流派の名稱まで見えてゐる事は留意すべきで、室町初世既に諸流の對立があつた事實を語つてゐる。本書の傳本には尙次の如きものがある。

南葵文庫所藏

仙傳抄

寫本

一冊

帝國圖書館所藏

仙傳抄一名萬花活様、寫本

一冊

君臺觀左右帳記 三卷

能阿彌

君臺觀左右帳記は、能阿彌及相阿彌が東山殿義政の殿中に於ける裝飾用の古器珍什を具録して、需むる者に與へたものらしく見える。古來書畫の鑑賞家や、茶道の好事者にとつて、殆ど經典視されて居たものだけに、その名は汎く知られてゐる。巻尾に、

此一巻頻依御懇望注進之候。閑被成御覽、御不審之事候者可承候。口傳可申候。努々不可有御他見候也。

文明八年三月十二日

能阿彌 在判

大内左京大夫殿

とある。博物館本の本書には、この次に、

右此條々不實候得共、依所望思出次第に記也。不可有外見也。

永正八年辛未十月十六日

眞 相花押

千光堂松翁居士

と記されてゐる。大内左京大夫は政弘の事らしい。然し千光堂松翁は誰であるか、いづれにしても登載された珍器の多くは、義政在職時代に蒐集された舶載品らしく、文明十一年銀閣を築いて隱遁してから、延徳二年に薨去するまで、此種の採集品を眺めては、雅興の限りを盡してゐたものであらう。本書の内容については、今泉雄作氏が往年詳細な解説を「國華」誌上に公表されてゐるから、必ず參看すべきである。本書は類従本の外に、凡そ次の如きものが現存する。

帝國博物館所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊
神宮文庫所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊

圖書寮所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊
圖書寮所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊
南葵文庫所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊
帝國圖書館所藏	君臺觀左右帳記	寫本	三冊
帝國圖書館所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一帖
靜嘉堂文庫所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊
靜嘉堂文庫所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊
靜嘉堂文庫所藏	君臺觀左右帳記	寫本	一冊

御飾記 一卷 相阿彌

室町時代以降に於ける室内の敷設、裝飾を徴するに缺くべからざる著である。巻尾に、此一巻書大略致存知分、慥注申候。御不審之事候者尋可承候。就口傳可申候。不可有外見者也。

大永三季十二月吉日

松雪齋鑑岳眞相在判

と云ふ奥書があり、別本には、

此一巻しるしたる物一向無所持候之條、近年於殿中見及申分注申候。(下略)

ともある。著者が實見を主として本書を編した事は明らかである。君臺觀左右帳記と共に、詳しい繪入りの記述になつてゐる。類従本の外には、次の如き傳本がある。

靜嘉堂文庫所藏	東山殿御飾記	寫本	一冊
靜嘉堂文庫所藏	東山殿御飾記	寫本	一冊
靜嘉堂文庫所藏	東山殿諸飾記	寫本	一冊

作庭記 一卷

九 良 經

作庭記は、後京極良經の撰と傳へられてゐる。著作年代について異説があるけれども、輕々しく舊傳を否定するわけにはゆくまいと考へられる。かういふ一節がある。

南庭へ出す遣水、おほくは透渡殿の下より出テ西へ向へて流す常事也。又北對よりいりて二棟の屋の下を経て、透渡殿の下より出ス水、中門の前より池へいる、常事也。

透渡殿は鎌倉中世既に京洛中に殆んど存在を失つたものらしいから、かういふ記載が後世のものにあり得べきことではなからう。また本書はたゞ作庭の故實作法を記したものとせばかり見らるべきものでない事も勿論であつて、到る所に時代人の生活と信仰とを想はせるところの記述がある。しかもそれ等はさう後世のものとして考ふべきものではない。不動明王ちかひてのたまはく、瀧は三尺になれば皆我身也。いかにいはむや四尺五尺内至一丈二丈をや。(中畧)不動種々の身をあらはし給ふ中に、以瀧本とする故なり。

これなども近代の劍客傳によく物語られる練膽修心の法としての瀑布を見る話を思ひあはされる信仰の一である。この種の記載は他にも頗る多い。本書の傳本としては、尙次の如きものがある。

神宮文庫所藏	作庭記	寫本	一冊
圖書寮所藏	作庭記	寫本	一冊
京都圖書館所藏	作庭記	寫本	一冊
彰考館所藏	作庭記	寫本	一冊

洛陽田樂記 一卷

大江匡房

洛陽田樂記は、堀河院の御代永長元年、京洛の地に田樂の流行した事を記したものである。當時の状態は中御門宗忠の「中右記」にも見えてゐるから参照するを要する。漢文體で記され、短いものではあるが、田樂の研究者にとつては勿論平安季世の生活を觀察せんとする者にとつて好個の文献たるを失はない。類從本の外に、次の如き傳本がある。

彰考館所藏	洛陽田樂記	寫本	一冊
-------	-------	----	----

文安田樂能記 一卷

大僧正實意

文安田樂能記は、文安三年三月十七日伏見宮貞常親王が、實意大僧正の住坊に渡御せられて、田樂能藝を御覽になつた事を記し、翌十八日武家の若君(當時將軍の弟)を招待した事に及んでゐる。兩日とも公武の貴顯に接し、上下の賞讃を得た「福若丸」については、

福若丸能藝容儀越尋常たり。此福若丸年少之時、白地に立入此門室處、先世之宿緣歟、私宅に歸ることを悲び、(中畧)然間同宿、已に及數箇年べり、

とある。當時妙齡の演技者が上下の歡迎を受けた様子が分る。廿一日には特に伏見殿に召され、更にその面目を施した。本書もその名譽を傳へる爲に記録されたもので、巻尾にも、

此次第記録一紙可書置之由、愛阿頻被望之間、伺伏見殿申之處、可然之旨依仰福若丸に書與之。と記されてゐる。

糺河原勸進猿樂日記 一卷

伊勢宗悟

糺河原勸進猿樂日記は寛正五年四月、法印善盛の勸進で糺河原に行はれた猿樂の記録である。太夫は觀世又三郎と音阿彌で、將軍(公方様)も、夫人(上様)も、棧敷で觀覽し、四日から十一日までの間に行はれた。演者には毎日觀客から衣裝

を與へ、初日には「御服小袖都合八十三」有り、第二日には「御服之外九十一」有つたし、第三日にも六十三領に及んだとある。以て當時の猿樂の景況を知るべきである。曲目の名もあけてあるので、それにも参考になるものが少くない。巻尾に、

右伊勢宗悟被書進之候。於七尾寫之。(中畧)右此條々依御懇望相傳之。努々不可有外見者也

天文十七季七月十一日

松波越前入道 松 雪 有判

とあるから、當初伊勢氏によつて記録されたものであらう。類従本の他には、次の如き傳本がある。

- 内閣文庫所藏 糺河原能の記 寫本 一冊
- 靜嘉堂文庫所藏 糺河原勸進猿樂日記 寫本 一冊

異本糺河原勸進申樂記 一卷

異本糺河原勸進申樂記は、前者と同時の事を記したもので、天正十一年の奥書がある。演技場や、觀覽席、橋掛り等の状態を圖示してある所に本書の特色がある。本書には尙

- 圖書寮所藏 多田須河原申樂記 寫本 一冊
- 圖書寮所藏 糺河原勸進能棧敷圖 寫本 一冊
- 圖書寮所藏 糺河原申樂棧敷圖 寫本 一冊

栗田口猿樂記 一卷 傳尊應法親王

栗田口猿樂記は、青蓮院門主尊應法親王の執筆せられたものと傳へられてゐる。本文中の一節に、

さて此度の芝居まくすが原と申は、當門跡慈鎮和尚の御舊跡也。(中畧)應仁のおほいなる亂れ出來て、その次のとしの秋より千草のはなちりくく(中畧)ちかき年ごろたちかへらせ給ひては、又かゝる物見などありて、群集ありしかば、和尚の御素意にても侍らむかし。

とあつて、奥書の文とも照應してゐる。内容は永正二年今春太夫の勸進能の興行の事を記したものである。

以上 文學博士 櫻 井 秀

飲食部

厨事類記 一卷

厨事類記は、平安季世から鎌倉季世へかけての食饌に關する舊儀故實を傳へた好著である。残缺本即ち「卷一御膳部」と巻數不明の部分があるのみであるが、内容の價値はその爲に少しも失はれない。「腋御膳」御酒の條に次の一節があつて、宣旨云、藏人所中宮權大進藤原朝臣定房仰云、來月五日爲御方違可有行幸北山殿、腋御膳新酒一斗酢三升、宜仰酒造司早令沙汰進者。

永仁三年三月日

出納前薩摩守安倍 在判

永仁三年以後のものである事は明らかである。「晝御膳」「腋御膳」「御節供」「臨時供御」等多くの項目に分つて、必要に應じて圖を入れて説明してあるが、「臨時供御」の條を見れば、節供の調進物等も見えてゐる。試みにその一部をあけるならば、

七日。○正月 若菜。菘茄實加進之。

十五日。御粥。

三月三日。御節供。

赤御飯。御菜。御菓子八種
各居御臺。

五月五日

赤飯。御菜。御菓子八種。^{一種}
粽

七月七日

索餅。御菓子八種。蔬實。小豆。

九月九日

赤飯。御菜。御菓子八種。

などとおつて、節供の日に赤飯の用ひられる事が、既にこの頃からあつた古き風である事などが分る。卷數不明の分は、分類の名稱は明らかでないが、饗應の用具の解説を圖と共に記したものと、「調備部」即ち各種の饗應用の飲食物の解説を記した部分とある。この「調備部」の中の「調備故實」の條を見ると、

干物御物

干鳥、雉ヲ鹽ツケズシテ、ホシテ削天供之。

楚割、鮭ヲツケズシテホシテ、削天供之。

蒸蛸、蛸ヲ蒸テ、ホシテケヅリテ供之。

焼蛸、蛸ヲ石ヲヤキテ、ホシテ削天供之。

干鯛、平切天供之。

かういふ一節もある。讀書子が記録等でよく見受けるところの食品で興味の多いものである。この如く他にも多くの好参考を含んでゐる書である。類従本の外に、次の如き傳本がある。

帝國圖書館所藏	厨事類記	寫本	一冊
圖書寮所藏	厨事類記	寫本	一冊
靜嘉堂文庫所藏	厨事類記	寫本	一冊

世俗立要集 一卷

卷頭に「飲食部」とあつて、帝王畫御膳圖以下二十一項目を掲げてある。一種の百科全書、又は類書ともいふべきものであつたらうと思はれる。残缺傳存の部分が飲食部であつたために、この部に收められたのである。内容は平安季世から鎌倉中世へかけての食膳に關する風習故實を述べてあり、頗る貴重な資料を提供してゐる。一三例をあけるならば、一、ハシニテサカナクハザルヤウ

昔堀川右大臣顯房ノ御子息國信ノモトへ、カタタガヘノタメニワタラレタルニ、御料チマイラセタルニ、ハシチラスエテ汁ヲ御料モナラズニヨリテス、メ申ニ、御返事ニサカナナチバコソ、テニテハナラメト御返アリト、記録ニミヘタリ。この末文に云ふ「記録」は名を詳かにしないが留意すべき傳本である。

また酒の肴に梅干を使用する由來を説いた次の記載もある。
若漢土ノ作法歟、漢土ニ鳩ト云鳥アリ。其鳥ノ羽ノ拘入ツル酒ヲ鳩酒ト云、此酒ヲ飲ツレバ必死スト云々。其藥ニ梅干ヲ用ヒル。而チ若敵アリテ鳩酒モヤス、ムルト、ハシノ臺ニ梅干チ一置ト云々。

古書には多く劇毒物に關する解毒法を傳へたものがあつて、その中には現代に於ける藥學に貢獻するものもあらうと考へられるのであるが、右の一條などもその例證とすべきである。また「貴人御前ニテ酒ノ事」と云ふ一條の中には、次の様な記事もある。

スベテ貴人ノ御前ニテ酒ヲタマハレルニハサカナチクフベカラズ。但時ノ珍物ナドニテモカケヌハカヘリテ法ナシ。テ

ニトリテスコシハクフベシ。スベテサカナヲハシニハサンデ貴人御前ニテクフ事セヌ事也。

これによつても飲酒の作法がよく知れるし、肴の食ひ方も前條の記事と参照して手で食ふ事の正しい事が分る。今昔禮節作法の變化に驚かれる。この種の文献も頗る多かつたやうであるが、今は「厨事類記」と本書などが、比較的古いもので代表視されてゐるにすぎない。類従本の外に、左の如きがある。

- 帝國圖書館所藏 世俗立要集 寫本 一冊
- 神宮文庫所藏 世俗立要集 寫本 一冊
- 圖書寮所藏 世俗立要集 寫本 一冊
- 彰考館所藏 世俗立要集 寫本 一冊

四條流庖丁書 一卷

多治見貞賢

四條流庖丁書は、料理關係の作法、技巧等について、傳へたものであるが、恐らくは室町初世の作であらう。奥書にも右此條々相傳之趣、努々不可有外見者也。

于時長享三年二月下旬

多治見備後守

貞賢 在判

とある。組刀の記載から始めて、繪を以て解説しつゝ、料理一般に及んで居り、参考すべき條々が少くない。例へば、

- 一、女ニ參ラスル物ヲバ、大ニ切ベシ。男ニ參ラスモノヲバ小ニキルベシ。口傳。
- 一、鳥ノ燒物ノ事、女ニハヒツタレヲ上ニ盛ベシ。男ニハ別足ヲ上ニ盛ベシ。引垂ハ陽、別足ハ陰也。(中略)口傳有之、和合ノ心也。

などとあつて、厨房の技巧作法などにまで、陰陽の思想の混入せるを示すなど、料理以外の興味から云つても大なるものがある。料理に關するものとしては、勿論頗るよき資料を提供してゐるが、同時に又、故實や由來の記載に留意さるべきものが多い。本書は、類従本以外に、次の如き傳本がある。

- 神宮文庫所藏 四條職掌庖丁書 寫本 一冊
- 彰考館所藏 四條家庖丁 寫本 一冊

武家調味故實 一卷

武家調味故實は、卷頭に缺文があつて遺憾であるが、室町以後に於ける武家、貴族の生活を究めんとする者にとつては、一讀すべき必要ある書である。野菜類から、魚、鳥等の調理、作法を記したもので、食饌關係に範圍は限られてゐるが、その料理技巧の方面よりしてのみならず、作法的故實の方面に於て見るべきもの少くないのである。例へば

- 一、御はがため、かならず正月一二三日ならねども、七日より内に吉日をみて、御鏡を御覽せらるゝなり。

と云ふ様な記事から、「くわい人の間にいませ給べき物」の注意等、此種の記載は古人の「日用必携」とも云ふべき書には、皆載せられては居るが、その内にも多少の出入や沿革があつて、時代の變化やそれに伴ふ常識の動搖等を觀る事が出来る。

大草家料理書 一卷

大草家料理書は、庖丁人や、庖丁の作法を説き、また各種料理の方法を、解説したものである。室町時代の武家方面の記録を読む者の参考になるばかりでなく、料理の道に於ける宗家としての大草家の秘傳を知らうとする人々のためには、好個の参考文献である。

最初に魚類に庖丁を加へる時の作法が説かれ、次で次の一節がある。

一、式鯉ニ切刀曲四十四在之、式草鯉三十八、行鯉ニ三十四刀也、又組ニ切放て竝たる數十二、置所六あり。

一、まなばしニ七の病有、刀ニ五の病、此内禁忌箸刀あり、祕事ナリ。
此種の作法の中にも、時代の影が明らかに映り出て居るのを看取する事が出来る。其の他鯛の苔焼とか、南ばん焼とか云ふ料理の品名、その調理法等が記されてゐるもので、讀者のこれによつて得る所は、決して少くはあるまいと思ふ。

庖丁聞書 一卷

庖丁聞書は、調理の名目と其の方法をあけて、料理關係の故實作法に及んでゐる。室町季世のものかと考へられる。内容は魚鳥から野菜果實に及んでゐるが、今二三をあけて見ると、

- 一、三鳥と言は鶴、雉子、鴈を云也。此作法にて餘鳥をも切る也、
 - 一、五魚と言は鯛、鯉、鱸、鮓、王餘魚をいふ、此作法にて餘の魚をも切也、
- などと云ふ記事もある。本邦に於ける肉食は古から主として魚鳥であつた。その中でも時に尊重されたものと、然らざるものがあつたらしい。その一つは分らないのであるが、かういふ記載から見ても、これ等の種類が少くも當代に於て愛賞されたことだけは確實であらう。その他こゝに載せられた數多くの食物の種類を検討だけでも、色々の方面に益する所大なるものがあらうと思ふ。

大草殿より相傳之聞書 一卷

大草殿より相傳之聞書は、大草流の料理の書であつて、献立の事、式禮の事から、調理の事など、委しく記された大部なものである。飲食物の史的研究に益する事大なるは云ふまでもない。

- 一、かはらけの物二つたての時は、左はやき鳥、右はきりかまほこ(下略)。

とか、

- 一、しやうじんと魚類の時は、しやうじんは左、魚は右、しやうじんと鳥とをつかふ事はあるまじく候。

とか云ふ故實が、この時代に成立したかも興味をひく問題であらう。またこゝに驚く程嚴密に規定されてある作法が、果して近代まで斯道の技術者の間に嚴守されたか分らないが、然し風俗史的地見地から見ても捨て難い記載が多い。また巻頭にある「きんぎよとは口のきなる鯉の事にて候」以下の記事等は、單に料理や、故實のみでなく、大きな興味を惹く一記事と思はれる。本書は、類従本の外には、次の如き傳本がある。

靜嘉堂文庫所藏

大草殿相傳之聞書 寫本

一冊

喫茶養生記 二卷

榮

西

喫茶養生記は、僧榮西の著で建保二年の著作となつてゐる。上下二卷に分つて、漢文體で記してあるもので、「茶也養生之仙藥也、延齡之妙術也」と云ふ語を以て始まつてゐる。上卷は「五藏和合門」とし、茶の功能から、釋名、形狀、採時等に及び、下卷は「遣除鬼魅門」として、飲水病、中風、其の他の病氣をあけて、それに對する茶の功德を説いてある。従つてこの書が、茶道に於ける参考と共に、醫學、生理學等の立場から参考になる所少くない。殊に下卷に於ては、茶の功能を強調して居るが、その外にも一般的な療法、養生法もあつてゐるのであつて、病名や、病氣の原因等についても記載してあり、醫學史上看過すべからざるものと考へられる。本書は昔から重要視されたもので元祿年間に刊行もされた。内閣文庫、神宮文庫にはその刊本もある。近時、大日本佛敎全書の中にも収録せられてゐる。寫本としては次の如きものがある。

内閣文庫所藏

喫茶養生記 寫本

一冊

喫茶往來 一卷

玄 惠 法 印

本書の著者は、玄惠法印とされてゐる。本邦の藝道史を修める者にとつて必讀の書である。「茶」の賞翫、茶道の成立と推移などを見んとする人々には、これによつてよく茶道の過渡期に於ける状態を知る事が出来よう。

こゝに於ては、一方に茶味の識別を中心とする、始源的な「茶」の道の心得と共に、一方には近代的な、茶席のしつらへと云つた風な意匠も見られるのであつて、喫茶の興遊から「茶道」への推移を語る。かの完成した驚くべき形式化されたる茶について知らんとする者にとつて、これ等の書の與へる所は大なるものがあらうと思ふ。

酒 茶 論 一卷

沙 門 蘭 叔

酒飯論と似た内容を持つもので、酒徳と茶徳の優劣論である。兩方の主張者の問答として論を進め、最後に調停者が出て「酒之徳以不可盡、茶之徳以不可極」と云つた様な事を云つて、終つてゐる。この内の問答の推移の間に、風俗史家にとつて逸すべからざる好資料を多く含むものである。

亭子院賜酒記 一卷

紀 長 谷 雄

亭子院賜酒記は、延喜十一年六月十五日に行はせられた酒會の記録である。大戸（當時上戸の事を云ふらしい）すべて八人、廿盃を限度として行はれた。藤原仲平以下平希世まで、「皆當時無雙名號甚高」かりし酒客で、大盃を巡らしたのであつて、亂れざる者は伊衡一人のみであつたとある。

酒 飯 論 一卷

酒飯論は、成立年代は室町中世か、或は季世かと考へられる。風俗史の資料としては勿論、その外にも種々の方面から利用され得る。著者は、奥書には、

右酒飯論者不知何人作也。或曰後成恩寺禪閣之戯作（下略）

と云ふ説を掲げてあるが、容易に承認は出来ない様である。内容は上戸の飲酒禮讃と下戸の反對の主張觀察を、造酒正長持と、飯室律師好飯と云ふ二人に代表させて問答せしめ、それを第三者が批判すると云ふ形で、全部七五調の雜文で記されてある。造酒正長持が、口を極めて酒を禮讃し、下戸を嘲笑すれば、飯室律師は上戸の醜體を笑殺して下戸の禮讃をする。そして第三者として、「中戸に過ぎたるものぞなき」と判してゐるのであつて、これが著者の思想であらう。室町時代は禁酒運動の幾度か行はれた時であるから、その方面から云つても、時人の態度を考へる上に、本書も亦一資料を提供するものであらう。

北野大茶湯之記 一册

天正十五年十月、北野に張行された大茶會についての記載である。當時に於ける茶道の大衆化と共に、秀吉の性行をもよく示すものとして注意さるべき書である。最初に當時の秀吉の御觸等がのせてある。茶道執心のものには若黨町人百姓以下誰人でも釜一つ、つるべ一、香物一、茶のないものはこがしても良いから持つて集れと云ふかの有名な一句も中に見える。當時の茶道の一般化してゐた事を示すものであらう。同時にまたこれ等の言葉や、其れに續く座敷は松原で良いとか、「數寄心懸有之」者は唐のものでも出て来いと云ふ言葉や、大言壯語の好きな、大が、りな事の好きな秀吉の一面を物語る。然しまた、「侘者においては」云々の條もあるのは注意を要するので、茶道が、「茶飲」の華奢から、「茶數寄」の閑寂典雅に移り、更に一轉して「侘茶」の時代に入らんとする傾向を示すものである。茶道史の上からこの過渡時代を示すものとしても尊重さるべき文献であらう。類従本の外には左の寫本がある。

以上 一冊 文學博士 櫻井秀

新校羣書類従 卷第三百二十九

檢校保己一集

紀行部三

高倉院嚴島御幸記

土御門内大臣通親公

はかなくて年もかへりて、治承四年にもなりぬ。春のはじめにめづらしきことも、かきつくしがたし。くらるおりさせ給ひて、いつくしまの御幸あるべしなどさめきあひたるも、安徳夢のうき橋をわたる心地するに、きさらぎの廿日あまりにや、春宮に位ゆづり奉り給ひて、内侍所、神璽、寶劍わたしたてまつられし夜こそ、日ごろ思召しとりしことなれど、心ほそき御けしき見えしか。宮人も限りなくあはれつきせざりしが、空のけしきもかき曇り、残りの雪、庭もまだらにうちそそぎて、くれがたになりしほど、かんだちべぢんに集りて、あるべきことも、古きあとに任せて行はれしに、宣旨うけたまはりて、ぢんにいでて、御位ゆづりのこと、左大臣仰せしをきゝて、心ある人袖をうるほして、なにとなく思ひつゝくる事色にいでたる。その中に、とりわき心ざしふかき人に

新校羣書類従 卷第三百二十九 高倉院嚴島御幸記

や、かくぞ思ひつゝける。かきくらし降る春雨や白雲のおる、なごりを空に惜める時よくなりぬとて、何となくひしめきあひたり。辨内侍御はかしとりて歩みいづ。せいりやう殿の西おもてに、やすみちの中將うけとる。備中の内侍いほにしるしの宮とりいづ。隆房中將とりて、近きまもりの司たちをひていづ。年ごろちかく候ひて、もち扱ひし御はかし、しるしのはこ、今宵ばかりこそ手をもふれめと思ひつゝけむ内侍の心のうち、思ひやられてあはれなり。まうけの君に位ゆづり奉りて、はこやの山のうちもしづかになど、おほしめすま、なるべきだにあはれもおほかるに、まして心ならずあはれなるらむさきくのありさま、思ひやらる。内裏のこともはてて、夜もあけがたになりしほどに、人々歸りまゐりて、なにとなく火のかけもかすかに、人めまれなるさまになりて、涙とまらぬ心地するに、院號おほせられて、殿上はじめ、なにくれさだめらる。鶏人のこゑもとまり、瀧口のもんじやくもたえて、もんちかくくるまのおりのりせしも、ひがごとのやうにぞおほ

えける。そのころ、閑院の池のほとりの櫻はじめてきたるを見て、

九重の匂ひなりせば櫻花春しりそむるかひやあらまし
かくて、いつくしまの御幸あるべしとて、やよひの三日、
神ほうはじめらるべき日次のさたあり。位おりさせ給ひて
は、賀茂、八はたなどへこそいつしか御幸あるに、思ひもかけぬ海のはてへ、浪をしのぎていかなるべき御幸ぞと、なげきおもへども、あらし波の氣色風もやまねば、口より外にいだす人もなし。四日、よき日とて、御幸はじめあるべしとて定めらる。そのあしたより雨ふりて、夕べにぞはれたる。そんなうなどさせ給て、實國大納言使にてまるる。夜に入りて、土御門高倉邦つなの大納言の家に御幸あり。殿より、からの御車、うつしの馬、なにくれと殿へまらさせ給ふ。御車奉るよそひもいとめづらし。御隨身ども、さま／＼ふるまひて、御前まるる。上達部、殿上人のこりなくつかうまつる。ひきさがりて中宮行けいあり。今宵ぞいつくしまの神ぼうはじめらる。御供の人さだめらる。わづらひなく無下にしのびたるやうにとぞさたある。宮の鶯こゑしづかにさへづりて、よもの山邊もかすみこめ、春ふかきけしきにも、たびの空、なにとなく世の中さま／＼あやなく、わかれをしむともがら多くきこゆ。永き春日もはかなく暮れて、十七日に都を出でさせ給ふべきにてありしに、山の大小しゆなにくれと申すときこえて、靜

る。立ちよりてきたしの設定も、いかなるべき旅の御遊びごと、こゝいみもせず歎きあはれたるを、御かど出でになどいさむる心「地」の中にもたゞならず。日さしいつるほどに御幸なる。殿上人十よ人、上達部七八人ばかりにて、御なほしにてぞおはします。御車さしよせて御舟に奉る。閑院の池の舟などこそ奉りならひしか、いつかはかゝる道にも御らんせむとぞおほゆる。御舟にたちさるまじきよしおほせごとありしかば、御まへには御送りの人もきしになみるたり。公卿には「帥大納言隆季、藤大納言實國、五條大納言邦綱、土御門宰相中將通親、殿上人には中將隆房、辨兼光、御幸の事うけたまはり行ふ。むくのかみ宗のり、この外は前右大將宗盛、頭亮重衡、さぬきの中將時實などは、女房四五人ばかりさがたき人々ぞまるる。人おほからずとおほしめせど、さすがに船数おびたしく、程なくみつの濱につかせ給ふ。八はたの御へいたてまつらせ給ふ。御舟ながら、濱のうへ錦のあくをば、こもをしきてぞ御へいよせたつる。御あがもの、隆房中將とりて御船にまるらす。宗教役送はつかうまつる。かものかみすすむひる、ごけいにまるる。かくて御舟いだして、こち風をおひてくだらせ給ふ。さるの時に、川じりのてら江といふ所につかせ給ふ。邦綱の大納言御所つくりて御まうけ心をつくして、御舟ながらにさしいれて、つりどのよりおりさせ給ふ。御障子ども、からの大和の畫どもかきちらした

かならざりしかば、けふは八條殿へ御門出あるべしとて、八條大宮二位殿の「許へ御幸あり。なにとなく波のうきすにゆられありきて、夢か夢にあらざるかとのみ、おほやけわたくし思ひあひたるなごりも、いかにとあらぬわかれもなど、あながちけに申したりける人のわりなさに、内裏へいとま申さむとて参りしたよりにたち入りて、定めなき世のおくれさきだつためしも、旅の空のあはれさなど申しあはせつゝ、おほろなる月影ほのかにさし入りて、窓の梅のちりすぎたる、梢にとまるなごりばかりに、風のたよりにほのめかしたる、いひつくしがたし。程なく夜もや、ふけぬるよし、いさむる聲にもよほされて、たちいつるとてかきつけける。

めの前に止らぬものは今はとて立ち出づる程の泪なりけり
思ひやれ都の空を詠めても八重の潮の旅のあはれさ
八條殿へ御幸いそがるべしときこゆる御使まるりなどしつ
つ、ならはせ給はぬ旅の空、おほつかなきなど申させ給ひける。隆季大納言まるりて、御幸もよほしかくして候などすゝめ申す。あはれに御供すべき人みな舟に参るべしとて、草津といふ處にひらばりうちてまるらせたり。隋帝の錦のともづなにてつなぎたりけむ舟にはかはりたれども、心ことにひきつくるひたり。御舟ども、峯のあらしに色々のこのは汀に散りしきたるやうに、うち散らしたり。おほかたこゑどもは、こすゑのせみの夏ふかき心ちして、御供の女房たち御舟にまる

り。廐にあしけの馬ども二疋たてて、めづらしき鞍どもかけたり。御よそひの物ども數しらす。上達部、殿上人の居所ども、みなその用意あり。福原より、けふよき日とて舟にめしそむべしとて、唐の舟まるらせたり。まことにおどろ／＼しく、晝にかきたるにたがはず。たうじんぞつきて参りたる。こまうどにはあだには見えさせ給はじとかや、なにがしの御時にさたありけむに、むけに近く候はむまでぞかはゆくおほゆる。御舟にめしそめて、江のうちをさしめぐりてのほらせ給ひぬ。夕べの雨靜かにそほちて、旅のとまり、いつしか都戀しく、心ほそきありさまなり。雨かくふらば、あすはこれにや泊らせたまふべき、またかちよりや福原までつかせ給ふべき、御舟にてやあるべきなど、右大將におほせあはせらる。あくるあした、雨なほはれやらで、日ついでかぎりあれば、とまらせたまふべきにあらずとて、いでさせたまふ。雨の空は風さだまらずとて、かちより御幸なる。西の宮のへい奉らせ給ふ。にはにて御拜あり。むねのり御使にてまるりぬ。御こしにていでさせ給ふ。人々馬にてみなつかうまつる。おとに聞きつるなるをの松、聞きもならはぬ波の音、いそべちかくいつしかなれぬる心地しつゝ、いづくともわかず山川をうちすぎ、はる／＼とゆきける。西の宮の前にて、ほつせ奉りてたひらかに都へ歸るべきよしぞ祈り申さるゝ。ひつじのときはとがの山さかにつかせ給ふ。よもの海を池に見なして、な

にかは三千世界のこらむと見えたり。これにてひるのくご
まゐりて、やがて出でさせたまひぬ。いくたの森などうち過
ぎて、さるのくだりに福原につかせ給ふ。入道大きおほいま
うち君心をつくして、御まうけども、心ことばもおよばず。
天のしたを心にまかせたるよそほひのほど、いとなまれたる
ありありさま思ひやるべし。まことに三十六のほらに入り
たらむ心地す。こだち庭のありさま、晝にかきとめたし。お
とに聞きしにもや、すぎて、めづらかに見ゆ。つかせ給ひて
のち、いつしかいつく島の内侍どもまゐりて、あそびあひた
り。御所の南おもてに、錦のきぬやうちて、こまほこのさを
たてわたしたり。内侍八人ぞある。皆からの女のおよほひぞ
したる。はなかつらの色よりはじめて、天人のおりくだりた
らむも、かくやとぞ見ゆる。萬歳樂などさま／＼まひたり。
左右にめぐりてつかる、ことをしらす。朝夕しつきたるまひ
人にはまさりてぞ見ゆる。利曾のがくの聲も限りあれば、こ
れにはいかでかとぞ覺ゆる。まひはてぬれば、うへにめしあ
けて、御まへにて神樂をぞうたはせらる。近く候ふかんだち
べ殿上人もてなしあひたり。山かけくらう日もくれしかば、
庭にかゝりをともして、もろこしの魯陽入日を返しけむ程も
かくやとぞ覺ゆる。夜もふけしかばいらせ給ひぬ。なにのなご
りもなくぞ、うち／＼はおほしける。世のありさまにだにも
てなしまるれば、堯舜のひじりの御代には劣らせたまはじ

とぞみゆる。かの天ほうのするに、とき變らむとて、時の人
この舞をまなびけり。大真といふもの、ほかにはあらく山
といふもの、うちにはおもふ所ありけむ、その心には似たま
はざりけむ、君の御心にかはりたれど、いかにと申す人もな
し。けにぞおもふにかひなき。

廿一日、夜をこめて出でさせ給ふ。都をいでさせ給ふより、
かんだちべ殿上人みなじやうえをぞきたる。音に聞きし和田
のみさき、須磨の浦などいふ所々、うらづたひはる／＼荒き
磯をこぎゆく舟は、帆うちひきて波の上に走りあひたり。
福原の入道は、からの舟にてぞうみよりまゐらる。播磨の
國まで(き)こえけるにや。いなみのなごきこゆるにぞ、あは
れにおほゆる。御こし近く候ひて、ところ／＼とはせ給ふ。
八瀬どうじをぞさすのめして、御こしつかうまつる。播磨の
國山田といふところにひるの御まうけあり。心ことにつくり
たり。庭には黒き白きいしにて、あられのかたにいしだ、
みにし、松をふき、さま／＼のかざりどもをぞしわたした
る。御まうけ、海のいろくづをつくし、山の木の實をひろひ
ていとなめる。とばかりありてぞいさせ給ふ。風少しあら
だちて、波の音もけあしくきこゆる。うかべる舟どもすこし
騒ぎあひたり。明石の浦などすぐるにも、なにがしの昔しほ
たれけむもおもひいでらる。さるのときに高砂のとまりにつ
かせたまふ。よもの舟ども碇おろしつ、浦々につきたり。

御舟のあし深くて湊へかゝりしかば、はしづね三ぞうをあみ
て御輿かきすゑて、上達部ばかりにて御舟に奉りし。聞きも
ならはぬ波のおと、いつしかおどろ／＼しく、浦人の聲も耳
にとまりたり。これよりぞ、國々へめされたる夫など返しつ
かはさる。たよりにつけて、都なる人におとづれける。
思ひやれ心もすまに寢覺して明しかねたるよ、の恨みを
いづれの里にか、にはとりのほのかに聞えて、いともの哀
れなり。よもの浦々かすみわたりて、たゞならぬ春のあけほ
のに、旅のそでのうへそのこととなくぞしほたれける。しほ
みちぬ、いでさせたまふべしとて、我も／＼と舟どもいとな
みたり。近く候へなどたのもしくおほし(め)したる、いとか
たじけなし。からの御舟よりつゞみを三たびうつ。もろ／＼
の舟どもはじめてこのこゑに湊をいづ。いでしててぞ一の御
舟はいださる。舟こかんどりなど心ことにさうぞきたり。
はじこかしの藍ずりに、きなるきぬども重ねて、廿人きたり。
なぎたる朝の海に、舟人のゑいや聲めづらしくぞきこゆる。
午の時かたぶきし程に、むろのとまりにつき給ふ。山まはり
て、そのなかに池などのやうにぞ見ゆる。舟どもおほくつき
たる、そのむかひに、いへしまといふとまりあり。筑紫へと
きこゆる舟どもは、風にしたがひてあれにつくよし申す。むろ
のとまりに御所つくりたり。御舟よせておりさせ給ふ。御ゆな
どめして、このとまりのあそびものども、古きつかの狐の、

夕暮にばけたらむやうに、我もわれもと御所近くさしよす。
もてなす人もなければまかり出でぬ。この山のうへに賀茂を
ぞいはひ奉りける。御へいまるらせたまふ。またわたくしに
もまゐりてへい奉る。としおいたる神どの守あり。この社
は、かものみくりやに、このとまりのまかりなりしそのかみ
ふりわけまるらせて、御しるしあらたなり。社五六、大やか
にてならびつくりたる。つゞみうちて、ひまなく神なぎども
集りて遊びあひたり。これは、御道のほど雨風のわづらひ
などの御祈り申すとぞきこゆる。雲わけむの御ちかひも、思
ひがけぬうらのほとりに、たのもしくぞおほゆる。

廿三日に、空もはれ風もしづまりて、有あけの月あはぢ島
におちかゝりて、またなくおもしろければ、
あはぢ島かたぶく月を詠めてもよに有明の思ひでにせむ
備前の國こじまのとまりに着かせたまふ。御所つくりたり。
御ものごども新しくと、のへおきたり。上達部殿上人ども
の宿所どもつくりならべたり。しほすこしひて、御舟つき給
ふ。みぎは遠ければ、御輿にてそのほらせ給ふ。御所の東の御
つほに樂屋をつくりて、入道内侍どもぐしてまゐる。さま
ざまのひた、れども、錦をたちいれ花をつけたる、八人集り
てでんがくをす。女の遊びともみえず。たゞあらむだにある
べきに、海のほとりに眼おどろかす物やあらむとおほゆ。田
樂はてにしかば、國のすしとて、をかしけなるものどもまる

りて、ずしはしりつかうまつる。日くれにしかば、皆まかでぬ。浦々御覽じやりて、いる日の空にくれなるをあらひて、向ひなる島がくれなる山のこだちども、晝にかきたる心地するに、御眼にかゝる所々尋ねさせ給ふ。この向ひなる山のあなたに、入道おとゞはおはすると申すに、きこしめして、御氣色うち變りにしかば、人々までもあはれに思ふ心の中ともみえたり。あからさまと思ふとまりだにも物あはれなるに、まして忍びすがちにいりぬらむ氣色、いかばかりと覺ゆ。くにつなの大納言御おとづれありしなど申しけるなにはへも思しめしわかず。この國にやはたのわか宮おはしますときこしめして、へい奉らせ給ふ。

廿四日のとらの時に、つゞみをうちて、び中の國せみといふ所につかせ給ふ。國々ふかくなるまゝに、山の木だちいのたちやうもきびしく見ゆ。

廿五日のさるの時に、安藝國うま島といふところにつく。これにて、皆うしほにて髪をあらひ、身をきよむ。宮じましかくなりけりと、きよき心をおこす。

廿六日、空のけしきうら、かにて、神の心もうけよろこばせ給ふにやと、恵みもかねてしるし。日さしいづる程に、いでさせ給ふ。うまの時に宮島につかせ給ふ。神ばうの舟たづねらる。かねてまゐりまうけたるよし申す。おんやうしの舟しばらくまたる。空のけしき、所のありさま、眼も心もおよば

へのへい、神くわんとりてはうぜんに供へならべたつ。拜殿のうちのほど、かうらいのはんでう一疊、御拜の座とす。ごんくのへいは、かねみつの辨つたへとりて、たかすゑの大納言、たう大納言つたへ取りてまゐらす。御拜をはりて歸らせ給ふ。のとのしたまはる。御琴一、御琵琶一、御ひやうし横笛うけとりて、はうぜんにならべおく。内侍ども色々さまざまにしやうぞきて、にしきをたちきたり。ぬひ物せしめも心も及ばず。御神樂をはりて大宮へ參らせ給ふ。御ほうへいはてて、御きやう供養あり。金でいの法花經一部、壽量品壽命經、御てづからか、せたまひける。御導師こうけん僧正參りて、此のよしを申しあげらる。九重のなかをいでて、やへのしほちをわけまるらせたまふ御心ざしなど、きく人も袖をしほりあへず申上げける。かつげもの一かさね一包をぞ給はりける。けんしやうおほせらる。法けん一人なし給ふ。神ぬしかけひろ位あけさせ給ふ。宮島の座主阿闍梨になしたぶ。安藝の守ありつね加階一しなあけさせ給ふ。院の殿上許さる。隆季大納言ぞかねみつにおほせける。御神樂のやをとめ八人きぬ。一々綿などた(ま)はせける。日くれて歸らせ給ふ。上達部殿上人のとのる所、心をつくしてまうけたり。内侍どもがやかたをしつらひてぞ、おのくすごしける。月の頃ならましかば、いかにおもしろからまし。月なき空をぞ口をししく思ひあひたる。

す。だいたうの湖心寺かくやとぞ見え、神がみ山イナシのほらなどいいてたらむ心ちす。宮じまのありのうらに、神ばうとへのへたてて御拜あり。社づかさ狩衣などきたるもの、神ばうもちてまゐる。おほぬさにはらへ清め申して參らすもの、ときざねの中將とりつぎてまゐらす。しほひくほどにて、御所へ御舟いらねばはしぶねにてぞ、おりさせ給ふ。上達部御舟にさぶらひて、宮島の南の方三間四面の御所つくりて、障子の晝ども海のかたをぞかきたる。うみのうへなぎさまで廊をつくりつゞけて、しほみたば御舟をさしよせむイナシしたくをぞしたる。御湯殿などありて、きぬの御じやうえめしていでさせ給ふ。御所のひんがしの庭に白木の机をたてて、こもをしきて、しろたへのへいをよせたつ。其の東に唐櫃のふたをあけて、こがねのへいをおく。その西にわらざをしきて陰陽師の座とす。神馬一疋たつ。左衛門の尉のぶさだ、時むねこれをひく。北面などもいまだはじめおかれねば、御供には上達部の侍ひをぞめされける。たかふさの中將御前にさぶらふ。宮内少輔むねのり役送をつとむ。御けいはてぬれば、めしつかひ御沓をもちてさきにまゐる。くわいらうの北のはまをめぐりてまゐるらうを通りてまゐらせ給ふ。位の御ときは、一二町をだにもえんだうをこまゐらせしに、めしならはぬ御沓もいかゞとぞおほゆる。上達部殿上人御供にイナシ候す。御イナシまらうどの宮にまづ參らせ給ふ。ごんくのへいは二さ、け、しろた

廿七日に、空の氣色うら、かにはれわたりて、のこりの鶯おもはぬみやまの木かけにかたらふこゑす。夜をこめて、しほ満つとて御所のまへまでさしいらたる、まことにこの世の有さまとも見えず。供御などはてにしかば、御宮めぐりあるべしとて、みやへまゐらせたまふ。今日はぬの、御淨衣をぞめしたる。國々のかみどもまゐらせたる、宮のまへにはこびおく。廊のまへに樂やをつくりて、拜殿をたてたり。内侍ども、老いたる若きさま、あゆみつらなりて、神供參らす。とりつゞきてがくどもして、御戸ひらきてまゐらす。それはてしかば、官司神人まで物をたまはる。ちやうくわんなどぞわかち給ふ。内侍ども、かねをのべ錦をたちて、さまざまの花をつけて、大口をきて、田樂つかうまつる。八人ならびは、天人のおりあそぶらむもかくやとぞおほゆる。そののちそがうこまほこなどまふ。さほどなる姿眼も心もおよばず。日もくれにしかば、たきのみやへまゐらせ給ふ。こうけん僧正うたよみて書きつけける。
雲居より落ちくる瀧の白糸に契りを結ぶことぞ嬉しきよに入りにかば、こよひ御つやあるべしとてまゐらせ給ふ。内侍ども集りて、夜もすがら御神樂あり。ふくる程に、七つになるこ内侍あるに、神つかせ給ひて、始めはたふれふして、時中ばかりたえいりにし。おとなしき内侍どもか、へてほどへて生きいづ。御神樂つかうまつるべきよしおほせられ

て、神主めしいでて、さまざまの事も申さる。めもあやに
いかにと疑ひをなす人もありぬべきに、さしもいふかひなき
ものの、さまざま法文などときて、御神のはじめてこの島に
跡をたれ給ひしことばとて申す。きく人泪をのこはずといふ
ことなし。入道めしいでて、おほせらる、ことどもあり。こ
れを人きかず。法華經のじゆりやうほんをたびく誦しける。
かうべをかたぶけずといふことなし。あるひはけだかき女房
うしろの障子にうつりて、寶殿に向ひ給へる姿を見たるなど
申す人もあり。常にありとおほえぬにほひ、神殿のうちより
かうばしくにほひこし。あまたおどろき騒ぎあひき。まこと
に高唐の神女は、かのやうだいにありて、みかどの夢にいり
て、あしたに雪となりゆふべには雨となりむと契り奉りけむ
あともかくやとぞおほゆる。明方になりしかば、やしろの
は鳥こゑくあけぬととなふ。浪の音もたかくみづ垣をあら
ふは、潮みつるにや。はくらく天の、うしほのこゑは來て耳
にをあらふいとつくりけるも、きゝてはイナシふせいもたくみなりける
にやと、かたんととりあつめたる折所からのあり様いひつくし
がたし。かくてあけにしかば、御所へかへらせ給ふ。

廿八日、このわたりの浦々を御覽すべしとて、あまどもか
づきせさせ給ふ。からはなだのかりの御なほし、からあやの
白き御ぞ二、御大口たてまつらせ給ふ。御姿いみじうなまめ
かしう美しうみえさせ給ふ。浦づたひて、さしまはして御覽

てもてまゐる。心ばせありとおほせられて、そのよしの歌つ
かうまつれとおほせありしかば、

千歳へむ君がかざしの藤浪は松の枝にもかゝるなりけり
空はれて日さしあがるほどに、我もくと船ども帆うちあ
けて、雲の波けぶりの波をわけて走りあひたり。備前の國
うちうみとほらせ給ふ。日いらかたにこじまにつかせたま
ふ。

四日の曉、御舟いださる。夜舟こぐこゑまことにうら悲し
けにきこゆ。

五日、雨ふりしかば、たかさこのとまりにつかせ給ふ。都人
のくだるにこそ、なにごとかと上下たづねける。さるの時に
福原につかせ給ふ。いま一日も都へとくと、上下心のうちには
思ひける。福原の申御覽せむとて、御輿にてこ、かしこ御幸
あり。所のさまつくりたる所々、こまうどの拜しけるもこと
わりとぞみゆる。あしたといふよりもりの家にて、かさがけ
やぶさめなどつかうまつらせて、御覽せさす。日くれてかへ
らせ給ふ。

八日、家のしやう行はる。か、いどもたまはせけり。かね
みつの辨承はりておほせける。左少將すけもり、丹波のかみ
きよくにぞ加階しける。都近くなるま、にやはた山の見えし
も頼しく嬉しくぞおほゆる。ひえの山みゆるなど申せしか
ば、女房達もたちさはぎ見あひ給ふ。さるの時に御車にめし

す。まことにせんのはらもかくやと、りゆうぐうともこれをい
ふにやとおほゆる所々のみおほかり。みるめなどもてまゐる。
とばかり御覽じまはりてかへらせたまふ。あくるたつの時に
又御宮めぐりありて、やがて御舟にたてまつる。しまのうち
にもおどろしく騒ぎあひたり。内侍どもみぎはにい
て、なにとなくひごろのなごりしのびおもひたる氣色なり。
なごりおほきよしの歌つかうまつれとありしかば、

立ち返り名残もありの浦なれば神もあはれをかくる白波
風もしづかに、物のあはれも春ふかくなりけるけしき、
おもひがけぬ島のうへに、櫻のちりがたになりたる見ゆ。い
みじくをかしくおほえしに、三月盡になりけり。けふは廿九日
かで旅のとまりとても春を惜まざらむとて、人々ふみつくる
もてなし興せさせ給ふべきにもあらず。なにはえもおほし
めされず。ことわりとぞみたてまつる。

四月一日になりぬれば、けふは衣がへなどいふことぞかし
とおもひやらる。またくもりたれど、雨やみにたれば、舟ど
もみなどをいだしたりしかば、浦々とまりくうちすぎつ、
やうく都ちかくなる心地して、旅のなごりもおほえず。と
くとくとすぎさせ給ふ。むかへの岸に、色ふかきふぢ、松の
縁にさきかゝりたるを御覽じて、あれとりにつかはせとおほ
せられしかば、ちやう官やすさだはし舟にてとほりしを、め
しとめてつかはす。をかのうへのほりて、松の枝にか

て、八條どのへいらせ給ふ。一二どののもとへかへらせ給ふ。
都のうちもめづらしくぞおほしめさる。かくて御やせもた
ゝならずなきこえて、くすしども申しす、めて、御きう治
などぞきこえし。

右高倉院嚴島御幸記以扶桑拾葉集校合了

右高倉院嚴島御幸記内閣文庫所藏古寫本を以て校勘す

(昭和三年六月)

後鳥羽院熊野御幸記

京極中納言定家卿

建仁元年十月

五日。天晴。曉鐘以後營參。左中辨夜前示送云。折烏帽子可參。但於三津邊可用立烏帽子。又高良御幣使可存。兼又曰。前使同可勤也。所々御布施取可存者。仍着折烏帽子。兼日後光折之。淨衣。初度如此云々。シトニタビ付。昇縁邊。坐。左中辨同如此。時如例。御拜如例。訖出御門中庭。被懸御床。晴光奉仕御禊。奉仕之。公卿以下列居。非御供一人々。着布衣藁履候二門外。御禊訖。廳官等徹御精進屋被入。此間令相待御。取始了。未訖之間出御。殿上人取三松明前行。左右。非道者前陣。出南門御。御船之間乘私船下。先達早速立了。遲明改衣帽。船甚遲。構營參。着大渡。出御御船之間也。騎馬先陣。公卿等多乘輿。先陣了。入御宿院。有御禊。陪膳之役人如三日吉。事訖起御坐候御床。之間。予進仕。高良御幣參上。取御幣一授祠官。束帶之祝之間。即登坂自藥師堂方參備。自馬場昇御。御歩男御奉幣。幣被進。御拜祝了御神樂。御拜。廻御馬。御隨身引之。次入御簾中。黃衣男取桂榊。黑衣僧懸幡花幔。御經供養公胤。訖。仲經。俊宗。予。降清。有雅取三布施。三口。訖即退下。

勝負訖。入御御所。殿。即被講和歌。予依召勤三仕講師。内府被書序。代詠訖退下。小食。歸參以前出御馳奔。今日御馬也。次參三境王子。次第又如例。次於境有御禊。田中也。自此所先陣參畫御養御所。但此所不可有沙汰。仍觸右中辨。前陣次大鳥居新王子云々。次第如例。次篠田王子。又御觀宗行爲御使。シタタ明神云々。如例。次平松王子。於三王子。殊有亂舞沙汰。自是停御馬。步入御平松新造御所。各入宿所。國皆悉備。假屋。先行。予無三板。敷也。

今日詠歌

初冬侍

太上皇幸三住吉社三首應

正四位下行

制和歌

寄社祝

あひおひの久しき色も常磐にて君が代まもる住吉の松

初冬霜

冬やきたる夢は結ばぬさ衣に重ねて薄きしろたへの袖

暮松風

淡路島かざせる浪の夕まぐれ聲ふきおくる岸の松風

御製祝云

かくてなほ變らず守れよ、をへてこの道照す住吉の神
感歎之思難禁。定有神感。與今遇三此時一拜三此社。一身之幸也。

騎馬出三木津。故方人々畫養。打屋形御所之儀等如例嚴重。予最前乘船下。解衣裳二及二寢。着水干。申始許着三木津。先達次第申可觸。先約拜三王子。人々前後會合。良久御船着御。御幣。長房取之授御先御拜二度。先達部三退出。候御經供養。達云々。進之。宿老人々已前退出。即騎馬馳奔。先里神樂。了上下亂舞。宿老人々已前退出。即騎馬馳奔。先陣參三坂口王子。又如三前儀。又前陣參三コウト王子。如三前儀。又先陣參三天王寺。併三個西門鳥居。公卿。少時入御。御船之後。每度指御。御金堂禮三舍利。公卿以下參進禮之。次子等少々騎馬先陣。禮了殿上人廻三後戸方。取御經供養布施。導師之外十禪師云々。二襲計取具取之。即下御。入御御所之後退出。宿所ヨリ禮了。食依三窮屈。今夜不參。御所又疎人。無所役云々。猶々此供奉。世々善緣也。奉公之中宿運令然。感涙難禁。御共人。内府。春宮權大夫。共其供奉。右衛門督。宰相中將公經。從三位仲經。大貳範光。三位中將通光。殿上人保家。予。隆清。定通。忠經。有雅。通方。上北面略皆悉也。下北面又清撰在此中。面目過身。還多恐。人定有吹毛之心歟。入夜左中辨出給題三首。明日於三住江殿可有披講云々。窮屈之間。沉思不叶。今夜宿讀良庄三勤仕之。六日。拂曉。私出馬指參阿倍野王子。先達相伴致。參詣住吉社。先達同奉幣。始而奉拜三當社。感悅之思無極。依及三深更。小宅休息。天明訖。又參三社頭。辰終御幸。御奉幣。衣冠男給御幣。傳三生絹袍衣冠男。御經供養訖。里神樂。有三相撲三番。令申訖。兩人共給祿。

今日宿三木津。宇多庄。有實朝臣下。八條院姫宮。領狀共不見來。尤以不便。三間萱葺屋。風冷月明。七日。天晴。遲明猶取三松明出路。參三井口王子。此王子新先達。於此所待御幸。忠信少將乘輿來會奉幣。語云。昨日損足云々。小時臨幸。次第如例。訖競三出騎馬。參三池田王子。於此所被彈琵琶。法師給物。小袖。從是先陣參三淺宇河王子。不待御幸。又前陣參三鞍持王子。又馳入畫養所。吉祥寺云々。食了。參三胡沐新王子。從是也。步行。過御所。畫御宿鶴子。云々。參三廿野王子。次參三糺井王子。相待御幸。良久臨幸。御奉幣里神樂訖。亂舞拍子及三相府。次又白拍子。加以三五房友重一人舞。次相撲三番。訖競三出騎馬。先參三厩戸王子。即馳入宿所。此御宿惣名信達。此所厩戸御所云々。如例有萱葺三間屋。自國充行。御所聊近。還懷恐。戌時計有召參上。被召入御前。被講三首。忽有定被出三直題。次第雪爲先。如例讀上了。御製又以殊勝。愚歌

曉初雪
色々のこのの上にもちりそめて雪はうづます東雲の路
山路月
袖の霜の影うち拂ふみ山ぢもまだ未遠きゆぶくよかな
讀上了。人々詠吟。即退出。

内府 宰相中將 大貳 三位中將 下官 定通 長房 通方

信綱 家長 清範 是等也。

八日。天晴。拂曉出道。參信達一之瀨王子。又於坂中。次參地藏堂王子。次參ニウハ目王子。次參中山王子。次參山口王子。次參川邊王子。次參中村王子。次入晝養假屋。所信等無沙汰。其所甚荒。於此所有非時水コリ。相待御幸。甚遲。忠信少將參會。小時先參此王子。サキ。暫相待之間。御幸訖。先出儲御所。ワサキノクチ云々。予爲御使。小時於此所。有御禊。予取御幣立。御禊訖。返給廳印。神馬二匹令牽。相具御幣。參三日前宮。社頭甚嚴重。淨衣折烏帽子甚凡也。但道々習何爲平。坐兩社之間。中央石帖如舞上。敷薦二枚。爲座。依社司之訓。取御幣一拜。前後。付社司。御使取御幣拜舞。不知其例。諸社奉幣。兩段。付社司。使御幣於社司。以務拜舞。如何。社司指唐笠來。不當日影。科云々。普通束帶也。但此男大宮司男云々。猶其父戴紙冠。不出戶外。僅見在戶內。取御幣。以黃衣冠。神人令入中門戶內。祝音聞訖。神人又出中門外。有還祝。予立坐東薦。又取御幣一本也。拜付。同社司。次第如前。訖退出。歷中奉任。恐。自是向道甚遠。過三滿願寺之間。僧等忽喚入。每度日前御幣使參此寺云々。怒參入三廳官。相具御誦經物。僧等稱乏少之由。不似先例。頗比興也。僧懸昇禮盤之間。予退出。凌遠路出道。參ナクチ王子。先是又兩王子御坐云々。平緒王子非。次參松坂王子。次參松代王子。次參菩提房王子。自是。次參秋戶王子。次藤代宿。不計北宅也。窮屈平臥。

十日。自夜雨降。遲明(依殿)。朝陽漸晴。晝天猶陰。拂曉凌雨赴道。無程王子御座云々。但依路遠。向路頭樹一拜云々。クメサキ。次參井關王子。於此所雨漸休。夜又明。次參ツノセ王子。次又攀昇シ、ノセノ山。崔嵬嶮岨。巖石異昨日。超此山。參沓カケ王子。過ニシ、ノセ椎原。樹蔭滋路甚狹。於此邊有晝養御所云々。又私同儲之。暫休息山中。小食。於此所上下伐木枝。隨分造槌。付神枝持參内ノハタノ王子。童子云々。各結付之云々。次出此木原。又過野。秋薄遙躡。眺望甚幽。此邊高家云々。聖護院宮并民部卿領云々。此所共有便事。但未尋得。次又參三王子。田藤次。又愛德山王子。次クリマ王子。次寄小松原御宿。御所邊四宿之處已無之。國沙汰人成敗獻之。假屋乏少之間。無緣者不レ入。甚員占小宅立簡之處。内府家人押入宿了。不レ出之由忿怒云々。國沙汰之人。又非我進止之由。後于云々。只依人涯分偏頗賦。不レ迨相論。又非可レ入身。此御所有水練便宜。臨深淵構御所。即打過遙尋宿所。渡河參イハウチ王子。入此邊小家。重輔庄云々。宮戸部兩人便書如形到來。覺了房周梨自御山下向。今日相待。更可伴參云々。以三代官可足之由。雖相示。猶丁寧之由也。乘燭以後甚雨。今夜甚熱不異三伏。着帷。南國之氣與蠅多。又如夏。

十一日。雨降。中後聊休。入夜月朧々也。遲明出宿所。

九日。天晴。朝出立。頗遲々間。已於王子御前。有御經供養等云々。雖營參。白拍子之間。雜人多立隔無路。強不能參。逐電攀昇藤代坂。五躰王子有相撲等云々。道崔嵬殆有恐。又眺望遼海。非無興。參塔下王子。次參拊下王子。次參ニコロ坂王子。次參一壺王子。次昇カブラ坂。參ニカフウザカ下王子。又崔。次參山口王子。次入晝養所。過御所。次參ニイトカハ王子。又凌嶮岨。昇ニイトカ山。下山之後。參ニサカサマ王子。水逆流河有之。次又過今日御宿三町計。入小宅宿所。自是雖有例假屋。此家主依儲雜事。入此所。文儀知音。先是又依文義顯男。取宿所。先入小宅之間。件宅有憚之由聞付之。仍驥出入此所。先達如此由稱。父喪。雖然臨時水ヲカキテ。以景義令殺了。又依七十日許云々。取潮垢離。カク。是臨時之事也。此湯淺入江邊。松原之勝形奇特也。家長送題二首。詠吟窮屈之間。甚無術。秉燭以後。又着立烏帽子。如一夜參上。小時被召入幕內。又依仰講師。事了即退出。今日又一首當座。

深山紅葉 海邊冬月 愚詠

聲たてぬ嵐も深き心あれやみ山の紅葉みのき待ちけり
曇りなき濱の眞砂に君が代のかささへ見ゆる冬の月かけ
今日偏文義得意等。沙汰田殿庄。女房中納言 遂不見參云云。

不知ニ超山參鹽屋王子。此邊又勝。次入晝宿小食。次ウヘ野王子。野徑。次ツイノ王子。自是此邊一步指。次參ニイカルガ王子。次參切部王子。入宿所。最狹少。海。御所前也。但國占宛云々。小時御幸入御步。晚景又有題。即書之持參。戌時許如例被召入。讀上了退出。幕無。驛中間波。野徑月明。うちもねずとまやに波のよるの聲誰をと松の風ならねども於此宿所鹽垢離カク。眺望海。非甚雨。者可レ有興所也。病氣不快。寒風吹枕。
十二日。天晴。遲明參御所。出御前陣。又超山。參切部中山王子。次出濱參磐代王子。此所爲神小養。御所無入御。此拜殿板每度被注御幸人數。先云々。右中辨召番匠。板放天カンナチカク。書入數。天如元令打付之。建仁元年十月十二日。由陰陽博士晴光未參上。北面。此人數之中其着無術之御幸四度。
御先達權大僧都法印和尙位覺賞
御導師權大僧都法印和尙位公胤
内大臣正二位兼行右近衛大將皇太弟傳源朝臣通親

次々如此。殿上人。上北面僧。寬快已下三人北面皆書之。自是又先陣過千里濱。此處。參千里王子。次參鍋子。自是入晝養所。食了。參御所之間。御幸已出御。自是宿所御布。

施。以忠弘送遺之。絹六。次參ニハヤ王子。御幸入御之間。先陣
 延。綿百五十兩。人三四。於此濱御鹽垢離。又先陣見ニ出邊御宿。入ニ私宿
 所。宿所任別當自^{御所}上^{御所}之。御所美麗。臨河有深淵。田邊河
 所。甚廣不似^{御所}切部。御所美麗。臨河有深淵。田邊河
 夜寒風吹枕。咳病忽發。心神甚惱。此宿所又以荒。又鹽垢
 離。昨今之間一度可有之由。先達命之。但今猶遂^{御所}此事。
 十三日。天晴。天明參^{御所}。未上^{御所}格子。御先達參^{御所}儲御拜
 所。近臣人々未^{御所}出之間。早出。前陣參^{御所}秋津王子。春宮權大
 夫參會。又超^{御所}山參^{御所}九王子。次ミス山王子。次ヤカミ王子。
 次稻葉根王子。此王子准^{御所}五體王子。每事過差云。次入^{御所}晝養宿所。
 馬自^{御所}此所停被^{御所}置。師自^{御所}是步指渡^{御所}石田河。先參^{御所}二瀬王子。
 候^{御所}之。次昇^{御所}崔嵬嶮岨。入^{御所}瀧尻宿所。河灘韻忙巖石之中也。
 人^{御所}夜給^{御所}題。使者運來。即詠^{御所}之持參。如^{御所}例披講之間。參入讀
 上^{御所}之。了退出。參^{御所}此王子^{御所}歸^{御所}宿所。

そのめし秋おくれめとたれかいはた川又浪こゆる山姫の袖

旅宿冬月

瀧川のひきは急ぐ旅のいほを静かにする冬の月影
 一寢之後乘輿。相^{御所}沙汰^{御所}之力者十二人。豫^{御所}不^{御所}付^{御所}之。使法師厚裝束。十二
 今夜付^{御所}晝養山中宿。此所又不思議奇異小屋也。寒嵐甚難
 堪。

十四日。天晴。天明出^{御所}山中宿。參^{御所}重點王子。次參^{御所}大坂本
 王子。次超^{御所}山了。入^{御所}近露宿所。于^{御所}時日自^{御所}瀧尻^{御所}至于^{御所}此所。
 生。多是紅葉也。社後有^{御所}此尼南無房堂。此内又書^{御所}付^{御所}一首。後開
 云々。不^{御所}夕^{御所}又^{御所}水^{御所}訖。出^{御所}王子御前。所作了。月出^{御所}山之間也。
 今日之道。深山樹木多有^{御所}葎苔。懸^{御所}其枝^{御所}。如^{御所}藤枝。遠見
 偏似^{御所}春柳。

十六日。天晴。拂曉又出^{御所}發心門。王子^{御所}。内水飲。自^{御所}被^{御所}殿^{御所}一步
 指。參^{御所}御前^{御所}過^{御所}山川千里。遂奉^{御所}拜^{御所}寶前。感涙難^{御所}禁。自^{御所}是
 入^{御所}宿所。暹明更歸^{御所}參^{御所}被^{御所}殿。左中辨自^{御所}夜^{御所}爲^{御所}奉^{御所}待^{御所}御幸^{御所}也。
 但數刻。仍入^{御所}近邊地藏堂。更被^{御所}寄^{御所}衣食^{御所}暫住。已時計御幸。
 御共參^{御所}寶前。ウツノ入堂云々。即入^{御所}御御所。訖即退下。コリ
 訖。着^{御所}奉幣之裝束。新物立烏帽子ハ。歸參^{御所}。數刻之後出候。了奉幣。
 左中辨取^{御所}金銀御幣^{御所}進^{御所}之。令^{御所}取^{御所}御。此間親兼朝臣取^{御所}白妙御幣。
 御拜訖。祝僧法眼。取合申^{御所}祝。先證誠殿。次兩所。御幣二本。
 御拜如^{御所}一。次若宮殿。御幣^{御所}御拜^{御所}ハ御幣^{御所}ノサキヲ右合持^{御所}御幣^{御所}白。御
 社之儀。一。次若宮殿。御幣^{御所}一。萬^{御所}十萬^{御所}御^{御所}前^{御所}拜^{御所}皆^{御所}同^{御所}前^{御所}。祝申
 了。退之間。予取^{御所}被^{御所}物^{御所}給^{御所}之。給^{御所}之。即入^{御所}御御所^{御所}供養御所。
 祈殿。公卿在^{御所}西。殿上人在^{御所}東。御誦經俊家朝臣。親兼朝臣
 取^{御所}布施。以^{御所}公胤法印^{御所}御經供養了。公卿被^{御所}物^{御所}殿上人取^{御所}布施
 了。予退下。此間舞相撲等云々。御加持。不見^{御所}其儀。咳病殊
 更發無^{御所}爲^{御所}方。心神如^{御所}無^{御所}殆難^{御所}遂^{御所}前途。腹痛瘡瘍等競合。秉
 燭以後又コリ。此事臨時依。又着^{御所}晝裝束。先達相共參^{御所}御前。
 奉幣。其儀如^{御所}晝御拜。公私不^{御所}晝^{御所}幣^{御所}ノサ。稠人狼藉淺猿。次入^{御所}
 經供養所。依^{御所}綱入^{御所}西。導師來說法了。置^{御所}布施^{御所}了。被^{御所}物^{御所}。次減
 宿所云々。

崔嵬波泄。自眩轉魂悅了。昨日渡^{御所}河。足聊填。仍偏乘^{御所}輿。
 此宿近^{御所}御所。午終御幸。步。訖即給^{御所}題。

峯月照^{御所}松

さしのほる君を千歳とみ山より松をぞ月の色にいでける

濱月似^{御所}雪

雲きゆる千里の濱の月影は空にしられてふらぬ白雪
 只今披講。長房朝臣注^{御所}送^{御所}之。驚即持參。僻事也。供御之間
 云々。即退出。秉燭以後。又參上。講際阿闍梨依^{御所}召參。候。
 部外^{御所}讀經。良久有^{御所}召。參^{御所}御前。又讀上了退出。即^{御所}亥刻。乘
 輿出^{御所}道渡^{御所}河。即參^{御所}近露王子。次ヒソ原。次繼櫻サクウ中ノ
 河。夜中着^{御所}湯河宿所。路間崔嵬。夜。寒風無^{御所}爲^{御所}方。有^{御所}非時水。
 次イハ神。

十五日。天晴。天明後水窮屈之間。訖。見^{御所}御所^{御所}禮了。此宿甚寒
 又出^{御所}道。此所今日御宿也。午時許着^{御所}發心門。宿^{御所}尼南無房宅。
 此宿所尋常也。然而猶先陣。午時許着^{御所}發心門。宿^{御所}尼南無房宅。
 會。相逢會釋給所。着^{御所}稍。此道之間。常不^{御所}具^{御所}筆硯。又有^{御所}所
 思。未^{御所}書^{御所}一事。他人大略。每。此門柱始書^{御所}付^{御所}一首。心門一句。
 首。

惠日光前城^{御所}三根。大悲道上發心門。南山月下結緣力。西剎雲中吊^{御所}
 旅魂。

いり難き御法のみかはけふすぎぬ今より六つの道に歸すな
 今日。王子湯河。次猪鼻。次發門。

此王子寶前殊發信心。紅葉飄^{御所}風。寶殿上四五尺木無^{御所}際
 レ火。鐵有^{御所}加持僧十二人來加持了。置^{御所}布施。依^{御所}貧乏^{御所}一綿。退出。
 自^{御所}此經^{御所}所路^{御所}入^{御所}宿所。扶^{御所}病^{御所}又參^{御所}御所。數刻。寒風病身無
 二爲^{御所}方。深更被^{御所}召入。
 二座和歌。

發心門料二首

遠近落葉 暮聞河波 歌凡非尋常。

窮屈病惱爲方ナシ。

二座事發心門本宮序。

本宮二首。内府有^{御所}序。

讀上了退出。心中如^{御所}已更無^{御所}爲^{御所}方。
 十七日。夜雨降。今朝猶陰風甚寒。明日新宮下向。船更以無
 之云々。御所即以下皆闕如云々。扶^{御所}病^{御所}未^{御所}時計參^{御所}御所。以前
 出御了。芝僧供云々。御所^{御所}西^{御所}向^{御所}禮^{御所}殿也。公卿候^{御所}前^{御所}庭。兩塔。東西
 行數^{御所}庭。爲^{御所}客僧座。山伏各引^{御所}卒其徒。相替坐。次第被^{御所}引
 之。了即起又替。今日人々皆着^{御所}楚々裝束。長袴張下袴。予獨不
 存。着^{御所}日來御會裝束。甚見苦。此間參^{御所}御前。心閑奉禮。所
 祈者。只出離生死臨終正念也。僧供了。令^{御所}參^{御所}御前候。次
 第御所作了。如^{御所}昨日^{御所}還^{御所}御。殿上人在^{御所}前。公卿在^{御所}御後。次
 山伏御覽。公卿殿上人又候^{御所}御前近邊。山伏作法恒例云々。
 依^{御所}無^{御所}要^{御所}不^{御所}委注。渡^{御所}御前^{御所}乘^{御所}船入^{御所}白山。寒風無^{御所}術。見了即入^{御所}宿所。今夜
 可有^{御所}種々御遊云々。此先達構^{御所}驗競^{御所}事云々。依^{御所}所勞^{御所}二臥^{御所}
 宿所。

十八日。天晴。天明拜寶前。出河原乘船。所死行一加二艘。共下人等多止了。略定待三人。覺本房稱老屈一不參。圓勝房相具。舍人一人雜人等也。自川程有種種石等。或稱雜物。未一點計着新宮。奉拜。小時御幸如例。行先令參寶前。給。次入御御所。次立烏帽子歸參。良久出御。御奉幣如本宮。予取祝師之祿如前。事了。入御御經供養所之間。私奉幣。稠人如例。歸參。取御經供養布施。次如例亂舞。次有相撲。此間退下宿所。入夜爲加持參寶前。僧等參着不來會。仍問事之由。示先達參御所。例和歌訖退下。又有房。

十九日。天晴。遲明出宿所。又赴道。與持來。仍猶乘之。傳先達持等。山海眺望非無興。此道又王子數多御坐。未時參着那智。先拜瀧殿。嶮岨遠路。自曉不食。無力極無術。次拜御前入宿所。小時御幸云々。日入之程參寶前。御拜之間也。又取祝師祿了。次令供三神供一御。別當取儲之。公卿次第取繼。一萬十萬等御前。殿上人猶次第取繼之。予同取之。次入御御經供養所。取例布施。次驗クラベ云々。此間私奉幣退下宿所。深更參御所。例和歌訖退下。二座。一明日香云々。窮屈病氣之間。每事如夢。

廿日。自曉雨降。無松明。天明之間。雨忽降。雖待晴間。彌如注。仍營步一里計行。天明。風雨之間。路窄不及取笠。着笠笠。輿中如海如林宗。終日超嶮岨。心中如夢。

廿六日。天晴。鷄鳴之程御幸入御云々。但只今即出御之由。左中辨示送之。仍念出。天明之程入御鳥羽御精進屋。即又出御御幸。稻荷御拜。御經供養。此間私奉幣。候法蓮云々。如例取布施。俊家中將。予取導師布施。了即入御一條殿之儀。猶此人數可參云々。然而觸小々人々。自是退出。入九條小食了。即馳出參日吉。私宿願也。於馬場邊遇春宮權太夫。未時許參着。奉幣了即馳歸。於清閑寺邊取松明歸京。洗髮沐浴了付寢。今夜莫食。

廿七日。早朝道之間。雜物悉以水洗之。又雜物等取聚送先達許。是恒例云々。文義沙汰之。

右後鳥羽院熊野御幸記以古寫二本按合了

未遇如此事。雲下紫金峯如立手。山中只一字有小家。右衛門督宿也。予相替入其所。如形小食了。又出衣裳。只如入水中。於此邊適雨止了。前後不覺。戌時許着本宮。付寢。此路嶮難。過於大行路。不能違記。

廿一日。天晴。天明參御所。出御之間前行參寶前。御拜了入御禮殿。又可御加持云々。此間退出。先陣馳奔。湯河書養了。着近露宿所。

廿二日。天晴。拂曉出近露。下瀧尻マナコ小家書養了。未一點許着田邊宿。日入了之後。出此宿所。過切部入ニイハ。明日可超三宿。遠路無術之間。今夜如此迷惑。鷄鳴之程入此宿所一寢。

廿三日。天晴。日出之後渡川過小松原。超ニシ、ノセ山。午始許入湯淺宿所。五郎云、男宿所事甚過差。予之不堪感。引所殘鹿毛馬了。今日適休息。終日偃臥。

廿四日。天陰。雨降間休。曉出道超藤代山。雨甚。路次失度。入藤代宿所。小食了。又出道。凌超ヲレ山。申時許入信達宿。御所近邊也。國沙汰者送下如菓子等之物。

廿五日。天晴。曉參御所。出御以前出道。於大鳥居小家食了。出過天王寺。入ニナガラ宿所。自京家到來。相具船也。仍候之。但此宿細川庄成時沙汰也。人不來云々。仍即打出了。馳奔入皆瀨宿。山崎前々宿所也。今日過二十五六里了。御幸ナカラヨリ御船上御云々。一寢。

新校羣書類從 卷第三百二十九

新校羣書類従 卷第三百三十

檢校保己一集

紀行部四

海道記

源 光 行

白河の渡り中山の麓に、閑素幽栖の侘士あり。性器に底なれば、能をひろひ藝をいるゝにたまるべからず。身運は本より薄ければ、報いをはち命をかへりみて、うらみをかさぬるに所なし。徒らに食泉の蝦蟇となりて、身を藻によせて力なきねをのみなき、空しく窮谷の埋木として、意樹に花たえたり。惜しからぬ命のさすがに惜しければ、投身の淵は胸の底に淺し。存するかひなき心はなまじひに存したれば、斷腸の棘は愁ひの中に茂り、春は蕨を折りて臨める飢をさふ。伯夷が賢にあらざれば、人も咎めず。秋は菓を拾ひて貧しき病をいやす。美子が藥も未だ飢ゑたるをば治せず。九夏三伏の汗は拭ひて苦します。手中に扇あれば涼を招くにいとやすく、玄冬素雪のあらしは凌ぐに能はず。身のうへに衣なければ、寒をふせぐにすべなし。窓の螢も集めざれば目は暗きが如し。何を見てか

志を養はむ。樽の酒も酌む事を得ざれば心に常に醒々たり。いかゞ憂を忘れむや。然る間歳の水速く流れて、生涯はくづれなむとす。留むとすれども留まらず。五旬のよはひの流車坂に下る。朝に馳せ暮に馳す。日月の廻りの駿駒のひま、鏡の影に對ひ居てしらぬ翁に恥づ。鑄子を取りて白絲を憐む。是によりて佛のうへにはよはひをおどろかす老をつけ、鶴鬢のほとりに早落をいとふ花、露におどろき霜をいとふ志たちまちに催して、僧を學び佛に歸する念漸くにおこる。名利は身にすてつ。稠林に花ちりなば、覺樹の菓は熟するを期すべし。薜蘿は肩にすがり、法衣の色そみなば、衣の裏の玉は悟る事を得つべし。只暮れの露の身は、山陰の草を置所とすれども、朝霞は望み絶えて天を仰ぐに空し。世を厭ふ道は、貧道より出でたれども、佛を念ずる思ひは遺忘とおこたる。四聖の無爲を契りしも、一聖なほ頭陀の道にとゞまりき。ひとへにおれのが有爲をいとひ貪り、おのれいよく座禪の窓に忙し。然而曹腊が酒も人を急はしてよしなし。子罕が賄ひは心に賄ひて身の樂とせり。鵝眼なけれど天命の路に杖つきて歩をたすく。錨牙はか

けたれども地恩の水に口すゝぎて渴をうるほす。空腹に一盃の粥をすゝれば餘味あり。薄紙百綴の衿、寒に服すれば肌を暖むるにたれり。檜笠をかぶり装とす。出家の身なり。わらぐつをふんで駕とす。遁世の道なり。抑相模國鎌倉の郡は、下界の鹿澁苑天朝の築渦州なり。武將の林をなす。萬葉の花萬にひらけ勇士道に榮えたり。百歩の柳百たびあたり、弓は曉月に似たり。一張そばだちて胸をたふし、劍は秋の霜のごとし。三尺たれて腰すゝし。勝鬪の一陣には爪を楯にして仇を雌伏し、猛豪手にしたがへて直に雄稱す。干戈威をいつくしくして梟鳥あへてかけらす。誅戮にきびしくして虎おそれをまし、四海の潮の音は、東日に照されて浪をすませり。貴賤臣妾の往還するおほくうまやのみち隣をしめ、朝儀國務の理亂は萬緒の機かたんに織り、去年質耳外に聞なして、おほくの歳をわたり、舌の端唇して、いくばくの日をか送るや。心のふね洋爲に漕ぎ、いまだ海道萬里の波に棹さす。乗馬あらましにはす。未だ關山千程の雲にむちうたす。今便人の芳縁に乗じて、俄に獨身の遠行を企てり。貞應二年卯月の上旬五更に、都を出でて一期に旅立つ。昨日は住みわびて厭しかりし宿なれども、今立ち別れば名残をしく覺えて、暫しやすらへども、鐘のこゑ明け行けばあへずして、いつまた粟田口の堀道を南にかいたをりて、相坂山にかゝれば、九重の寶塔は北の方にかくれ、又相坂を下に、松をともして過ぎ行けば、四宮

河原のわたりはしのゝめに通りぬ。小關を打ち越えて、天津の浦をさして行く。關守の門をだにかへりみれば、金剛力士忿怒のいかる眼を驚し、勢田の橋を東に渡れば、白浪瀧落ちて流所とながれ、又身をひやす湖上に船をのぞめば、心興にのり野庭に馬をいさめて、手に鞭をかなづ。漸くに行く程に、都を遙にへだてぬ。前途林幽なる纒に青齊梢に見ゆ。後路山さかりて白雲路をうづむ。既に斜陽景くれて、暗雨しきりに笠にかゝる。袖を絞りて始めて旅の哀れをしりぬ。其の間山館に臥して露よりおく曉の望み蕭々たり。煙高旱子巖の路をうづみ、水に望みて又水に望む。波の淺深長堤の汀にすゝむ。濱名の橋の橋下には、往事をちかひて志をのべ、清見關のせきやには、あかぬ名残をとゞめて歩をはこぶ。富士の高根に煙を望めば、臘雪宿して雲ひとりむすび、うつ山路に葛を尋ねれば、昔の跡夢にして風の音おどろかす。木々の下には下ごとも牽帳をたれて、行客の苦みをいこへ、夜々の泊りには行々として重ねて行々たり。山水野塘の興こそみものをまし、歴々として更に歴々たり。海村林邑の感いやめづらかなり。此の道若し四道の間に逸興の勝れたるをかね、又孤身が斗藪の今旅始めなれば、遇孤たる舊客猶ながめを等閑にせず。況や一生の新賓なれば、感恩おさへがたし。感恩の中に愁腸の交事あり。所謂母儀の老を□又幼を都にとゞめて、不定の再觀

を契りおく。無狀かな、愚子が爲體、浮雲に身を乗せて旅天に迷ひ、朝露の命にて風のたよりにたゞよふ。道をおなじうする者は我をしらざる客なり。語は親昵に契りていつちか離れなむとする。長途に疲れて十日あまり、窮屈頗に身をせむ。湯井の濱に至りて一時半偃息しばらく心をゆるぶ。時に萍實西にしづむ。舊里を忍びて後を期し、桂花東にひらけ、外郷に向ひて中懷をなやます。仍三十一字を綴りて、千度思ひ萬度懷ひて、旅の志をのぶ。これは是文を以てさきとせず。歌を以て本とせず。只興にひかれて物の哀れを記するのみなり。

四月四日の曉、都出でし朝より雨にあひて、勢田の橋のこなたに暫くとまりて、雨じたくしてゆく。今日あすともしらぬ老人を、ひとり思ひ置きてゆけば、
思ひおく人にあふみの契りあらば今歸りこむ勢田の長橋
橋のわたりより雨まさりて、野徑の道芝露殊にふかし。八町なはてを過ぐれば、行人たがひに身をそばめ、一邑の里とほれば、亭犬頻に形をほゆ。今日しもならはぬ旅の空に、雨さへいたく降りて、いつしか心のうちもかきくもるやうに覺えて、

旅衣まだきもなれぬ袖の上にぬるべきものと雨はふりきぬ
田中打ち過ぎ民宅打ち過ぎて、はる／＼と行けば、農夫並び立ちてあら田をうつ聲は行雁のなき渡るが如し。卑女うちむれ前田の面にゑぐつむ。存外しづくに袖をぬらす。そともの小

の流れ百瀬に流れて、衆客の歩みに足をひたせり。山里江複は當路にありと雖も、萬里の行者はなかばもいたらず。

すゞか川ふるさと遠く行く水にぬれて幾せの浪をわくらむ
薄暮に鈴鹿の關屋に泊る。上弦の月峯にか、れり。虚弓いたづらに歸鴈路にのこり、下流の水谷に落ち、奔箭すみやかにして虎に似たる石にあたる。爰に旅驛漸くに重ねて、枕を宿縁の草にむすび、雲衣曉にさむし。袖をいはねの昔にしく。
松は君子の徳をたれて、天のごとくおほへり。竹は吾丈の號(友愍)あれば、風にふしてよをあかす。

鈴鹿山さしてふる里おもひねの夢路の末に都をぞとふ
六日、孟嘗君が五馬の客にあらざれば、函谷の鶏の後夜を明してたつ。山中なかば過ぎて漸く下れば、巖扉削りなせり。仁者の栖しづかにして樂み、澗水掘りながす。智者の砌うごけども豊かなり。かくて邑里に出でて田中の畔を通れば、左に見、右に見、立田眇々たり。或は耕しおのれがひき／＼に論じ、畦畝あぜを並びて苗を我がとり／＼に藝ふたり。民のけぶりは父君心體の恩火より賑ひ、王道の徳は子民稼穡の土器より開けたり。水龍は本より稻穀を護りて夏の雨をくだし、電光はかねてより九穗をはらみて三秋をまつ。東作の業力をはけます。西收の税たのもしく見ゆ。劉寛が刑を忘れたり。蒲鞭定めて螢になりぬらむ。
苗代の水にうつりて見ゆるかな稻葉の雲の秋のおもかけ

川には、川ぞひ柳に風たちて鷺のみの毛うちなびき、竹の編戸の垣根には、卯花咲きすさびて山時鳥忍びなく。かくて三上の嶽をのぞみて野洲河をわたる。

いかにしてすむやす川の水ならむよ渡る許り苦しきやある若梢と云ふ所を過ぎて、横田山を通る。此の山は白榆のかけに現れて、緑林の人をしきる所とも聞ゆれば、益なく覺えていそぎゆく。
はや過ぎよ人の心よこた山みどりの林かけにかくれて
夜景に大岳といふ所にとまる。年頃うちかなはぬ有りさまにおもひとりて、髪をそりければ、いつしかかゝる旅寝するも哀れにて、彼の盧山の草庵の夜曲は、情ある事を樂天の詩に感じ、此の大岳の柴の宿の雨には、何事を貧道の歌にはづ。

墨染の衣かたしき旅ねしついつしか家を出づるしるしに
五日、大岳をたちて遙に行けば、内の白河、外の白河といふ所を過ぎて、鈴鹿山にかゝる。山よりは伊勢の國に移りぬ。重山雲さかし。越ゆれば千丈の屏風彌しけく、群樹烟ながし。蹇は又萬尋の帷帳ます／＼あつし。峯には松風かた／＼に調べて鶯康が姿しきりに舞ひ、林には葉花稀に残りて、蜀人の錦は纒にちりほふ。是のみにあらず。山姫の夏の衣は梢の緑にそめかけ、樹神の音の響は谷の鳥にこたふ。此の路を何里ともしらす越え行けば羊腸坂厳しくして、駑馬石にあしなえたり。すべて此の山は、一山の中に數山を隔てて、千巖の峯にさはり、一河

日數ふるまゝに古郷も戀しくて、立ち歸り過ぎぬる跡をみれば、いづれが山いづれが水、雲より外に見ゆるものなし。朝に出でて夕に入る。東西を日の光りにわきまふといへども、晩るればとまり明くれば立つ。晝夜を露命に論ぜむ事はかたし。おのづから一步を捨てて萬歩をはこばば、遠近かぎりありて往還を期しつべし。只あはれむ、遙かに都鄙の中路に出でて、前後のおもひに勞する事を。

ふる里は山のいくへにへだてきぬ都の空をうづむしら雲
夜陰に市腋といふにとまる。前を見おろせば、海さし入りて河伯の民うしろにやしなはれ、見あぐれば峯崎しくて山祇の髮風にけづる。磬をうつ夜の浪は千光の火を出し、木々になく曉の颯は孤枕の夢を破る。このところにとゞまりてこゝろはひとりすめども明け行けば友にひかれ打ち出でぬ。

松がねのいはしく磯のなみ枕ふしなれてもや袖にかくらむ
七日、市腋を立ちて、津島の渡といふ所を舟にて下れば、蘆の若葉あをみわたたりて、つながぬ駒も立ちほなれず。菱の浮葉に浪はかくれども、難面かはつはさわぐけもなし。とりこすさをの雫袖にかゝりたれば、

さしてものを思ふとなしに水馴棹み馴れぬ浪に袖は濡しつ
渡りはつれば尾張の國にうつりぬ。片岡には朝陽の影うちにさして、燒野の草に雉なきあがり、小篠が原に駒あれて、泥みしけしき引きかへて見ゆ。又園中に桑の下宅あり。宅には蓬頭

なる女、簀にむかひて蠶養をいとなみ、園には僚倒たる翁、鋤を持ちて農業をつとむ。大かた禿なる小童部といへども、田を習ふ心ざし、たゞ足をひぢがごとする思ひのみあり。わかしくしてより業を習ふありさま哀れにこそ覺ゆれ。實に父兄の教へつゝしまされども、主孝の志おのづからあひなるものか。山田うつ卯月になれば夏引のいとけなき子も足ひぢにけり。幽月影あらはれて、旅店に人しづまりぬれば、草の枕をしめて、萱津の宿にとまりぬ。

八日、萱津を立ちて鳴海の浦に來ぬ。熱田宮の御前を過ぐれば、示現利生の垂跡にひさまつきて、一心再拜の謹啓に頭をかたぶく。暫く鳥居に向ひて阿字門を觀すれば、權現の砌ひそかに寂光の色に□夫土木霜降りて瓦上松風天に吹くといへども靈驗日新にして人中の心花春のごとくにひらけたり。しかのみならず、林の梢枝をたる、幡蓋社頭の上におほひ、金玉の檐端をうつ金色を神殿の面にみかく。彼の和光同塵は來際をかざる期なき事を憐む。羊質未參の後悔に向前のうらみあり。後參の未來に向方のたのみなし。願くは今日の拜參をもちて、必ず當來の良縁とせむ。路次の便詣なりといふ事なかれ。此れ機感相叶ふ時なり。光りをまじふるは冥を導く誓ひなり。明神定めてその名に應じ給はば、長夜の明曉は神にたのみある者をや。

光りとづる夜の天の戸はやあけよ朝日戀しき四方の空見むこのうらを遙かに過ぐれば、朝には入海にて魚にあらずば遊ども、逆旅にして友なきあはれには、なにとなく心ほそく、そらにおもひしられて、

露の身をおくべき山の陰やなきやすき草葉も風吹きつゝ、湖見坂といふ所をのほれば、吳山の長坂にあらずといへども、周行の短息はこゝにあたり。數歩を通じて長き道に進めば、宮道二村の山中を賒に過ぎて、山はいづれも山なれども、優興はこの山にひく。松はいづれも松なれども、木立はこの松にとゞまれり。翠を含む風の音をきくと雖も、雲に舞ふ鶴の聲に晴れの空を知る。松の性く、汝は千年の貞あれば、おもがはりせじ。再往々々、我は一時の命なれば、後見期しがたし。けふすぎぬ歸らば又よふたむらのやまぬ名残の松の下道山中に堺川あり。身は河上にうかんでひとり渡れども、影はみなそこに沈んで我とふたりゆく。かくて三河國にいたりぬ。雄鯉鮒が馬場を過ぎて、數里の野原に一兩のはしを名づけて八橋といふ。砂に睡る鴛鴦は夏を辭し去り、水にたてる杜若は時をむかへて開きたり。花は昔の色かはらず咲きぬらむ。橋もおなじ橋なれども、幾度つくりかへつらむ。相如が世を恨みしは、肥馬に乗つて昇僊にかへり、幽子身を捨つる。窮鳥に類ひて當橋を渡る。八橋よ、八橋よ、くもでに物おもふ人は昔も過ぎきや。橋柱よ、はしばしらよ、おのれも朽ちぬるか。むなしく朽ちぬるものは今もまたすぐ。すみわびて過ぐる三河の八橋を心のきてもたち返らばや

べからず。晝は汐干潟なれば馬をはやめてゆく。酉天は溟海漫々として雲水蒼々たり。中上には一葉の舟かすかに飛びて白日の空にのほる。彼の僂男の船中にてなどや老いにけむ。蓬萊の島は見ずとも、不死藥をばとらずとも、波のうへの遊興は一生の歡會なり。これ延年の術にあらずや。老せじと心を常にやる人ぞ名をきくしまの藥をもうれ猶この干潟を行けば、小蟹どもおのが穴々より出でて蠢き遊ぶ。人馬の足にあわてて、横にをどり平さまに走りて、我があななへ逃げ入るをみれば、足の下にふまれて死ぬべきは外なる穴へ走りて命いき、外に恐れなきは足の下なる穴へ走り來てふまれて死ぬ。憐むべし、煩惱は家の犬のみにあらず、愛着は濱の蟹ふかき事を。これを見てはかなくおもふ我々、かしこしやいなや。生死の家に着する心は、かにもまさりてはかなき物か。

誰もいかにみるめ哀れとよる波の漂ふ浦に迷ひ來にけり山重りて又かきなりぬ。河へだゝりて又へだゝりぬ。ひとり舊里を別れて、遙かに新路におもむく。しらす、いづれの日か古郷にかへらむ。影をならべゆく。道づればあまたあれども、心ざしは必ずしも同じからねば、心に准ずる氣色は友をそむきて似たれども、折りにふる、物のあはれは心なき身にもさすがに覺えて、屈原が澤に呻ひて漁夫が嘲りを恥ぢ、楊岐が路になきて騷人のうらみをいだきけむも、身のたとへにはあらねこの橋のうへに思ふ事をちかひて打ち渡らば、何となく心もゆく様におほえて、遙かに過ぐれば宮橋といふ所あり。數雙のわたし板は朽ちて跡なし。八本の柱は残りて溝にあり。心のうちに昔をたづねて、ことのはしに今をしるす。

宮橋の残る柱にこととはむ朽ちて幾世かたえ渡りぬるけふの泊りをきけば、前程猶遠しといへども、暮れの空を臨斜脚既に酉金に近づく。日の入る程に矢橋の宿に落ちつきぬ。九日、矢橋を立ちて、赤坂の宿を過ぐ。むかしこの宿の遊君、花顔春こまやかにして、蘭質秋かうばしき女ありけり。貞を潘安仁が弟妹にかりて、契りを三州吏の妻妾に結べり。妾は良人に先んじて世を早くし、良人は妾におくれて家をいづ。しらす、利生の菩薩の化現して夫を尋ねけるか。又しらす、圓通大士の發心して妾をすくへるか。互の善知識大なる因縁なり。かの舊室妬が咒咀に拵舞惡怨かへりて善教の禮をなし、異域朝嘲の輕仙に、鼻酸持鉢忽に智行の徳にとふ。巨唐に名をあけて本朝に譽を留むる上人誠に貴し。誰かいはむ、初發心の道に入聖なりとは。是則本來佛の世に出でて、人を化するにあらずや。行くく昔を談じて、猶々いまにあはれむ。いかにしてうつゝ、が道を契らまし夢驚かす君なかりせばかくて本野が原を過ぐれば、懶かりし蕨は春の心を生替りて秋の色疏けれども分け行く駒は鹿の毛に見ゆ。時に日重山にかくれて、月星躔に顯れぬ。曉をはやめて豊河の宿にとまり

ぬ。深夜に立ち出でてみれば、この川はながれひろく水深くして、まことにゆたかなる渡りなり。河の石瀬に落つる浪の音は、月の光りにこえたり。川邊に過ぐる風の響は、夜の色白し。又みぎはひなのすみかには、月より外に眺めなれたるものなし。

しる人も渚に浪のよるのみぞなれにし月の影はさしくる十日、豊河を立ちて、野くれ里くれはるくと過ぐれば、峰野の原といふ所あり。日野の草の露より出でて、若木の枝にのほらす。雲は峰の松風にはれて、山の色天とひとつに染めたり。遠望の感心情つきがたし。

山の端は露より底に埋れて野末の草に明くるしの、めやがて高志山にかゝりぬ。石利を踏み大敵山を打ち過ぐれば、焼野が原に草葉萌え出でて、梢の色煙をあぐ。この林地を遙かに行けば山中に堺川あり。これより遠江國にうつりぬ。下るさへたかといはばいかせむのほらむ旅の東路の關この山のこしを南にくだりて、遙かに見おろせば、青海浪々として白雲沈々たり。海上の眺望はこの所に勝れたり。漸山脚に下れば、匿穴の如くに掘り入れたる谷に道あり。身をそばめ聲を呑んで下る。くだりはつれば、北は韓康獨徃の栖、花の色夏の望み貧しくして、南は范蠡扁舟の泊り、波の聲夕の關に樂しぶ。鹽屋にはうすきけぶり靡然となびきて、中天の雲片々たり。濱膠には決れるうしほ涓焉とたまりて、數條の畝破々たり。浪によるみるめは、心なけれど黒白をわきまへ、白洲に

十一日に橋本をたつ。橋のわたりより行く／＼たちかへりみれば、跡に白浪のこゑはすぐるなごりをよびかへし、路に青松の枝はあゆむもすそを引きとむ。北にかへり見れば湖上はるかにうかんで、なみのしは水の顔に老いたり。西にのぞめば湖海ひろくはびこりて、雲のうきはし風のたくみにわたす。水郷のけしきはかれもおなじけれども、湖海の淡鹹は氣味これことなり。沔のうへには浪に轟ぶみささぐすしき水をあふぎ、舟の中には唐櫓おすこゑ秋の雁を眺めて夏の空にゆく。本より興望は旅中にあれば、感傷しきりに廻りておもひやみがたし。此所をうちすぎ、濱まつのうらにきたりぬ。長汀砂深くして行けばかへるが如し。萬株しゆくして風波こゑをあらそふをみれば、又湖を呑めば、則北浦の北より吐き出し、濱漪珠を沙汰せば、則疊巖の疊にくだきしく。優なるかな、艶なるかな、忘れ難く忍びがたし。命あらば□年か再び來りてこのうらにすぎむ。

波は濱松には風の裏うへに立ちどまれとや吹きしきるらむ林の風におくられて廻澤の宿をすぎ、遙かに見わたして行けば岳の邊には森あり。野原には澤あり。峯にたつ木は枝をうへにさして生ひたれども、水にうつるかけは梢をさかさまにして互に相違せり。水と木とは相生中よしときけども、うつるかけは向背して見ゆ。時既にたそがれになれば、夜の宿を向へて池田の宿にとまる。

たてる鷺は、心あれども毛砂にまどへり。優興にとゞめられて暫く立てれば、この浦の景趣はひそかに行人の心をまどふ。行き過ぐる袖も鹽屋の夕煙たつとて蟹の寂しとや見む

夕陽の影の中に橋本の宿にとまる。この泊りは菴海南に湛へて遊興をこぎゆく舟にのせ、驛路ひがしに通りて響號を濱名の橋にきく。時に日車西に馳せて牛漢漸くあらはれ、月輪峰に廻りて兎景初めて幽かなり。浦ふく松風は臥しもならはぬ旅の身にしみ、巖をあらふ浪の音は聞きもなれぬ老の耳にたつ。初更の間ひごろの苦みにわかれて、七編のこもむしろにゆるめるといへども、深漏はこよひのとまりの珍しきに目ざめて、數雙の松の下にたたり。磯もとゞろによる波は、水口喧しく罵れども、暗れくもりゆく月は、雲のうす衣をかうぶりて忍びやかにすく。彼の釣魚のかけは波の底に入りて、魚のきもをこがし夜舟の棹のうたは枕のうへに訪れて、客のねざめにともなふ。夜も既に明けゆけば、星の光りはかくれて宿立つ人の袖はみえ餘所なる聲によばれて、しらぬ友にうちつれて出づ。しばらく舊橋に立ちとゞまりてめづらしきわたり興すれば、橋の下にさしのほるうしほは、かへらぬ水をかへし上さまにながれ、松をばらふ風のあしは、かしらをこえてとがむれどもきかず。大かた鞆中の贈答は此所に儲けたり。誰か水驛の跡をいはず。橋本やあらぬ渡りと聞きしにも猶過ぎかねつ松のむら立浪まくらよるしく宿のなごりには残してたちぬ松の浦風

十二日、池田を立ちてくれ／＼行けば、林野おなじさまなれども、ところ／＼みちとなれば、見るにしたがひてめづらしく天中川をわたれば、大河にて水面三町ばかりあれば、舟にて渡る。はやく波さかしくて、棹もさしえねば、大なる扒をもちて、横さまに水をかきてわたる。かの王霸が忠にあらざれば浮沓河漸むすぶべきにあらず。張轉望が牛漢浪にさかのほりけむ浮木の舟のかくやおほえて、

よしさらば身をうき／＼にて渡りなむ天つみ空の中川の水上の野原を一里ばかりをすぐれば、千草萬草露の色なほあさく、野煙徑風の音またよわし。あはれおなじくは、この道の秋の旅にてあれな。

夏草はまだうら若き色ながら秋にさきだつ野邊の露かな山口といふ今宿を過ぐれば、路は舊に依りて通ぜり。野原を跡にし、里村をさきにして、打ちかへ／＼過ぎ行けば、事のまゝと申す社に參詣す。本地をばしらす。佛陀にもいますらむ。薩睡にもいますらむ。中丹をば神かならずあはれみ給ふべし。今身もおだやかに後身もおだやかに、すぎのむら立は三輪山にあらずとも戀しく、尋ねてもまるらむ。願くはたゞ畢竟空寂の法味を納受して、眞實不虛の感應をたれたまへ。思ふことのまゝに叶へば杉たてる神の誓ひの驗しとぞみむ社のうしろに小川をわたれば、佐夜中山にかゝる。この山口をしばらくのほれば、左に深谷右も深谷、一峯ながき道は堤

のうへに似たり。兩谷の梢を眼下に見て、群鳥の囀りを足の下に聞く。谷の兩片はたかく、又山の間をすぐれば、中山と見えたり。山は昔の九折の道、ふるきが如し。梢はあらたなる抄、千條のみどりみなあさし。この處は其の名ことに聞きつるところなれば、一時のほどに百般立ちどまりてうち眺めゆけば、奏蓋の雨の音はぬれずして耳をあらひ、商絃の風の響きは色あらずして身にしむ。

わけ登るさよの中山なか／＼にこえて名残ぞ苦しかりける時に胡馬ひづめつかれて、日鳥翅さがりぬれば、草命をやしなはむがため、きく川の宿にとまりぬ。或家のはしらに、故中御門中納言宗行卿かく書き付けられたり。彼の南陽縣の菊水下流を汲んでよはひをのべ、此の東海道の菊河西涯にやどりて命を全くせむ事を。ことにあはれとこそおほゆれ。身は累葉の賢枝に生まれ、その官は黃門のたかき階にのほる。雲のうへの月の前には冠の光りをまじへ、仙洞の花の下には錦の袖の色をあらそふ身たり。榮え分にあまりて時々はなど匂ひしかば、人それをかざして近きも從ひ遠きもなびきしも、かゝるうきめ見むとは思ひやはよるべき。さてもあさましや、去る承久三年中旬、天下風あれて海内のなみさかへりき。鬪亂の亂將は花城よりみだれ、合戦の戰士は夷國より戦ふ。暴雷雲をひびかして日月光りをおほはれ、軍慮地を動して弓劍威をふるふ。そのあひだ萬歳の山のこゑ、風わすれて枝をならし、一

く、又水さかし。ながれをこえ鳥をへだてて、瀬々かた／＼にわかれたり。この道を三三三行けは、四望かすかにして遠情おさへ難し。時に水風例よりもはけしくて、白砂きりのごとくにたつ。笠をかたぶけて駿河國にうつりぬ。前島を過ぐるになみはた、ねども、藤枝の市をとほれば花はさきかゝりたり。前島の市には波の跡もなしな藤枝の花にかへつ、岡部の里邑を過ぎてはるかにゆけば、宇都の山にかゝる。この山は山中に山を愛するたくみのけづりなせる山なり。碧岸の下に砂ながうして巖をたて、翠嶺の上に葉おちて壤をつく。朧を背におひ、面を胸にいだきて、漸にのほれば、汗肩祖のはだへに流れて、單衣かさぬといへども、懐中の扇を手に動して、微風の扶持可なり。かくて森々たる林をわけて、峨々たる峰を越ゆれば、貴名の響はこの山にたかし。大かたをちこちの木立に心をわけられて、一方ならぬ感望に思ひみだれて過ぐれば朝雲峰くらし。虎李將軍が柄をさり、暮風谷寒し。鶴鄭太尉が跡にすむ。既にして赤羽西にとひ、まなこにさへぎるものとは檜原楨の葉、老のちからこゝを疲れたり。足にまかするものは苔の岩ね動の下道、嶮難にたへず。暫くうち休めば、修行者一兩客繩床そばにたてて又休む。

立ち返るうつ山伏ことつてよ都こひつ、獨りこえきと行く／＼思へば、過ぎきぬるこの間の山河は、夢に見つるかうつ、にみつるか。昨日とやいはむけふとやいはむ。昔を今と思

清の河の色、波あやまつてにこりをたて、茨山汾水の源流たかくながれ、はるかに西海のしにくたり、卿相羽林の花族とほく落ちて、東關の東にちりぬ。これのみにあらず、別離宮の月のひかり、所々にうつりぬ。雲をへだてて旅の空にすみ、鶏籠山の竹の聲方々にうれへたり。風のたよりをたえて外土にさまよふ。夢かうつつか。むかしもいまだきかず。錦帳玉端の床は主失ひて武客の宿となり、麗水蜀川の貢數をつくして邊民のたからとなりなき。夜ひるたはぶれて袴をかきねし鴛鴦、千歳比翼ちぎりいきながらたえ、朝夕にうやまひて袖ををさめし僮僕も、多ねん知恩のこゝろさしおもひながらわかれぬ。實に會者定離のならひ、目のまへに見ゆるに、利利も首陀もかはらぬ奈落のそのありさま、あはれにこそおほゆれ。今はなげくともたすくべき人もなければ、涙をさきだてて心よわくうちいでぬ。その身にたつものは劍戟のつるぎ、魂ろを一騎の客にかく。その目にたつものは劍戟のつるぎ、魂を寸神のむねにけす。せめて命のをしさに、かく書き付けられけむこそ、するすみならぬ袖の色もあらはれぬべく覺ゆれ。心あらばさぞあはれと水莖の跡かきわくる宿の旅人

妙井渡といふ所の野原をすく。中呂の節にあたりて、小暑の氣やう／＼催せども、いまだ納涼のころならねば、手に擲はず。夏深き清水なりせば駒とめて暫し涼まば日はくれぬべし。播豆藏の宿を過ぎて、大堰河を渡る。この川は川中に渡りおほ

へば我が身老いたり。今を昔とおもへば我が心わかし。古今をへだつる物は我が心の中懐なり。生死涅槃猶如昨夢といへるもあはれにこそおほゆれ。昨日過ぎにしあとは今日の夢となり、今日此所をすぐる。明日いづれの所にして今はきのふといはむ。誠にこれ過ぎぬるかたの歳月を夢よりのゆめにうつりぬ。昨日今日の山路は雲よりくもにいろ。あすや又きのふの雲に驚かむけふはうつ／＼のうつ山越手越の宿にとまりてあしを休む。十三日手越を立ちて野邊をはる／＼と過ぐ。こすゑをみれば淺緑の夏のはじめなりといへども、草村をのぞめば白露まだきに秋の夕に似たり。北に遠ざかりて雪しろき山あり。とへば甲斐の白峯といふ。年頃き、しところ命あれば見つ。およそこの間數日の志をやしなひて、百とせのよはひをのべつ。かの上仙の藥は下界のためによしなき物をや。

をしからぬ命なれ共けふはあればいきたるかひの白根をも見つ宇度の濱をすぐれば、浪の音風のこゑ、殊にこゝろすむ所なり。濱の東北に靈地の山寺あり。四方たかくはれて四明天台の末寺たり。堂閣繁昌して本山中堂の儀式をかり、一乘讀誦のこゑは十二廻中に聞き絶ゆる事なく、安居一夏の行は探花汲水のつとめ驗をあらそふ。修する所は中道の教法論談を空假の頃に決して、利する所は下立の衆生歸依を遠近の境にいたす。伽藍の名をきけば行基ほさつの建立、土木の風情、本尊の

實を尋ねれば觀世音と申す。補陀落山の聖容、出現の月あきらかなり。大形佛法興隆のみぎり、數百箇歳の星漢霜ふりたり。僧俗山住のみね、三百餘宇の禪房霞ゆたかなり。雲船の石神山腰に護りて惡障をふせぎ、大形の木容は寺内に納めて善業をなす。千手觀音かの山より石舟に乗りてこの地にくだり給ひけり。その舟善神となりて山路の大坂に石舟護法と號す。彼の海岸山の千眼は南方より北を飛びて、有縁をこの山に導く。宇度濱の品天面を地に得て、舞樂をこの濱にまなべり。昔稻河大夫といふ人、天人の濱松の下に樂をしらべて舞ひけるをみて、まなび舞ひけり。又人のみるをみて、鳥のごとくに飛びて雲に隠れにけり。その跡をみれば一の面形を落せり。大夫これを取りて寺の寶物とす。よつてその寺に舞樂をしらべて法會を始行す。その大夫が子孫舞人氏とす。二月十二日常樂會とて寺中の大營なり。その後天人歸り、廻雪は春の花の色みねにとまり、想風は歲月のころはよつてこの濱をすぐれば、松に雅琴ありて浪につまみあり。天人の樂今聞くに似たり。袖ふりし天津をとめが羽衣のおも影にたつ跡の白波江尻の浦をすぐれば、青苔石におひ黒布磯にはる。南は澳の海森々と波をわかつて、孤帆天にとび、北は茂松鬱々と枝たれて、一道つるをなす。漁夫の網をひく、身をたすけむとして身をくるしみ、游魚の釣をのむ、命ををしみて命をほろぼす。人いくばくの利をか得たる。魚いくばくの餌をかもとむ

る。世をわしるおもひ、命をたばふ志、かれもこれもともにおなじ。これのみかは、山にあせかく樵夫は、北風をになひて夕にかへり、野にあしなへぐ商客は、白露をはらうてあかつきに出づ。面々のたのしみまち／＼なりといへども、各々のくるしみはみなこれ渡世の一事なり。人ごとにはしる心は變れども世をすぐる道は一つなりけり。この浦を遙かに見渡して行けば、海松はなみの岩ねに根をはなれたる草、海月は潮のうへに水にうつるかけ、ともにこれうき世を論じて人をいましめたり。浪の上に漂ふ海の月もまたうかれ行くとぞ我を見るらむ。清見が關を見れば、西南は天と海と高低ひとつにまなこをまどはし、東北は山と磯と嶮難おなじく足をつまだつ。磬の下には波の花風にひらきて春のさだめなく、峯のうへには松の色みどりを含みて秋をおそれず。浮天の波は雲を汀にて月のみふね夜出でてこぎ、沈陸の磯は磬を道にて風の使脚あしたにふきてすぐ。名を得たる所必ずしも興をえず。耳に耽る所かならずしも目にふけらず。耳目の感ふたつながら得るはこの浦にあり。浪にあらひてぬれ／＼や□に道をとへば松風むなし／＼こたふ。岸柳に苦みを尋ねれば槿花變じて石あり。關屋の邊に、布をた／＼みといふ所あり。昔せきもりの布を取りたるが、つもりて石になりたるといへり。吹きよせよ清見浦風忘れ貝拾ふ名残のなにしおはばや

變らばやけふみるばかり清見浦おほはし袖にかゝる浪路は海老は浪におよぎ、愚老は汀にたゞよふ。ともに老いて腰かがまる。汝はしるや、生涯うかべるいのち今いくほどと。我はしらす、幻中の一瞬の身。かくておきつの浦をすぐれば、鹽がまの煙かすかに、うら人の袖うちしをれ、邊宅には小魚をさらして、屋上に鱗をふけり。松のむら立なみのゆるい、心なき心にもこゝろあらむ人に見せまくほしくて、たゞぬらせゆくての袖にかゝる波ひるまの程は浦風も吹く岫崎といふ所は、風飄々と翻つて砂をまはし、波浪々と亂れて人をしきる。行客こゝにたづさはりて、しばらくよせひく浪間をうかゞひていそぎとほる。左は嶮岳の下と岩のはざまをしのぎ行き、右はかすかなる浪のうへをのぞめば眼うけぬべし。遙々とゆくほどに、大和田のうらに來て、小船の沖中にたゞよへるをみる。飄帆飛んで萬里風便をたのみて白煙にいら、鼈波うごきて千雲夕陽をあらひて紅藍にそむ。海館のうち此所をのみとめて身をばとゞめず。忘れじな波の面影立ちそひてすぐる名残の大わだの浦あり。湯居の宿を立ちて、遙かに行けば、千本の松原といふところにはらふ。晴の天の雨には翠蓋のかさあれば袖をたくらす。砂の濱の水には白花ちれども風をうらみず。行く／＼あとをかへりみれば、前途いよくゆかし。

聞きわびぬち、の松原吹く風の一かたならずわれしほる聲。蒲原の宿にとまりぬ。すがごものうへにふせり。十四日蒲原を立ちて遙かに行けば、前路に進みさきだつ賓は、馬に水かひて後河にさがりぬ。後程にさがりくるをのれば、野に草しきてまだこぬ人をさきにやる。最後のあはれは行旅のならひにも思ひしられてうちすぐる程に、富士川をわたりぬ。この河中にこそ石をながす。巫峽の水のみなんぞ舟をくつがへさむや。人のこゝろはこの水よりさかしければ、老馬をたのみてうち渡る。老馬々々、なんぢは智ありければ、山路の雪のみにあらず、川のその心もよくしりにけり。音にき、し名高き山のわたりとて底さへ深し富士川の水。浮島が原をすぐれば、名はうきしまときこゆれど、まことは海中とは見えぬ。野徑とは見つべし。草むらあり。木の林あり。はるかに過ぐれば人煙片々と絶えて又たつ。新樹程をへだてて隣たがひにうとし。東行西行の客はみな知音にあらず。村南村北の道にたゞ山海を見る。山の頂に二泉あり。湯の女がこのみねに遊びて常にあり。ひがしふもとに新山と言ふ山あり。延暦年中に天神くだりてこれをつくといへり。すべてこのみねは、天漢の中に沖ひて、人衆の外にみゆ。眼をいたゞきて立ち魂恍々とほれたり。幾としの雪積りてかふじの山いたゞき白き高ねなるらむ。問ひきつるふじの煙は空にきえて雲に名残の面影ぞたつむかし探竹翁といふものあり。女を赫奕姫といふ。翁が家

冥道にたちかくれにけり。

都をばいかに花人春たえてあづまの秋の木の葉とはちるやがて按察使左兵衛督有雅卿。おなじくこの原にて、するの露、もとの雫とおくれさきだちにけり。夫れ人つねの生なし。家つねの居なし。これは世のならひ事の理なり。されども期來りて生れて謝せば、理をのべて忍びつべし。縁つきて家をわかれば、ならひを存してなぐさみぬべし。別れし所はうき世なり。城の外の荒々たる野原の旅のみち、没せむ時はいまだしき時なり。恨みをふくみし悄悄たる秋の天の夕の空、誠に時の災孽の遇にあへりといへども、こゝにこれ先世の宿業のむくゆる酬いなり。抑かの人々は官班、身を名譽のき、をあく。君恩あくまでうるほして、降雨のごとし。人望かたかくに開けてさかりなる花に似たりき。中に黃門都護は、家の貫首として一門の間に捷をおし開き、朝の重臣として萬機の庭に線をととのへき。誰か思ひし、天俄に災をくだして天命をほろほし、地忽に天をあけて地望を失はむとは。あはれなるかな、入木のとの跡は千とせの記念にのこり、歸泉の靈魂は九夜の夢にまよひにき。されども善惡心につよくして、生死はたゞ恨みなりとおもへりき。つひに十念相續して他界にうつりぬ。夏の終秋のはじめ、人酔ひ世にこりし。その間の妄念はさもあらばあれ。南無西方彌陀觀音、その時の發心なほざりならずば、來迎たのみあり。これやこの人々の別れし野邊と、うちながめ

てすぐれば、淺茅が原に風たちて、なびく草葉に露こほれ、無常の郷とはいひながら、無慚なりける別れかな。有爲のさかひと思へども、うかりける世の中かな。官位は春の夢、草の枕にながく絶えぬ。樂榮はあしたの露、昔のむしろにきえはてぬ。死出山路には隨はぬならひなれば、後世のうらみもいかせむ。東のみちにひとり出でて、あやふき武士にいざなはれ行きけむ心のうちこそあはれなれ。かの冥吏呵責の場には、ひとり自業自得の斷罪に舌をまき、この妻息別離の跡には各不意不慮の横死に涙をやる。生れてのわかれ、死してのうらみ、ふたつながらをいかせむ。眞をうつしてもよしなし。一生いくばくならぬ魂を訪ひて足りぬべし。二世のちぎりむなしからじ。

思へばなうかりし世にもあひ澤の水の泡とや人の消ゆらむけふ足柄山をこえて、關の下の宿にとまるべき日、暮鳥むらがりとんで、林頭に驚ねぐらをあらそへば、山の此方竹の下といふところにとまる。四方は高山にて、一川谷にながれ、嵐落ちて枕をあらふ。聞けばこれ松の音、霜さえて袖にあり。拂へばたゞ月のひかり、ね覺のおもひにたえず、ひとりおきるのこりの夜をあかす。

見し人にあふ夜の夢の名残かなかけるふ月に松風の聲更くる夜の嵐の枕ふしわびぬ夢も都に遠ざかりきて

十六日、竹の下を立ちて、林中をすぎてはるるゝと行けば、町段緑衫を萬きやうの竹にかり、時に暮れ行く日脚は景を遠島の松にかへし、來宿疎人は契りを同驛の庭にむすぶ。彼の草につなぐ疲馬は、胡國を忍びて北風に嘶へ、野にやすむ群牛は、吳地に倣ひて夜の月に喘ぐ。棹歌數聲舟船を明月映のほとりによせ、松琴萬曲琵琶を尋陽江の汀にきく。一生のおもひ出今夜の泊りにあり。

行きとまる磯邊の浪のよるの月旅ねの袖にまたやどせとや十七日、逆川を立ちて、平山を過ぎて、高倉宰相中將範茂。笠峯山のうみじり急河といふ淵にて、底のみくづと沈みにけり。つらくその昔を思へばあはれにこそおほゆれ。日本國母の貴光をかややす。光りの末に身をてらし、天子聖皇の恩波をそぐ。波の雫に家をうるほす。羽林のはなあらたに開け。春にあへるにほひ天下に薫し。射山の風あた、かにあふぐ。時にあたるひき遠近にふるふ。圖らざるや、榮木山風たきき、そのはなちりととなり、逝水ながれ急にして、その身泡ときえむとは、連枝の契りかたえはやくをれぬ。家苑の地あと空しく残り。鮎組のむつび一頬をならべず、他郷の水おちてかへらず、一生こゝにつきぬ。この河は三家の水口たるか、いふことなかれ、水こゝろなしと。なみの聲嗚咽して哀傷をなす。流れ行きて返らぬ水の哀れにも消えにし人の跡と見ゆらむ此のつぎにあひ尋ねれば、一條の宰相中將信能美濃國遠山といふところにて、露の命をかしてける。夫洛中にわかれて維し

千東のはしを獨梁にさしこえて、足柄山に手をたてて登れば君子松いつくしくて、貴人の風過ぐる笠をとがめ、客雲梢にかさなりて、故山の頂あらたに高し。朝の間雨ふりて、松の風聲の虚名をあらはす。程なく日岳の東にのほりて、雲はやく驛路の天にはれぬ。彼の山祇のむかしの歌に、遊女が口に

つたへ、嶺猿の夕のなきは、行人の心をいたましむ。昔青墓の宿の君女、この山をこえける時、山神翁に化してうたををしへたりけり。あしがらといふはこれなり。時に萬仞みねたかし。樹根にまとうて腰をかめ、千里巖さかし。昔の鬚をかながりて脛をのく。山中を胡馬がへしといふ。馬もしこゝにとまらましかば、この山をば鞍馬とぞいはまし。これより相摸國にうつりぬ。

秋ならばいかに木の葉の亂れまし嵐ぞおつる足柄の山

關下の宿をすぐれば、宅をならぶる住民は人を宿して主とし、窓にうたふ君女は客をとめて夫とす。憐むべし千歳のちぎりを旅宿の一夜のゆめにむすび、生涯のたのみを往還の諸人の望にかく。翠帳紅閨萬事の禮法ことなりといへども、草庵柴戸一生の觀念これおなじ。

櫻とて花めく山の谷ほこりおのが勾ひも春は一とき道は順道なれども、宿を逆川といふ所にとまる。鹽のさすとき、水の上さまにながるれば、北は片岡田畛うちすぎみて、薄の焼けをれ青葉にまじり、南は満海蒼波わきあがりて、白馬ならびわたる。しかのみならず、前汀東西素布を長疊の浪にあらそひ、後園

日、家をはなれしうらみいよ、悪業のなかだちたりしかども、旅の道に手をひらけしときに、家を出でしよろこび還りて善縁のすゝめにあへり。たなごゝろをあはせ念をたゞしくして魂ひとり去りにけり。臨終の義を論ぜば往生ともいふべし。西方には聖衆定めて九品の寶蓮にみちびくらむ。彼の羽化をえて天闕にあそびしは、八座のむしろ家門の塵をうち拂ひ、虎賁を兼ねて仙洞にわしる。累葉の花寶枝の風に綻びき。傷しいかな、平日のかけ盛にして、未西天の雲にかたぶかざるに、壽堂の扉ながくとぎて、北邙の地にうづむことを。花の床をなにかさりけむ。跡にとまりて主なし。親族はかなしめどもよしなし。旅に出でてひとり心ざしぬ。楊國忠が他界にうつりし、しらす、人の恨みをなすことを。平章事の遠山にほろびし思ひやりき、身の悲みをふくみなむことを。彼の東平王の舊里を思ふ墳上の風雨になびく。誠にさこそあはれにこそは覺ゆれ。

思ひきや都を夜半に別れ路の遠山野べに露きえむとは。夫れ人のうまれたるは、庭におつる木の葉の風に動くが如し。風やみぬれば動かす。死と思へば、旅に出づる行客のやどにとまるが如し。こゝに別れぬといへども、かしこには生れぬ。たゞ煩惱のうらみのみさる事を悲しみ、愚痴の心をしらする事をうらむべし。はやく別れをしまむ人は、再會を一仙の國に約し、恩をこひむひとは、追福を九品のみちに訪ぬべし。今更に何歎くらむ末の露もとよりきえむ身とはしらすや

こゝろ、されども神慮は人しらす。きねがならはしにしたがひて、ふしをがみてとほりぬ。

江の島やさして鹽路に跡たる、神は誓ひの深きなるべし。路の池に高き山あり。山の峰かぶるにて貴からずといへども、怪石ならびるて興なきにあらず。歩をおさへて石をみれば、昔かの掘りうがちたる磬どもなり。海も久しくなれば、ひるやらむとみゆ。腰越といふ平山のあはひを過ぐれば、稻村といふ所あり。さかしき岩のかさなり臥せる濱をつたひ行けば、岩にあたりてさきあがる浪の花のごとくにちりかゝる。

うき身をば怨みて袖をぬらすともさしもや波に心碎かむ。申の斜に湯井の濱に落ち着きぬ。しばらく休みて、此所をみれば、數百艘の舟ども綱をくさりて大津のうらに似たり。千萬宇の宅軒をならべて大淀のわたりに異らず。御靈の鳥居の前に目をくらして後、若宮大路より宿所につきぬ。月さしのほりて、夜も半に更けにければ、おきたる老人おほつかなくおほえて、

都には日をまつ人を思ひおきてあづまの空に月を見るかな。鶏鳴八聲のあかつき、旅宿一寢の夢さめて、たち出で見れば月の光り屋上の西にかたぶきぬ。

思ひやる都は西にありあけの月かたぶけばいと戀しき。十八日、この宿の南の軒ばに高き丸山あり。山の下に細き小川あり。峯のあらしこゝろ落ちて夕の袖をひるがへし、灣水ひ

大磯の浦、小磯の浦をはるくくとくれば、雲のかけ橋なみのうへに泛みて、鵲のわたし守あまつ空に遊ぶ。あはれさびしきたびの空かな。ながめなれてや人はゆるくらむ。

大磯やこいその浦の浦風にゆくともしらすかへる袖かな。相摸川をわたりぬれば、懷島に入る。砥上が原を出づ。南の浦を見やれば、浪のあやおりはへて白き色をあらひ、北原をのぞめば、草の緑をせめなし淺更さらせり。中に八松といふ所あり。八千歳のかけにたちよりにて、十八公の榮をさかりにす。

やつ松の八千よの影に思ひなれて砥上が原に色も變らじ。固瀬川をわたりて江尻の海汀をすぐれば、江の中に一峯の孤山あり。孤山に靈社あり。江尻大明神と申す。威験ことにあらたにして、御前を過ぐる下り船は上分を奉る。法師はまるらぬときけば、その心を尋ぬるに、昔この邊の山寺に禪僧ありて、法華經を讀誦して夜をあかし日をくらす。その時女の形出で来て夜ごとに聽聞して、あくれば忽然としてうせぬれば、その行方をしらす。僧これをあやしみて、絲を搗へて密に裾につけにけり。あくる朝に絲をたゞしてみれば、海上にひかれてかの山にいたりぬ。巖穴に入りて龍尾につけたり。神龍顯形して後、僧にはちてこれを入れずといへり。夫れ權現は利生の姿なり。化現せば何ぞ姿にはからむ。弘經は讀誦の僧なり。經を貴みば何ぞ僧を厭はむや。深きちかひは海にみたり。波にたるゝあとは、遊體は天に知れたり。雲にひ

きそ、ぎて夜の夢をあらふ。年頃ゆかしかりつる所か。いつしか周覽相もよほし侍れども、いまだ旅なれば今日は空しく暮しつ。相知りたる人は一兩人侍るを頼りて、物など申さむとおもふ程に、たがひてなければ、いとたよりなくて、

頼めつる人は渚のかたつ貝逢はぬにつけて身を怨みつ、さらぬ人はおほけれども、うとければ物いはず。その中にふるき得意ひとりありて、不慮の面談をとぐ。往事の夢に似たる事を憐みて、次に昔にかはる事をなげく。互に心懷を述べて暫し相語る。その後立ち出でてみれば、このところの景趣は、うみあり、山あり、水木たよりあり。廣きにもあらず、狭きにもあらず、街衢のちまたはかたんに通ぜり。實にこの聚おなじ邑をなす。郷里都を論じて望まづめづらしく、豪をえらび賢をえらぶ。門櫛しきみをならべて地又賑へり。おろく將軍の貴居を垣間見れば、花堂たかくおしひらいて、翠簾の色喜氣をふくみ、朱欄妙にかまへて、玉砌のいしずゑ光をみかく。春にあへる鶯のこゑは好客堂上の花にあざけり、朝をおくる龍蹄は參會門前の市に嘶ゆ。論ぜず、本より春日山より出でたれば、貴光たかく照して、萬人みな瞻仰、士風塵をはらふ。威験遠く誠めて四方ことごとく聞きにおそる。何ぞ況や、舊水源すみまさりて、清流いよく遺跡をうるほし、新花榮鮮にひらけて、紫藤はるかに萬歳をちぎる。凡座制を帷帳の中に廻して、徵集郡國の間につめたり。しかのみならず、家室は扇をわすれて

夜の戸をおしひらき、人倫は心を調へてほこるともほこらず。愚政の至り治りて見ゆ。

夜の戸ものどけき宿に開くかな曇らぬ月のさすにまかせてこの縁邊に付きて、おろく歴覽すれば、東南の角一道は舟楫の津、商賣の商人百族にぎはひ、東西北の三方は、高卑の山風のごとくに立ち廻りて所をかざれり。南の山の麓に行きて、大御堂、新御堂を拜すれば、佛像烏瑟のひかり、瓔珞眼にかやき、月殿畫梁のよそほひは金銀色をあらそふ。次にひがし山のすそに臨みて二階堂を禮す。これは餘堂の踳躒して感歎およびがたし。第一、第二の重檐には、玉のかはら鴛の翅をとばし、兩目兩足のならひ給へし臺は、金の盤鶴燈をか、けたり。大方魯般意匠窮つて、成風天に望むに涼しく、毗首手功をつぐせり。發露人の心に催す。見れば又山に曲木あり。庭に怪石あり。地形のすぐれたる佛室と言ひつべし。三壺雲に浮べり。七萬里の浪池邊によせ、五城霞に峙てり。十二樓の風階の上にふく。誤つて半日の客たり。うたがふらくは七世の孫に逢はむ事を。夕におよんで西に歸りぬ。鶴岡にとて鳩宮にまゐらず。あけの玉がき金鏡に映じ、白妙のしき幣風にそよめき、銀の鑑は朱檻をみかく。錦のつゞれははなにひるがへる。しばらく法施奉りて瑞籬に候すれば、神女がうたの曲は、權現垂跡の隱教にかなひ、僧侶の經のこゑは、衆生成道の因縁を伸ぶ。彼の法性の雲のうへに、寂光の月老いたりと

でしかども、我をすつとやうらむらむ。無爲に入るは眞實の報恩なれども、有爲のならひは疏きにうらみあり。本よりおもはず東鄙の經廻を、今はいよく急ぐ西路の歸願、彼の最後の今に逢ふ事は先世の縁なれば、座したりとも違ひなむ。違ふともきたりなむ。たゞちぎりの淺深に依りて志の有無にまかせたり。悲むらくは親も老いたり。子も老いたり。いづれかさきだち、いづれかおくれむ。たゞなげく所は、母山の病木、八旬の涯に傾きて一房の白花いまだひらけざるに、子石のがれたる苦み、半白の波におほれて一滴の雫いまだ汲まざることを、朝に看夕にさだむ。志とけずしてやみなば、佛に祈り神に祈る功それいかせむ。我きく、佛神は孝養のために擁護のちかひをおこし、經論は報恩のために讃嘆のこと葉をのべたりと。壯齡の昔は將來を恃みて天に祈りき。衰邁の今は先報をかへりみて身をうらむ。もしこれ不信の雲におほはれて感應の月顯れざるか。もしこれ過去の福因をうゑずして、現在の貧果を得たるか。先報によるべくは、佛のちかひたのむやいなや。誓願によるべくば、我が孝なんぞむなしき。信否ともに感じて妄恨みだりにおこる。天眼あひなだめて憐みをたれ給へ。悲母の目前に中懷を謝して白髪をおとし、愚子が身のうへには本望をとけず黒衣をきる事を。夢の間の筭はたとひ一旦の雪にとめうしなふとも、覺路の蓮はかならず九品の露にひらきおくらむ。子養は子のこゝろざしにつくす。風樹は風の恨み

いへども、若宮の林の間に、應身の風あふぎてあらたなり。

雲の上に曇らぬ影を思へども雲より下に曇る月かな月の光りにたゞすみて、石屋堂の山の梢はるかにながめていぶせくかへりぬ。適下向なれば遊覽の志切々なれども、經廻わづか一句にして、上洛すでに五更になりぬれば、名残のむしるをまきて、出でなむ事をいそぐ。時に晚鐘のうちおどろかせば、永しと思ひつる夏の日も、今日はあへなく暮れぬ。一樹のかげの宿縁あさからず、拾調のむつび芳約ふかき人あり。きてもとへけふばかりなる旅衣あすは都にたち歸りなむ返し、

旅衣なれきてをしき名残にはかへらぬ袖も怨みをぞする五月のみじか夜、時鳥の一聲の間にあけなむとすれば、菖蒲の一夜のまくら、再會不定のちぎりをむすびて出でぬ。

かりぶしの枕なりとてあやめ草一よの契り思ひわするな湯井の濱を歸りゆけば、浪のおもかけ立ちそひて、野にも山にもはなれがたき心ちして、

なれにけり歸る濱路にみつ汐のさすが名残にぬる、袖かな人を頼みてくだるほどに、たのむ人にはかにのほりなむとすれば、身を無縁のさかひにすてて、志を有縁のうちに便宜あらば善よしおもへり。とけばやと存すれども、花京に老いたる母あり。嬰兒にかへりて愚子をしたひ待る。異郷にうかれたる愚子は、萬里を隔てて母を思ひおく。抖擻のためにいとまをこひて出

のこす事なかれ。

いかにせむ結ぶこの身をまたすして秋に杵のおつる山風東國はこれ佛法の初道なれば、發心の沙彌ことさらに修行すべき方なり。この故に木方初發の因地より萌して、金刹極證の果門を開かむと思へり。觀夫けがらはしき濱路を過ぎ行くにも、白砂なほおもしろく見ゆ。まして極樂金繩のみに思ひやるもゆかしけれ。銀樹七重の風無苦のこゑをしらべ、紫蓮千葉の色に染功徳の池には、水煩惱のあかをあらひ、善根のはやしには、樹菩提のこのみをむすぶ。ゆるたる宮殿は十方に飛びて居ながらす。ことに利生を約諾す。生くる人はみな說法集會の場にまじはりて無量の命を延年し、來る昔は悉見佛聞法の室に誇りて不退の樂に世會す。久遠世々の父母は珍本覺の如來に顯れ、過去生々の妻子はなつかしくて新來菩薩にむすびたり。法喜禪悅の味は口のうちにみち、端嚴殊妙のかざりは身のうへにそなはれり。およそ三十一金の月胸にはれ、第一義空の水心にすめり。この故に無始來のねぶりは夢ながくさめ、六趣輪の冥は盲眼ひらけたり。彼無常念王の故郷を忍ぶちぎり娑婆にあつく、法藏因位の舊臣を顯れむ志我等にふかし。これに依つて九品覺王の善政をたる、一念、奉公の輩ならびに平等引接の賞にあづかりて、諸天薩埵の僉議をなす。六賊重罪の犯却て皆空無漏の旨を奏す。七寶の高臺には四十八願の主五劫思惟の光りをはなちて、念佛のものをてらし、二

脇片座には三十三尊大悲弘誓のあみをたれて、苦海の沈没を
すくふ。故に二世の佛の濟度にもれたる五逆の罪人も、願海不
捨の舟に撐して彼岸にわたり、十方土の淨刹にすてられたる
此界の惡徒も、大雄起世翅にかゝりて西天に飛ばむ。あはれ
とく生れてみちに入らばやな。

浪風も御法の聲をとく聞きて見るめ苦しき海を出でばや
迷ひきて又迷ひこむ假の宿に長く歸らむ道に歸らむ

東國にさまよひ行く子あり。本の都を別れてかりの宿にふ
せり。西刹に訪ひ尋ぬる母います。あはれもとめて彼の國
に導を。その母といます佛は三字の名號を子どもにさづけて、
三因佛性のかくれたるをよび出し、十念の來迎を最期にちぎ
りて、十地證王の位につく。信力よわきものには他力を與へて
これをすくふ。倒れふしたる赤子を親の抱くが如し。念緒つよ
き願緒にすがりて自らず、む。驥につく蠅の千里に翔るがご
とし。されども具轉の浮身は一榮の香にす、められて、三毒の
酒に酔ひふす。世路の嶮難につかれて、佛界の正道にまよはず
妻子をおもふ心冥にくらまされて、心佛の光りをへだてたり。
菩提の鹿は罪業の山にかくれて、駈れどもいまだ出でず。煩惱
の虎は功德のはやしを別けて、追へどもかへらず。睡眠の閨に
は曉の鐘の聲うちおどろかせども、諸行無常の告げをさとら
ず。遊戯の床には暮れの日さしおどろかせども、分段の有爲の
ことわりわきまへず、老少不定の悲みは眼にさへぎりて、雲の

ば消えてのこらず。金くだけて灰にまじる。水に入れて汰けば
うする事なし。罪雪ならば善心あらはれぬべし。迷へる時は目
をふさぎて我が身をだにも見ず。さとするときは眼をひらいて
人の體をみる。障子をへだててあなたは十萬億土と思へども、
ひきあげたればたゞ一間のうちなり。佛性の水煩惱の風に氷
れども、思ひとけば水とは誰かしらざらむ。貧しとも嗟くべか
らず。電泡の身にいくばくの歎きぞや。樂めどもおごるべから
ず。幻化の世にはいくばくのあやまりぞや。樂みは大憍慢の
あだなり。あだはすなはち惡趣に引きおとす。貧は又道心のさ
またけならず。則善所に引きあげ、樂みは先生の怨敵なり。貪
着身をしばりて四生の牢獄にこむ。貧は今生の智識なり。愛欲
心をゆるして三界の樊籠を出す。この故に世をいとふ人は沙
門と名づけて樂める人とす。我等八苦の病はおもけれども念
佛のくすりにいえぬべし。名利の敵はうかふとも非人の身
を敵とせじ。上界天人の快樂も心にくからず。過去生々にく
たびかうけたる。國王大臣の果報もうらやましからず。流來世
世のいくたびか得たる。六趣の栖は疏みはてたるところな
り。九品の都ぞいまだみねば戀しけれ。戀しくば誰か參らざ
るべき。たま／＼人身をうけたるは梵天の絲に針をつけえた
る時なり。佛法の教木龜眼の語に信じ得る時なり。これだにも
ありがたしと思はば、十方佛土に又ふたつなき一乗妙法に生
れあひて、十惡をうとまず引接をたれたまふ。阿彌陀佛を念じ
奉るは、口のあればたゞとなへるたるか。耳のあればたゞ

如くにさわけども心空にしておもはず。先後相違のわかれば
耳にみちて、風の如くにひらけども聞つれなくしてあはれま
ず。老いたるは老いたればいよく餘命ををしみ、わかきは若
ければ實に將來を期す。その間山水遡かにながれて依に泉に
かへる。風煙命滅びて忽に冥途にまどひ、又貯持財はをしめど
もになはず。養居僮僕は哭すれども隨はず。終に天使にめされ
て地獄に落ちぬれば、冥路山さかし。嬰兒のあゆみにたゞよ
ひてひとり行く。黄泉水はやし單己のわたりに溺れて身をな
がす。かなしきかな。獄卒の呵責にかゝりて後悔魂をくだ
き、琰王の斷罪にをの、きて前非の舌をまく。惡行はぢをあら
はず鏡の中の影、自業のむかへは陳じがたし机上の文。嗚呼十
八猛鬼の忿怒といかれる聲、天雷のおちかゝるがごとし。六十
四眼の睚眦とにらめる、(熱鐵)のほとばしるに似たり。逃げむと
すれども逃ぐるにむなし。刃のふるところ、よけむとすれども
よけられず。焔にむせぶとき、心うきかな、猛火の薪となりて
萬億歲罪根山の林夏ひさし。寒嵐の水に沈みて無量劫業報池
の水春に別れたり。我等が前罪こゝに謝せずば、後悔またい
かゞせむ。心あらむ人たれか悲しまざらむや。
見ねばにやいたき心もなかるらむきくも身にたつ劍のは枝
但極樂西方にあらず、おのれが善心のますにあり。泥裂地の
そこにあらず、おのれが惡念の心地にあり。彌陀うとき佛にい
まさず、自らが本有の眞性にあり。獄卒しらぬ鬼にあらず、自
らが所感の業嵐にあり。雪つもりて山をなす。春の日にあたれ

に聞きるたるか。あなあさましのやすさや。無始生死の間に
ちりの結縁つもりて泰山となる。露の功德たまりて蒼海とた
たへて、善根林をなし、機感時をえて、今生を生死の終りとし、
當來を解脱のはじめとする人、この時に生れてこの縁にあひ
たり。故に慈父の長者は貧子ども爲に福徳の經を説きて、化
一切衆生とこしらへ、みな皆令入佛道とよるこび、悲母
の教主はよわき子共の爲に誓願を發して、此願不満足と舌
をのこひ、誓不成就正覺と口をはく。こゝに知りぬ、この南
浮は西方の出門なりといふことを。道心はたとひかたからず
とも、慚悔の箒をつかねて常に心を清めむ。然らば則さくら
花えだにこもり、春の候を迎へて開きなむとす。佛種胸にう
づもれ、終のときに臨みて宜きさすべし。抑これは韞中の
景趣にあらず、存外のあさき狂言なり。然して魚にあらずば
魚のこゝろをしるべからず。我にあらすば我が心ざしを悟る
べからず。駿蹄の千里にはするも、驚駭の咫尺に蹙くも、心
ざしのゆく程はいたる所たがはず。大鳳の雲にかけるを羨み
て、小鳥のまがきにあそぶばかりなり。此の品、家を出でし始
め、道に入りし時、身のおはれに催されて、人の嘲りをかへ
りみず、愚懷のためにこれを記す。他興のためにこれをか、
ず。あざける人、あはれむ人、順逆の二縁ともに一佛土に生
れて、一切衆生をすくはむとなり。
開くべきむねのはちすの類ひには春まつ花の枝に籠れる
變らじな濁るもすむも法の水一つ流れとくみてしりなば

南海流浪記

道範阿闍梨

仁治三年壬申七月十三日。本寺訴訟。經年而達。未院... 仁治三年壬申七月十三日。本寺訴訟。經年而達。未院... 仁治三年壬申七月十三日。本寺訴訟。經年而達。未院...

都をば霞のよそにかへり見ていづち行くらむ淀の川浪... 同日。神崎立。筒井至。路間五里。小屋福ス原グ...

瀟於諸島... 山抄作川... 浪字湯... 山抄作川... 浪字湯... 山抄作川... 浪字湯...

御家人之許へ被預... 十五日、在家五六丁許引キ上リテ、堂舎一字僧房少々有ル所... 移スエラ。此ノ所地形殊勝(ナリ)。望東孤山擊ニ夜月...

作ことやこ
 左之松山ノ上釋迦如來影現形像有之云々。凡此ノ善通寺ノ
 傳記謂悉
 地院實弘
 定月房是
 也左遷後
 不レ於淡
 州八木近
 邊有ニ成相
 寺即其舊
 跡而弘遺
 德靈驗多
 祭之號
 實弘祠又
 有稱ニ阿
 字石今
 祕藏寺
 高野山岩のむろ戸に澄む月のこの麓より出でけるかさは
 此御誕生所西方五岳山云ヒテ、五佛之高山ノアル其麓也。同
 日午刻。於ニ講堂有ニ法花講。大師御報恩云々。其ノ後有ニ童舞
 云々。其日及ニ晚景。不レ能ニ還向。即通ニ夜御影堂云々。翌日
 宇足津歸。寛元元年九月十五日、善通寺移住寺僧等、兼テ大
 師御誕生所傍、庵室構テマヘリ。同月廿一日大師至ニ御行道
 所。世號ニ世坂參詣。其路嶮峻嗟嘆。老骨難ニ攀躋、只人ニタス
 ケラレテ登リイタル。此ノ行道ノ路ニハ、于レ今草不レ生。清淨
 寂寞タリ。南北諸國皆見。眺望疲眼。此行道所五岳中岳。我
 拜師山西岫也。大師此處ニ觀念經行之間。中岳青巖綠松「已」。
 釋迦如來乘雲來臨。影現シタマフ。大師拜之給フ(之)故。云ニ

サテモ又、此居所ハ大師御誕生ノ座跡ナレバ、御建立ノ伽
 藍于レ今少々現存。就レ中大師御眞筆ノ御影常ニ拜見。是愁之中
 ノ喜ナル由申シテ、
 よに出でて自らとむる影よりぞ入りにし月の形をも見る
 以上兩首の返し、淡路(より)、
 高野山みねの白雲跡たえてむなしき空に雨ぞこほる、
 入る月も光りや共に並ぶらむみづからとめし影にうつりて
 寛元三年十月廿一日。出雲國配學園房阿闍梨法性。延自「サ
 リ、已」死門之命誓以ニ廿一日爲ニ閉眼之期。是大師引接炳然
 歟。同十二月十八日。自ニ本山ニ告ニ遣之。聞レ之。周章悶亂。
 悲泣哀慟。彼阿闍梨者自ニ少年ニ同學也。交如ニ之蘭。昵同ニ膠
 漆。加之。受ニ傳法灌頂於先師法眼和上位。(明任)既爲ニ祕密血
 脉一門。顯密因緣旁、以深。離別哀傷豈以淺乎。仍自ニ同十九日
 始ニ行阿彌陀護摩ニ五十ヶ日。泣資ニ彼并。其後自行ニ念誦等之
 時。爲ニ廻向(之)隨一。是爲ニ蒙ニ彼還來引接也。彼安藝無常。
 此出雲電光。哀傷一意。
 かたぐのものと雪は散りぬなりいつか我が身の末の白露
 同年十二月十六日。高野淨井院阿闍梨(尙祚。覺禪房。去十一
 月廿五日逝去之由。同朋來テ告。未レ聞ニ終其詞。嗚咽悶絕。彼
 阿闍梨者。花王法水稟源禪林教風傳レ心因レ之事。相教相互開ニ
 蒙霧。世間出世俱無ニ内外一矣。彼賢哲者愚質ニ二紀之法弟也。
 而冥途前後。泣而有餘。凡一山學徒滅ニ法燈。失ニ惠日。爲レ之

我拜師山也。此行道所數刻、大佛頂寶篋印等陀羅尼、滿眼所
 及海生山獸等養生アツ。如來影現(之)事貴目出覺テ、
 わしの山常にすむなる夜半の月來りて照す峯にぞありける
 十月之頃、南大門出デテ、南方名山等眺望。南大門(ノ)前路。
 弘三丈五尺。長八町。左右率都婆多立之。其門東脇古大松。
 寺僧云。昔西行此ノ松下七日七夜籠居、
 ひさに經てわが後の世をとへよ松跡忍ぶべき人もなき身ぞ
 とよめるによりて、此ノ松バ西行ガ松ト申スナリト申スナキ
 キテ、
 契り置きて西へ行きける跡にきてわれもをばりを松の下風
 寛元二年甲辰正月之頃、當寺ノ童舞裝束被レ調事、再會ノ日發
 願文事、同六月十五日(之)夜、多度郡田所入道號ニ堀池入 夢想
 道隨佛。
 二云、御誕生所ノ石壇南邊、大ナル蓮花生。莖ノ長六尺許、大
 衆合許、初含テ漸開、其色其香美甚妙也。諸人集會拜見之。
 隨佛作ニ奇特之想、問云、是何ナル蓮花、如是大妙。人答曰、是
 高野上人御房(之)蓮「花」云々。合掌瞻得シテ夢覺了。同八月
 之頃、淡路國人ノ許、修行者ノ便ニ文ツカハス狀、此離山三年
 ナリ、在國兩歲ナル事、本山戀慕、羈旅艱難、定同心歎。抑
 其淡路島、高野ノ大門チカムトミエ侍レバ、其ノ國ニテモ
 南山サハサハト見侍ラム。浦山敷コトトテ、
 君はなほみてや慰むはなれぬるたかの山の峯の白雲

如何「々々」筆與涙相和記之。
 高野山流れし水もかれぬめり草木はいかたねをきざらむ
 寶治二年申。四月之頃。依ニ高野ニ品親王仰奉レ摸ニ當寺御
 影。此事去年雖被レ下ニ御使。當國無ニ淨行佛師之由依ニ申上。
 今年被レ下ニ佛師成祐。鏡明奉レ摸ニ寫(之)處。所謂佛師四月五日
 出京。九日下着堀江津。同十一日當寺參詣。同十三日作ニ紙
 形。當日於ニ御影堂。佛師按ニ梵網十戒。其後始ニ紙形。自ニ同
 十四日圖繪。同十八日終ニ其功。所奉レ摸之御影。其御影形
 色豪蓋無レ違ニ本御影云々。同十八日依ニ寺僧評議。今此佛師
 改押ニ本御影之裏ニ加ニ御修理云々。已上此等間不レ出ニ御影
 堂。佛師下着之時。院主細
 者。當寺之古老相傳之。大師御入唐時。爲ニ御母儀自摸ニ置
 我影像。爲ニ吾面之孝ニ御ス云々。

此御影「堂」上洛(之)事
 承元三年隱岐院御時。立佐大臣殿當國司之間。依ニ院宣被
 レ奉レ迎。寺僧再三曰。上古不レ奉レ出ニ御影堂之由。雖レ令レ言
 上子細ニ數度依レ被レ仰下。寺僧等頂ニ戴之。上洛御拜見之後。
 被レ奉レ摸レ之。繪師御下向之時。生野六丁免田寄進云々。嘉祿
 元年九條禪定殿下攝録。御時奉レ拜レ之。又摸ニ寫(之)繪師者唐
 人。御下向之時。兔田三丁寄進云々。
 同年六月二日。御上洛。同十五日高野參着。即御拜見御歡

サテモ又、此居所ハ大師御誕生ノ座跡ナレバ、御建立ノ伽
 藍于レ今少々現存。就レ中大師御眞筆ノ御影常ニ拜見。是愁之中
 ノ喜ナル由申シテ、
 よに出でて自らとむる影よりぞ入りにし月の形をも見る
 以上兩首の返し、淡路(より)、
 高野山みねの白雲跡たえてむなしき空に雨ぞこほる、
 入る月も光りや共に並ぶらむみづからとめし影にうつりて
 寛元三年十月廿一日。出雲國配學園房阿闍梨法性。延自「サ
 リ、已」死門之命誓以ニ廿一日爲ニ閉眼之期。是大師引接炳然
 歟。同十二月十八日。自ニ本山ニ告ニ遣之。聞レ之。周章悶亂。
 悲泣哀慟。彼阿闍梨者自ニ少年ニ同學也。交如ニ之蘭。昵同ニ膠
 漆。加之。受ニ傳法灌頂於先師法眼和上位。(明任)既爲ニ祕密血
 脉一門。顯密因緣旁、以深。離別哀傷豈以淺乎。仍自ニ同十九日
 始ニ行阿彌陀護摩ニ五十ヶ日。泣資ニ彼并。其後自行ニ念誦等之
 時。爲ニ廻向(之)隨一。是爲ニ蒙ニ彼還來引接也。彼安藝無常。
 此出雲電光。哀傷一意。
 かたぐのものと雪は散りぬなりいつか我が身の末の白露
 同年十二月十六日。高野淨井院阿闍梨(尙祚。覺禪房。去十一
 月廿五日逝去之由。同朋來テ告。未レ聞ニ終其詞。嗚咽悶絕。彼
 阿闍梨者。花王法水稟源禪林教風傳レ心因レ之事。相教相互開ニ
 蒙霧。世間出世俱無ニ内外一矣。彼賢哲者愚質ニ二紀之法弟也。
 而冥途前後。泣而有餘。凡一山學徒滅ニ法燈。失ニ惠日。爲レ之

喜云々。同十八日御報書云々。御影無爲奉渡事返々悦入候。宿善開發數及三落涙。心中可被察之云々。

同年十月廿七日、伊與國寒川地頭小河六郎祐長。建立一堂。三尊

供養導師勤之。彼路頭比女八幡云所。讚岐内。其所大楠木本半出阿彌陀佛造、堂ヲ造り覆へり。其木末大榮エテカレヌ。

楠の木も本の悟りを開きつ、佛の身ともなりにけるかな

同廿八日、舞樂。同廿九日、還向ノ次、琴曳云宮マウデ、

讚岐。此宮昔八幡大井筑紫ヨリ此處オチツキテ、京ノ八幡ヘ

トワタラセ給。其御舟ノ船御琴宮内ツクリコメタリ。サテ琴曳云、山ガラ京ヤハタノ山形也。三面海也。殊勝地形也。

松風に昔のしらべ通ひ来て今にあとあることびきの山

同年十一月十七日、尾背寺參詣。此寺大師善通寺建立之時、山云々。本堂三間四面。本佛御作樂師。三間御影堂。御影并

七祖又天台大師影有之。同十八日還向。依二路次參詣稱名院。眇々松林中有九品庵室。本堂五間。彼院主念々房。持佛

堂。松間池上地形殊勝也。彼院主他行之旨。追送之。

九つの草の庵と見しほどにやがて蓮の臺なりけり

九つの草の庵もとめおきし心いざなへうみのにしまで

念々房返(し)

むすびおく草の庵のかひあれば今は蓮の臺とぞきく

手斧始。同二月二日棟上。大公沙(阿彌陀佛。同年五月一日

申。寅時有鎮壇。阿闍梨道範。以我功德力。大師加持力。及以法界力。願我成吉祥。今此一伽藍。奉慈氏下生。興隆諸佛法。利益諸衆生。

大勸進阿闍梨道範 建長元年五月廿一日。此諸國流人赦免之宣下有之。同六月八日。院宣。并六波羅下知狀。及長者御房御書狀(等)來着。仍

即可歸洛之處。自同十二日。本病更發。不能出行。經四十餘日。付一小減。臨歸山之期。七年之間。世出世之事。無二内外。申談之人之許へ申遣云。

な、とせのたえぬ報いの末の露おなじ蓮の上に遊ばむ

彼返報云、七ヶ年之祇候。一生中之大幸也。唯、頼者世々欲蒙御引接云々。

末の露思定めぬ身にしあれどとふ言の葉にか、らざらめや

追申。御歸山之後。毎年一度可令登山之志深し。

頼めおきし法のしるべの灯の重ねて照す峯を尋ねむ

同七月廿二三日之頃。痼病得小減(後)。欲歸山之處。當國

白峯寺院主靜圓備後阿闍梨。當年宿願入壇所望事。「近々」被歎申之旨、病後氣力雖不可堪。作業。此寺國中清淨蘭若。崇徳院

法皇御靈廟也。此阿闍梨年記六十六。練行慈仁之器也。仍大師御門流於此寺。永代流傳(之)事。尤可爲興法萬人(之)方便。

新校羣書類從 卷第三百三十 南海流浪記

湯山鈔云、又、道範配所へ、高野より、名歌をよみ送りし一冊かし給。一返披見。詩もあり、和歌もあり、皆、八句物な

私云。建治三年二月十一日書寫了。

右南海流浪記以正智院道範自筆本書寫按合畢

此事寫之外種々事等多之。右筆不違。仍畧之。殊以爲肝

要之所許書脫。于時正嘉第二曆仲秋上旬之候。聊爲後摸

之。執筆了巧。披見候。可被唱念念佛云々。

湯山鈔云、又、道範配所へ、高野より、名歌をよみ送りし一冊かし給。一返披見。詩もあり、和歌もあり、皆、八句物な

私云。建治三年二月十一日書寫了。

右南海流浪記以正智院道範自筆本書寫按合畢

此事寫之外種々事等多之。右筆不違。仍畧之。殊以爲肝

要之所許書脫。于時正嘉第二曆仲秋上旬之候。聊爲後摸

之。執筆了巧。披見候。可被唱念念佛云々。

湯山鈔云、又、道範配所へ、高野より、名歌をよみ送りし一冊かし給。一返披見。詩もあり、和歌もあり、皆、八句物な

私云。建治三年二月十一日書寫了。

右南海流浪記以正智院道範自筆本書寫按合畢

此事寫之外種々事等多之。右筆不違。仍畧之。殊以爲肝

要之所許書脫。于時正嘉第二曆仲秋上旬之候。聊爲後摸

之。執筆了巧。披見候。可被唱念念佛云々。

湯山鈔云、又、道範配所へ、高野より、名歌をよみ送りし一冊かし給。一返披見。詩もあり、和歌もあり、皆、八句物な

私云。建治三年二月十一日書寫了。

右南海流浪記以正智院道範自筆本書寫按合畢

此事寫之外種々事等多之。右筆不違。仍畧之。殊以爲肝

要之所許書脫。于時正嘉第二曆仲秋上旬之候。聊爲後摸

之。執筆了巧。披見候。可被唱念念佛云々。

湯山鈔云、又、道範配所へ、高野より、名歌をよみ送りし一冊かし給。一返披見。詩もあり、和歌もあり、皆、八句物な

りし。殊御覽歌おほし。事繁まゝうつすにおよばず。如レ此おほき歌をたゞ三首にて返歌あり。其歌云。

ながれずば人も命とみたらしやさてぞより來る瀬々のうたかた

かくばかり情ありけり山のはに立ちかへりてやよそのしら雲

うれしさをいかゞこたへむわび人の袖とふ月のあり明の影

又、此歌序長々書給。其中、但佛在世昔思へば、瑠璃太子、釋種ヲホロボイシ時、萬德莊嚴ノ御膚ニモ、同業一族ノ風驗シク、阿祇王ノ、如來ヲイマシメシ日ハ、上味適悦ノ御唇ニモ、馬麥塗受ノ霞タナビク。捉婆達多ガ、佛弟子ヲワカレシモ此時ナルベシ。大聖イマダ免レ給ハズ、凡徒ナラサクベキニヤ。

流浪記者。據_テ吾所藏兩本與_テ雲石堂按本湯山抄拔萃并群書類従三百卅所刻入之卷。差_テ對_テ照之。其後批共有_二正嘉建治年日_一。是爲_二同本_一也。然而彼此校讎互致_二寫誤脫落_一不_二齊_一。則姑從_二其善者_一。猶有_二疎舛_一乎。後之覽者知而訂焉。

嘉永四年辛亥仲夏 南山正智介峰散人道猷

（此の間、先徳道範眞蹟長帳あり、略す。）
師。名道範。字覺本。泉州船尾人。未詳俗姓。年甫十四。登山授明任剃染。氣貌豪邁。聰穎神悟。學涉内外。夙發精通。建仁初主寶光院。嘗從覺海研察宗義。就靜通證奧旨。又歷請守覺賢賢傳諸眞祕。建保四年稟任之灌頂于正智院。五年七月 後鳥羽

上皇聞其德詔爲御驗者蒙恩賜任權少僧都。法性寺殿下亦延師屢問法。文曆中移住正智大乘法柄。仁治四年坐末院事謫讚州。翌年寓善通寺。於是德化遍布南人靡然嚮風。建長元年遭赦歸。山徒渴法再成_レ林。四年夏患疽遂五月二十二日恬然而化。壽七十四。葬于無量壽院塔側。平生鈔記凡二百七十餘寫。於八傑之中其著述夥師爲_二寂矣_一。當初若微大德我山教相殆墜地歟。師自刻_レ像舍_一寶光一每忌日設講。一日問者妄吐臆語稱_二範師釋_一。像忽出聲喝曰。吾無此語。合座駭然。又正智有眞影。小童恒供香。然火動中熄。乃童懇之影。影言曰。予盛香宜應太則焗焉。山中于今爲口碑。欽其遺靈受法徒數多矣。

道範大德六百年忌拈香偈

遺烈尤優八傑中。星霜六百感無窮。若能眞影出聲得。呵我三千嬌弊風。

嘉永辛亥五年

沙門 道猷 欽言

右南海流浪記高野山正智院道猷の校訂本（嘉永四年仲夏鏤刻 禿氏祐祥氏所藏）を以て校勘す（昭和三年五月）

紀行部五

東關紀行

前河内守親行

古₁今₂あ₃ふ₄坂₅の₆下₇ 風₈の₉さ₁₀む₁₁の₁₂ け₁₃れ₁₄ど₁₅ゆ₁₆の₁₇ ね₁₈ば₁₉わ₂₀び₂₁の₂₂ づ₂₃ぞ₂₄ぬ₂₅び₂₆の₂₇ 古₁今₂あ₃ふ₄坂₅の₆下₇ 風₈の₉さ₁₀む₁₁の₁₂ け₁₃れ₁₄ど₁₅ゆ₁₆の₁₇ ね₁₈ば₁₉わ₂₀び₂₁の₂₂ づ₂₃ぞ₂₄ぬ₂₅び₂₆の₂₇ 圓₂₈融₂₉院₃₀女₃₁ 御₃₂一₃₃條₃₄院₃₅女₃₆ 母₃₇后₃₈法₃₉興₄₀院₄₁女₄₂ 院₄₃殿₄₄二₄₅女₄₆ 圓₂₈融₂₉院₃₀女₃₁ 御₃₂一₃₃條₃₄院₃₅女₃₆ 母₃₇后₃₈法₃₉興₄₀院₄₁女₄₂ 院₄₃殿₄₄二₄₅女₄₆ 新校羣書類従 卷第三百三十一 東關紀行

檢 校 保 己 一 集

山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽なる砌にいたるごととに、目にたつ所々、心とまるふし_レを_レかき置きて、忘れず忍ぶ人もあらば自ら後のかたみにもなれとてなり。東山の邊なる住家を出でて、相坂の關うち過ぐる程に、駒引きわたる望月の頃も漸く近き空なれば、秋ぎり立ちわたりて、ふかき夜の月かけほのかなり。木綿付鳥かすかにおとづれて、遊子猶殘月に行きけむ幽谷の有様おもひ_レで_レらる。むかし蟬丸といひける世捨人、この關の邊にわらやの床を結びて、常は琵琶をひきて心をすまし、大和歌を詠じておもひを述べけり。嵐のかぜはけしきをわびつゝぞすぐしける。ある人のいふ、蟬丸は延喜第四の宮にておはしける故に、この關のあたりを四宮河原と名付けたりといへり。

古へのわらやの床のあたりまで心をとむる相坂の關

東三條院石山に詣でて、還御ありけるに、關の清水を過ぎさせ給ふとて、よませ給ひける御歌、あまたたびゆきあふ坂の關水にけふをかぎりの影ぞかなしきときこゆるこそ、いかなりける御心のうちにかと、哀れに心ほそけれ。關山を過ぎぬれ

煙風にさそはれうちかをり、あかの花も露鮮かなり。願書とおほしき物ばかり帳の紐に結びつけたれば、弘誓のふかき事うみの如しといへるも頼しくおほえて、

頼しな入江に立てるみをつくし深き験のあると聞くにも天龍と名付けたるわたりあり。川ふかく、流れ激しくみゆ。

秋の水みなぎり来て、舟のさること速かなれば、往還の旅人たやすくむかひの岸につき難し。この河みづまされる時、舟などもおのづから覆りて底の水屑となるたぐひ多かりと聞くこそ彼の巫峡の水の流れおもひよせられて、いと危き心ちすれ。しかはあれども、人の心にくらぶれば、靜かなる流ぞかしくおもふにもたとふべき方なきは世にふる道のけはしき習ひなり。

この河のはやき流れも世の中の人の心のたぐひとは見えず。遠江の國府いまの浦につきぬ。こゝに宿かりて一日二日留りたる程、あまの小舟に撐しつゝ、浦のありさま見めぐれば、しほ海湖の間に洲崎遠く隔たりて、南には極浦の波袖を濕し、北には長松の嵐心をいたましむ。名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる。昨日のめうつりなからずば、これも心留らずしもあらざらましなどはおほえて、

浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残をぞきく

ことのみ、と聞ゆる社おはします。その御前をすぐとて、聊かおもひつゞけられし。

ゆふだすきかけてぞ頼む今思ふことのみ、なる神の験を

をかひが根をさしやにけよれなくよせらるる山

ならねども、しばしやすらはる。

日數ふる旅のあはれは大井河渡らぬ水も深き色かな

まへ島の宿をたちて、岡部の今宿をうち過ぐる程、かた山の松のかけに立ちよりて、かれいひなど取り出したるに、嵐冷じく梢にひゞきわたりて、夏のまゝなる旅ごももうすき袂もさむくおほゆ。

これぞこの頼む木のもと岡べなる松の嵐に心してふけ

宇津の山をこゆれば、つたかへではしけりて昔の跡たえず。かの業平が修行者にとつてしけむ程も、いづくなるらむと見行くほどに、道のほとりに札をたてたるをみれば、無縁の世すて人あるよしをかけり。みちより近きあたりなれば、少し打ち入りてみるに、僅なる草の庵のうちに一人の僧あり。畫像の阿彌陀佛をかけ奉りて、淨土の法もんなどをかけり。その外にさらにみゆる物なし。發心のはじめを尋ねきけば、わが身はもとこの國のものなり。さして思ひはなれたる道心も侍らぬうへ、その身堪へたるかたなければ、理を觀するに心くらく、佛を念するに性ものうし。難行苦行の二の道ともにかれたりといへども、山の中に眠れるは、里にありて勤めたるにまさるよし、ある人のをしへにつきて、この山に庵を結びつゝ、數多の年月を送るよしをこたふ。むかし叔齊が首陽の雲に入りて猶三春の蕨をとり、許由が潁水の月にすみし。おのづから一瓢の器をかけたるといへり。この庵のあたりには殊更煙たてたる

小夜の中山は、古今集の歌に、よこほりふせるとよまれたれば、名高き名所なりとは聞きおきたれども、みるにいよ／＼心細し。北は深山にて松杉嵐烈しく、南は野山にて秋の花露しけし。谷より嶺にうつるみち、雲に分け入る心地して、鹿の音涙を催し、蟲のうらみあはれふかし。

踏みかよふ峰の梯とだえて雲にあととふ佐夜の中山

この山をもこえつゝ、猶過ぎ行くほどに、菊川といふ所あり。去りにし承久三年の秋の頃、中御門中納言宗行と聞えし人の、罪ありて東へくだられけるに、この宿にとまりけるが、昔は南陽縣の菊水下流を汲んで齡をのぶ、今は東海道に菊川西岸に宿して命をうしなふと、ある家の柱にかゝれたりけりと聞きおきたれば、いとあはれにてその家を探ぬるに、火のためにやけて、かの言の葉ものこらずと申すものあり。今は限りとのこし置きけむかたみさへ、あとなくなりけるこそ、はかなき世のならひ、いとあはれにかなしけれ。

かきつくる形見も今はなかりけり跡は千年と誰かいひけむ菊川をわたりて幾程もなく一村の里あり。こはまどぞいふなる。この里の東のはてに、すこしうちのほるやうなる奥より大井川を見渡したれば、遙々とひろき河原の中に、一すぢならず流れわかれたる川瀬ども、とかく入れ違ひたる様にて、すがたしといふ物をしたるにいたり。なか／＼渡りてみむより、よそめ面白く覺ゆれば、かの紅葉亂れて流れけむ龍田川

よすがもみえず。柴折りくぶる慰めまでも思ひたえたるさまなり。身を孤山の嵐の底にやどして、心を淨域の雲の外にすませる、いはねどしるく見えて、なか／＼あはれに心にくし。

世を厭ふ心の奥や濁らましかゝる山邊の住居ならでは

この庵のあたり幾程遠からず。峠といふ所にいたりて、おほきなる卒都婆の年經にけると見ゆるに、歌どもあまた書き付けたる中に、東路はこゝをせにせむ宇津の山哀れもふかし。葛のした道とよめる、心とまりておほゆれば、そのかたはらにかきつけし。

我もまたこゝをせにせむ宇津の山分けて色ある葛のした露猶うちすぐるほどに、ある木蔭に石をたかくつみあけて、めにたつさまなる塚あり。人にたづねれば、梶原が墓となむこたふ。道のかたはらの土となりけりと見ゆるにも、顯基中納言の口ずさみ給へりけむ、年々に春の草のみ生ひたりといへる詩思ひいでられて、これもまたふるき塚となりなば名だにも残りごとあはれなり。羊太傳が跡にはあらねども、心ある旅人はこゝにも涙をやおとすらむ。かの梶原は將軍二代の恩に橋り、武勇三略の名を得たり。かたはらに人なくぞみえける。いかなることにかありけむ。かたへの憤りふかくして、忽に身を滅すべきになりければ、ひとまどものびむと思ひけむ。都のかたへはせのほりけるほどに、駿河國きがはといふ所にてうたれにけりととき、しが、さはこゝにてありけるよと哀れ

に思ひあはせらる。讚岐の法皇配所へおもむかせ給ひて、かの志戸といふ處にて隠れさせ御座しける御跡を、西行修行のついでにみまらせて、よしや君昔の玉の床とてかゝらむのちはなにかはせむとよめりけるなど承るに、ましてしもさまのものは申すにおよばねども、さしあたりてみるには、いと哀れにおほゆ。

哀れにも空にうかれし玉銚の道のべにしも名を留めけり
清見が關も過ぎうくて、しばしやすらへば、沖の石むら／＼汐干にあらはれて波に咽び、磯の鹽屋とこころ／＼風に誘はれて煙たなびけり。東路のおもひ出ともなりぬべきわたりなり。むかし朱雀天皇の御時、將門といふもの東にて謀反おこしたりけり。これをたひらけむために、民部卿忠文を遣しける。この關にいたりてとまりけるが、清原滋藤といふ者、民部卿にともなひて軍監といふつかさにて行きけるが、漁舟の火のかけは寒くして浪を焼き、驛路の鈴の聲はよる山をすぐといふ唐の歌を詠じければ、民部卿涙を流しけるときくにもあはれなり。

清見湯關とはしらで行く人も心ばかりは留めおくらむ
この關遠からぬ程に興津といふ浦あり。海に向ひたる家に宿りて待れば、いそげによする波の音も、身のうへにかゝるやうに覺えて、夜もすがらいねられず。

清見が磯べに近きたび枕かけぬ浪にも袖はぬれけり
こよひは更にまどろむ間だになかりつる。草の枕のまろぶ

西東へはる／＼とながき沼あり。布をひけるが如し。山のみどり影を浸して、空も水もひとつなり。蘆かり小舟とこころ／＼に撐して、むれたる鳥多くさわぎたり。南は海のおもて遠く見渡されて、雲の波煙の浪いとふかきながめなり。すべて孤島の眼に遮るなし。わづかに遠帆の空に連れるを望む。こなたかなたの眺望いづれもとろ／＼に心細し。原には鹽屋の煙たえ／＼立ちわたりて、浦かぜ松の梢にむせぶ。この原昔は海の上にかびて、蓬萊の三の島のごとくにありけるによりて、浮島となむ名付けたりと聞くにも、自ら神仙のすみかにもやあらむ。いと奥ゆかしくみゆ。

影ひたす沼の入江にふじのねの煙も雲も浮島が原
やがてこの原につぎて、千本の松原といふ所あり。海の渚遠からず。松はるかに生ひわたりて、みどりの蔭きはもなし。沖には舟ども行きちがひて、木のはのうけるやうにみゆ。かの千株の松下双峯寺、一葉の舟中萬里身とつくれるに、かれもこれとはづれず。眺望いづくにもまさりたり。

見渡せば千本の松の末遠みどりにつゞく波の上かな
車返しといふ里あり。或家に宿りたれば、網つりなどいとなむ賤しきものすみかや、夜のやどりありかことにして、床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛戎人の夜半の旅ねも、かくやありけむとおほゆ。
これぞこのつりする海士の苦庇いとふありかや袖に残らむ

しなれば、寢覺ともなき曉の空に出でぬ。くきが崎といふなるあら磯の岩のはさまを行き過ぐるほどに、沖津風烈しきにうちよする波もひまなれば、いそぐ汐干のつたひ道、かひなき心ちして、ほすまもなき袖の雫までは、かけても思はざりし旅の空ぞかしなど、打ちながめられつゝ、いと心ほそし。

沖津風けさあら磯の岩つたひ浪わけ衣ぬれ／＼ぞ行く
神原といふ宿のまへをうちとほる程に、おくれたる者まちつけむとて、ある家に立ち入りたるに、障子に物をかきたるをみれば、旅衣すそのの庵のさむしろにつもるもしるきふじのしら雪といふ歌なり。心ありける旅人のしわざにやあるらむ。昔香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり。冬の朝簾をあけて峯の雪を望みけり。今富士の山のあたりに宿をかる行客あり。さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる。かれもこれもともに心すみておほゆ。

冴ゆる夜に誰こ、にしもふしわびて高ねの雪を思ひやりけむ
田子の浦にうち出でてふじの高ねを見れば、時わかぬ雪なれども、なべていまだ白妙にはあらず。青うして天によれるすがた、繪の山よりもこよなうみゆ。貞觀十七年冬の頃、白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞ふと、都良香が富士の山の記に書きたり。いかなるゆゑにかと、おほつかなし。

ふじのねの風に漂ふ白雲を天津乙女の袖かとぞみる
浮島が原はいづくよりもまさりてみゆ。北はふじの麓にて、

伊豆の國府にいたりぬれば、三島の社のみしめうちをがみ奉るに、松の嵐木ぐらくおとづれて、庭の氣色も神さびわたれり。この社は伊豫の國三島大明神をうつし奉ると聞くにも、能因入道伊豫守實綱が命によりて歌よみて奉りけるに、炎旱の天よりあめにはかにふりて、枯れたる稲葉もたちまちに緑にかへりける。あら人神の御なごりなれば、ゆふだすきかけまくもかしこくおほゆ。

せきかけし苗代水の流れきて又天くだる神ぞこの神
かぎりある道なれば、この砌をも立ち出でて猶ゆきすぐるほどに、宮根の山にもつきにけり。岩がね高く重なりて、駒もなつむばかりなり。山のなかに至りて、湖廣くたへり。箱根の湖となづく。又蘆の海といふもあり。権現垂跡のものとる氣高く尊し。朱樓紫殿の雲に重れる粧ひ、唐家驪山宮かと驚かれ、巖室石龕の波にのぞめる影、錢塘の水心寺ともいひつべし。うれしき便りなれば、うき身の行方しるべせさせ給へなどのりて、法施奉るついでに、

今よりは思ひ亂れ蘆の海の深き恵みを神にまかせて
この山もこえおりて、湯本といふ所にとまりたれば、深山おろし烈しくうちしぐれて、谷川漲りまさり、岩瀬の波高くむせぶ。暢臥房のよるのき、にもすぎたり。かの源氏物がたりの歌に、涙もよほす瀧のおとかなといへる、思ひよられてあはれなり。

わの御法は
云沈ひ蘭
にほひ蘭
薫のおも
か庭上
ろみち
ち十二
あ四物
に云々
とありき
とありか
とありか
はよる
もちぎ
けりし
ずあり
なつり
をらひ
なむか
金葉雜下
10
天河な
せろ水に
せきまく
せあみ
かみす
ばかり
かみす

うたゝねの記

阿 佛

もの思ふことの慰むにはあらねども、ねぬ夜の友とならひにける月の光り待ち出でぬれば、例のつまどおしあけてたゞひとりみ出したる、あれたる庭の秋露、かこ顔なる蟲のねも物ごとくに心をいたましむるつまとなりければ、心に亂れおつる泪をおさへて、とばかりこし方ゆくさきを思ひつゞくるに、さもあさましくはかなかりける契りの程を、などかくしも思ひいれけむと、わが心のみぞかへすんぐらめしかりける。ゆめうつゝともわき難かりし宵のまより、關守のうちぬる程をだに、いたくもたどらずなりにしや。打ちしきる夢のかよひ路は、一夜ばかりのとだえもあるまじきやうに習ひにけるを、さるは月草のあだなる色をかねて知らぬにしもあらざりしかど、いかにうつりいかに染めける心にか、さも打ちつけにあやくなりし心迷ひには、ふし柴のとだへに思ひ知らざりける。やう／＼色つきぬ。秋の風のうきみにしらるゝ心ぞ、うたてく悲しきものなりけるを、おのづから頼むる宵はありしにもあらず。打ち過ぐる鐘の響をつく／＼と聞きふしたるも、いけるこゝちだにせねば、けに今さらに鳥はものかはとぞ思ひしられける。さすがにたえぬ夢のこゝちは、ありしにかはるけぢめも見えぬものから、とにかくにさはり勝なるあしわ

け船にて、神無月にもなりぬ。降りみふらずみ定めなき頃の空のけしきは、いとど袖のいとまなき心ちして、おきふしながめわぶれど、絶えてほどふる覺束なさの、ならはぬ日數の隔るも、今はかくにこそと思ひなりぬるよの心細さぞ、なににたとへてもあかず悲しかりける。いとせめてあくがるゝ心催すにや、にはかにうづまきに詣でむと思ひ立ちぬるも、かつうはいとあやしく、佛のみ心のうちはずかしけれど、二葉より参り馴れにしかば、すぐれて頼しき心ちして、心づからのなやましさも愁へ聞えむとにやあらむ。しば／＼御前に、ともなる人々、時雨しぬべし。はやかへり給へなどいへば、心にもあらず急ぎ出づるに、ほうこんごう院の紅葉この頃ぞさかりと見えて、いと面白ければ、すぎがてにおりぬ。かうらんのつまの岩のうへにおりて、山の方を見れば、木々の紅葉色色に見えて、松にかゝれるつたの心の色も、ほかにもことなる心地していと見所多かるに、うきふるさとはいと忘れぬるにや。とみにもたゞれず。折りしも風さへ吹きて、物さわがしくなりければ、みさすやうにてたつ程、人しれず契りしなかのことの葉を嵐ふけとは思はざりしをと思ひつゞくるにも、すべて思ひさますることなき心のうちならむかし。歸りてもいとくるしければ、うちやすみたる程御ふみとて取り入れたるも、むねうちさわざりてひきひろけたれば、たゞ今の空の哀れに日ごろの怠りを取りそへて、細やか

に書きなされたる墨つき筆のながれも、いとみ所あれど、例の中々かきみだす心まよひに、言の葉のつきもみえずなりぬれば、御かへりもいかゞ聞えけむ。名残もいと心ほほそくて、この「御」文をつく／＼と見るにも、日ごろのつらさはみな忘れぬるも、人わろき心の程やとまたうちおかれて、これやさはとふもつらさの數々に涙をそふる水莖の跡

例の人しれずなみちちかきそらにだに、たど／＼しきゆふやみに契りたがへぬしるべばかりにて盡きせず。夢のこゝちするにも、いできこえむ方なければ、たゞいひししぬ泪のみむせかへりたる。曉にもなりぬ。枕に近き鐘の音も唯今の命を限る心ちして、我にも非ず起き別れにし袖の露、いとゞかこちがましくて、君やこしとも思ひわかれぬなみちち例のたのもし人にてすべりいでるも、かへす／＼夢のこゝちなむしける。彼處にはむめきたの方(月)ころわつらひ給ひけるが、つひにきえはて給ひにければ、その程のまぎれにや、またほどふるもことわりながら、いひしにたがふつらさはしも、ありしにまさる心地するは、いかにおほし惑ふらむと、とりわきたりける御思ひの名残も、いと苦しくおしはかり聞ゆれど、あはれしる心の程、中々聞えむ方なくて、日數ふるいぶせさをかれ／＼ぞ驚かし給ひつる難面。よの哀れさも、みづから聞え「あはせ」たくなどあれば、例のうちるる程

の鐘の響に人しれずたのみをかくるも、おもへば淺ましくよの常ならず。あだなる身のゆくゑ、つひにいかになりはてむとすらむと、心ほそく思ひつゞくるにも、ありしなからの心ならましかば、うきたる身のとがもかうまでは思ひしらすぞ過ぎ「な」ましなど思ひつゞくるに、今さら身のうさもやる方なく悲しければ、今宵はつれなくてやみなましなど思ひ亂るゝに、例のまつほど過ぎぬるはいかなるにかと、流石めもあはず、みじろぎふしたるに、かのちひさき童にや、忍びやかにうちたゞを聞きつけたるには、かしこく思ひしつゝむる心もいかなりぬるにか、やをらすべり出でるも、我ながらうとましきに、月もいみじくあかければ、いとほしたなき心地して、すがいの打ち残りたるひまにたち隠るゝも、かのひたちのみやの御すまひ思ひ出でらるゝに、いるかたしたふ人の御さまぞ、ことたがひておはしけれど、立ちよる人の御面かけはしも、里わかぬ光りにもならびぬべき心地するは、あながち「に」ひ出でられて、さすがに覺し出づるをりもやと、心をやりて思ひつゞくるに、はつかしきことも多かり。しはずにもなりぬ。雪かきくらしして風もいとすさまじき日、いとくおろしまはして、人三人ばかりして物語などするに、夜もいたく更けぬとて、ひとはみな寝ぬれど、露まどろまれぬに、やをら起き出でてみるに、宵には雲がくれた「りつ」る月の、浮雲まがはず

なりながら、山のは近き光りのほのかにみゆるは七日の月なりけり。みし夜のかぎりも今宵ぞかと思ひいづるに、たゞそのをりの心地して、定かにもおほえずなりぬる御面かけさへ、さし向ひたる心ちするに、まつかきくらす涙に月の影もみえずとて、佛などの見え給ひつるにやと思ふに、はづかしくもたのもしくもなりぬ。さるは月日にそへてたへ忍ぶべき心ちもせず。心盡しなる事のみ増れば、よしや思へばやすきと、こゝとわりに思ひ立ちぬる心のつきぬるぞ、ありし夢のしるしにやと嬉しかりける。今はと物を思ひなりにしもといへば、いかに悲しき事おほかりける。春ののどやかなるに、何となくつもりにける手習のほんごなどやりかへすついでに、かの「御」文ども「を」とりいでてみれば、梅がえの色つきをめし初めより、冬草(の)かれはつるまで、をりくゝのあはれ忍びがたきふしんくゝを、打ちとけて聞えかはしける事の積りける程も、今はとみるは「あはれ」淺からぬなかに、いつぞやつねよりも目とゞまりぬらむかしと覺ゆる程に、こなたのあるじ、今宵はいとさびしく、物おそろしき心ちするに、こゝにふし給へとてわがたへも歸らずなりぬ。あなむつかしと覺ゆれど、せめて心の鬼もおそろしければ、かへりなむともいはでふしぬ。人はみな何心なくねいりぬる程に、やをらすべり出づれば、とももし火の残りて心細きひかりなるに、人や驚かむと、ゆゝしく

麓といふ處なれば、ひとめしけからず、木の葉のかけにつきて、夢のやうに見置きし山ぢをたゞひとり行くこゝち、いといたく危く(もの)怖ろしかりける。山びとの目にも咎めぬまゝに、あやしくものぐるほしき姿したるも、すべて現の事とも覺えず。さてもかの處、にし山の麓なれば、いと遙かなるに、夜中より降りいでつる雨の、明くるまゝにしほくとぬる、程になりぬ。故里よりさがのわたりまでは少しもへだ、らす見渡さるゝほどの道なれば、さはりなくゆきつきぬ。夜もやうやうほのくゝとする程になりぬれば、みちゆき人も、こゝもとはいとあやしと咎むる人もあれば、物むつかしくおそろしき事、このよにはいつかは覺えむ。たゞ一すぢになきにしはてつる身なれば、あしのゆくに任せて、はや山ふかく入りなむと、打ちもやすまぬまゝに、苦しうたへがたき事しぬばかりなり。いるあらしの山の麓にちかづくほど、雨ゆゝしく降りまさりて、むかへの山をみれば、雲の幾重ともなくをりかさなりて、ゆくさきもみえず。からうじて法輪の前(は)過ぎぬれば、はては山路にまよひぬるぞすきかたなきや。をしからぬ命もたゞ今ぞ心ほそく悲しき。いとゞかきくらす泪の雨さへふりそへて、こしかたゆくさきも見えず。思ふにもいふにもたらず。今とぢめはてつる命なれば、身のぬれとほりたる事伊勢の白水郎にもこえたり。いたくまはりはてにければ、松風のあらゝしきをたのもし人にて、これも都のか

怖ろしけれど、たゞ障子ひとへを隔てたる居どころなれば、ひるより用意しつるはさみはこのふたなどの、程なく手にさはるもいと嬉しくて、かみを引き分くるほどぞさすが(そ)おそろしかりける。そぎおとしぬれば、このふたにうち入れて、かき置きつる文「な」どもとり具しておかむとする程、いでつる障子口より火の光りのなほほのかに見ゆるに、文かきつくる硯のふたもせでありける「が」傍に見ゆるをひきよせて、そぎおとしたる髪をおしつゝ、みたるみちの國紙のかたはらに、たゞうち思ふ事を書きつゝ(くれ)れど、外なるともしびの光りなれば、筆のたちどもみえず。歎きつゝ、身を早きせのぞことだにしらす迷はむ跡ぞ悲しき身をもなけてむと思ひけるにや。たゞ今も出でぬべき心地して、やをらはしをあげたれば、つごもりごろの月なき空に、あま雲さへたちかさなりて、いとものおそろしう暗きに、夜もまだふかきに、とのる人さへ折りしもうちこはづくろふもむつかしと聞きたる(事)に、かくても人にやみつけれむとそらおそろしければ、もとのやうに入りてふしぬれど、傍なる人うちみじろぎだにせず。さきくゝも、とのる人の夜ぶかくかどをあげて出づるならひなりければ、その程を人しれずまつに、今宵しもとくあけて出でぬるおとすれば、さるは心ざす道もはかゝしくも覺えず、こゝも都にはあらず、北山の

たよりとおほえて、簑笠などきてさへつりくる女あり。こわらはのおなじ聲なるともの語りするなり。これや桂の里のひとならむとみゆるに、たゞあゆみに歩みよりて、是は何人ぞあな心う、御まへは人のてをにけ出で給ふか。又くちろむなどをし給ひたりけるにか。何故か、るおほ雨に降られて、この山中へ(は)出で給ひぬるぞ。いづくよりいづくをさしておはするぞ、あやしくゝとさへづる。なにといふ心にか、舌をたびくゝならして、あないとほしくゝとくり返し、いふぞ嬉しかりける。しきりに身のありさまを尋ねれば、これは人を恨むるにもあらず、またくちろむとかやをもせず、たゞ思ふ事ありて、この山のおくに尋ねべき事ありて、夜ぶかく出でつれど、雨も夥しく、山路さへ惑ひてこし方もおほえず、ゆくさきもえしらす、しぬべき心地さへすれば、爰によりたるなり。同じくはそのあたりまでみちびき給ひてむやといへば、いよいよいとほしがりて、手をひかへてみちびく情のふかさぞ、佛の御するべにやとまで、嬉しくありがたかりける。程なく送りつけてかへりぬ。まちとる處にもあやしくものぐるほしきもののさまかなと、見おどろく人おほかるらめなれども、かつらの里のひとの情におとらめやは。さまざまにたすけ扱はるゝほど、山路はなほ人のこゝちなりけるが、今はとうちやすむほど、すべてこゝちも失せて、露ばかり起きもあがられず。徒らものにてふしたりしを、都人さへ思ひのほかに尋ね

しるたよりありて、三日ばかりはとにかくにさばりしかども、ひとひに本意とけにしかば、一すぢにうちもうれしく思ひなりぬ。さてこの所をみるに、うき世ながらかゝる所もありけりとすごく思ふさまなるに、行ひなれたるあま君たちの、よひ曉のあか怠らず、爰かしこにせぬれの音などを聞くにつけても、そゝろにつもりけむ(と)年月のつみも、かゝらぬ所にてやみなましければ、いかにせましと思ひ出づるにぞ、みもゆる心地しける。故里の庭もせにうきををしらせし秋風は、ほけ三昧の峯の松風に吹きかよひ、ながむる門に面かけと(と)月影は、りやうじゆせんの雲るはるかに心を送るしるべとぞなりにける。

捨て出でし鷺のみ山の月ならで誰を夜なく戀ひ渡りけむゆたのためたに物をのみ思ひくちにはては、うつ、心もあらずあくがれそめにければ、さまざま世のためしにもなりぬべく、思ひの外にさすらふる身のゆくへを、おのづから思ひしづむる時なきにしもあらねば、かりの世の夢の中なるなけきばかりにもあらず。くらきより暗きにたどらむ長き夜の惑ひを思ふにも、いとせめて悲しけれど、心は心としてなほおもひなれにし夕暮のながめに打ちそひて、ひと方ならぬ恨みもなけきも、せきやるかたなきむねのうちはかなき水莖のおのづから心のゆくたよりもやとて、人しれず書きながせど、いとせしき泪の催しになむ、いでやおのづから大かたのよ

の情をすてぬなけの哀ればかりを折り／＼にちりくることの葉もありしにこそ、露のいのちをまかけて、今日までもなからへてけるを、うきよの人のつらきいつはりにはさへならひはてにけることもあるにや。おなじ世ともおほえぬ迄に隔りてにければ、ちかの鹽がまもいとかひなき心地して、陸奥のつほのいし文かき絶えて遙けき中となりけるかな日ごろ降りつる雨のなごりに、たちまふ雲まの夕づく夜のかけほのなるに、おしあけがたならねど、うき人しもとあやくなる心地すれば、妻戸はひきたてつれど、かど近く細き川の流れたる水のまさるにや、常よりも音する心地するにも、いつの年にかあらむ、この川の水の出でたりしに、人しれず、波をわけしことなど、たゞ今のやうにおほえて、思ひ出づる程にも波は騒ぎけりうき世をわけて中川の水あれたる庭に呉竹のたゞ少しうちなびきたるさへ、「そゝろ」にうらめしきつまとなるにや。

よと共に思ひ出づれば呉竹の怨めしからぬそのふしもなしおのづからことをついでになどばかり驚し聞えたるにも、世の煩しきに、思ひながらのみなむ、さるべきついでもなくて、みづから聞えさせずなど、なほざりに書きすてられたるもいと心うくて、消えはてむ煙ののちの雲をだによも眺めじな人めもるとてとおほゆれど、心のうちばかりにてくたしはてぬるはいとか

ひなしや。そのころ心地例ならぬ事ありて、命も危き程なるを、こゝながらともかくもなりなば煩しかるべければ、思ひがけぬ便りにて、おたきの近き所にて、はかなき宿りもとめいでてうつろひなむとす。かくとだに聞えさせまほしけれど、とはす語りもあやしめて、「なくく」かどを引きいづる折りしも、先にたちたる車あり。さきはなやかにおひて、こせんななどこと／＼しくみゆるを、たればかりにかと目留めたりければ、かの人しれず恨みきこゆる人なりけり。かほしるき隨身などまがふべうもあらねば、かくとはおほしよらざらめと、そゝろに車の中はづかしく、はしたなき心地しながら、今一たびそれとばかりも見送り聞ゆるは、いと嬉しくもあはれにも、さまざまむねしづかならず。つひにこなたかなたへ行き別れ給ふ程、いといたう願みがちに(心細し)彼(の)處にゆきつきたれば、兼て聞きつるよりもあやしくはかなければ、のさまなれば、いかにして堪へ忍ぶべくもあらず。暮れはつる空のけしきも、ひごろにこえて心ほそくかなし。宵るすべき友もなければ、あやしきも定めぬとふの蒼蒼に、たゞひとりうちふしたれど、とけてしも寝られず。

はかなしな短き夜はの草枕結ぶともなきうたゝねの夢ひごろふれど問ひ来る人もなし。心ほそきまゝに、きやうつと手に持たる許りぞたのもしき友なりける。せかいふらう

ことある處を、しひて思ひつゞけてぞ、うき世のゆめもおのづから思ひさますたよりなりける。けふかあすかと心ほそき命ながら、卯月にもなりぬ。いさよひの光りまち出でて、程なき窓の薺だつものもおろさず。つく／＼とながめいでたるに、はかなけなる垣根の草に、まどかなる月影に、ところながらあはれ少からず。おく露の命まつまの假の庵に心細くも宿る月影いづくにかあらむ、幽かに笛の音のきこえくる(が)、かの御あたりなりしねに迷ひたる心地するにも、きと胸ふたがるこちするを、待ち馴れし故里をだにとはざりし人はこゝまで思ひやはよるさてもなほうきにたへたる命のかぎりありければ、やうやう心ちも怠りさまになりたるを、かくてしもやとて、また故郷にたちかへるにも、松ならぬ檜に、そゝろにはづかしくみまはされて、消えかへり又はくべしと思ひきや露の命の庭の淺ぢふなけきながら、はかなく過ぎて秋にもなりぬ。ながき思ひのよもすがらやむともなき砦の音、寢屋ちかき蟋蟀のこゑの亂れも、ひと方ならぬねざめの催しなれば、壁にそむけるともし火のかげばかり(を)友として、あくるをまつもしづ心なく、盡きせぬ泪の雫は窓うつ雨よりもなり。いとせめてわびは

つる慰みに、さそふ水だにあらばと朝夕のこと草になりぬるを、そのころ後の親とか(の)たのむべき、ことわりも淺からぬ人しも、遠つあふみとかや、聞くもはるけき道を分けて、都の物語でせむとて上りきたるに、何となく細やかなる物語などするづいでに、かくてつくづくとおはせむよりは、るなかの住ひもみつゝなくさみたまへかし。かしこも物さわがしくもあらず。心すまざる人は、さみぬべきさなるなど、なほざりなく誘へど、さすがひたみちにふりはなれなむ都のなごりも、いづくを忍ぶ心にか、心ほそくおもひわづらはるれど、あらぬすまひに身をかへたると思ひなしてとだに、うきを忘るゝたよりもやと、あやなく思ひたちぬ。くだるべき日にもなりぬ。夜ぶかく都を出でなむとするに、ころは神無月の廿日あまりなれば、有明の光りもいと心細く、風の音もすさまじく身にしみとほる心ちするに、人はみな起きさわけど、人しれずこゝろばかりには、さてもいかにさすらふる身のゆくへにかと、たゞ今になりては心ほそきことのみおほかれど、さりとてとゞまるべきにもあらねば、出でぬるみちすがら、まづかきくらす泪の先に立ちて心細く悲しき事ぞなにしたとふべしとも覺えぬ。ほどなく逢坂山にもなりぬ。おとに聞きし關の清水も。たえぬ涙とのみ思ひなされて、

越えわぶる逢坂山の山水はわかれにたえぬ涙とぞ見る

過ぎきつる日数の程なきに、とまる人々の行末を覺東なく戀しきこともさままゝなれど、隅田がはらならねばこととふべきみやこ鳥もみえず。

思ひいでて名をのみ慕ふ都鳥あとなき浪にねをやなましのしほひ湯、音にき、けるよりも面白く、濱千鳥むらゝとびわたりて、海士のしわざに年舊りにける鹽がまどの、おもひくゝにゆがみたて(た)る姿ども、みなれず珍しきこと、あするにも、思ふ事なく都のともにもうちぐしたる身ならましかば(と)、人しれぬ心のうちのみさままゝくくるしくて、これやさはいかに鳴海の浦なれば思ふ方には遠ざかるらむみかはの國八はしといふ所をみれば、これも昔にはあらずなりぬるにや、橋もたゞひとつぞみゆる。かきつばたおほかる所と聞きしかども、あたりの草もみな枯れたるころなればにや、それかと見ゆる草木もなし。業平のあそびの、はるゝきぬる」と歎きけむも、思ひ出でらるれど、つましあればにや、さればさらむと少しをかしくなりぬ。都いでて遙かになりぬれば、かの國の中にもなりぬ。はまの浦ぞおもしろき所なりける。波あらししほの海路、のどかなる水うみのおちいたるけぢめに、はるゝと生ひつゝきたる松のこたちなど、繪にかまほしくぞみゆる。おちつき所のさまをみれば、こゝか

あふみの國野路といふ處より、雨かきくらしふり出でて、都の山をかへりみれば、霞にそれとだに見えず。隔りゆくもそらろに心細く、何とて思ひ立ちけむと悔しきこと數しらず。とともかくても、ねのみ泣きがちなり。すみわびて立ち別れぬる故里もきては悔しき旅衣かな道のほど目とゞまる所々多かれど、こゝはいづくゝともけちかくとふべき人もなければ、いづくの野も山もはるゝととゆくを、とまりもしらず、人のゆくにまかせてゆめぢをたどるやうにて日數ふるまゝに、さすがならはぬひなのながぢに、おとろへはつる身も、われかのこゝのちのみして、みのはりのさかひにもなりぬ。すのまたとかや、ひろくゝとおびたゞしき河あり。ゆききの人集りて舟をやすめさしかへるほど、いと所狭うかしがましく怖しきまでの、しりあひたり。からくしてさるべき人みな渡りはてぬれど、人々も、こしや馬とまちいつるほど、河のはたにおりて、つくづくとこし方を見れば、あさましげなる賤の男ども、むづかしげなる者どもを舟にとりいれなどする程、何事にかゆ、しく争ひて、あるひは水にたふれいりなどするにも、見なれずものおそろしきに、かゝるわたりをさへ隔てはてぬれば、いと都の方(は)はるかにこそはなり行くらめと思ふには、いと涙おち増りて忍びがたく、かへらむ程をだにしらぬこゝろもとなさよ。

しこに少しおろかなる家(イナシ)どもものなかに、おなじかや屋どもなどさすがに狭からねど、はかなげなるあしばかりにてむすびおけるへだて(イナシ)どもも、かけとまるべくもあらず。かりそめなれど、けに宮もわらやもと思ふには、かくてしもなかくにしもあらぬさまなり。うしろは松原にて前(イナシ)はおほきなる河のどかに流れたり。海いと近ければ、湊の浪こゝもとにきこえて、潮のさすときはこの河の水さかさまに流るゝやうに見ゆるなど、さまかはりていとをかきさまなれど、いかなるにかこゝろとゞまらず。日數ふるまゝに都のかたのみ戀しく、ひるはひめもすにながめ、よるは夜(イナシ)すがら物をのみ思ひつゝくる。あらいその波のおとも、枕のもとにおちくるひきには、心ならずも夢の通路たえ果てぬべし。

心からかゝる旅ねに歎くとも夢だに許せ沖つ白波
不二の山はたゞこゝもとに(と)ぞみゆる。雪いと白くて(こ)ころほそし。風になびく烟の末も、ゆめの前に哀れなれど、うへなきものはと思ひけつこゝろのたけぞものおそろしかりける。かひのしらねもいと白く見わたされたり。かくてしも月の末つかたにもなりぬ。都の方より(も)ともに(イナシ)文どものあまたあるを見れば、いとをさなくよりはぐくみし人、はかなくも見すてられて、心ほそかりし思ひに、病ひになりてかぎりになりたるよしを、鳥のあとのやうに書きつゝけておこせ

たるを見るに衰れにかなしくて、よろづをわすれていそぎのほりなむとするは、人のおもふらむことどものさわがしくかたはらいたければ、とにかくにさはるべき心ちもせねば、にはかにいそぎたつを、道もいと氷とちて、さはりがちにあやふかるべきを、たゞ今はかゝるしきうちそふ人もなくてなど、さまざまとゞむる人も多かりければ、思ひわびてねのみなかる、を、見る人も心ぐるしくとて、ともすべきものどもなど、誰かれと定めてのほるべきになりぬ。いとうれしけれど、とにかくに思ひわけにすることなく、なにと又都へかへらむとあぢきなくものうし。こゝとでも又たち歸らむ事もかたければ、ものごとになごり多かる心地するにも、うちつけにものむづかしき心のくせになむ。常(に)より居つるはしらのあらくしきが、なつかしからざりつるも、立ちはなれなむはさすがに心ほそくて、人見わくべくもあらず。ちひさく書きつくれど、めばやき山賤もやとつ、ましながら、
忘るなよあさきの柱變らずば又きて(ぞ)馴るゝ折りもこそあれこのたびは、いと人すくなに心ほそけれど、都をうしろにてこし折りの心地には、こよなく日數のすぐるも戀しき心地するぞ、あやにくに我が心より思ひたちいでぬれど、われながら定めなく、旅の程も思ひしられざれど、いとはずに日數もうらゝかに(て)とゞこほる所もなかりけるを、ふはの關にな

りて雪たゞふりに降りくるに、風さへまじりて吹「雪」もかきれぬれば、關屋ちかくたちやすらひたるに、關守のなつかしからぬおももちとりにくゝ、なにをがなとゞめむとみいだしたるけしきもいと怖しくて、

かきくらす雪まをしばしまつ程にやがて留むるふはの關守京に入る日しも雨降りいでて、鏡の山も曇りて見ゆるを、くだりし折りも、この程にて(は)雨降り出でたりしぞかしの思ひいでて、

このたびは曇らば曇れ鏡山ひとを都のはるかならねばかく思ひつゞくれど、誠にかの人を都はちかき心のみばかりにて、いつを限りにと思ひ返すぞ、又かきくらす心ちしける。日たくるまゝに、雨ゆゝしく晴れて、しるき雲おほかる山多かれば、いづくにかと尋ねれば、ひらの高根やひえの山などに待るといふを聞くに、はかなき雲さへなつかしくなりぬ。きみもさはよそのながめや通ふらむ都の山にかゝる白雲暮れはつる程にゆきつきたれば、思ひなしにや、こゝもかしこもなほ荒れまさりたる心ちして、ところゝもりぬれたるさまなど、なにに心の「とゞまるべくもあらぬを見やるも、いとはなれまうきあばらやのきならむと、そゝろにみるもあはれなり。おい人はうちみえてこよなくおこたりざまにみゆるも、うき身をたればかりかうまで慕はむと哀れも淺からず。その後は身をうき草にあくがれしこゝろも、こりはてぬるに

や、つくづくとかゝる蓬がそまに朽ちはつべき契りこそはと、身をも世をも思ひしづむれど、したは「ぬ」こゝちなれば又なりゆかむはていかゞ。

我よりは久しかるべきあとなれど忍ばぬ人は哀れとも見し
右轉寢記以扶桑拾葉集校合了

此うたゝね一冊後醍醐天皇宸筆無疑者也三月黃門俊景
右うたゝねの記前田侯爵家所藏古寫本を以て校勘す(昭和三年七月)

新校羣書類従 卷第三百三十一

檢校保己一集

紀行部六

いさよひの日記

阿

佛

孔安國¹ 魯共序² 使³ 夫子⁴ 講⁵ 堂⁶ 於⁷ 壁⁸ 中⁹ 石¹⁰ 函¹¹ 得¹² 三¹³ 十¹⁴ 二¹⁵ 孝¹⁶ 經¹⁷ 二¹⁸ 章¹⁹ 萬²⁰ 葉²¹ 十二²² 水²³ 莖²⁴ 之²⁵ 崗²⁶ 乃²⁷ 田²⁸ 葛²⁹ 葉³⁰ 緒³¹ 吹³² 變³³ 面³⁴ 知³⁵ 兒³⁶ 等³⁷ 之³⁸ 不³⁹ 見⁴⁰ 頃⁴¹ 鴨⁴² 按⁴³ 將⁴⁴ 軍⁴⁵ 執⁴⁶ 權⁴⁷ 親⁴⁸ 王⁴⁹ 康⁵⁰ 執⁵¹ 權⁵² 守⁵³ 時⁵⁴ 宗⁵⁵ 相⁵⁶ 將⁵⁷ 軍⁵⁸ 執⁵⁹ 權⁶⁰ 親⁶¹ 王⁶² 康⁶³ 執⁶⁴ 權⁶⁵ 守⁶⁶ 時⁶⁷ 宗⁶⁸ 相⁶⁹ 將⁷⁰ 軍⁷¹ 執⁷² 權⁷³ 親⁷⁴ 王⁷⁵ 康⁷⁶ 執⁷⁷ 權⁷⁸ 守⁷⁹ 時⁸⁰ 宗⁸¹ 相⁸² 將⁸³ 軍⁸⁴ 執⁸⁵ 權⁸⁶ 親⁸⁷ 王⁸⁸ 康⁸⁹ 執⁹⁰ 權⁹¹ 守⁹² 時⁹³ 宗⁹⁴ 相⁹⁵ 將⁹⁶ 軍⁹⁷ 執⁹⁸ 權⁹⁹ 親¹⁰⁰ 王¹⁰¹ 康¹⁰² 執¹⁰³ 權¹⁰⁴ 守¹⁰⁵ 時¹⁰⁶ 宗¹⁰⁷ 相¹⁰⁸ 將¹⁰⁹ 軍¹¹⁰ 執¹¹¹ 權¹¹² 親¹¹³ 王¹¹⁴ 康¹¹⁵ 執¹¹⁶ 權¹¹⁷ 守¹¹⁸ 時¹¹⁹ 宗¹²⁰ 相¹²¹ 將¹²² 軍¹²³ 執¹²⁴ 權¹²⁵ 親¹²⁶ 王¹²⁷ 康¹²⁸ 執¹²⁹ 權¹³⁰ 守¹³¹ 時¹³² 宗¹³³ 相¹³⁴ 將¹³⁵ 軍¹³⁶ 執¹³⁷ 權¹³⁸ 親¹³⁹ 王¹⁴⁰ 康¹⁴¹ 執¹⁴² 權¹⁴³ 守¹⁴⁴ 時¹⁴⁵ 宗¹⁴⁶ 相¹⁴⁷ 將¹⁴⁸ 軍¹⁴⁹ 執¹⁵⁰ 權¹⁵¹ 親¹⁵² 王¹⁵³ 康¹⁵⁴ 執¹⁵⁵ 權¹⁵⁶ 守¹⁵⁷ 時¹⁵⁸ 宗¹⁵⁹ 相¹⁶⁰ 將¹⁶¹ 軍¹⁶² 執¹⁶³ 權¹⁶⁴ 親¹⁶⁵ 王¹⁶⁶ 康¹⁶⁷ 執¹⁶⁸ 權¹⁶⁹ 守¹⁷⁰ 時¹⁷¹ 宗¹⁷² 相¹⁷³ 將¹⁷⁴ 軍¹⁷⁵ 執¹⁷⁶ 權¹⁷⁷ 親¹⁷⁸ 王¹⁷⁹ 康¹⁸⁰ 執¹⁸¹ 權¹⁸² 守¹⁸³ 時¹⁸⁴ 宗¹⁸⁵ 相¹⁸⁶ 將¹⁸⁷ 軍¹⁸⁸ 執¹⁸⁹ 權¹⁹⁰ 親¹⁹¹ 王¹⁹² 康¹⁹³ 執¹⁹⁴ 權¹⁹⁵ 守¹⁹⁶ 時¹⁹⁷ 宗¹⁹⁸ 相¹⁹⁹ 將²⁰⁰ 軍²⁰¹ 執²⁰² 權²⁰³ 親²⁰⁴ 王²⁰⁵ 康²⁰⁶ 執²⁰⁷ 權²⁰⁸ 守²⁰⁹ 時²¹⁰ 宗²¹¹ 相²¹² 將²¹³ 軍²¹⁴ 執²¹⁵ 權²¹⁶ 親²¹⁷ 王²¹⁸ 康²¹⁹ 執²²⁰ 權²²¹ 守²²² 時²²³ 宗²²⁴ 相²²⁵ 將²²⁶ 軍²²⁷ 執²²⁸ 權²²⁹ 親²³⁰ 王²³¹ 康²³² 執²³³ 權²³⁴ 守²³⁵ 時²³⁶ 宗²³⁷ 相²³⁸ 將²³⁹ 軍²⁴⁰ 執²⁴¹ 權²⁴² 親²⁴³ 王²⁴⁴ 康²⁴⁵ 執²⁴⁶ 權²⁴⁷ 守²⁴⁸ 時²⁴⁹ 宗²⁵⁰ 相²⁵¹ 將²⁵² 軍²⁵³ 執²⁵⁴ 權²⁵⁵ 親²⁵⁶ 王²⁵⁷ 康²⁵⁸ 執²⁵⁹ 權²⁶⁰ 守²⁶¹ 時²⁶² 宗²⁶³ 相²⁶⁴ 將²⁶⁵ 軍²⁶⁶ 執²⁶⁷ 權²⁶⁸ 親²⁶⁹ 王²⁷⁰ 康²⁷¹ 執²⁷² 權²⁷³ 守²⁷⁴ 時²⁷⁵ 宗²⁷⁶ 相²⁷⁷ 將²⁷⁸ 軍²⁷⁹ 執²⁸⁰ 權²⁸¹ 親²⁸² 王²⁸³ 康²⁸⁴ 執²⁸⁵ 權²⁸⁶ 守²⁸⁷ 時²⁸⁸ 宗²⁸⁹ 相²⁹⁰ 將²⁹¹ 軍²⁹² 執²⁹³ 權²⁹⁴ 親²⁹⁵ 王²⁹⁶ 康²⁹⁷ 執²⁹⁸ 權²⁹⁹ 守³⁰⁰ 時³⁰¹ 宗³⁰² 相³⁰³ 將³⁰⁴ 軍³⁰⁵ 執³⁰⁶ 權³⁰⁷ 親³⁰⁸ 王³⁰⁹ 康³¹⁰ 執³¹¹ 權³¹² 守³¹³ 時³¹⁴ 宗³¹⁵ 相³¹⁶ 將³¹⁷ 軍³¹⁸ 執³¹⁹ 權³²⁰ 親³²¹ 王³²² 康³²³ 執³²⁴ 權³²⁵ 守³²⁶ 時³²⁷ 宗³²⁸ 相³²⁹ 將³³⁰ 軍³³¹ 執³³² 權³³³ 親³³⁴ 王³³⁵ 康³³⁶ 執³³⁷ 權³³⁸ 守³³⁹ 時³⁴⁰ 宗³⁴¹ 相³⁴² 將³⁴³ 軍³⁴⁴ 執³⁴⁵ 權³⁴⁶ 親³⁴⁷ 王³⁴⁸ 康³⁴⁹ 執³⁵⁰ 權³⁵¹ 守³⁵² 時³⁵³ 宗³⁵⁴ 相³⁵⁵ 將³⁵⁶ 軍³⁵⁷ 執³⁵⁸ 權³⁵⁹ 親³⁶⁰ 王³⁶¹ 康³⁶² 執³⁶³ 權³⁶⁴ 守³⁶⁵ 時³⁶⁶ 宗³⁶⁷ 相³⁶⁸ 將³⁶⁹ 軍³⁷⁰ 執³⁷¹ 權³⁷² 親³⁷³ 王³⁷⁴ 康³⁷⁵ 執³⁷⁶ 權³⁷⁷ 守³⁷⁸ 時³⁷⁹ 宗³⁸⁰ 相³⁸¹ 將³⁸² 軍³⁸³ 執³⁸⁴ 權³⁸⁵ 親³⁸⁶ 王³⁸⁷ 康³⁸⁸ 執³⁸⁹ 權³⁹⁰ 守³⁹¹ 時³⁹² 宗³⁹³ 相³⁹⁴ 將³⁹⁵ 軍³⁹⁶ 執³⁹⁷ 權³⁹⁸ 親³⁹⁹ 王⁴⁰⁰ 康⁴⁰¹ 執⁴⁰² 權⁴⁰³ 守⁴⁰⁴ 時⁴⁰⁵ 宗⁴⁰⁶ 相⁴⁰⁷ 將⁴⁰⁸ 軍⁴⁰⁹ 執⁴¹⁰ 權⁴¹¹ 親⁴¹² 王⁴¹³ 康⁴¹⁴ 執⁴¹⁵ 權⁴¹⁶ 守⁴¹⁷ 時⁴¹⁸ 宗⁴¹⁹ 相⁴²⁰ 將⁴²¹ 軍⁴²² 執⁴²³ 權⁴²⁴ 親⁴²⁵ 王⁴²⁶ 康⁴²⁷ 執⁴²⁸ 權⁴²⁹ 守⁴³⁰ 時⁴³¹ 宗⁴³² 相⁴³³ 將⁴³⁴ 軍⁴³⁵ 執⁴³⁶ 權⁴³⁷ 親⁴³⁸ 王⁴³⁹ 康⁴⁴⁰ 執⁴⁴¹ 權⁴⁴² 守⁴⁴³ 時⁴⁴⁴ 宗⁴⁴⁵ 相⁴⁴⁶ 將⁴⁴⁷ 軍⁴⁴⁸ 執⁴⁴⁹ 權⁴⁵⁰ 親⁴⁵¹ 王⁴⁵² 康⁴⁵³ 執⁴⁵⁴ 權⁴⁵⁵ 守⁴⁵⁶ 時⁴⁵⁷ 宗⁴⁵⁸ 相⁴⁵⁹ 將⁴⁶⁰ 軍⁴⁶¹ 執⁴⁶² 權⁴⁶³ 親⁴⁶⁴ 王⁴⁶⁵ 康⁴⁶⁶ 執⁴⁶⁷ 權⁴⁶⁸ 守⁴⁶⁹ 時⁴⁷⁰ 宗⁴⁷¹ 相⁴⁷² 將⁴⁷³ 軍⁴⁷⁴ 執⁴⁷⁵ 權⁴⁷⁶ 親⁴⁷⁷ 王⁴⁷⁸ 康⁴⁷⁹ 執⁴⁸⁰ 權⁴⁸¹ 守⁴⁸² 時⁴⁸³ 宗⁴⁸⁴ 相⁴⁸⁵ 將⁴⁸⁶ 軍⁴⁸⁷ 執⁴⁸⁸ 權⁴⁸⁹ 親⁴⁹⁰ 王⁴⁹¹ 康⁴⁹² 執⁴⁹³ 權⁴⁹⁴ 守⁴⁹⁵ 時⁴⁹⁶ 宗⁴⁹⁷ 相⁴⁹⁸ 將⁴⁹⁹ 軍⁵⁰⁰ 執⁵⁰¹ 權⁵⁰² 親⁵⁰³ 王⁵⁰⁴ 康⁵⁰⁵ 執⁵⁰⁶ 權⁵⁰⁷ 守⁵⁰⁸ 時⁵⁰⁹ 宗⁵¹⁰ 相⁵¹¹ 將⁵¹² 軍⁵¹³ 執⁵¹⁴ 權⁵¹⁵ 親⁵¹⁶ 王⁵¹⁷ 康⁵¹⁸ 執⁵¹⁹ 權⁵²⁰ 守⁵²¹ 時⁵²² 宗⁵²³ 相⁵²⁴ 將⁵²⁵ 軍⁵²⁶ 執⁵²⁷ 權⁵²⁸ 親⁵²⁹ 王⁵³⁰ 康⁵³¹ 執⁵³² 權⁵³³ 守⁵³⁴ 時⁵³⁵ 宗⁵³⁶ 相⁵³⁷ 將⁵³⁸ 軍⁵³⁹ 執⁵⁴⁰ 權⁵⁴¹ 親⁵⁴² 王⁵⁴³ 康⁵⁴⁴ 執⁵⁴⁵ 權⁵⁴⁶ 守⁵⁴⁷ 時⁵⁴⁸ 宗⁵⁴⁹ 相⁵⁵⁰ 將⁵⁵¹ 軍⁵⁵² 執⁵⁵³ 權⁵⁵⁴ 親⁵⁵⁵ 王⁵⁵⁶ 康⁵⁵⁷ 執⁵⁵⁸ 權⁵⁵⁹ 守⁵⁶⁰ 時⁵⁶¹ 宗⁵⁶² 相⁵⁶³ 將⁵⁶⁴ 軍⁵⁶⁵ 執⁵⁶⁶ 權⁵⁶⁷ 親⁵⁶⁸ 王⁵⁶⁹ 康⁵⁷⁰ 執⁵⁷¹ 權⁵⁷² 守⁵⁷³ 時⁵⁷⁴ 宗⁵⁷⁵ 相⁵⁷⁶ 將⁵⁷⁷ 軍⁵⁷⁸ 執⁵⁷⁹ 權⁵⁸⁰ 親⁵⁸¹ 王⁵⁸² 康⁵⁸³ 執⁵⁸⁴ 權⁵⁸⁵ 守⁵⁸⁶ 時⁵⁸⁷ 宗⁵⁸⁸ 相⁵⁸⁹ 將⁵⁹⁰ 軍⁵⁹¹ 執⁵⁹² 權⁵⁹³ 親⁵⁹⁴ 王⁵⁹⁵ 康⁵⁹⁶ 執⁵⁹⁷ 權⁵⁹⁸ 守⁵⁹⁹ 時⁶⁰⁰ 宗⁶⁰¹ 相⁶⁰² 將⁶⁰³ 軍⁶⁰⁴ 執⁶⁰⁵ 權⁶⁰⁶ 親⁶⁰⁷ 王⁶⁰⁸ 康⁶⁰⁹ 執⁶¹⁰ 權⁶¹¹ 守⁶¹² 時⁶¹³ 宗⁶¹⁴ 相⁶¹⁵ 將⁶¹⁶ 軍⁶¹⁷ 執⁶¹⁸ 權⁶¹⁹ 親⁶²⁰ 王⁶²¹ 康⁶²² 執⁶²³ 權⁶²⁴ 守⁶²⁵ 時⁶²⁶ 宗⁶²⁷ 相⁶²⁸ 將⁶²⁹ 軍⁶³⁰ 執⁶³¹ 權⁶³² 親⁶³³ 王⁶³⁴ 康⁶³⁵ 執⁶³⁶ 權⁶³⁷ 守⁶³⁸ 時⁶³⁹ 宗⁶⁴⁰ 相⁶⁴¹ 將⁶⁴² 軍⁶⁴³ 執⁶⁴⁴ 權⁶⁴⁵ 親⁶⁴⁶ 王⁶⁴⁷ 康⁶⁴⁸ 執⁶⁴⁹ 權⁶⁵⁰ 守⁶⁵¹ 時⁶⁵² 宗⁶⁵³ 相⁶⁵⁴ 將⁶⁵⁵ 軍⁶⁵⁶ 執⁶⁵⁷ 權⁶⁵⁸ 親⁶⁵⁹ 王⁶⁶⁰ 康⁶⁶¹ 執⁶⁶² 權⁶⁶³ 守⁶⁶⁴ 時⁶⁶⁵ 宗⁶⁶⁶ 相⁶⁶⁷ 將⁶⁶⁸ 軍⁶⁶⁹ 執⁶⁷⁰ 權⁶⁷¹ 親⁶⁷² 王⁶⁷³ 康⁶⁷⁴ 執⁶⁷⁵ 權⁶⁷⁶ 守⁶⁷⁷ 時⁶⁷⁸ 宗⁶⁷⁹ 相⁶⁸⁰ 將⁶⁸¹ 軍⁶⁸² 執⁶⁸³ 權⁶⁸⁴ 親⁶⁸⁵ 王⁶⁸⁶ 康⁶⁸⁷ 執⁶⁸⁸ 權⁶⁸⁹ 守⁶⁹⁰ 時⁶⁹¹ 宗⁶⁹² 相⁶⁹³ 將⁶⁹⁴ 軍⁶⁹⁵ 執⁶⁹⁶ 權⁶⁹⁷ 親⁶⁹⁸ 王⁶⁹⁹ 康⁷⁰⁰ 執⁷⁰¹ 權⁷⁰² 守⁷⁰³ 時⁷⁰⁴ 宗⁷⁰⁵ 相⁷⁰⁶ 將⁷⁰⁷ 軍⁷⁰⁸ 執⁷⁰⁹ 權⁷¹⁰ 親⁷¹¹ 王⁷¹² 康⁷¹³ 執⁷¹⁴ 權⁷¹⁵ 守⁷¹⁶ 時⁷¹⁷ 宗⁷¹⁸ 相⁷¹⁹ 將⁷²⁰ 軍⁷²¹ 執⁷²² 權⁷²³ 親⁷²⁴ 王⁷²⁵ 康⁷²⁶ 執⁷²⁷ 權⁷²⁸ 守⁷²⁹ 時⁷³⁰ 宗⁷³¹ 相⁷³² 將⁷³³ 軍⁷³⁴ 執⁷³⁵ 權⁷³⁶ 親⁷³⁷ 王⁷³⁸ 康⁷³⁹ 執⁷⁴⁰ 權⁷⁴¹ 守⁷⁴² 時⁷⁴³ 宗⁷⁴⁴ 相⁷⁴⁵ 將⁷⁴⁶ 軍⁷⁴⁷ 執⁷⁴⁸ 權⁷⁴⁹ 親⁷⁵⁰ 王⁷⁵¹ 康⁷⁵² 執⁷⁵³ 權⁷⁵⁴ 守⁷⁵⁵ 時⁷⁵⁶ 宗⁷⁵⁷ 相⁷⁵⁸ 將⁷⁵⁹ 軍⁷⁶⁰ 執⁷⁶¹ 權⁷⁶² 親⁷⁶³ 王⁷⁶⁴ 康⁷⁶⁵ 執⁷⁶⁶ 權⁷⁶⁷ 守⁷⁶⁸ 時⁷⁶⁹ 宗⁷⁷⁰ 相⁷⁷¹ 將⁷⁷² 軍⁷⁷³ 執⁷⁷⁴ 權⁷⁷⁵ 親⁷⁷⁶ 王⁷⁷⁷ 康⁷⁷⁸ 執⁷⁷⁹ 權⁷⁸⁰ 守⁷⁸¹ 時⁷⁸² 宗⁷⁸³ 相⁷⁸⁴ 將⁷⁸⁵ 軍⁷⁸⁶ 執⁷⁸⁷ 權⁷⁸⁸ 親⁷⁸⁹ 王⁷⁹⁰ 康⁷⁹¹ 執⁷⁹² 權⁷⁹³ 守⁷⁹⁴ 時⁷⁹⁵ 宗⁷⁹⁶ 相⁷⁹⁷ 將⁷⁹⁸ 軍⁷⁹⁹ 執⁸⁰⁰ 權⁸⁰¹ 親⁸⁰² 王⁸⁰³ 康⁸⁰⁴ 執⁸⁰⁵ 權⁸⁰⁶ 守⁸⁰⁷ 時⁸⁰⁸ 宗⁸⁰⁹ 相⁸¹⁰ 將⁸¹¹ 軍⁸¹² 執⁸¹³ 權⁸¹⁴ 親⁸¹⁵ 王⁸¹⁶ 康⁸¹⁷ 執⁸¹⁸ 權⁸¹⁹ 守⁸²⁰ 時⁸²¹ 宗⁸²² 相⁸²³ 將⁸²⁴ 軍⁸²⁵ 執⁸²⁶ 權⁸²⁷ 親⁸²⁸ 王⁸²⁹ 康⁸³⁰ 執⁸³¹ 權⁸³² 守⁸³³ 時⁸³⁴ 宗⁸³⁵ 相⁸³⁶ 將⁸³⁷ 軍⁸³⁸ 執⁸³⁹ 權⁸⁴⁰ 親⁸⁴¹ 王⁸⁴² 康⁸⁴³ 執⁸⁴⁴ 權⁸⁴⁵ 守⁸⁴⁶ 時⁸⁴⁷ 宗⁸⁴⁸ 相⁸⁴⁹ 將⁸⁵⁰ 軍⁸⁵¹ 執⁸⁵² 權⁸⁵³ 親⁸⁵⁴ 王⁸⁵⁵ 康⁸⁵⁶ 執⁸⁵⁷ 權⁸⁵⁸ 守⁸⁵⁹ 時⁸⁶⁰ 宗⁸⁶¹ 相⁸⁶² 將⁸⁶³ 軍⁸⁶⁴ 執⁸⁶⁵ 權⁸⁶⁶ 親⁸⁶⁷ 王⁸⁶⁸ 康⁸⁶⁹ 執⁸⁷⁰ 權⁸⁷¹ 守⁸⁷² 時⁸⁷³ 宗⁸⁷⁴ 相⁸⁷⁵ 將⁸⁷⁶ 軍⁸⁷⁷ 執⁸⁷⁸ 權⁸⁷⁹ 親⁸⁸⁰ 王⁸⁸¹ 康⁸⁸² 執⁸⁸³ 權⁸⁸⁴ 守⁸⁸⁵ 時⁸⁸⁶ 宗⁸⁸⁷ 相⁸⁸⁸ 將⁸⁸⁹ 軍⁸⁹⁰ 執⁸⁹¹ 權⁸⁹² 親⁸⁹³ 王⁸⁹⁴ 康⁸⁹⁵ 執⁸⁹⁶ 權⁸⁹⁷ 守⁸⁹⁸ 時⁸⁹⁹ 宗⁹⁰⁰ 相⁹⁰¹ 將⁹⁰² 軍⁹⁰³ 執⁹⁰⁴ 權⁹⁰⁵ 親⁹⁰⁶ 王⁹⁰⁷ 康⁹⁰⁸ 執⁹⁰⁹ 權⁹¹⁰ 守⁹¹¹ 時⁹¹² 宗⁹¹³ 相⁹¹⁴ 將⁹¹⁵ 軍⁹¹⁶ 執⁹¹⁷ 權⁹¹⁸ 親⁹¹⁹ 王⁹²⁰ 康⁹²¹ 執⁹²² 權⁹²³ 守⁹²⁴ 時⁹²⁵ 宗⁹²⁶ 相⁹²⁷ 將⁹²⁸ 軍⁹²⁹ 執⁹³⁰ 權⁹³¹ 親⁹³² 王⁹³³ 康⁹³⁴ 執⁹³⁵ 權⁹³⁶ 守⁹³⁷ 時⁹³⁸ 宗⁹³⁹ 相⁹⁴⁰ 將⁹⁴¹ 軍⁹⁴² 執⁹⁴³ 權⁹⁴⁴ 親⁹⁴⁵ 王⁹⁴⁶ 康⁹⁴⁷ 執⁹⁴⁸ 權⁹⁴⁹ 守⁹⁵⁰ 時⁹⁵¹ 宗⁹⁵² 相⁹⁵³ 將⁹⁵⁴ 軍⁹⁵⁵ 執⁹⁵⁶ 權⁹⁵⁷ 親⁹⁵⁸ 王⁹⁵⁹ 康⁹⁶⁰ 執⁹⁶¹ 權⁹⁶² 守⁹⁶³ 時⁹⁶⁴ 宗⁹⁶⁵ 相⁹⁶⁶ 將⁹⁶⁷ 軍⁹⁶⁸ 執⁹⁶⁹ 權⁹⁷⁰ 親⁹⁷¹ 王⁹⁷² 康⁹⁷³ 執⁹⁷⁴ 權⁹⁷⁵ 守⁹⁷⁶ 時⁹⁷⁷ 宗⁹⁷⁸ 相⁹⁷⁹ 將⁹⁸⁰ 軍⁹⁸¹ 執⁹⁸² 權⁹⁸³ 親⁹⁸⁴ 王⁹⁸⁵ 康⁹⁸⁶ 執⁹⁸⁷ 權⁹⁸⁸ 守⁹⁸⁹ 時⁹⁹⁰ 宗⁹⁹¹ 相⁹⁹² 將⁹⁹³ 軍⁹⁹⁴ 執⁹⁹⁵ 權⁹⁹⁶ 親⁹⁹⁷ 王⁹⁹⁸ 康⁹⁹⁹ 執¹⁰⁰⁰ 權¹⁰⁰¹ 守¹⁰⁰² 時¹⁰⁰³ 宗¹⁰⁰⁴ 相¹⁰⁰⁵ 將¹⁰⁰⁶ 軍¹⁰⁰⁷ 執¹⁰⁰⁸ 權¹⁰⁰⁹ 親¹⁰¹⁰ 王¹⁰¹¹ 康¹⁰¹² 執¹⁰¹³ 權¹⁰¹⁴ 守¹⁰¹⁵ 時¹⁰¹⁶ 宗¹⁰¹⁷ 相¹⁰¹⁸ 將¹⁰¹⁹ 軍¹⁰²⁰ 執¹⁰²¹ 權¹⁰²² 親¹⁰²³ 王¹⁰²⁴ 康¹⁰²⁵ 執¹⁰²⁶ 權¹⁰²⁷ 守¹⁰²⁸ 時¹⁰²⁹ 宗¹⁰³⁰ 相¹⁰³¹ 將¹⁰³² 軍¹⁰³³ 執¹⁰³⁴ 權¹⁰³⁵ 親¹⁰³⁶ 王¹⁰³⁷ 康¹⁰³⁸ 執¹⁰³⁹ 權¹⁰⁴⁰ 守¹⁰⁴¹ 時¹⁰⁴² 宗¹⁰⁴³ 相¹⁰⁴⁴ 將¹⁰⁴⁵ 軍¹⁰⁴⁶ 執¹⁰⁴⁷ 權¹⁰⁴⁸ 親¹⁰⁴⁹ 王¹⁰⁵⁰ 康¹⁰⁵¹ 執¹⁰⁵² 權¹⁰⁵³ 守¹⁰⁵⁴ 時¹⁰⁵⁵ 宗¹⁰⁵⁶ 相¹⁰⁵⁷ 將¹⁰⁵⁸ 軍¹⁰⁵⁹ 執¹⁰⁶⁰ 權¹⁰⁶¹ 親¹⁰⁶² 王¹⁰⁶³ 康¹⁰⁶⁴ 執¹⁰⁶⁵ 權¹⁰⁶⁶ 守¹⁰⁶⁷ 時¹⁰⁶⁸ 宗¹⁰⁶⁹ 相¹⁰⁷⁰ 將¹⁰⁷¹ 軍¹⁰⁷² 執¹⁰⁷³ 權¹⁰⁷⁴ 親¹⁰⁷⁵ 王¹⁰⁷⁶ 康¹⁰⁷⁷ 執¹⁰⁷⁸ 權¹⁰⁷⁹ 守¹⁰⁸⁰ 時¹⁰⁸¹ 宗¹⁰⁸² 相¹⁰⁸³ 將¹⁰⁸⁴ 軍¹⁰⁸⁵ 執¹⁰⁸⁶ 權¹⁰⁸⁷ 親¹⁰⁸⁸ 王¹⁰⁸⁹ 康¹⁰⁹⁰ 執¹⁰⁹¹ 權¹⁰⁹² 守¹⁰⁹³ 時¹⁰⁹⁴ 宗¹⁰

心からおりたつたこのあま衣ほさぬ恨みと人にかたるな
とぞいはまほしき。いづのこふといふ所にとゞまる。いまだ
夕日のこるほど、みしまの明神へまるとして、よみてたてま
つる。

あはれとや三島の神の宮柱唯こ、にしもめぐりきけり
おのづから傳へし跡もあるものを神はしるらむ敷島の道
尋ねきてわがこえかゝる箱根路を山のかひある知べと思ふ
廿八日、いづのこふをいでてはこねぢにかゝる。いまだ夜
深かりければ、

玉くしけ箱根の山をいそげども猶明けがたき横雲の空
あしがら山はみちとほしとて、はこねぢにかゝるなりけり。
ゆかしさよ其方の雲をそばだててよそになしぬる足柄の山
いとさかしき山をくだる。人のあしもとゞまりがたし。ゆさ
かとぞいふなる。からうじてこえはてたれば、又いふもとに
はや川といふ川あり。まことにはやし。木のおほくながる、
を、いかにととへば、あまのもしほ木を浦へいださむとてな
がすなりといふ。

東路の湯坂を越えてみわたせばしほ木流る、はや川の水
ゆさかより浦にいでて、日くれかゝるになほとまるべき所遠
し。いづの大しままでみわたさる、海づらを、いづことかい
ふととへば、しりたる人もなし。あまの家のみぞある。
あまのすむその里の名も白浪のよする渚に宿やからまし

まりこ川といふ川を、いとくらくて「たどり」わたる。こよひ
はさかはといふ所にとゞまる。あすはかまくらへいるべしと
いふ「なり」。

廿九日、さかはをいでて、濱路をはるゝと行く。あけは
なる、うみづら、いとほそき月いでたり。

浦路のく心ほそさを波間より出でてしらする有明の月
なぎさによせかへる浪のうへにきりたちて、あまたありつる
「つり」ぶねみえずなりぬ。

あま小舟漕ぎ行く方をみせじとや浪に立ちそふ浦の朝霧
みやことほくへだ、りはてぬるも、なほ夢のこゝちして、

立ち離れよもうきなみはかけもせじ昔の人の同じ世ならば
あづまにてすむ所は月かけのやつとぞいふなる。浦近き山も
とにて、風いとあらし。山寺のかたはらなれば、のどかにすご
くて、浪の音、松のかげたえず。都のおとづればいつしかお
ほつかなきほどにしも、うつの山にてゆきあひたりし山ぶし
のたよりにことづけ申したりし人の御許より、たしかなるた
よりにつけて、ありし御返しと覺しくて、

旅衣涙をそへてうつの山しぐれぬひまもさぞしぐるらむ
ゆくりなく憧れ出でし十六夜の月や後れぬ形見なるべき
都をいでしことは神無月十六日なりしかば、いさよふ月を
おほしめしわすれざりけるにやと、いとやさしくあはれにて

たゞこの返事ばかりをぞ又きこゆ。

常盤井
國實氏
一姫院
嵯峨院
草龜山
后院母

めぐりあふ末をぞ頼むゆくりなく空にうかれし十六夜の月
さきのうひやうゑのかみの御女、歌よむ人にてちよく撰にも
たび／＼入り給へり。大宮のゐんの權中納言ときこゆ(る人)、
歌のことゆゑ朝夕申しなれしかばにや、道のほどのおほつか
なさなどおとづれ給へる文に、
はるゝと思ひこそやれ旅衣涙しぐるゝほどやいかにと
返しに、

思ひやれ露も時雨も一つにて山路分けこし袖の雪を
このせうとのためかぬの君も、おなじさまにおほつかなさな
どかきて、

古郷は時雨にたちし旅衣雪にやいとゞさえまさらむ
かへし、

後高倉院
姫宮
母條院

後高倉院
堀河院
母條院

旅衣浦かせえて神なづきしぐるゝ空に雪ぞふりそふ
しきかんもんるのみくしけどのときこゆるは、こがの太政
大臣の御女。これも續後撰より、うちつゞき二たび三たびの
家いへのうちぎ、にも、歌あまたいり給へる人なれば、御名
もかくれなくこそ(は)。いまは安嘉門院に、御かたとてさぶ
らひ給ふ。あづまぢおもひ立ちしあすとて、まかり申すのよ
し(に)、北白川のへまるりしかど、見えさせ給はざりしか
ば、こよひばかりのいでたちものさわがしくて、かくとだに

きこえあへず。いそぎいでしにも、心にかゝりて、おとづれ
きこゆ。草の枕ながら年さへも暮れぬる。心ほそき雪のひま
なさなどかきあつめて、

消えかへり詠むる空もかきくれて程は雲を雪になり行く
なときこえたりしを、立ちかへり、その御返したよりあらばと
心にかけるらせつるを、けふ「は」しはすの廿二日、文まち
えてめづらしうれしさ、まづなに事もこまかに申したく候
に、こよひは御かたがへのぎやうかうの御うへとて、まぎ
るゝほどにて、おもふばかりもいかゞとほいなうこそ、御た
びあすとて御まるりありける日しも、みねどのののみみぢ見
「に」とて、わかき人「々」さそひにしほどに、後にこそかゝる
事どもきこえ候しか。などやかかとも御尋ね候はざりし。

一つかたに袖やぬれまし旅衣たつ日をきかぬ恨みなりせば
さてもそれより雪になり行くと、おし「ばかりの」御返事
は、

かきくらし雪ふる空の詠めにも程は雲の哀れをぞしる
とあれば、このたびは又たつ日をしらぬとある御返しばかり
をぞきこゆる。

心から何うらむらむ旅衣たつ目をだにもしらすかほにて
曉たよりありとき、よもすがらおきるて、都の文どもか
く中に、ことにへだてなくあはれにたのみかはしたるあね君

に、をさなき人々の事さまんにかきやるほど、れいの浪か
ぜはけしくきこゆれば、たゞ今あるまゝの事をぞかきつけ
ける。

夜もすがら涙も文もかきあへず磯こす風に獨りおきるて
又おなじさまにて、古郷には戀ひしのぶおとうとのあまうへ
にも、ふみたてまつるとて、いそものなどはしづもいさ
さかつゝみあつめて、

徒らにめかり鹽やくすさびにも戀しやなれし里のあま
ほどへて、このおとゞひふたりのかへりごといとあはれに
て、みればあねぎみ、

玉づさをみるに涙のかゝるかな磯こす風は聞くこゝちして
このあねぎみは、中のるんの中將と聞えし人のうへなり。

今は三位入道と「か」おなじ世ながらとほざかりはてて、をこ
なひるたる人なり。そのおとうとのきみも、めかりしほやく
とある返事さまんにかきつけて、人こふる涙の海はみやこ
にもまくらの下にたゝへてなど、やさしくかきて、

もろともにめかり鹽焼く浦ならば中々袖に波はかけじを
この人も安嘉門院にさぶらひしなり。つゝましくする事ども
をおもひつらねてかきたるも、いとあはれにもをかし。ほど
なく年くれて、春にもなりにけり。かすみこめたるながめの
たど／＼しさ、谷の戸はとなりなれども、うぐひすのはつね
だにもおとづれこず。おもひなれにし春の空はしのびがたく

古今戀友則
の枕のしへ
あれど海は
をみるめ
はあひひ
ぞおひひ
る
首爲尹卿千
何となく
雨に花は
らぬはく
もりさく
べき頃や
きさらぎ
の空
爲廣卿集
これぞこ
の月の桂
の花曇か
すむをよ
恨みけむ

頼むぞよ汝干に拾ふうつせ貝かひある波の立ちかへる世を
くらべみよ霞のうちの春の月はれぬ心はおなじながめを
しら浪の色もひとつに散るはなを思ひやるさへ面影にたつ
東路の櫻をみても忘れずば都の花を人やとはまし
やよひの末つかたわか／＼しきわらはやみにや、日まぜにお
こること二たびになりぬ。あやしうしをればはてたる心ちしな
がら、三たびになるべきあかつきよりおきるて、佛のおま
へにて、心一つにして、法華經をよみつ。そのしるしに
や、なごりもなくおちたるをりしも、都のたよりあれば、か
かる事こそなご郷へもつけやるついでに、れいの權中納言
の御もとへ、たびの空にてあやふきほどの心ほそさも、さす
が「たもつ」御法のしるしにや、けふまではかけとゞめてと
かきて、

いたづらにあまの鹽焼く煙とも誰かはみまし風に消えなば
と聞えたりしを、おどろきて、かへりごととくし給へり。

消えもせじわかの浦路に年をへて光りをそふる蟹の藻鹽火
御きやうのしるしとたふとて、

頼しな身にそふ友となりけりたへなる法の花の契りは
卯月のはじめつかた、たよりあれば、又おなじ人の御もと
へ、こぞのはるなつのこひしさなどかきて、

見し世こそ變らざるらめ暮れはてし春より夏にうつる梢も
夏衣はやたちかへて都人今やまつらむ山ほとゝぎす

九條廢帝
姫宮
後鳥羽院
皇女建保
雲大親
五年内親
王御親
三九月十
四日野
宮同十
九日着
續後撰戀
五にうき
にうきみ
こがかり
ねはかり
ゆきはは
かぜだに
もみず

むかしの戀しきほどにしも、又みやこのたより「あり」とつけ
たる人あれば、れいの所々へのふみかく中に、いさよふ月と
おとづれ給へりし人の御もとへ、

朧なる月は都の空ながらまだきかざりし波のよなく
など、そこはかとなきことどもをかき「て」聞えたりしを、た
しかなる所よりつたはりて、御かへりごとをいたうほどもへ
ず、まちみたてまつる。

ねられじな都の月を身にそへてなれぬ枕の波のよなく
權中納言のきみは、まぎるゝことなくうたをよみ給ふ人なれ
ば、このほどてならひにしたる歌ども、かきあつめてたてま
つる。うみちかき所なれば、かひなどひろふをりも、なぐさ
の濱ならねば、なほなき心ちしてなどかきて、

いかにしてしばし都を忘貝浪のひまなく我ぞくだくる
しらざりし浦山風も梅が香は都ににたるはるのあけほの
花ぐもりながめて渡る浦風に霞たゞよふ春のよの月

東路の磯山かけのたえまより波さへ花のおもかけにたつ
都人思ひもいでば東路の花やいかにとおとづれてまし

など、たゞ筆にまかせておもふまゝに、いそぎたるつかひとて
かきさすやうなりしを、又ほどへす返しし給へり。日ごろの
おほつかなさも、このふみにかすみ晴れぬる心ちしてなど侍

そのかへし、又あり。
草も木もこぞみし儘に變らねどありしにもにぬ心ちのみして
さてほとゝぎすの御たづねこそ、

人よりも心つくして時鳥たゞ一聲をけふぞ聞きつる
さねかたの中將の、五月まで時鳥きかで、みちのくにより
都にはきゝふるすらすらむ郭公せきのこなたの身こそつられれと
かや申されたる事の候なる。そのためしとおもひいでられて
此の文こそことにやさしくなどかきておこせ給へり。さるほ
どに、う月のするにたりければ、ほとゝぎすのはつねほのかに
もおもひたえたり。人づてに聞けば、ひきのやつといふ所に
あまた聲なきけるを、人きゝたりなどいふをきゝて、

忍びねはひきのやつなる郭公雲るに高くいつかなのらむ
などひとり思へども、そのかひもなし。もとより東路は、み
ちのおくまで、昔より時鳥まれなるならひにやありけむ、ひ
とすぢに又なかずばよし。稀にもきく人ありけるこそ、人わ
きしけるよと、心つくしにうらめしけれ。又和徳門院の新中
納言ときこゆるは、京極中納言の御むすめ、ふか草のさきの
齋宮ときこえしに、ちゝの中納言のまるらせおき給へるまゝ
にて、年へ給ひにける。この女院は、齋宮の御子にしたてま
つり給へりしかば、つたはりてさぶらひ給ふなり。うきみこ
がる、もかり舟などよみ給へりし民部卿のすけのせにうとて

24年弘安元年二月三日
記云嘉曆八年八月十一日
常樂寺終焉
歌去月終焉
アトマト終焉
トナセリト終焉
ヨノナセリト終焉
ヲノナセリト終焉
是弘安元年
テ弘安元年
十年弘安元年
本十弘安元年
作十弘安元年
カ非ルナ
ナモ六ナ
ラノニ諸守

ぞおはしける。さる人のこにて、あやしきうたよみて、人
はきかれじとあながちにつゝみ給ひしかど、はるかなるたび
の空おほつかなさに、哀れなる事どもをかきつゝけて、
いか許り子を思ふつるのとび別れ習はぬ旅の空になくらむ
と、文のことばにつゝけて、歌のやうにもあらずかきな給
へるも、人よりはなほざりならずおほゆ。御かへり事は、
それ故にとび別れても蘆たづの子を思ふかたは猶ぞ戀しき
ときこの。そのついでに、故入道大納言、草のまくらにもた
ちそひて、夢に(も)みえさせ給ふよしなど、この人ばかりや
あはれともおほさむとて、かきつけてたてまつる。
都までかたるも遠し思ひねに忍ぶ昔の夢のなごりを
はかなしや旅ねの夢に迷ひきてさむればみえぬ人の俤
などかきてたてまつりしを、又あながちにたよりたづねて、
かへりごとし給へり。さしも忍び給へりしも、折りからな
りけり。

東路の草の枕は遠けれどかたればちかきいにしへの夢
いづくよりたびねの夢に通ふらむ思ひおきつる露を尋ねて
など宣へり。夏のほどは、あやしきまで音づれもたえておほ
つかなさも一かたならず。都のかたはしがのうら浪たち、
山、三井寺のさわぎなどきこゆるも、いとおほつかなし。か
らうじて八月二日ぞつかひまちえて、日ごろよりおきたりけ

る人々のふみども、とりあつめてみつる。じじゆうの(さいし
やうの)君のもとより、五十首の和歌をよみたりけるとて、き
よがきもしあへずくだされたり。うたもいとをかしくなり、ま
さりけり。五十首に十八首(一)てんあひぬるもあやしく、心
のやみのひがめこそあるらめ。その中に、
心のみへだてずとも旅衣山路かさなるをちの白雲
とあるうたをみるに、旅の空を思ひおこせてよまれたるにこ
そはと、心をやりてあはれなれば、その歌のかたはらに、も
じちひさく返事をぞかきそへてやる。
戀ひしのぶ心やたぐふ朝夕に行きては歸るをちのしら雲
又おなじたびのだいにて、
かりそめの草の枕のよなくを思ひやるにも袖ぞ露けき
とある所にも、又かへりごとをぞかきそへたる。
秋ふかき草の枕に我ぞなくふりすててこしす蟲のねを
又この五十首のうたのおくに、こと葉をかきそふ。大かた歌
のさまなどしつつけて、おくに昔の人の歌、
これをみばいか許りかと思ひつる人に代りてねこそなかるれ
とかきつく。じじゆうのおとうとためもりの君のもとよりも、
廿首のうたをおくりて、これにてんあひて、わろからむ事を
こまかにしるしたべといはれたり。ことしは十六ぞかし。歌
のくちなればやさしくおほゆるも、返すく心のやみと、か

たはらいたくなむ。これも旅のうたには、こなたを思ひてよ
みたりけりとみゆ。くだりしほどの日記を、この人々の許へ
つかはしたりしを、よまれたりけるなめり。
立ち別れふじの煙をみても猶ほそさのいかにそひけむ
又これも返しをかきつく。
かりそめに立ち別れても子を思ふ思ひをふじの煙とぞみし
また權中納言の君、こまやかに文かきて、くだり給ひし後は、
うたよむ友もなく、秋になりてはいとおもひいでできこゆ
るまゝに、ひとり月をのみながめあかしてなどかきて、
東路の空なつかしきかたみだに忍ぶ涙にくもる月かけ
この御返事、これも古郷の戀しさなどかきて、
かよふらし都の外のみみても空なつかしきおなじ眺めは
都の歌ども、このちおほくつもりたり。又かきつくべし。
しき島や やまとの國は あめつちの ひらけ始めし
むかしより 岩戸を明けて おもしろき かぐらのことば
うたひてし さればかしこき ためしとて 聖の御世の(も)イ
みぢしなく 人のこゝろを たねとして 萬のわざを
いなりければ おに神までも あはれとて 八島の外の
ことのはに おに神までも あはれとて 八島の外の
よつのうみ 波もしづかに をさまりて 空ふく風も
やはらかに 枝もならさず ふるあめも 時さだまれば
きみへのの みことのまゝに したがひて わかの浦路の
もしほぐさ かきあつめたる あとおほし それが中にも

名をとめて 三代までつぎし 人の子の 親のとりわき
ゆづりてし そのまことをば もちながら 思へばいやし(き)
しなのなる そのほ、きぎの そのはらに たねをまきたる
とがとてや 世にもつかへよ いけるよの 身をたすけよと
契りおく すまとあかしの つぎなる ほそ川山の
山川の わづかにいのち(を) かけひとて つたひし水の
みなかみも せきとめられて いまはたゞ ぐがにあがれる
いののごと かぢをたえたる ふねのごと よるかたもなく
わびはつる こを思ふとて よるのつる なく(都)を(を)
いでしかど 身はかずならず かまくらの 世のまつりごと
しげければ きこえあけてし ことの葉も 枝にこもりて
うめの花 よとせの春に なりにけり 行方もしらぬ
なかざらの 風にまかする なるさとは 軒端もあれど
さゝがにの いかさまにかは なるさとは 世々の跡ある
玉づさも さて朽ちはてば あしはらの 道もすたれて
いかならむ これを思へば わたくしの なげきのみかは
世のためも つらきためしと なりぬべし 行くさきかけて
さまん(に) かきのこされし ふでの跡 かへす(も)
いつはりとおもはましかば ことわりを たすの森の
ゆふしでに やよやいさゝか かけてとへ みだりがはしき
するの世に あさはかとなく なりぬとか いさめおきしを
わすれずば ゆがめることも またたれか 引きなほすべき

とばかりに 身をかへりみず たのむぞよ その世をきけば
きてもさは のこるよもぎと かこちてし 人のなきけも
かゝりけり おなじはりまの さかひとて 一つながれを
くみしかば 野中の清水 よどむとも もとの心に
まかせつゝ とゞこほりなき 水ぐきの 跡さへあらば
いとゞまた つるが岡への 朝日かけ 八千代の光り
さしそへて あきらけき世の なほもさかえむ
長かれと朝夕祈る君が代を大和こと葉にけふぞのべつる

のこるよもぎとかこちけるといふ所のうらがきに、皇太后
宮の大夫しゆんぜいの「卿の御むすめ、ちのゆづり」とて、
はりまのくにこしべのしやうといふ所をつたへしられける
を、(ちとうの)さまたけおほく(候ひければ、むかし)武藏
のぜんじ(どの)へ、ことなる(御)をせうにはあらでまらせ
られける歌、しんちよくせんに「も」入り侍るとやらむ。心の
まゝのよもぎのみしてといふ(御)うたを、かこちて申され
(候ひ)ける歌、
君一人跡なきあさのみをしらば残る蓬がかすをことわれ
とよまれ(候ひ)ければ、ひやうぢやうにもおよばず、廿一
かでの地とうのひはうを、みなとゞめられ(候ひ)けり。
そのち野中のしみづをすぐとて、

都のつと

宗 久

觀應の頃、一人の世すて人あり。みづから銀山鐵壁をとほ
る志なしといへども、いにしへ樹下石上をしめしあとをした
ひて、いづくもつひのすみかならねばとおもひなしたつゝ、し
らぬひのつくしをたちいでしより、こゝかしこまよひありき
侍りし程に、いさゝかしたるたよりありしかば、大江山の雲に
ふし、いく野の原の露にやどりて、さすらひ侍りしほどに、
丹波國はや山といふ所に行きぬ。身をかくすべき宿とまでは
たのまねど、その年をばそこにて過し侍りて、又の春やよひば
かりに京へのほりて、二三日侍りしほどに、清水、北野の宮な
どへまうでつゝ、それよりあづまのかたへ修行におもひ立ち
侍りき。まだ夜をこめて都をいづ。有明の月のかけ東川の浪
にうつりて、なきのこれる鳥の聲とほ里の跡にきこえて、そ
こはかとなく霞わたれる空のけしきいとおもしろし。やがて
あふさか山をこゆ。杉の下道いまだこぐらく、關の岩かどふ
みならずもたどしきほど、都のかたいつしかへだゝり行
くも、三千里の外のこととして、ふるさとをわかれしよりも
なほ心とまり侍りしにや。その日は石山につやし侍りても、
一すぢに無上菩提心の願ひを祈り申しき。あくれば下向の人
にともなひて、日出づるほどに、志賀の浦をすぎ、こぎ行く舟

忘られぬもとの心のあり顔に野中の清水かけをだにみし
とよまれたるも、そのこしべのしやうへくだられける
の「うたにて候。(新勅撰に入りて候。)
(永仁六年三月一日書之)

このあぶつばうと申す人は、定家の息爲家の室なり。きんだ
ち五人ましゝ候。はりまの國ほそ川のしやうを爲家よりゆ
づりおかれ候を、爲氏たふくたるによりてあふりやう候そし
ようのために、かまくらへくだられ候時の道の日記にて候。
爲氏もちんじやうのため「に」かまくらへ下向。兩人ともにか
まくらにて死去せられし(なり)。そしよは爲氏のかたへはつ
けられず候ひしとかや。あぶつは安嘉門院の四條と申す人な
り。爲相のは、なり

右十六日夜日記以岡山少將光政朝臣筆本書寫以夫木抄扶桑拾葉集
及他本按合畢

右いきよひの日記内閣文庫所藏古寫本を以て校勘す
(昭和三年五月)

の跡はるかにみわたされて、かの滿誓沙彌がなにしたとへむ
と詠じけるふせいも心にうかび侍り、えいざんりようごんの
先徳、和歌はけろんのもてあそびなりとてとゞめられけるが、
ある時惠心院にて、あけほのに湖水を見だしておはしける
に、おきに舟の行くをみて、人のこのうたを詠吟しけるをき
き給ひて、觀念の助縁となりぬべかりけりとて、そのち廿
八品十樂の歌などおほくよまれけると申しつたへ侍るも、さ
もやとおほえ侍り。鏡山をすぐるとても、すみ染にあらたむ
るわがおもかけもはかりある心地して、いざたちよりてと
もおほえ侍らず。

立ちよりてみつと語るな鏡山名を世にとめむ影もうければ
さてあづまぢのたびの日かすもやう／＼つもりゆけば、名
だかきところ／＼、ふはの關なるみ淵、たかし山、二むら山
など過ぎて、さやの中山にもなりぬ。かの西行がまたこゆべし
とおもひきやとよめるも、あはれにおもひあはせられぬ。さ
やの中山、さよのなかやまといふ説々あるにや。中納言師仲、
當國の任にてくだられけるに、土民さよの中山と申し侍りけ
るとて、中古の先達などもさやうによまれて侍るにや、撰集
の中にもみおよぶ心地し侍りし。源三位頼政は長山とぞ申し
ける。このたび一人の老翁のありしにたづね侍りしかば、こ
とやうもなくさやの中山とこたへ侍りき。
こゝはまたいづくととへば天彦の答ふる聲もさやの中山

新泰勅時世
平泰勅時世
さの中にあ
くは跡にな
けり心にな
まのりのよ
しもぎのみ

拾遺哀傷
世の中を
なへむに
とへむに
ぼらむに
ぎ行く朝
しあら浪
のあとの

古今雜山
か今立山
よりかみ
てゆかむ
年へぬむ
身は老む
やしぬる
とやしぬ
新古今齋
旅今齋
又こゆべ
しとおも
ひきやも
のちなり
けりさ夜
の中山

やがてするがの國うつ山をこゆ。鳶の下道もいまだ若葉の
ほどにて、紅葉の秋おもひやられ侍り。
もみぢせば夢とやならむうつ山現にみつる鳶の青葉も
清見が關にとまりて、まだ夜ぶかく出で侍るとて、おもひつ
づけ侍りし。

清見がた波のとざしもあけて行く月をばいかによはの關守
たぬ日もありときし田子の浦なみにも、たびの衣手はい
つとなくしほたれがちなり。ふじの山をみわたせば、いとふ
かくかすみこめて時しらぬ山とも更にみえず。朝日のかけに
たかねの雪なほあざやかにみえて、鏡をかけたるやうなり。
筆にもおよびがたし。

時しらぬ名をさへこめて霞むなりふじのたかねの春の曙
ふじのねの煙の末は絶えにしを降りける雪やきえせざるらむ
それよりうき鳥が原を過ぎ、はこねにまうづ。けに権現のあ
らたなる御ちかひならずば、この山のいたゞきにかゝる水あ
るべしとおほえず。いとふしぎなり。此所をばこの世なが
らのめいどなりと申しつたへたるにや、ところのさまもなべ
てにはかはりたることもおほかりし。いつとなく波かぜあ
れて、いとすさまじくみゆ。

箱根路や水海ある、山風に明けやらぬよのうさぞしらるゝ
さてさがみのくにかまくら山のうぢといふ所に行きつきて、
いにしへのゆかりありし人をたづねしに、昔がたりになりぬと

古今戀
よみ人し
らみ子
するが
る田子の
うらなみ
はあれど
たぬ日
もきみ
こぬみ
はなし

伊勢物語
むさしの
はけふは
なやきそ
わか草の
つまもこ
れもれり
れり

ぬひじりありけるを、村の人ひけ僧などなづけたるとかや、
いづれの所のいかなる人ともさらしにられず。その所にふゆ
のほどは侍りて、春になりしかばかんづけの國へこえ侍りし
に、おもはざるに一夜のやどをかす人あり。やよひのはじめ
の程なりしに、軒ばの梅のやうくちりすぎたる木のまに、
かすめる月のかけもみやびかなる心地して、所のさまも松の
柱竹あめ垣しわたしてゐなかつた、さるかたにすみなし
たるもよしありてみえしに、家あるじいであひて、心あるさま
にたびのうれへをとぶらひつゝ、世をいとひそめける心ざし
のほどなど、こまかにとひきつて、われもつねなき世のありさ
まをおもひしらぬにはあらねども、そむかれぬ身のほだしの
みおほくて、かゝづらひ侍る程に、あらましのみにてけふま
で過しはべりつるに、こよひの物がたりになむ、すてかねける
心のおこたりも、今さらおどろかされてなどいひて、しばしは
こゝにとままりて、道のつかれをもやすめよとかたらししか
ど、すゑにいそぐ事ありしほどに、秋のころかならずたちか
へるべきよしちぎりおきていでぬ。その秋八月ばかりに、か
の行方もおほつかなくて、わざとたちよりてとひ侍りしかば、
その人はなくなりて、けふ七日の法事おこなふよしこたへし
に、あへなさもいふかぎりなき心地して、なかいかいますこし
いそぎてたづねざりけむ、さしもねんごろにたのめしに、い
つはりのある世ながらも、いかに空だのめとおもはれむと、

きしかば、はやうすみける所のさまなど見侍りて、いと
世のはかなさもおもひしられ侍りき。

みし人の昔の下なる跡とへば空行く月も猶かすむなり
そのあたりにかりのやどりをたづねとままり侍りしに、あ
ぎの僧などあまたありし中に、ひたちの國たかをかといふ
所に、やむごとなきちしきおはすとかたる人侍りしかば、や
がてたづねまかりぬ。法雲寺といふ寺あり。宗已庵主とて、
空岩和尚の高弟にておはしけるが、在唐久しくし給ひて、天
もくの中峯和尚などにもまみえ給ひけるとかや。世をすつ
とならば、かくこそあらまほしくおほえしかば、其の山に三間
の茅やをむすびて一夏を過し侍りぬ。又甲斐國とくさ山に、山
ごもりひさしき僧ありとき、しかば、かのむろにもたづねま
かりて、しばしありて、又ひたちの國へ歸り侍りしに、むさ
しのはてなき道に行きくれて、その夜は道づれの僧などあ
またありしも、みなかりそめの草の枕をむすびてとままり侍
りしほどに、この野はむかしもぬす人ありてこそ、げふはな
やきそともよまれるとき、おきしかど、さまでやはとおも
ひしに、昔の衣をさへひきてかへりし白波のあらかりしなご
りにいと旅の床もものうくこそ侍りしか。

厭はずばかゝらましやは露の身のうきにも消えぬ武藏野の原
そののちなほかなたこなたへちしき編参し侍りしに、ち、
ぶ山といふ所に年久しくすみて、かりにもさとなどへもいで

心うくぞ侍りし。さて終のありさまなどたづねきしかば、い
まはの時までも申し出でしものをとて、跡の人々なきあへり。
有侍の身、はじめておどろくべきにはあらねども、無常じん
そくなるほども、今さら思ひしられ侍りし。さてこの人は
萬にすける心のありし中にも、和歌の浦波に心をよせ侍りし
と人々かたりしかば、むかしのそいをたづねて、こゝろざしの
ゆくところをいさゝかやどのかべにかきつけて出で侍りぬ。
過ぎにしやよひの十日あまりの頃、ひなのなかぢのた
よりに梅のほひをたづね、あづまの軒ばのほとりに
月のなさをかたあそぶことありき。宿のあるじ夜もす
がら今むかしのことをかたり合せ、やまともろこしの歌
をいひ出でて、旅のおもひをなぐさめ侍りしかば、心をか
りのやどりにとまめながら、先途を萬里の雲にいそぎ、後
會を三秋の月にやくして立ちわかれにし後は、かさねて
ありしちぎりをたがへじとて、今この所にたづねきたれ
るにかの人すでに世をはやうせり。一夜のおもかけ二た
び見ることをえず。れんほのおもひむねをこがし、愛執
の涙袖をうるほす。これによりてかなしみのうちうご
く心ざしを種として、なけき外にあらはるゝことをし
す。たとひ綺語のあやまれるたはぶれなりといふとも、
なほ讚佛のはるかなるえんとならざらめかも。
袖ぬらすなけきのもとをきてとへば過ぎにし春の梅の下風

拾遺哀傷
一條にしへ
はちるを
や人のむ
花こけむ
こふかし
曾丹集
わがやど
のもとあ
からんさ
かねども
かみか
たのみ
たのし

のうらの東にむかへる入海に、かけはしたかくかけて、うらより遠にかよふみちあり。又磯のきはをめぐりて、山の陰を行く道もあり。あまの家もおほくつくりならべたるに、けぶりのたち登るも、これや鹽やくなるらむとみゆ。浦こぐ船のつなでも所がらにや心ひくすぢなり。更け行く月からるの音たえんくきこえて、いと心すぢし。わが御門六十餘國の中にしほがまといふところにたるなしといにしへの人のいひけむも、ことわりなりとおほえし。

有明の月とともにや鹽がまの浦こぐ舟も遠ざかるらむ
それより浦づたひに松島にたづね行く。けにこゝろあるあまのすみかとみえたり。又こゝに圓福寺とて寺あり。覺滿禪師開山の地なり。僧衆百人住すとかや。寺のまへみなみはしほがまの浦へつゞきて、千島などいへどもなほそのかぎりみえず。あるはおきの遠島とて、海をへだててはるかなり。そのあひだにこじまおほくみえたり。松しまのひんがしにあたりて、はなれたるしまに橋をわたして、ひとつの堂あり。五大堂といふ。やがて五大尊をあんちせり。みなみへむかへる山陰の磯ぎはに、石をたかくたゝみて、ほそき道あり。海のきはをつたひ行きてみれば、すさきに松おひかたぶきて、木末を浪にひたせり。ゆきかふふねはさながらしづえのみどりをこえ行く。それよりすこしへだゝりて小島あり。これなむをじまなるべし。小舟につなをつけて、くりかへしつゝかよふ

所なり。このしまに寺あり。來迎の三尊ならびに地藏菩薩をすゑたてまつれり。をしまより南一ちやうばかりさしいでて、松竹生ひならびて苦ふかく心すぢきところあり。この國の人のほかなくなりける遺骨をさむる地なり。その外發心の人のきりたるものとゆひなどもおほくみゆ。いとあはれに心すみておほえしかば、二三日とゞまり侍りき。

誰となき別れのかずを松島やをしまの磯の涙にぞみる
いまはとて、もとの道へと心ざし侍りしほどに、またむさし野にもなりぬ。こゝにておもひのほかに、都の人のしきしまの道のことなどたづね申し侍りしにゆきあひぬ。そのほかむかししれりし人ひとりふたりありしかば、折りからうれしくおほえて、やがてともなひつゝ、ほりかねの井こゝかしこみめぐり侍りしかば、このたびのおもひでなる心地ぞし侍りし。素性法師がうつ山の山にて在五中將にゆきあひけるもかくやとおもひやられ侍りき。さても末の松山はことに名だかき所なるを、たゞひとりみちゆきぶりにみすぢきむも、ねんなきやうに侍りしかば、むかしもながらのはしのかなくづゝるでのかはづのひほしをだにこそもち侍れ。わすれがたみにもし侍らむとおもひしかば、松の落葉などかきあつめて侍りしなかに、まつかさといふ物のありしと、又しほがまの浦にてうつせ貝などやうのものをひろひあつめて侍りしを、この人にとりいだしてみせ侍りしかば、かく申されし。

伊勢物語
くありはら
のあねは
の松の都
のつとに
のつとに
まいぎと
ましを

末の松山まつかさはきたれども波だにこさば又やぬれなむ返し、
浪こさぬ袖さへぬれぬ末の松山まつかさのかけの旅ねにさらにくちせぬちぎりの程もおもひしられて、いと旅の衣手もしほたれまさり侍りしに、またかの人、
ともなはで獨りゆきけむ鹽竈の浦の鹽がひみるもかひなしかへし、

鹽がまのうらみもはてば君が爲拾ふ鹽貝かひやなからむかくのみあくがれゆくほどに、日かずもつもりて、さすがふる郷のかたもおほつかなくて、いづくを家路ともさだむるとしはなけれども、たちかへるべき道はいそがれ侍りしほどに、一夜のたびのやどにて、老の眠りをさまして、壁にむかへるのこりのともしびをか、けそへて、路すがらの名だかきところどころのこゝろにのこりしを、わすれぬさきにとて、おもひ出づるまゝに、前後のしだいをいはず。これをしるしつけて、みやこのつとにとて持ちのほりぬ。

僧に宗久といふ人あり。心を一枝の花にそめ、おもひを八重の風にかけて、よもぎふの跡さだむる所なく、うき草の露さそふ水にまかせてなむ、まどひありき侍りけり。三芳野の花の春は、山のあなたをかくれがとたのみ、むさし野の月の秋は、草のゆかりをやどりにて、あかしくらし侍れば、六十餘州のとさう残る所なく、三十一字の風情尋ねぬかたもなし。いに

しへ賢かりし人も、あるは竹を愛する事をこのみ、あるは詩をつくりし事を身にそふやまうとなむしける。此人もかくのごとくなるべし。墨染の袖のうちには、とこしなへにちひさき硯をはなたす。むかしのつえのほとりには、又みじかき筆をなむとりそへ侍りける。剡溪の曉の雪をのぞまざれども、すきの友をたづねてはそこはかとなくあくがれ、廬山の夜のまをきかざれども、沈味のはらわたをくだきて心ざしをのべすといふことなし。觀應の頃にや、大江山生野の道を分け過ぎてより、陸奥しほがまの浪にうかぶまで、名ある野山のするゑには、おもひの露をのこしおき、なさけおほき草木のかけには、言のはをかきあつめて、あねはの松にはあらねども、都のつととなづけ侍りぬ。誠におろかなるもてあそびに似たりとはいへども、などか心をつたふるをしへともなり侍らざらむ。たちまちに嗟嘆のこゝろざしにたへず。いさゝか荒蕪の言葉こそへ侍るばかりなり。

于時貞治六年春。再披見之次而記之而已。

後普光園攝政

開路 老槐 在判

右都のつと以扶桑拾葉集并古寫本校合聊注愚案畢

さし竹のあみどばかりぞのこりける。けにあき風もたまるまじうみえたり。

昔だに荒れにしふはの關なれば今はさながら名のみなりけり關の藤川イナシはそのなもなつかしければ、わきてこととひ侍りし。名はことくしけれど、さしもなき小川にて、よろづ代までのながれともわかイナシれず、されど「たえせぬためしはいとたのもしくて、

さても猶沈まぬ名をやとゞめましか、る淵瀬の關の藤川みののお山とかやは、はやかの小島のあたりちかく聞えしかば、行くさきもいまはほどあらじと、けふぞちと心イナシもおちる侍りし。名にしおふ一松イナシもなほそのまゝにて、昔の跡かはらぬよし、このあたりの「しもべ」かたりしを、よくもたづねきかざりしぞ、後までくやしかりし。

うかりけるみののお山のまつこともけに類なき世の例なかくて、一三日のみちを、五六日のほどに、やうくとからうじて、をじまにイナシまるりつきぬ。みもならはぬ所の景色、左も右も聳えたる山に雲ふかくかゝりて、さらに晴まなし。けに又なうあはれるものはかゝる所なりけりイナシ、時しも秋のみ山のありさま、たゞおしこめて、いひしらぬもののおはれいはむかたイナシもなし。鹿の音、蟲の聲も、かの松蔭にて聞きし秋は、もの數ならず覺えしは、たゞ所がらの思ひなしに

新古今後
政京極攝
人すまぬ
屋の板關
にさのあ
はたのち
の風たれ
秋

時納言光
納言正權
位日野大
納言資大
卿男三

もて世のありさま身のしぎイナシ(など)さままゝに奏せしかば、これまでまるりぬるうへは、床をならべし契りさらにかはり侍らじと仰ごとありしに、

しらざりき習はぬ山の陰までもゆかを並む契りありとはイナシ神代をかけたるふることイナシ「もとりいでたるも、いとをこがましくや。そののちは朝夕なれイナシ」つかへ侍る事むかしにたがふ事なし。鎌倉大納言のほり侍るべき勅書の請文申し侍るとて、たゞこれをのみまつことにて、おほやけわたくし慰み侍りし。八月イナシ(十五)五日雨のうちに題を給はりて、

戀天象
佛を野山の末にのこせとや月をかたみに契り置きけむ

横雲の波イナシこそ峯もほのくくと頓てを島のかげぞ明けゆく此所をイナシはじめてつかうまつりたるよし、人々申し侍りしやらむ。かすく多かりしかどみな忘れぬ。又當座のいたづらごとは中々みぐるしうて、みなもらしつ。御製などの耳にたつも多かりしかど、みなかきとゞむる事もなくて、世の人はなか／＼とりおきても侍らむ。尋ねいだしてさらに加ふべきり。な八月十日イナシころいつの日にてありしやらむ、時雨にさきだちて、いろふかき紅葉の枝に、くれなるのうすやうむすびつイナシけ「られ」て、仲房朝臣もてくだされ「たり」し。

や。をばすて山ならねどいと慰めかねべき旅の空も、あまりによろづたどくしかりしかば、二條中納言良冬のたちいりたる所へまづおちつきぬ。この宿のありさま、かやが軒端竹のあみ戸、まばらなるすのこより、風もたまらず吹きあけて、一夜だになほやどりがたし。いま一日もといそぎて、けふぞやがて、小島の頼宮後光嚴へ参りし。雨さへかきくれて、直衣の袖もいとゞしをればはてぬ。冠イナシ(の)かげのめづらしきにや、山人めくものおほく見侍りし。内裏のありさまはこのあたりにイナシ「は」まれなるイナシ「は」板ぶきなれど、山はさながら軒ばにて、雲霧のはれまなし。やがて御前のめしありて、この「ほどの」世のしぎなど奏す。山よりの御みちのわりなかりし事など、さまざまあはれる事をぞ仰ごとありし。こよひは瑞岩寺とかやいふ寺尋ね出でてとゞまる。この堂いとイナシ「見所多し。山陰ふかう作りなして、岩水」水のながれ、都にてもかゝる所はをかしかりぬべき山水のさまなり。又の日もなほ「日」一日やみくらす。にがくしくしてその夜はあけぬ。たび「ね」の心ほそさいとやるかたぞなきやイナシ。

いとゞ又うきに憂きそふ旅ねかなうかれ心ちの夢の紛れに時光朝臣のさぶらふ所イナシ「を」あけて、やすみ所に給ひしかば、二三日ありてぞ、うちずみの心イナシ「に」てありし。賢俊僧正

まだしらぬ深山隠に尋ねきて時雨もまたぬ紅葉をぞみる御返し、

故郷に歸るみゆきのをりから紅葉の錦かついそぐらむ八月十日あまりは、日數のみふる雨の中イナシ「は」いとゞはれぬ雲るは山たかき心地してもむづかしイナシ「き」)。軒はさながら雲霧にとぢられて、みねのイナシ「あらし」松かぜあらましく吹きおろして、よろづにすさまじかりし事のみぞ多き。かゝるところを百敷とたのみたるも、ありがたき世のためしなれど、むかし木の丸殿などいひけるもかくこそイナシ「は」ありけめ。この國のみゆきのためしイナシ「も」、元正天皇などたび／＼あとする事なれば、おどろくべき事ならねど、ならはぬ山の御すまひ猶世づかぬ心ちして、都の戀しさぞあけくれの思ひにてありし。名だかきなかばの月をさへ、隔てがほなるあま雲は、なほはれやらす。二千里の外イナシ「の」古人の心もかくこそはと、とりあつめてものあはれなり。夜一よ吹きつる風明方よりしづまりて、今夜の月はなほわするまじきにやとて、人々に短冊たまはす。殿上の御遊などにはあらで、めなれぬえびす衣のうへ人どものけしきイナシ「も」、ものゝふめきたれど、おの／＼思ひの露をよすがにて、なほことイナシ「の」葉の花をあらそふなるべし。夕風又ふきたちて程なくすみのほり、月山陰までものこりなうさし入りて、いとくまなし。くもりなき御代のためしとイナシ「かねて」し

詞花集雜
下井の水
昔はかはら
ねどうはら
ねるかづつ
ぞれるかへ
にけるへ

る、心ちせしかば、行するゑかけて「いとたのもし。
名に高き光りをみよのためしとや最中の秋の月はすむらむ
鎌倉イナシの大納言イナシのほり、けふくとのみ聞えしかど、た
だおなじさまにて日かず経しかば、心もとなしとて、度々
御つかひをつかはす。今はほどあるまじきよし、おほやけわ
たくしへうけ文のありしにぞ、たれもくあんどしたるやう
に侍りし。都よりあまたまるれる殿上人などは、おのがさま
ざまうちむれて、こゝかしこの名所などへ行きてあそび侍り
しかど、なほ心に茂る八重むぐらの露けさに、さやうの友に
だにさそはれず、あかしくらすも、たゞ我が身ひとつの秋との
み覺えて、いとなぐさめがたし。しんによ養老の瀧などいふ
所へ行きて、かのながれにふれぬれば、やまひもやがてい
侍るよし人々申しあひしかど、さやうの所へもさし出でず。夜
ぶかき砦の音などの聞えくるにぞ、人のすみかありとも覺え
侍りし。ねざめの里とかやいふもこのわたりぞかし。けにあか
しかねたる草の枕は、ことわりすぎたる秋の夜なり。内裏の
庭もさながら田面につゞきて、いなばの山も遠からねば、又
かへりこむ都のたのみならでは侍る事もなし。
思ひきや思ひもよらぬ假イナシねしていなばの月を庭に見むとは
かゝるいたづら「事を」のみおもひつゞけてぞ、心ひとつを
ば慰め侍りし。八月のするかまくらの大納言すでに尾張に着
きぬと奏せしかば、同廿五日をじまの頼宮よりたるるに行幸

あり。そのありさま、非常イナシの儀にて、腰輿にめさる。朝衣の
人はなくイナシ「て、えびすごろもとかやの姿めづらしき事なり。
おもひくなりし出たち中々見所もありしにや。ほうれんの
かたびらを腰輿にわたして懸けたりしぞ、はじめたる事な
れど、かくもありぬべき事なり。あなかの民どもさながら
見まらせむも忝き事なれば、かやうに申しさたし侍りし
なり。たるるの頼宮は當國の守護頼康うけたまはりて造りま
うく。黒木の御所小柴垣などゆひわたして、かうくしく、
廻立殿大嘗宮などの心地ぞせし。入御のほど物みるものども
いづくよりか集りけむ、いとおほし。實澄朝臣御劍にさぶら
ふ。その儀常の儀にたがふ事なし。やすみ所は風もたまらね
ば、別の宿たづね出でて、よに思ひなしへだイナシ「りた」るやう
におほゆ。さてもこのわたりは名所などにもいたくもてあつ
かはぬ所なれど、かのたかつねの朝臣の、美濃のイナシ國司に
なされて下りけるイナシ「とき」に、うつれる影はとよみける、この
たる井の水の事にや。かくいふほどに、廿六日の夜、あふみの
凶徒ばら、はちやとかや、この國へうちいるべしとてひしめ
そかりしに、こよひはがくしくひしめきて、すではやは
近づきたるよし申しの、しり侍りしほどに、人々内裏へつど
ひまゐる。いかなるべきにかと、いと物さわがしくてイナシ「かくて

世をやつくさむと、心ほそさぞいはむかたなき。されど曉が
たに、別の侍らぬよし人々申し侍りしかば、夢のさめたる心
ちしておのくまかでイナシ「ぬ。馬ども」よういし、臨幸もいづか
たへかとまでさたありし。そのをりのさわぎ、申すばかりなイナシ「か
り」しイナシ「などぞ、中々いまの思ひいでとも申し侍りぬべき。
さて九月三日イナシ「に、將軍イナシたるるにつく。そのありさまめで
たういみじかりし事なり。まへ二三日イナシ「は、武士どもひますき
まなく、しゆくくにつく。もちつれたる旅のおもにも道
もさりあへず布引イナシ「に、つゞきて、よろづいまぞ心地ひろ
びろとおほえ侍りし。大納言は錦のよろひひた、れに小具足
にて、栗毛なる馬に乗る。さきうちは、ゆふき、小田、佐竹など
いふものどもなり。いろくイナシ「の具足ども、水のたるやうなる兜
のくはがた、さきにきらめきて、夕日にかややく。一日のま
るりなどの心地して、おのくイナシ「きらくしくぞみえし。後陣
には仁木兵部大輔、小山などいふ東國の武士かすをつくして
残るものなし。將軍の馬イナシ「の先には、命鶴丸心詞もおよばず出で
たち、坂東第一と聞えしくろき馬にぞのりたる。そのありさま
見所おほし。年たけたるあけまきの姿もすべてあしくもみえ
ず。まことにものにあひぬべきけしき人にすぐれたり。引馬十
正いづれもく心も及ばぬものどもなり。東國の名馬はのこ
りなくのほりたるよしぞ聞えし。佐竹ぶちなどいひし大馬ど

も、その數おほし。將軍やがてすぐに内裏へまゐる。頼宮の
外に、めし具したる軍兵をばとめ置きて、たゞ一人まゐ
る。庭上に入り、中門の前に立ちて、頭弁俊冬朝臣もて事のよ
しを奏す。西園寺左衛門督イナシ「いであひて引導す。弓矢を取りて堂
上の御前のめしあり。ほどなくまかりいづ。宿所はたる井の
長者が家なり。此所は、はじめ内裏になり侍りしほどに、お
それ申しけるを、たゞさぶらふべきよし、仰ごと承りてとゞま
りけるとぞ聞えし。おほかた垂井へ臨幸の後は、しんでんをさ
りて遊興イナシ「ものの音をもとめてふかくおそれ申しけるとぞ聞
えし。いとありがたき事なり。けに仁義をもわきまへてこそ、
これほどの運をばたもち侍るらめと返すくたのもしくぞ
うけ給はりし。鎌倉右大將イナシ「建久にはじめて上洛せられけるも
たゞかくこそはありけめ。都にてありしかば、主上晝の御座
に出御。頼朝卿イナシ「は、まごびさしの圓座に祇候のよし日記に見
え侍る。さやうの式も、御旅の御所なればにや、さたにも及
ばざりしやらむ。おなじき五日貢馬十イナシ「びき内裏へたてまつ
る。その外別して名馬などとおくりたりしかば、かひあ
る心ちぞせし。十五夜に、みちにて讀みたりしうたとて點申さ
れしかば、このみちにゆるされたる事もなくて憚りありしか
どイナシ「も、いなみがたうて、おつイナシ「くぞ墨をつけ侍りし。おほ
かたこのたびの御旅イナシ「の御イナシ「なぐさめは、たゞよるひる詩歌に

右本者。後普光園攝政殿述作也。以_レ彼真筆之本_一 將軍家
臨_レ寫之_一 校_レ合之_一。尤可_レ謂_レ證本_一者也。

文明第二之曆蜡月上浣 左近衛權中將藤原朝臣判

かきおきし昔をきくも君がすむ國に治る道はありけり

此一冊者。於_レ西周之旅店_一一覽之次。所_レ染_二柔翰_一也。依_レ爲_二

急本_一卒摸_二寫之_一。追可_レ清書_一而已。比興々々。

天文廿一年閏夏正十又九戸部尙書郎藤判

右小島のくちずさみ以_レ横田茂語藏及元祿七年印板扶桑拾葉集本_一校
合畢

右小島のくちずさみ内閣文庫所藏古寫本を以て校勘す

(昭和三年六月)

住吉詣

寶篋院贈左大臣義詮公

貞治三年卯月上旬のころ、津の國難波の浦みむとて、かの
所にまうでけるに、淀より舟にのりて、この河づらかしこ
の山々をながめ行くに、ころしも卯月の初めなれば、ちり残
りたる岸の山吹をみれば、春の名残ぞ忍ばる。垣ねの雪か
卯花に山郭公おとづる。夏山のしけみがするをみわたせ
ば、これなむ八幡山鳩の峯などふしおがみて、

石清水たえぬ流れをくみてしる深き恵みぞ代々に變らぬ
山崎、たから寺、田邊の里のなとうちながめ行くに、江口
の里といひ_てし_ばし_舟をとめて、かなたこなたをながめ
ありきけるに、日もくれぬ。いにしへ西行法師この所にやど
りせしこと思ひ出でられて、

惜みしも惜まぬ人も留らぬ假のやどりと一夜ねましを
夜明けもてゆくほどに、長柄といふ所につきぬ。いにしへは
此所に橋ありて、人のゆきかよひしが、今ははしの跡とて
は、わづかに古くひばかりなり。まことや、古きためしに人
のひくめるはことわりぞ。

朽ち果てし長柄の橋の長らへてけふに逢ひぬる身ぞふりにける
やうく難波の浦につきぬ。聞きしより_は、みるはまされ
り。蘆やのさと、みつの浦などいふよせくる波にをしやかも

めの、水をもてあそびてたはぶるさま、いとおもしろし。

難波がた蘆間の小舟いとまなみ棹の雫に袖ぞ朽ちぬる

みつの浦より舟に乗りて、こ、かしこを見るに、

聞きしより見るは勝れりけふこそは初めてみつの浦の夕波
たみのの島にさがりてみれば、あまの釣りする船ども、あま
た岸のほとりにこぎよせてやすらひるたり。つりのうけな
は、ぬれたるあみを、木の枝にかけおきたるを見て、

雨ふれどふらねど乾くひまぞなき田蓑の島の蟹のぬれ衣
それより南にあたりて、野田の玉河といふ所あり。この(川の)
ほとりに藤の花さきみだれたり。

紫の雲とやいはむ藤のはな野にも山にもはひぞかゝれる
これよりすみよしに詣でむとて、天王寺にたちより見れば、
聖徳太子四天王ををさめおき給ふ。又みづからの御像をす
おき給ふ。石の鳥居、龜井の水など、心しづかにながめて、

よろづ代を龜井の水に結びおきて行末長く我も頼まむ
それより住よしにまかりて、四社(の)明神ををがみ奉りて
四方の海深きちかひや日のもと民もゆたかに住吉の神
この御神は、和歌の道に心ざしふかき人をよくまもらせ給ふ
と、むかしよりいひつたへ侍り、ことに秀歌を好む人、この神
にまゐりて祈誓申せば、かならずその道にかなひけるとぞ。

神代より傳へ傳ふる敷島の道に心もうとくもあるかな

濱べにくだりて、松の木蔭にたちより見れば、まことに、
鴈なきて菊の花さくと、在原中將が詠せしことおもひ出で
て、

住よしの岸によるてふしら浪のしらす昔を松にとふらむ
はるかに海づらをみれば、西は淡路島、須磨、明石の浦などい
ふ。舟にてわたり見ばやなどおもへど、又世の中の銚楯によ
り、人のおそれもいかなれば、一夜をあかし都にかへり
ぬ。

淡路湯霞をわけて行く舟のたよりもしらぬ波の上かな
須磨の浦をみれば、しほやくけぶりのたちのほるを見て、
立ちのほる藻鹽の煙徒らにたが思ひよりくゆるなるらむ
あかしのうらを見て、

よみおきしことの葉ばかり有明の月もあかしの浦の眞砂地
また御前にまゐりて、いとま申して下向し侍りぬ。

みづがきのいく千代までもゆくすゑを守らせ給へ住吉の神

此の一卷(は)所々のさまを筆にまかせて書きしるし侍り。
又時の興にもなるべきかとなり。

卯月上旬

鶴ちよどのへ給ひし

義 詮 判

右住吉詣以宮部義正藏本書寫以扶桑拾葉集校合畢

右住吉詣内閣文庫所藏古寫本を以て校勘す (昭和三年六月)

道ゆきざぶり

前伊豫守貞世朝臣

(上)

きさらぎ廿日の夜ぶかく、かすみつ、山のはちかき月影
に、中なる川うちわたすほど、袖のしづくいと所せきたびの
衣の、あさ立ちそむるだに、かくしをぬるに、まいて行す
ゑの八重のしほぢのかいのしづく、思ひしられたり。その日
は山崎につきぬ。こゝは常にめなれし所なれど、このたびの
名残にや、ことならぬ草木の色もいと物がなし。つの國のあ
くた川にいたりぬるにも、ちりの身の行末いかとおほつか
なし。せ川、小屋野などいふところの下すどももの、ものみ侍
るとて、思ふ事なくいそがはしからぬけしきも、今はうらや
ましくおほゆ。

かく許り苦しからずば蘆火たくこやの中にも世をや盡さむ
川づらにそひて、木ぶかく物ふりたる山あり。鳥居たゞり。
そのあたりの人に尋ね侍れば、これは昔足姫の、もろこしの
三つの國したがへたまひ歸りたまひける時、この山によろひ
かぶとなど埋み給ひけるより、やがて武庫の山と申すとなむ。
このたびも荒き波ぢの障りなくなほ吹きおくれむこの山風
古集にも入江のす鳥いかにしてたつ跡にしも留る心ぞ
むこの浦の入江のす鳥いかにしてたつ跡にしも留る心ぞ

新校羣書類従 卷第三百三十三 道ゆきざぶり

うちでのほま打ちすぐれば、ざいご中將の、わがすむかた
といひけむ蘆屋のさとなりぬ。それよりこなたに磯ぎはち
かき松かけに、玉垣神さびて鳥居などたてる所あり。北野の
宮の、この所にやうがうしたまひてよりのち、御影のまつ原
と申すなるべし。

君がため暗かるまじき心には神も御影をうつさゝらめや
ほどなくいくた川につきぬ。この川に鳥のしますらをのつ
かとして、道のべちかく村だちたる。松風かすかにおとづれし
も、なにとなく聞き過ぐしがたかりき。さてみなと川といふ
ところ一夜とゞまりて、あけしかば、みやこより慕ひ來つ
るともだち一人ふたり、今はとあかれ行くほどに、いと心
ほそくて、いきうしといひつべきほどなり。

旅衣あさたつ袖のみなと川かはらぬせにとなほや頼まむ
須磨になりぬ。ところのさまは、あながちにこれぞと目と
どまるばかりのふしはなけれども、山がたかけたる家どもの、
物はかなげなるに、しばがきうちしつ、竹のすがきのふしに
くけにみえたるも、彼の昔の御まし所のさま思ひよそへられ
たり。こゝぞ關屋の跡とばかりいへど、この頃はあれたる板
屋だになく、まいてもる人もなかりき。磯ぎは近く行きめぐる
あまのを舟みゆ。かのしほちが、明石のすみ所にさしわたし
けむ浦つたひも、こゝなりけむかし。山もとの海づらをはる
ばると行くほどに、大藏谷といふところあり。松の木立しらす

の色までも心とゞまりぬべきを、名のことゞしけなるぞ心
うきや。あまさへ、たび人の舟どもうかゞふなる。しら浪の
よりくる舟(イ)などしけしなどいひおそりて、あはたゞしくい
そぎ過ぐるなるべし。うたて、などしもかゝるおもしろうき所
に、かやうのさはりの侍るらむ。明石の浦は、ことにしらはま
の色もげぢめ見えたるこゝちして、雪をしけらむやうなるう
へに、みどりの松の年ふかくて、はま風になびきなれたる枝
に手向草うちしけりつゝ、村々なみたてり。岡邊の家居も所
々に見えたり。住吉にては霞にまがひしあはち島も、ほどち
かくて殊に見どころおほし。播磨路はすべていづくも心とま
る所々ぞ侍る。いなみ野といふは、はるかにおしはれて、四
方にくまなく淺茅かれわたりて、やう／＼下もえいづるもい
と興あり。

勅なれば國治めにといなみ野のあさぢの道も迷はざらなむ
し水、かながさきなどうちすぐるに、それより南にあたり
たる所をとひしかば、しかまの里といふ。かちぢはすこしへだ
てたれども、河なみの海に出でたるけしき、はるかに見わたさ
れ、なにとなくおもしろし。又いさゝか行きすぎて、川のほと
りちかく、石の塚ひとつ侍り。これは神のいます所なりけり。
出雲路の社の御前にみゆる物のかたども一つ二つ侍りしを、
なにぞと尋ねしかば、この道をはじめてとほる旅人は、たかき
もいやしきも必ずこれをとり持ちて、石のつかをめぐりての

ちなし色の衣きたる神づかさども立ちなみつゝ、たびのぬさ
たてまつるべし。きびの中山とは、備中とこの備前との二つ
の社の中なればなるべし。谷川はおとに聞きしよりなほ心ほ
そけなり。うちつゞきたるいがきのさまは、けにぞかう／＼
しきや。この御社どもに、上矢一つづゝたてまつりぬ。さて
かるべ川、せいやまなど打ちこえて、屋蔭(イ)といふさとにとゞ
まり侍りぬ。

ものゝふの猛き名なれば梓弓やかけに誰か靡かざるべき
備後になりては、なか／＼名高きかたよりも、面白き所(イ)
そおほかりけれ。入海うちつゞきて磯ぎははるかに行きめぐ
るに、あまのすみかどもの山もとちかきも、けにかたゞよりあ
りで見ゆ。足引のやまわけくだりて、をのみの浦にいたり
つきぬ。この所のかたちは北にならびて、あさぢ深く岩ほこ
りしける山あり。ふもとにそひて家々所せくならびつゝ、あ
みほすほどの庭だにすくなし。西よりひんがしに入らみとほ
く見えて、朝夕しほのみちひもいとほやりかなり。風のきほ
ひに従ひて、行きくる舟の帆影もいとほもしろく、遙かなるみ
ちのく、つくし路のふねも多たゆたひたるに、一夜のうき
ねする君どもの、ゆきては來ぬるかこの泛びありくも、けにち
ひさき鳥にぞまがふめる。たゞこのむかひたるかたに、よこ
ほれる島山あり。むかし此所をらうじける人、和歌の道にすけ
る心ふかきあまりに、おりたつ田子いりぬる海人までも、歌

ち、をとこ女のふるまひのまねをして通る事と申し、か。いと
かたはらいたきわざにてなむ侍りしかな。まことやこの神の
本社ほほどちかき所のうみの中に立ち給ひたるが、かやうに
まなび侍るたびごとに、御社のゆるぎ侍るとなむ申すめり。
あらたなる事なるべし。

傳へ聞く神代のみとのまぐはひをうつす誓ひの程も畏し
こゝをば、いそ(イ)きとも、いそのわたりともいふにこそ。
旅なればとけてもねぬを春のよの磯のわたりの遠くもあるかな
それよりこなたに、戀の丸といふ里一村侍る。いかなる人
の物おもふとて、名のりにし侍りつらむと覺えて、いとをか
しく侍りき。

夢とてもいもやは見ゆる旅衣紐だにとかぬ戀のまろねに
かゝるところの名を聞き侍るに、まづ思ひいづるかたの侍
るかな。さてかゞつといふ里は、家ごとに玉だれのこがめと
いふ物を作るところなりけり。山の尾ごしの松のひまより、
海すこしきらくと見えておもしろく、その日はふく岡につ
きぬ。家ども軒をならべて、民のかまどにぎはひつゝ、まこ
とに名にしおひたり。それよりこなたに川あり。みののわた
りといふ。

故郷も戀しからめや東路のみのわたりと思はましかば
から川とかやいふところにとゞまりて、つとめてはきびつ
宮の御まへよりすぐる。みちのほとり近き鳥居のもとに、く

212206

をなむよませつゝもて興じけるより、やがてこの所を歌のし
まといふとぞ。しほやどもかすかにて、やきたつる煙のする
物あはれなり。この島にしほやくたびに、一日二日のほどに
必ず雨の降り侍るといひならはしたり。けにもとおほえき。
なほこの南にはれたるしま／＼あまた見ゆめり。みちのくの
しほがまの浦おほえて心あるあまもすむべかめり。よろづに
つけつゝ、こゝろのひまもなくて過ぎ行くうちにも、おのづか
ら心にうかび侍るいたづらの藻屑どもかきあつめ侍るなり。

うちかはす友ねなりせば草枕旅の海邊もなにかうからむ
今更にしらぬ命を歎かなかかはらぬ世々といひしちぎりに
なか／＼に別れの際はともかくもいはれざりしぞ今は悲しき
さても備後は鏡にすべき文もすくなく、たま／＼しみのす
みかより尋ねいでたる國文も、それをしるべとする程のこと
わりをさへしらぬ人の見侍れば、おろかなるこゝろにもあざ
むかれ侍るかな。かべの中石の函の中にをさめける世も、かば
かりやは侍るべき。かなしく覺え侍るまゝにうかび侍る歌、
いかにして蓬の中の蓬だに麻に似たるはすくななるらむ
つく／＼と緑の空に仰がすば世のうき旅にいかですぐさむ
生ひ曲る真木のまろ木の弓取は直ぐなるよりも力こそあれ
みだれたる世には、とめるをはぢといふ事、けにこの頃ぞ
まことと思ひしりぬべきや。五月十九日備後の尾道より安
藝國(イ)ぬたといふ所にうつり侍る。道は南東へ出でたる山あ

り。ひがたを隔てたり。いぬるにそひて、いそ路はるかにゆくに、吉和といふ所あり。ほどなく夕べになりぬ。

日も暮れぬ夕汐遠く流れあしの上しわが磯に宿やからましその海中に木ぶかき小島二つならびたり。これなむくぢら島といふなり。年ごとのしはすにくぢらといふを多く寄りきつゝ、又のとしのむ月に又かへり侍るとなむ。これはこゝにいます神の誓ひにてかく侍ると、海人どもの申すなり。それよりなほ南に、大海に出づるさかひをば、めかりの浦とぞいふなる。

たび衣袖もぬれけりあまをとめめかりの浦の波のたよりに北より南にさし出でたる山さきに、松や檜原しけりて、いと面白きをのへあり。いとさきとぞいふ。

かつきする蟹の手引の糸崎はしほたれ衣おるにぞありけるむかひにひがたをへだてたる山を、ゐんの島といふなり。それ行き過ぎて、備後と安藝國のさかひをいづる。よこほれる山中にかやふける堂あり。このふもとまで入海つゞきて、沼田川のながれ落ちあひたり。この河づらにうき出で侍るほどに、日暮れはてて、夕やみの端山のかけも、いとたつ／＼しきに、ほたる幽かに飛びちがひつゝ、なにとなく物心ほそきに、この里へ松の火などともしてきむかふ火影、川なみにきらきらとうつろひて、鵜川たつ心地ぞし侍る。この所は壽永のむかしまでは海の底にて侍りけるとて、石のかたはらなどに、か

までもなにかもれ侍るべき。あまがけりても見そなはし給ふらむを、如何してか心をもみがきて照し給ふらむ。御こゝろにも叶ひ侍らまし。七月七日手向にかぢの葉にかく歌七首。

紅葉ばの錦の橋や渡すらむ棚機津女のまれのあふせに
西の海や我こそ頼め織女のけふ渡るせの障りなければ
わが祈る心のすゑもとほらなむけふの手向の文字の關守
けふよりやなほ頼まましつくし舟楫の七葉の神に任せて
時來ぬとはや待ちわたせ彦星のいほはたおれる緋の島人
あひ見まくほしにやいとゞ祈らまし秋は花咲く菊の高濱
契りありて秋はかならず棚機の松浦の河を渡るべきかな
つくしの名所を少々よみ入れ侍るなり。

はづきの廿九日安藝の國ぬたのさとをたちて、入野といふ山ざとをとほり侍るに、この所はむかし小野のたかむらの故郷とて、やがてたかむらとも小野とも申し侍るとかや。大なる山寺あり。今夜は高谷といふさとにとゞまりぬ。又の日はおほ山といふ山路こえ侍るに、紅葉かつ／＼色づきわたたりて、ははそ柏などうつろひたり。日影だにもらぬ山中に、谷川こなたかなたに流れめぐりて、岩たゞく音心すゞし。ふし木などのよこたはりつゝ、谷ふかき上を、さながらみちにする所も侍る。紅葉ばのあけのまがきにしるきかなおほ山姫の秋の宮居はこの山こえすぎで瀬野といふさとあり。こゝもみなやまあ

きといふものからうちつきためり。離れたる山どもこゝ彼處に茂りて、いとおもしろし。この川にそひて西に、としふるけるなる松山の中に、神の社一つたたり。こしきの天神と申すとなり。これはかの御神つくしへうつされ給ひける時、こゝにて旅のきれいひまるらせたりける物の具に、こしきといふものの残りともまりて、今の世まで侍りけるなるべし。やがてそのこしきをも社に祝ひたてまつりて、かたはらにおき侍るなり。又そこをめでたき清水あり。これもかの天神の御手づから掘りいだし給ひけると申す。

我が祈る頼みもことに眞清水の淺かるまじき恵みをぞまつこの山にならびて田面のすゑの道のべに、かた岡のやうなる所に、松や竹などしげくて、草の堂一つたたり。平家の世に沼田のながしとかやがこもりけるを、のりつねの朝臣のせめおとしける所と申すめり。いまもしづが田返すをり／＼は、ふるきかばねなどほり出す事も侍るに、矢のあな刀のあとさへみえ侍るとなむ。そのあたりに、草とるといひて、田中人あまたおりたてり。

袖ぬらす習ひも悲しあやめかる沼田の田草けふはとりつゝ、この南によるづの神々いはひ奉る中に、をとこ山もいますと申す。

頼むぞよこゝも南の男山おなじ宮居にかけし祈りはひとのひとよりとかやのみことのりは、おろかなるわが身

ひのほそ路なり。駿河の宇津の山のおもかけぞうかべる。

晦日はかひだとかやいふ浦につきぬ。みなみには深山かさなりたり。ふもとに入海のひがたはる／＼と見る、北の山ぎはに所々家あり。こゝに廿日ばかりとゞまりて、長月の十九日の有明の月にいでて、しほひの濱を行く程、なにとなく面白し。さて佐西の浦につきぬ。

廿日は嚴島にまうで侍る。この島は峰三つ四つばかり聳えあがりて、み山木の年ふりたるうちにまじりて、老いたる松の岩上に生ひかたぶきつゝ、磯ぎはまでしけりたり。東にさし出でたる山の崎と、この島のあはひは二十餘町ばかり隔てたる中に、小じまのさと／＼しけにて見ゆるひとつ侍る。これなむこごる島といふなるべし。この島のあたりをば、あたととぞいふなる。

鳥守にいざ言とはむたが爲に何のあたとと名にしおひけむその南にあたりて、かすめる島々あり。まさかりのせととぞ申すなる。この國と伊豫の國とのさかひにて侍るとかや。海のうへに國のさかひの見ゆることぞめづらかなれ。彼の御社のやうは、すこしいぬるにむかひためり。らうの下まで汐みち入りたり。鳥居は海の中にとゞり。島の四方に入江どもあまたありて、見所かぎりなく侍るなり。百浦侍るとぞ申す。あはれ心しづかにて、このあたり漕ぎめぐりつゝ、思ふ人どち見侍らましかばと、先づ都の友も故郷のおやも戀しく侍るか

な。御仙瀧もなどいふ所々の侍るなれども、日暮れぬべしとて、いそがはしげに勧められ侍りしほどに、見ずなりにき。さてまかり申し侍りて、御前のはま漕ぎいでて、佛舍利二粒東寺葉室うみに入れたてまつりぬ。このたびの祈りなるべし。夕日にむかひてこぎわたる程に、ひく汐に向ひてふねおそく侍れば、磯ぎはのぬるみにかけて侍りしなど、ふなこどもいふを、などてかくはいふぞと尋ね侍りしかば、かやうに汐のちひの速き時は、磯ぎはは汐のさかさまに流れ侍るほどに、船のこぎよく侍るなり。ぬるみとはよどのことを申すといふ。

磯際のぬるみにかけて出し舟の早しほみちに向ふ程なきこの浦は四方に山々うきかさなりて、いづらを潮のみちひも通ひせむとおほゆる海中にこの島も侍るなりけり。さきにうみの都のあるじの御座所とおほえて、この世の中ともみえ侍らず。かへりてすさまじきまでぞおほえし。

廿一日はこの佐西を出でて、地の御前といふ社の西ひがたより山路に入るほどに、おふの山中といふ所に来りぬ。長月の有明の月影しらくと残りて、木の下露はまことに笠もとりぬべく、所せき紅葉の色こく見渡されたる中に、しひの葉の嵐にしろくなびきて、松の聲山川の音にひきあひたる朝ほらけ、身にしみておほえたり。

とにかくにしらぬ命を思ふかなわが身いそぢにおふの中山昔たれかけにもせむとまく椎のおふの中山かく茂るらむ

垂乳根の親に告げばやあらしてふ岩國山も今日は越えぬとふるき歌に、いは國山をこえむ日は手向よくせよあらきその路とよみて侍るやらむ。それをかたよせて詠めるなるべし。はるくと越え過ぎて、又海老坂といふさとに、寺の侍りしにとまりぬ。廿二日なるべし。又の日は、遠石のうらとて、山本南に向ひて八幡の御社います。その御前のはまのしほひのかた遙かなるおきに、大いなる石のさきあがりてみえ侍り。これをとほ石とは申すとかや。人こそしらねとぞいはまほしきや。この御神にも上矢一つたてまつりぬ。その日は暮れぬほどに、富田といふうらにつきたり。これも北西をかけて入海はるかにて、こじまどもの名もしらぬが、いくらも打ちつづきたり。その中に又いつく島といふも侍りしなり。つりするあまの舟ども、嵐にむかひていそがはしげにくるも見ゆ。雨けになりたりとて、村雲のあしばやくきほひ來たり。

夕汐につれてやきつるいとしくあし早船のとだの入海廿四日周防の國府につき侍り。道のほども南はうすみいでたるすゑに、嶺どもの墨繪にかきたるやうに見えたる。そのふもとに大いなる島は、姫島とて豊後の國なるべく、高崎の城などいふも雲るはるかに打ちかすみつゝ見えたり。かのすみ所など思ひやらぬにしも侍らず。この海づらは波いとたかし。これより外の海になりぬとぞ申すめる。やがて浦の名をも外の海といふなり。磯ぎはよりつゞらをりにのほる坂あり。

古集に侍るやらむ。むかひの岡にしひまたでといふ事の、ふとおもひ出で侍りてよめるなるべし。この山分けくだりて、又浦に出でたり。こゝをもおふの浦といふなり。向ひの山はいつく島山の南のはづれなりけり。行きめぐりてなほ同じ所になりたるかな。今朝さゝいの浦をいでつる友の大船どもも、今ぞ追風にほかけも見ゆる。ふねなる人も此方をゆかしと見おこすめり。

おふの浦をこれかと問へば山梨の片枝の紅葉色に出でつゝ、この舟どもの中に、朝けのいとなみするとて、けぶりのたち登りつゝ、浪にうつろふけしき、心あらむ人に見せまほしかりき。

浪の上に藻鹽やくかと思へつるは蟹のを船にたく火なりけりそれより此方はみな山路なり。つは黒河、こえ松、やを松などいふも、うみかたかけたたるみ山ぢなり。大谷とて岸たかき山河ながれ出でてみゆ。これより周防のさかひと申す。今夜は多田といふ山ざにとまりて、朝にまた山路になりぬ。これなむ岩國山なりけり。一つふたつある柴のいほりだになく、人はなれたる山中に、み山木のかけを行く。誠に岩たかく物心ほそき路なり。夕べになりぬれど、きこりだにかへらず、鐘の聲もきこえぬ所なり。

留るべき宿だになきを駒なづむ岩國山にけふやくらさむたち返りみる世のあらば人ならぬ岩國山もわが友にせむ

橘坂とぞいふ。

あら磯の道よりもなほ足曳の山たちばなの坂ぞくるしきこの坂越え過ぎて西のふもとに入海あり。東西に山さしめぐりて、その前に島あり。西ひがしのあはひに二つのわたりありて、舟どもこれを出で入るなめり。なほ沖のかたにあたりて、木しけりたる小島ども七つ八つばかり並びてみゆ。北の磯ぎはに人の家居ありて、こゝを國府と申すなり。なほ北の深山にそひて、南向に天神の御社たてり。御前の作道は廿餘町ばかり、はまばたまで見えたり。そのうちに鳥居二つ立てり。みたらし川は路にそひて流れてけり。橋などかけたり。そのにし南にさしむかひて一重なる松山の侍るを、くはの山とぞいふ。ふもとに松原とほくなみ立ちて、あたりはかた濱とて、しほやく所なり。

花薄まそほの糸をみだすかなしづがかふ兒のくはの山風長月はこの國府にて暮れて、神無月の七日の夜ふかくたて、なほひがたの路を行くに、しまくと入江々々どもいふばかりなく、目もあやなる所々うち續きたり。大きな濱田島といふかたは、打ちけぶりたるやうにて、あけほのの空のどかにて、浪の音もきこえぬ程なり。あしべのたづの明けぬとなく聲のどかなり。

大崎の浦吹く風の朝なぎに田じまをわたるつるのもろ聲そのこなたは、村のけぶり立ちならびて、梅やさくらの時

ならぬ花さへ咲きそひつゝ、朝けの風に匂ひ來るも、春秋をならべたらむ心ちして面白し。ひがたを行きかゝるほどに、しほみちぬべしとて、北にそひて聊かなる山路になりて、岩淵といふところに出でたり。此方も猶なた島かたとて、遠きひがたなり。今夜は香河とかや申す所にとゞまりぬ。竹の一村侍る。みこしに島のちかくと見えたるを、このさと人とへば梅が崎といふ。

立ちかへり春や來ぬらむ梅が崎ちりにし花と見ゆる波かなまことや、この月はすくなき春といふなるも、ことわりとおほえて、山梨、李などまでも咲きたり。

八日は雨ふりながら、いまだ明けた、ぬほどにいでて、みねへのほり行くなどいふばかりなし。いさごだにもなくて、さながら岩をのべしけるうへに、山川のながれきつゝ、底もあらはにみゆる岩淵に、ただよ木の葉の色も、けにぞ秋は限りと見えぬ。大方のやまのたゞすまひは、あづまぢのさやの中山おほえて、それよりは今すこしかけふかく、物ごゝる細き山路なり。日中ばかりこの山をこえて、あさの郡といふさどにつきぬ。むかし板がきの城と申しける山ぎはに、寺の侍るに今夜はとゞまりたり。この寺の本尊は信濃國善光寺の如來をたしかにうつし奉りけると申す。

雨にきる我が身の代にかへなむ衣おるてふあさのさと人あけぬれど、なほ雨風やます。よもすがら霰うちまじりて

様に出でたる山侍りき。くしきといひて、若宮のたゞせたまひたる所なり。その東の海の中に十餘町ばかりへだてて島二つむかへり。古への滿珠干珠なるべし。今はおいつへいつとかや申すめり。このうらを壇の浦といふ事は、皇后のひとの國うちたまひし御時、祈りのために壇をたてさせ給ひたりけるよりかく名付けけるとかや申すなり。その時の壇の石にて侍るとて御社の前のみちの邊に、しめ引きまはしたる石あり。この御社はあなと豊浦の都のおほ内の跡にて侍るとかや。この時御船つくらせ給ひける木とて、ふな木の松などいふも侍るなるべし。

(下)

長門國あなと豊浦の舊都に御社たゞせ給ひたり。これなむ神功皇后と申す。御神は昔西の戎のために恭き御ちかひ侍るを、あふぎ奉るにつけても、つくし路や松浦におもむき侍るべきいくさの舟の、追風待ちわび侍るほどに、古への御船出の四十八艘の事をなすらへて、三つ四つの和歌を奉るなるべし。西の海や安くわたらむ千早振神のあつめしふなかなずもがな豊國のおきつ島山えてしがな心のごとき珠と見るべくイ如意珠事なり。此の兩島は如意珠云々稚櫻花にさかえし都よりなほこのうらを神やしめけむイわか櫻の都は太和歌この國の一宮住吉明神にたてまつる歌四首、御社の數になすらへてよめるなり。

浮雲のおひ風まちて天の原神代にてらせ日のひかりみむ末の代のまほりもしるし千早振神の中にもひさにへぬれば

降りあかしつるを、今朝み侍れば、昨日わけこし山の梢どもに、雪のふりかゝりて、里近きふもとの梢は、なほのこりの紅葉どもの色こくて立ちまじりたり。まことにめづらかなり。それよりは山に分け入りて海のへたに打ち出で侍りぬ。こゝを羽ふとかや申すなり。南はうら浪たかく立ちて、雪ふかき絶間に、山ちかく見えたり。豊前國なるべし。北のやまは松しけりて、その前に社あり。八幡とぞ申すなる。御垣の前に西東へつながれて、しほもかよひ侍りけり。橋わたして大いなる鳥居立ちたり。松ばらむらだちたり。住吉の御前のはまおほえたり。この御前うちすぐるより、俄かに霰かきみだれて、西ふく風あらましく吹きおちつゝ、笠をだにとりあへぬほどなり。とかくしてうすは瀉といふ干瀉にうちいで侍りき。霰はすこしやみて、又雪ふりきつゝ、ひがたの砂のいろもことに見ゆ。磯ぎはの岩のうへに、鶉のむらがれるたるも、をりから見所侍りしほどに、

似ぬ色もことにぞ有りける鳥つ鳥うすはの瀉に雪はふりつゝ潮みち來つゝ、ひがたはえなむ通るまじく侍るとて、又山路になりて、小島といふうらざとに出でたり。松原をはるかに行き過ぎて、長門國府になりぬ。北はまとして、東南にむきて家居あり。このさと一むらすぎて、神功皇后宮の御社の前に出でたり。御やしろは南に向ひたり。それより山のうしとらに出でたる尾上をば、御かり山といふなり。このはまのわたにすさきのイリ落カ

やはらける光り洩すなしらなみのイ橘のあなごの事なりあはぎの原をいでし月影イ住吉の社は王津島歌神垣の松の老木はわがくにのやまとことばの種やなりけむねがはくはこの歌の心をみそなはし給ひて、あまがけりてもまほり給へ。このたびかくおろかなる身に、二心なく君にかへたてまつる事、あきらかなる神の道を一すぢにたのみ侍りてなるべし。

霜月十三日は住吉の御日にて侍れば、彼の一宮に詣で侍るに、本社よりも猶かうんしく神さびていみじく見えさせ給ふなり。この御前より西にあたりて、西の海のはるかに見わたされたり。松浦への舟どもも、皆このちかき海のへたに、ふくら島といふ所にかゝり侍るを、今一しほこの御神の御前にて祈りたてまつりて、又一首よみてたてまつる歌、

夢の中に見えけむ神の御ぞきぬの袖のは風は猶ぞ吹くべきこの歌のこゝろは、今年九月に、豊後の高崎の城より、宗久といふ僧此方にわたり侍らむとて、舟にのりはべりながら、順風なかりける夜の夢に、よはひ八十ばかりの翁の、かみひけ白きが、なほしに淨衣きたる、一人出で来て、左の袖をひろけて、これに乗りて舟出せよといひて、袖をうちふり給ひければ、おひ風吹きてこなたにわたりぬとおほえけるを、夢心地に住吉の大明神よと思ひてさめ侍るに、やがてその曉風よくなりぬとて舟いでて、日のうちに周防のくだ松といふところにつきぬとかたられし事を、ふと思ひ出でて侍りしほどに、この歌も

その心をかたかけてよめるなり。この舟どもけふも出で侍らずとて、ふくらの島よりつかひきたり。小舟にて天川といふわたりをして参りたりと申し、かば、こゝにもかゝるわたりのありけるよと思ふにも、あはれ星逢のはまのつゞきに、この渡りのあらましかばとぞ覺え侍る。このついでに又歌二首、

秋にしも限らざらなむ天の川あまの舟は今もかよふを
松浦船はやこぎつけよ天の川まれなる中の渡りなりとも

諏訪明神とたなばたは同體とかや申すめれば、殊にこの諏訪、住吉の二つの御神は、いくさの船のまほりにてわたらせ給ふぞかしと覺えてよみ侍るなり。霜月十八日この歌たてまつりて、七日になり侍るほどに、けふ皇后宮の御まつりとして、神供などたてまつる日しも、朝より東風吹き出でて、松浦ぶねはや出でぬと申す。ひとへに神々に祈り申すしるしと、かたじけなくおほえて、重ねて詠歌二首、

神祭るけふぞ吹きける朝ごちのたより待ちつる旅の船出は
勝つ事は千さとの外に顯はれぬ浦ふく風のしるべまぢえて

このうたども神の御こゝろにかなひけるやらむ。かく舟出もおもふまゝに侍るに、十二月五日まつらよりの使に、僧たち來り給ひて、語りたまふを聞き侍れば、これよりの舟どもあまりに待久しくなりけるほどに、松浦のをのこども打ちよりに、とかく又心ごゝろの議定どもし侍りける折節、この浦のおきに大船四十よそう通りけるを、はやこの方のふねのつきぬと

思ひて、人々何の定めもなくたちあかれて待ちける程に、又舟はよしもなきしらぬ舟どもにて、行方なくきこえける。又の日のこのふねども着き侍るとかや。ひとへに松浦のいくさのさだめを又あらためさせじと、神々のはからはせ給ひけるなるべし。こなたの舟出の日しも、かゝるふねの松浦をとほりける事、うたがひ侍るべくもなき神道の御計らひなるべし。歌は必ず神に通ずる事と申せば、かくおろかなる詞の花も、神々の手向にうけひき給ふにこそ。このしらぬ舟のとほりける日は、霜月十八日なるべし。こなたのふねは十九日松浦には着けるなり。

霜月の廿九日長門の國府を出でて、赤馬の關にうつりつきぬ。ひの山とかやいふふもとの荒いそをつたひて、はやともの浦に行くほどに、向ひの山は豊前の國門司の關のうへのみねなりけり。海の面は八町とかやいふめり。しほのみちひのほどは、宇治の早瀬よりも猶おちたぎりためり。さても穴戸豊浦の都と申し侍る事は、今の赤間の關と門司の關とのあはひは、山のひとつにて、その中にわづかに汐のみち干の道ばかり、穴のやうにて侍るに、その岸の東西に人家しけかりけり。あなど、はさていふなりけり。其を皇后のいくさの御舟とほりがたかりけるに、御舟よそひてのち一夜のほどに、この穴戸の山引きわかれて、今のはやとものわたりになりぬ。この山さながら西の海中によりて島となれり。この島のむかひは柳の浦とて、むかしさと内裏のたちたりける所なるべし。今はそこ

なるべし。この事はこの皇后宮の宮司として、老いて侍るが語り侍るなり。十二月の一日より十五日まで、一宮の御神この皇后宮におはしまして、神事侍るほどは、このさとの人、門に侍らず、足手をもあらはず、女とこのわざもせぬ事とぞ申す。神のをとめなどもかねをだにつけず、かみをもときわけぬ事なり。いとあらたなることなり。しはすの晦日は、このはやともの浦のしほ、さながら干つ、わたつみの底もあらはになり侍る時、おきの石にわかめの侍るを一ふさ、神主かりとりて歸れば、やがて汐みちき侍るとぞ。このわかめをととりて、神供にそなへ侍る事、むかしよりいまだ絶え侍らずとなむ。もし其の頃まで此のところ侍らば、行するの物語にもし侍りてまし。

(以下宮内省圖書寮所藏古寫本中卷與書)

此の草子おもひの外に京や鎌倉に人のもてなし侍るとて、かたじけなく、院の御製よりはじめて、宮々大臣公卿殿上人まで、このうちの歌を和して一句を書き添へられたり。鎌倉にては寺々の長老など皆以て一首の詩をおくられるれば、今は卑下し侍るに及ばず。始め度々自筆に書き付けしは、あなたこなた引きちらされ侍りて、又今書き付くる程に、ちうふけの右筆いとゞ文字かた見え侍らず。恥しくはいからはしき事なり。

此の草子たゞゞ自筆に書付畢。雖然皆以て他のために引き失

をやがてだいらのはまともいふなり。赤まの關のにしのはしによりて、なへの崎とやらむいふめる村は、柳のうらの北にむかひたり。この關は北の山ぎはにちかく、家とならびて岡のやうなる山あり。かめやまとて、をとこ山の御神のたゝせたまひたり。その東に寺あり。阿彌陀堂といふ。安徳天皇このうらにてかくれさせ給ひて後に、知盛の卿女の、少將のあまとかやいひける人、こゝにのこりとゞまりて、平家の跡問ひけるを、のちにかの御菩提所になされて、安徳天皇の御尊影おはします。本尊は清盛公のふく原の持佛堂の阿彌陀佛と申すなり。又小松のおとゞの本尊とて、さか佛もたゝせたまひたり。このたび安徳天皇の御事、いつかゆめに見えさせ給ふこととの侍りしほどに、たゞゞ御菩提をとぶらひ奉り侍りき。いかなる世々の契りにてか侍りつらむとぞおほえ侍る。門司の關はこの寺にむかひたり。そのつゞきに山どりのをとて、山寺ありと人のかたり侍りし。いとえんなる所の名なり。

海をさへ隔ててけりな山鳥の尾上の寺の入相のこゑ

まことや、このひくしまと、穴戸の江のはやとものわたりのあはひ、まことに引きわかれて侍るならば、しまの長さとはやとものわたりのひろさは、同じほどぞ侍らむ。おほつかなしとて、いづれの代にて侍りけるやらむ。國司出でて引島の長さをつづしてとりて、はやともの渡りにおしあてがひて侍りければ、ちりばかりも寸法たがはず侍りけるなむ。いと興ある事

ふによりて、又書きとじめり。もとより鳥の跡見えわかぬ上に、此の一兩年より右筆不叶間、殊更文字形不見歟。永和四年三月十八日於筑後國竹野庄内善導寺陣書之了。都よりつくしに下り侍る程の事を、馬上にて書き付けたり。

了 俊

右道ゆきぶり宮内省圖書寮所藏古寫本を以て校勘す

(昭和三年五月)

鹿苑院殿嚴島詣記

同

左のおほい藝滿まうち君安藝の國嚴嶋まうでのことあり。此のたよりにさすらひ給ひて、石上ふるき都のあとなれば、つくしの國をも御覽すべきなるべし。かつは浦つたひのめづらかなる所々をも御覽じ、かつは四の國にいたりて、やまと言の葉歌津といふ處をも御らんじ、又は武藏入道頼之。ふるき好をもとぶらはせ給ふべきにや。御舟よそひの事は、やがてかの入道うけたまはりて、百餘そなたてまつるなるべし。舟のうちにてのさうやく、みなこの人のまうけ瀬盛なり。むかしも嚴島には高倉院御幸なり、平のおほきおほい瀬盛まうち君も、たび々詣でられしためしも侍りけめども、此の度は引きかへて珍しき御姿どもにて、はなだ色にめゆひとかやいふ紋をそめて、袖口ほそく裾ひろきうちかけと云ふものを、同じすがたにき給ふ。赤き帯に青色のはき赤色の短き袴なり。御ともの人皆みさきばかりなる金がたなどもさ、せらる。かたはらの人はそしり侍りけめども、かやうのことはあながちに法も式もさだまらず。たゞ時代にしたがふことぞかし。今のやうなととて定まりたる器などをだにも、初めてしいだして用ひらる、ためし、古へもなきにしも侍らねば、そしりはかへりて道せばきなるべし。旅の衣のたつ日さだまりて、後小松康應元年三

月四日夜深く都を出でさせ給ふ。東寺の南の門うち過ぐる程に、かの寺の鐘の聲もきこゆめり。桂川のほとりと覺えて、火の影所々にみゆ。こあゆとるなりけり。けに瀬にひかるらむかし。その日の午の時ばかりに、攝津國兵庫の津につかせ給ひぬ。御ましの舟にまるるべき人々、かねて定めらる。

修理大夫 右京大夫

日野辨 畠山左近大夫將監

同七郎 今川修理亮

眞下 古山十郎

このほかは、おのくの舟にて参り侍り。

畠山右衛門佐 山名播磨守

細川淡路守 土岐伊豫守

探題伊豫入道 今川越後入道

同右衛門佐 同中務大輔

伊勢右衛門入道 曾我美濃入道

朝倉因幡守 若王寺別當

古山珠阿 松壽丸

士佛

かやうの人々なり。侍二三人しもべ三四人ばかり召しぐすべしと定め下さるれば、舟數よりも人かすはすくなかりき。兵庫にては、赤松の千菊丸、此の所のあるじ申し侍りけり。まことにこゆるぎのいそぎありくさま、ことわりと見ゆ。その夜

の曉に、御舟に移らせ給ふ。百よその舟ども皆ともづなを
とくめり。人々はかねて舟に乗りて夜をあかし侍りけり。
浪枕かゝるね覺めのありけるを老いの習ひと何かこちけむ
波の上やうくしらみ行く程に、和田の岬、明石のせと、
淡路のせと、とがり崎などいふ浦々過ぎさせ給ふ。けにも山水
のたゝすまひ、繪にかゝまほしく見ゆ。けふ五日雨風はけし
くなりて、あまのおしてもいとたゆきにや、夜中ばかりに
なりて、たて崎とかやいふ海中にいかりをおろして、御舟を
とゞめらる。四方の空くらかりしかば、御舟を洲にこぎかけ
しかども、煩ひなかりき。御座の舟ばかりにかゝりを二つた
てらる。是をことふねどものしるべとせり。

六日、御舟いでて、うしまど、ま井のすなどに至りぬ。ま
ことや此のうしまどといふ所は、むかしおきながたらしひめ
の御舟出の時、けしかるうしの御舟をくつがへさむとしける
を、住吉の御神のとりてなけさせ給ひしかば、かの牛まろび
死にけるが島となりて、それよりうしまどといふなりけり。
牛まろぶと書きて、うしまどとよむとなむ聞き侍りしなり。
ま井のす、つちのとなどと云ひてかたき所々今ぞ通らせ給ふ。
此所は潮のかなた此方に行き違ふめり。宇治の早瀬などのや
うなり。潮の落ち合ひて、みなわ白く流れあひて、潮騒早く
のほればくだるなり。稻舟ならましかば棹とりあへじかすと
みゆ。つちのといふは、大づちこづちとて、島山ふたつ北

くぢら島、いとざき、いくらの島などいふ浦々、北にあたり
てみゆ。この所々はいにし頃筑紫へ下り侍りし時通り侍りし
なりけり。此の南にいよのみ島遙かに霞みたり。今夜は安と
いふ海べたに御舟をかける。

十日、またこぎ出でさせ給ふ。たかはらみつかさ、はや山、
地の内海、かうしろ、ひろくれ、はたみ、かまがりのせと、か
やうの浦々過ぎさせ給へり。此の國のたか谷といふもの、舟
にて参りたり。大内左京權大夫おそく参るよし仰せらると聞
ゆ。おんどのせとといふは瀧のごとくに潮はやく、せばき處
なり。舟もおし落されじと、手もたゆくこぐめり。

船玉の幣も取りあへずおち滾つ早き潮瀬を過ぎにけるかな
とよ島などおしする程に、又夜に入りて、子の時ばかりに、
嚴島につかせ給ふ。御社のうしろに黒木の御旅所を造れり。
今夜は舟のまゝにとまりたる人もおほかるべし。

十一日、御社ふしをがませ給ひて、御前の濱の島居のほと
りより、かごにて御舟にうつらせ給へり。御社のらう／＼拜
殿などに、みこ内侍やうの神づかさ女ども立ちこみたり。か
もめのむらがれ居たるに、いとよくにたり。それよりをかだ
とかや云ふは、おほたき川とて、安藝と周防のさかひの川の
末の、海づら過ぎて、周防の國岩國ゆむろ岡などいふ所々
北に見ゆ。しろの島、伊豫の國道別の山など、南にあたりて
霞みつゝ、浪の上もうちけぶりたり。夜舟は心もとなかるべ

南に並びたるあはひを通る瀬戸なるべし。早潮におし落され
じと、舟子ども聲をほにあけて、こぎなめたり。るの時ばか
りに、おきの方にあたりて、蘆火の影所々に見ゆ。これな
む讃岐國うたつなりけり。御舟程なくいたりつかせた給ひ
ぬ。

七日は是にとゞまらせ給ふ。此處のかたちは、北に向ひて
渚にそひて、海人の家々ならべり。ひんがしは野山のをのへ
北さまに長くみえたり。磯ぎはに續きて、古りたる松がえな
どむろの木にならびたり。寺々の軒ばほのかに見ゆ。すこし
ひき入りて御まし所を設けたり。かの入道こゝろをつくしつ
つ、手のまひ足のふみ所をしらず、まどひありくさま、けに
もことわりと見ゆ。いかめしき御まうけとは見ゆめれども、
志の程にはなほ及び侍らぬとおもひけむ、ありがたかり
き。奉るくさんいかにめしき事なり。人々に給ふ物も御はか
し、よろひ、みな世のつねならずみがるならし。

八日の朝、御舟出なり。此の畏りとて、武藏入道おや子、
これより御とも舟にまゐるれり。海の上三里あまりこぎて、さ
なきといふ所にて、雨風けはしく、波いと高かりしかば、此
島に御泊有り。いかりおろしたる舟ども、夜もすがらたゆ
たふさま、心ほそかりき。

名にしおはゞ扱しもあらで浦風のさなきはなか激しかるらむ
九日、またこぎ出させ給ふ。備後國尾の道といふ處の西に、

しとて、かうしろといふ海上に御とまりなり。

十二日、大島のなるととて、しまん／＼あまたある中を、か
なたこなたに舟どもこぎわかれて、末にて又めぐりあふめ
り。

高潮になるとこぐめる友舟の蟹の手棹はまなくとらなむ
あひの浦過ぎて、むろづみと云ふ所に至りぬ。昔生身の文殊
のみ顔がまむとちかひける人につけ有りて、これこそ生身
の文殊よとて、此所の遊女をしへける所ぞかし。所のさま
まことに面白し。岩は高くきりしきて、そびえたる峯三四な
らびつゝ、松柏むろなどいふ深山木、昔おひさがりて、うき
雲うすくかゝれり。此の山のひんがしにしの脇に舟の泊あ
り。その西北になぎさにそひて、松原ひとすぢ霞につゞきて、
白濱も浪も一つに見ゆ。にるの湊こぎ過ぎて、くだ松といふ
とまりにつかせ給ふ。大内左京大夫はこゝにぞ参りためる。
御旅のかれ飯みきなどさま／＼まゐる。

あまをとめ賤機おらぬくだ松も浪の白絲よりやかくらむ
十三日、この國の國府の南、たかはまといふ浦ばたの、み
たじりといふ松原に、御旅所をたてたり。此の松原はいその
かみ嚴島の明神、こゝに天くだりまして、今の嚴島にはうつら
せ給ひければ、けにぞ神さびたるや。銀をしけるやうなるい
さご、西東のすぎきの中を、入江のやうに二筋ばかり潮さし
入りて、浦松のいたくこだかゝらで、枝ざし老いかゞまりて、

木だちつろへるやうなる、むら／＼おひて、其の中に小き社のふりたるぞおはします。

松原や高すの梢こゆるまで月のでしほのふけにけるかな猶人々は舟にぞとまりたる。

十四日、申の時ばかりに御舟出なり。四里ばかり漕ぎいでて大江などいふ過ぎて、おとまりといふ泊ちかくなる程に、西風吹きおちて、浪たかく打ちかけ侍る程に、又御舟おしなほして、跡のたかすのむかへ島といふうらに御舟を懸けたり。

十五日にぞこぎ出し給ふ。此の度は五里ばかり行きて、赤崎と云ふ浦にて、又大風むかひて更に御舟ゆかず。是よりこぎかへさせ給ひて、岩やどといふ浦にとまりませ給ふ。夜に入りて、なほ大風激しくて、神なり、浪すさまじければ、はし舟にて、たゞ御一所ばかり田島といふうらばたの海人の家に、草のおましをよそひておはします。舟どもは海上になほとまりぬ。大内も御ともにまるれり。

十六日の朝、武藏入道や、探題などに仰せ含めらる、事あり。浪風かうやうにある、によりて思召すやうあり。此の度は是より歸りのほらせ給ひて、靜にかちをこそくだらせ給はめ。いかゞ侍るべきと仰せらる。探題は我がかたにいらせ給ふを申しとゞめむこと、世の誹りもやと思ひけめども、此の度の浪風のさはり、たゞごととも覺え侍らず。かつは都にも急がせ給ふべきことの渡らせ給ふにこそと思ふに、人の誹り

夜を寒みかさねやせまし旅衣はるだにあらきあきの浦風今夜は廿五里ばかりこぎて、安藝國かまがりに御舟とゞめらる。墨島黒島とかいふ所なり。

廿日、いかりをとりて、内の海、たかみ、たかさき、ひきしま過ぎて、にふの浦と云ふ所にとゞまらせ給ふ。東風むかひて浪あらければ、暫くかゝらせたまふ。日の入る程に風すこしなきたり。又御舟をこがせらる。夜に入りて、なほ雨風おどろおどろしくなりしかば、舟ども思ひ／＼に漕ぎわかれて、御舟は遙かにさかりけるをもしろす。御舟を洲におしかけてゆかざりければ、はし舟をめて、たゞのうみの浦といふ所の磯際に、あしふける小屋にやどらせ給ひける程に、しほ満ち來て御舟おきぬとてまるれり。又めしてこがせ給ふ。

浮きねする沖つ泊をいそげとや明けぬ夜潮に船のおくらむしほの干て、ゐたる舟の、しほみちてうかぶをば、おくといふにこそ。

廿一日、御舟出。風なほ吹きはりて、御ふねのや、ほの柱、吹き折りにけり。いまだ朝のほどに、備後國尾道につかせ給ひぬ。御座は大寧寺とて、天龍寺の末寺なり。海中までうき橋かけて御道とせり。なにとなく珍しかりき。

古へにこりかたまりし跡なれやもしほくむてふあまの浮橋かの鋒のした、りの事思ひよせられてよめるなるべし。

廿二日、卯の時に御舟出す。あふとといふせとあり。おひ

を忘れつつ、歸り上らせ給ふべき由を申しけり。武藏入道も同じ心に申すめり。是はなほ御のほりにも、うたつによらせ給ふべき事をことぶき申さむの心もや侍りけむ。此のこと定めて、けふは又たかすにかへらせ給ひぬ。

十七日は是にとゞまらせ給ひぬ。今河越後入道は是よりまかり申して、かち路より筑紫に下りしかば、御はかしなど賜りて、かたじけなき仰せども承りしかば、うれしなきの涙袖もしほゞに見えしなり。此の便りに、筑紫の人にもみせよとにや。御自らさま／＼の事どもかゝせ給ひて、御文一くだり探題にたまはりけり。老の後のめいほくなるべし。やがてつくしにつかはしけるとなむ。今日備後より山名宮内少輔まゐれり。御のほりに尾の道を御覽せさすべきよし申す。父の左京大夫伊豫守は、やまひによりてまるらず。

十八日、かまどの關に御かへりあり。これにて大内一族ども伊與の河野など御目にかゝりきと聞ゆ。今朝おひ風ありとて出でさせ給ふ。

十九日、かまどの關より周防國やしろの島、よこ見、いつる、あき、ふなこしなどいふ浦々島々通らせ給ふ。此の南のかたにあたりて、伊豫國まさきがふる、いほたうのうらのせと、ふたかみまさかりのせと、はじかみのせと、ぬわとつなくつつわなどいふ所には、島々いくらも四方にならびたり。

あさなげに蟹のかるてふ藻鹽草たぐやかまどの關といふらむ

風激しく浪高かりしかば、船どものほをおろしてこぎかさねしかば、手棹どもきびしくとりて、こぎ過ぎたり。此處は島一南方へさし出でて、北の山々のあはひのほそき所をおし廻す所なり。海賊とて白浪のたち所なりとぞ。ともの浦の南にあたりて、宇治は□りなどいふ島々有り。箱の岬といふも侍り。

隔て行く八重の潮の浦島や箱の岬のなこそしるけれ。讃岐國にもなりぬ。やつまといふ島あり。此の島は人の家のつまむきに似たるゆゑにいふとなり。二面といふ小島も侍り。松が枝などおひたり。などやこのてがしほのなかるらむと覺ゆ。おひ風ことのほかにはけしくて、たゞつといひて、うた津より南なる浦に、御舟をよせてあがらせ給ふ。御迎へとて、馬はあれども、かちより渚のひがたにそひてあゆませ給ひて、些かなる山路を越えさせたまひて、うたつに又いらせ給ふ。二里ばかりあゆませ給ひけり。酉の時ばかりにぞ至らせたまひし。この西北のかたに見えたる山は、かの讃岐の院のおはしましけむ松山しろみねなど云ふめり。

流れけむむなしき舟の名残とてたゞ松山の陰ぞふりぬる。廿三日はこゝにとまり給ひて、武藏入道めされて、遙かに御物がたりありけるとかや。何事にかありけむ、涙をおさへてまかでけるときこゆ。

廿四日、出で給ひて、かの屋島といふかたなど見渡して、備前國よもぎ島といふ所になりぬ。